



# ゆうちゃんの独り言



## 居心地の良さ

---

歳をとると夜中にトイレに起きることが多くなると言われていますが、寒い夜に暖かい布団から出て、トイレに行くのが億劫になります。用を足してまた温もりのある布団の中に滑り込んだ時の何とも言えぬ心地よさと安心感に似た感覚を感じる時に、大袈裟ですが生きていてよかったと思います。人間と言うのはこんな些細なことにでも生きている価値を見出すものだと思います。

若いころは、何事にもチャレンジ精神だけで、世の中や物事の裏とかを理解をせずに突っ走りながら無茶なことをしてきました。いろいろ失敗や苦勞はしてきましたが、それなりに充実感がありました。

これが歳を重ねて行くうちに、だんだんと世の中や他人の厭なところを見てくると、昔の純粋なチャレンジ精神が政治家のような打算的なやり方によって変わって来てしまいます。仏教でいうところの煩悩がどんどん大きくなり、しっかりとした生き方や実際に行ったことに対する謙虚な反省がないままに歳を重ねると、最後は救いようのない人間となってしまいます。

しかし有難いことにこのような凡夫や悪人であっても「南無阿弥陀仏」と唱えるだけで救われ浄土に行けるといふ、易行念仏の開祖である法然上人や親鸞聖人の信念には頭が下がります。仏教の奥の深さを感じる瞬間でもあり、また本当に人間を冷静に分析している宗教であると思います。

最近ですが、人間にとって慣れることに慣れてしまうことがいけないのではないかと思うようになりました。どのようなことでも、初めて取り組むときは誰もが緊張しながら行い、実際の行動の中で生じる失敗を通じてノウハウを蓄積し、さらなる改善に繋げることが大切です。

しかし人間は、慣れてくるとだんだんと怠け心が強くなり、手を抜くようになります。これが一番いけないことなのです。常に初心の心で、さらに新鮮な気持ちで対応することが重要だと思っても、知恵がついた中途半端な人間はこれが出来ません。自然と楽な方向に動いてしまうのです。

これらの行動を防止する方法は、ただ一つで自分を甘やかさないことだと思います。所詮人間は怠けものですから、怠けない方に自分を置き直すことしかありません。そのためには安定した居心地の良い場を捨てて、次の新しいものにチャレンジすることだと思います。

人生でも仕事でも毎日同じことだけを繰り返していたは駄目なのです。少しでも変化をもたらすような新たな行動に出る必要があるのだと思います。

最も容易な事としては、仕事であれば担当の業務を変えて新たなものに取り組むことで、自分自身をリフレッシュすべきです。あるいは勤務地を変更するとかして、自分のいまいる居心地のよい環境を変えて、一時的に居心地が悪くすると本来の純粋なチャレンジ精神が蘇り、心身ともに大きく変化すると思います。

最も重要なことは、変化の無い生活を過ごすのではなく、毎日小さな変化を起こすことが重要だと思うのです。居心地の悪い状態をつくれば、人間だれでも良くするための行動を起こします。ここが最も大切なことだと思っています。

先日ですが、仲間と初めて立ち飲み屋に出掛けました。立ち飲み屋での基本的な行動様式は、独りで行き、多くのつまみを一度に頼まずに少しだけにし、さらに隣に居合わせた初対面の人と話をしながら酒を飲み、1時間程度で切り上げるのが礼儀なのだそうです。

凡夫がとった行動は、これらの流儀とは全く反対で、複数人で出掛けいっぺんにつまみを多く頼み、仲間内でわいわいがやがや長時間飲んで帰りました。この行動も単に居心地の良さを求めただけで、なんら進歩発展がないやり方でした。

今後は、チャレンジ精神を再度呼び起こし行動することと、立ち飲み屋に独りで行けるようになることで少しでも大人としての自立を図りたいと考えています。何ともだらしのない大人で自分自身でも情けなくなりますが、これが本来の自分であると再認識し、行動を起こしたいと考えているこの頃です。

## スープと人生の味

---

料理の中で何が好きかと問われれば、無条件にスープと答えるほど汁物が大好きです。出汁が効いたものであれば、どのような種類のスープでも好きです。一般的にスープというと西洋風のものがメインだと思われてしまっていますが、個人的には昆布やかつお節、煮干しなどで出汁を取り、季節の具を入れそしてさっと煮て、味噌を溶き入れた味噌汁が最高だと思います。現代の若者は味噌汁を飲まなくなったと言われていますが、日本の味の文化がだんだんなくなっていってしまうのは寂しい限りです。

味噌汁が食卓に登場したのは室町時代の頃と言われています。主に農家などで作られていた田舎料理であったものが、時代とともにさまざまな階層にも普及し、やがて日本人の特に朝の食卓に欠かせないものになりました。調理法はシンプルながらも、味噌汁の味は非常に繊細で奥深いものです。また、作る家庭によって十人十色の味がでるもので、正にお袋の味だと思います。

この味噌汁は、日本の食文化において、主食とされる米飯や雑穀飯の副食としての位置を占めるもので、昔から「一汁一菜」と表現されるように、味噌汁のような汁物と、「菜」としての副食を一品組み合わせるのが伝統的でした。非常にシンプルかつ質素ですが、日本人の生活習慣の中にぴったりとフィットし、労働で汗とともに消耗する塩分の補給に大きな役割を果たすなど、バランスの取れた形で生活に根付いてきたものです。

この味噌汁に対して、今の日本では海外からいろいろな形で西洋風のスープが上陸し、いまや日本では世界各国のスープを口にすることができるようになりました。西洋料理のスープですが、「浸す」という意味から出た言葉で、もともとは汁にパンを浸していたものを示していたようです。

そう言われてみると、オニオングラタンスープやブイヤベースに添えられるのもパンであるし、スープとパンはもともとから深い関係にあったのです。このような背景を考えると、西洋のスープと日本の味噌汁とは位置づけが少し異なるように思えます。

味噌汁は大好きですが、ブイヤベース、ミネストローネ、クラムチャウダー、フカヒレスープも好きです。ブイヤベースは、フランス南部の港町マルセイユの漁師たちが小魚や貝を鍋に放り込んで煮ていたのが始まりのスープで、魚介類のエキスを十分に楽しむことができます。以前にパリのレストランで飲んだ魚のスープは、絶妙なコクのあるもので最高でした。

また、アメリカのサンフランシスコのフィッシャーマンズワースにあるレストランでカルフォルニアワインを飲みながら食べたクラムチャウダーの味もまた最高でした。西海岸でとれるはまぐりやあさりの他に、にんじん、じゃがいも、ベーコン、玉ねぎ、マッシュルームやグリーンピース等の野菜も入った、とろっと煮込んだスープです。

高級なスープの代表格はなんといってもフカヒレスープでしょう。古来中国では最高位の者しか口に出来ない高級食材だった「ふかひれ」は、サメのひれから余分な肉や皮や骨の部分を取り除き乾燥させたものを丁寧に戻し、スープと共に煮込んだものです。毎日でも食べたいと思いますが、仮に食べられたとしても毎日だと必ず飽きが来るのです。人間の体の機能は本当によく出来ていると感心してしまいます。

このようにスープをとってみても世界の中にはいろいろな種類のものであり、それぞれにその土地の伝統や、またその土地で生きてきた人々の歴史がスープの味の中に加味されていると思います。

「スープの冷めない距離」の言い方のように今の時代は、複雑な人間関係のしがらみから少しでも逃れようとする行動様式が主流になりつつありますが、人間関係があっさりし過ぎて反対にスープがこってりとコクがあるようになっては、本来の関係が完全に逆転してしまっているように思えます。

人間もまたスープもある時はこってりとまたある時はあっさりとしたもののように、その時々で上手く使い分けることが重要だと思います。

日本人にとって笑い、涙の2つを比べた場合に、イメージ的にフィットするのは涙の方だと断言出来るのは、五十路を越えた世代ではないかと思えます。今の若者に関して涙のイメージは全く無く、お笑い番組が多いように笑いのイメージを持っています。

個人的には笑いよりも静かに流れる涙の世界が好きです。泣いた後に不思議とすっきりとします。確かに笑った後にもストレスがなくなったような気がします。涙の方がより深い世界に到達できるような気がしています。

涙が流れる時とは、つらいとき、悲しいとき、悔しいとき、あるいは逆にうれしいときや甚く感動したときに、自然に流れることは誰もが体験していることだと思えます。これは自分が体験した事実により、感情のスイッチが動作し喜怒哀楽を感じた結果なのです。

うれし涙や悲しい涙は、心身をリラックスさせる神経である「副交感神経」が刺激されることによって分泌され、反対に悔しいときや怒ったときは感情が昂ぶり、落ち着かない気分になり、最終的に心身を緊張させる神経である「交感神経」が刺激されることによって分泌される2つのパターンがあるのです。

同じ涙が流れる結果であっても、涙を出す指令はその感情の根源によって左右され、ある時は「副交感神経」またあるときは「交感神経」がメインとなって処理されるのです。このような人間の体の微妙なバランス感覚に驚きを感じます。

昔よく言われたことは「泣くのはみっともないことだ」とか「人前で涙を流すなんてとんでもないことだ」という感覚が戦前に生まれた男性を中心にありましたが、精神的な面だけでなく健康面から考えると、泣くのは情けないことでも弱さの象徴でもなく、むしろ健康を維持するのに効果的なのです。

それが証拠に、涙を流した後は何故かすっきりとした気分になるのは、その背景には凄いことが体の中で起きていたのです。涙には、脳から分泌されるプロラクチンや副腎皮質刺激ホルモンといったストレスに反応して心身に緊張を強いたり、さらに免疫系に影響する物質が含まれていることが分かっており、これらによりストレス物質を排出する重要な役目を果たしているのです。

このように涙は感情と一体化しているのです。ある事実を情として分析し、いままでの経験を通して蓄積したいろいろなノウハウを基に自分なりに判断して、喜怒哀楽を構成し最終的に感情という形で現す際に、涙という物質を排出しながら感情のストレスを減少させてバランスを取るようにするのだと思えます。

ここで重要なことは、感情を作り出す基となる経験や自分なりの考えをきちんと整理して持っていなければならない事です。ですから表面的に生きている人と、深く考えながら生きている人を比べた場合は、自ずと涙のレベルや内容が異なるのであって、ストレスの軽減の効果もそれに伴って差が出るものだと考えています。

また、涙の原料は涙腺内の毛細血管から得た血液から血球を除き、液体成分のみを取り出したものであり、基は血液であることを知っていましたか？「血も涙もない人」というような表現がありますが、血だけでなく涙も血液が原料だったとは本当に驚きです。

さて、反対に笑いはいかがなものなのでしょうか。笑顔は人の気持ちを和らげ、不思議と人間関係を円滑にする大きな力を持っています。「笑う門には福来る」と言われますが、健康のためにも「笑い」は効果があるようです。

感情を顔の表情で表す事ができる動物は、顔の筋肉が発達している人間と猿の二つの生物に限られているそうです。確かに我家の愛犬ミルクは笑いませんが、その様子は尻尾や目を見れば分かります。犬が笑ったらこれまた笑ってしまいますね。

この笑いに関してですが、同じ事実や現象を見た人が全て笑うものではありません。笑いには、それを判断するべきものがあり、その可笑しさを理解して初めて笑うことが出来るのです。すなわち笑いには知性がどうしても必要になるのだと思います。特にブラックジョークなどはその典型だと思います。

また、笑うという漢字の歴史を見てみると、これまた不思議なことが背景にあります。笑うと言う漢字は竹かんむりの文字であり、竹が風に吹かれてかがんでいる様を表現した文字のようです。さらに笑いとは、はるか昔に人間が「身体に悪いものをウェーッと吐き出す」という動作をしたことから始まったと言われていています。

つまり笑いとは元をたどれば、身体の中にたまった体に有害なものやストレスを外に追い出す意味があるというわけです。さらに医学的に見ると、笑うことによって免疫を担うリンパ球の一つであるナチュラル・キラー細胞が活発になって細胞が元気になり、感染症を引き起こすウイルスやがん細胞を攻撃する力を発揮するようです。

このように泣くこともまた笑うことも、共に健康状態を保つための自然治癒力を持つ良薬に匹敵するものと思われれます。どちらも欠けてはならないものですし、これらがきちんと動作するようにするためには、笑いには知性、涙には感情が必須となるのです。

結論的には、毎日健康で過ごすには日頃から知性を磨くとともに、豊かな感情を持てるようにいろいろな経験を通して人間としての魅力を高めることに尽きると思います。お笑い番組だけの生活から、豊かな感情を育みそれらから流れ出る涙を流す事も重要だと思うこの頃です。

## 一人で飲む酒、二人で飲む酒、そして皆で飲む酒

---

凡夫は酒好きの男です。といっても本当に好きかといわれると自分でも良く分かりません。ひよっとすると酒を飲む雰囲気だけが好きなのかも知れません。酒には日本酒、焼酎、ビール、ワイン、洋酒、紹興酒等いろいろありますが、お腹が冷え易い性分なので冷たい飲み物より暖かい飲み物を飲まないで不安になることから、真夏でも熱燗酒を飲むほどの日本酒党です。

また日本酒党といっても銘酒を冷で飲むのは苦手です。馬鹿の一つ覚えではないですが、いつでも熱燗なのです。一般的に熱燗の場合は良い酒は出てきませんが、それでも全く問題ないところが凡夫である証拠です。本当の酒好きではないのでしょう。

先日も会社の仲間と近くの居酒屋で「アンコウ鍋」を食べながら日本酒を飲みましたが、鍋と日本酒は本当に合う組み合わせだと思います。日本の食文化の素晴らしさに今更ながら感嘆してしまいます。美味しい料理を食べながら仲間とわいわいしながら飲むのは楽しくもありまた、日頃のストレスが解消される場であると思います。

若い頃はカラオケで歌いストレス発散した経験もありますが、最近はめったにカラオケに行くこともなくなりました。それよりもちょっと気の利いたつまみを食べながら酒を飲み、好き勝手なことを話した方がストレス発散になります。話を聞く側はさぞかし迷惑だと推測しますが、遠慮してはさらにストレスが溜まるだけなので、言いたい放題、好き放題の嫌なおやじになっています。きっと歳をとった所為だと勝手に思っています。

このように複数の人と飲む酒は楽しいイメージがあり、印象として明るい感じを受けます。ですから楽しい酒の場合は、仮に飲みすぎたとしても反面ストレス発散になっているので、翌朝は思ったほど酷い二日酔い状態になりません。意外と心身ともにすっきりと起きられますが、暗い雰囲気ですんだ酒は、さほど飲まなくとも何か憂鬱で、飲む前よりもストレスが溜まってしまいう事があります。

したがって飲むときのメンバーと、その中で交わされるであろう話題を選定した後に飲むことが重要だと思います。なんともお粗末な話しですが、30数年間日本酒を飲み続けてきて、最近になってやっと辿り着いた教訓です。この教訓が無かったことにより、いろいろな場面でいろいろな経験をしました。何事も凡夫はある結論に到達するまでに、多くの時間とそれなりの犠牲を払わなければならないのです。

さて、複数の人と飲む酒でなく二人で飲む酒はどうでしょう。二人という言葉から想像するのは、恋人同士でない以外は何か危険な雰囲気や秘密めいた印象をもちます。相対して飲むのですから、その時の話題はとてもシリアスなものだと思われる。仕事上での秘密の相談やあるいは上司から部下への個別指導のようなことや、あるいは男と女の関係の話など、円満に解決す

ることを目的とした場でありその雰囲気作りに酒が利用されているのですから、どちらかという  
と楽しんで飲む酒ではないと思います。

このような場の酒は美味しくなく、飲めば飲むほど悪酔いする酒です。このような時に誤って  
飲みすぎると翌日は復活出来ないような状態に陥ります。さらに話しが上手くまとまらなかった  
時などは、本来の問題はさらに大きくなり、場合によってはこじれたりします。金銭面では美味  
しくない酒のために金を浪費しただけでなく、悪酔いのために翌日の体調は最悪の状態になるの  
ですから、それこそ最低です。

それでは安全なのは、一人で飲む酒なのでしょうか。時々居酒屋の隅の方で一人ちびちびと酒  
を飲んでいる人を見かけますが、凡夫として何故に一人居酒屋で飲むのか理解できません。一人  
で飲むのなら飲まずに帰り、家でちびちびと侘しい酒を飲みます。

ひとつだけ理解できるのは自宅で飲むように自分を完全にひとりにして飲むのではなく、居酒  
屋等の雑踏の中に自分を置いて飲むという孤独感覚です。良いか悪いか分かりませんが、一人で  
飲む酒はお薦めできません。凡夫であれば、弱い人間なのできっと複数の人間を誘って飲みに行  
くか、飲まずに帰って家で静かに飲むと思います。

このように酒ひとつをとっても、その飲み方にはいろいろあるとともに、その場その場で人生  
の縮図のようなことが繰り広げられていることを思うと、この世の中に酒というものがあって  
よかったと思います。

ただひとつだけ理解できないのは、酒を飲めない人はどのようにしてストレスを発散したり、  
あるいは一瞬でも自分を忘れることをしているのだろうか、常々考えています。きっとスポー  
ツや旅や歌などのように体を使って忘れているのでしょうか。酒飲みからするとちょっとだけ哀  
れに見えてしまいます。飲めない人からみると、酒を飲む奴はと軽蔑めいたものがあるのだし  
ょうが・・・

あなたはどのようにして酒を飲んでいますか？一人ですか、二人ですか、それとも複数ですか  
？

## 日本酒は風流な燗酒に限ります

---

先週まで桜が満開で春を感じていましたが、先日仕事で数日間北海道を訪れました。東京を出るときは既に桜が散り始めていたのですが、北海道はまだまだ桜の季節ではなく、満開はゴールデンウィークなのだそうです。改めて日本の広さを感じました。さらに北海道の釧路と札幌ではなんと雪に降られてしまいました。コートを持たずに出掛けたので、とても寒い思いをしました。

地方都市に出張に行った場合は、仕事が終わると赤提灯で酒を飲み一日の疲れをとりたくなるのはサラリーマンの習性ではないかと思います。今回の北海道でも夜の7時には居酒屋で新鮮な海の幸を着にし、熱燗を楽しんでいました。

学生のころから酒といえば日本酒で飲み方は熱燗と拘りをもって飲んでいましたという格好が良いのですが、学生であった30数年前は日本酒といえば上燗や熱燗が標準でした。徳利をあちちっ！といいながらおちょこに注ぎながら飲む酒に、何故か風流を感じたものです。また、あの頃は今のように吟醸酒ブームはなく、お酒は冷やで飲むものと言う風潮はありませんでした。あったとしても常温で飲むのが普通でした。

酒を燗して飲む風習が始まったのは、奈良時代の頃からのことと思われていますが、はっきりしたものがないようです。ただ記録として最も古いのは、奈良時代の万葉集の中で、山上憶良が「貧窮問答歌」の一節に「糟湯酒うちすすろいて...」と詠まれているので、すでに奈良時代には、酒を温めて飲む風習があったようです。

吟醸酒を冷やで飲むのも美味しいと感じる事も確かにありますが、燗酒は酒の種類や温める温度、さらに飲む人の体調によって味が大きく変わります。冷酒を油絵に例えるのであれば、燗酒は日本的な水墨画に例えられると思います。さらに極端に言うと、燗酒は酒を温める人の愛情を感じる事さえあります。また冷酒は近代的な感覚であるのに対して、燗酒は時代の風情を感じます。

一般に日本酒に適する温度は冷（7～10度）、常温（約15度）、ぬる燗（約45度）、上燗（約50度）、熱燗（約55度）に分けられ、これらの温度に適する日本酒の種類（吟醸酒、純米酒、本醸造酒、普通酒、樽酒、生貯蔵酒）が確かにあると思います。

個人的には純米酒か本醸造酒を上燗か熱燗にして飲むのが好きです。温めることにより日本酒の香りとお酒が楽しめるからです。さらに人間にとって冷たいよりも暖かいものの方が体には良いのだと単純に思っています。良く見かける光景ですが、冷えた生ビールを一気に飲み干す人がいますが、内臓に大きなダメージを負わせていると思います。

また爛は人肌などといわれますが、口に含んでふくよかな暖かさを感じる体温より数度高い40度までが人肌の爛です。ぬる爛から上爛までの温度の酒の方が内から体が温まるだけでなく、冷やにはないふくよかな香りと、滋味あふるるまろやかな味わいが楽しめます。酒は味わいながら嗜む点に風情があると思うので、なおさら個人的にはゆっくりと飲みながら味わう爛酒が好きなのです。

さて、今回の北海道の居酒屋でいつものように熱爛をたのみましたが、いつものように日本酒が美味しいとは感じなかったのです。ここのところ仕事が忙しく体調が良くなかったことも影響しているのだと思いましたが、それだけでもないような気がしました。一言だけ余計なことを言ったのは美味しい酒を熱爛にと言ったのを店の若い店員が真に受けて美味しい吟醸酒を熱爛にしたのかも知れません。

今回は北海道産の日本酒を飲みましたが、残念ながら全体的に美味しいと思える酒はありませんでした。今月の下旬にまた北海道へ行く機会があるので、今度は美味しい酒を探したいと思いますが、長年飲んで慣れている性か日本酒は八海山か澤乃井の爛酒が好きです。

## アトピー性皮膚炎やアトピー型喘息のアレルギー疾患との戦い

---

人はいろいろな病気をもって生きていると思います。全く健康な人は殆どいないのではないかと思います。この私は、小さいことから小児喘息とアトピー性皮膚炎に悩まされ生きて来ました。それが中学に入る頃には自然と直りましたが、成人したころからアトピー性皮膚炎が再発し、さらにこの歳になってアトピー型喘息が出てくるなどちょっと大変な時期を迎えています。

アトピーという名前は「奇妙な」とか「原因不明の」という意味のギリシャ語のようです。喘息や鼻炎などのほかのアレルギー疾患にもアトピーという言葉が使われるようですが、慣用的には「アトピー」のみで皮膚炎のことを指すのが一般的です。

このアトピー性皮膚炎は、皮膚を構成する皮脂や角質層のセラミドが不足するために肌に水分が保たれず、どんどん蒸発してしまうことが特徴です。肌から水分が失われて乾燥すると、肌のバリア機能が働かなくなるためアレルギーが浸入しやすくなって、さらなる乾燥や症状悪化の原因になるのです。

皮膚の乾燥がひどくなるとカサカサして粉をふいたようになっていたり、肌の表面がひび割れて血が出たり、またちょっと触れただけでも飛び上がるほど痛いことがあります。皮膚病はそれなりに大変です。しかし数十年間この病気と付き合っていると表現が変ですが、愛着も感じてきます。

小学生の頃の思い出と言えば、アトピー性皮膚炎で特に耳の付け根と言うのでしょうか、その部分が自然と切れてしまい、さらにその傷口からリンパ液のような膿のようなものがいつも出ていて辛かった思い出があります。

当時の医療ではどうしようもなかったようで、両親に聞くとこの耳に放射線をあてて治療したこともあったようで、その影響だと思いますが今でも耳にその放射線を浴びた影響が残っています。また、べとべととした茶色で臭い塗り薬を付ける関係から耳を覆い隠す特殊なカバーを付けられ、その格好が恥ずかしく子供ながらに傷ついた記憶があります。

しかし不思議なもので小学校の高学年になるころにはその症状がなくなり、それまでの悩みがなくなりました。しかし、人生はそう甘いものではなく、その後就職し働き出した頃から、またアトピー性皮膚炎が復活したのです。

今度は耳ではなく手、顔、腹など体中にかゆみを伴う症状で悩まされました。発疹は顔面、上胸部、上背部、肘窩など上半身に強くあらわれました。特に顔面はいわゆる「アトピー性皮膚炎の赤ら顔」などと呼ばれ、もともと恥ずかしがり家の照れ屋だったため、アトピー性皮膚炎で顔が赤ら顔になるのは抵抗がありましたが、自分ではスキンケアに気を配り、皮膚を乾燥させないような努力をするしか方法がないのです。そのうちに、開き直る自分に目覚めてきました。

一般に青年期に入って再発した場合は治りにくいといわれています。その証拠に、これまでの人生のなかで医者に通った90%程度は全て皮膚科なのです。いろいろな医者に掛かりましたが、この病気には特效薬がないことが分かりました。

一般的に使用される塗り薬は、ステロイド軟膏と呼ばれるもので、世界中で使用されるようになって50年以上の歴史があるようです。確かに塗ったあとはその効果が顕著に現れますが、急速に直る効果の裏側にはその副作用が必ずあります。

しかしこのような副作用というのは薬だけでなく、この世の中でありとあらゆるところで起きていることです。ですからその使い方を上手くすれば別に怖がることはないと思っています。単に副作用が怖いからと言ってその薬を使用しないで他の方法を見つけることもある面で正しい方法かも知れませんが、限られた人生の中でいかに時間を有効に使うかが最も大切なことであると認識することが重要であると思います。

ですから個人的には今でもひどい時は迷うことなくステロイド軟膏を使用して炎症を抑えます。その後は、徐々に弱い軟膏に代えて、最後は保湿剤にするような自己コントロールをしながら一生直ることの無いアトピー性皮膚炎に対処しています。

しかし面白いもので、世の中がステロイド軟膏の恐ろしさを騒ぎ出したため1999年からプロトピック軟膏が開発され販売されました。この軟膏はタクロリムス軟膏と呼ばれ、免疫抑制剤ですがステロイド系のものではないため、ホルモン作用による副作用はみられません。ただし、塗るとヒリヒリと熱く感じるのが難点ですが、2~3日塗っているとヒリヒリ感はなくなります。吸収率のよい顔のアトピー性皮膚炎に効果が高く、個人的にも顔に炎症が生じた場合はこのプロトピック軟膏で対処しています。

最近困っているのは、アトピー型喘息の症状が出てきたことです。毎晩のように胸が苦しく目が醒めます。のどに痰が絡むようでしばらくベッドの端に座っていると症状が軽くなります。気孔が何らかの影響で狭められているのだと思います。

さてこのアトピー型喘息ですが、次のようなメカニズムで生じると言われています。体内に異物が入ってくると、体の免疫系は種々の抗体（IgG、IgM、IgA、IgE）を作って異物を破壊・排除します。

これらの中で、IgE抗体は肥満細胞の表面に固着して、アレルゲンと呼ばれる異物と結合すると直ちに肥満細胞の脱顆粒を引き起こします。その結果、ヒスタミンやロイコトリエンなどの気管支収縮物質が放出され、喘息発作等の症状が出現するのです。簡単に言うとアトピー体質と

はこのIgE抗体が作られやすいことなのです。

この異物が何なのかが分からないので、この連休は部屋を綺麗に掃除してその結果をみようと思っています。ひょっとすると酒の飲みすぎかあるいはストレスかも知れません。アトピー性皮膚炎に関してはどうにか自分でコントロールできるので問題ないのですが、アトピー型喘息だけははまだ原因や自分なりの対処方法が見出せていないので、チョット大変です。しかし、自分の体なので何らかの方法でこの病気と仲良くなって軽い症状で過ごせばいいなあと思っています。

## 私の大切なものと好きなもの

---

誰にでも自分だけの大切なものがあると思います。また、それらは物や人や思い出などいろいろな形でその人の中で大切にされているものだと思います。単純に考えて自分が好きなものは、大方大切なものに分類されるのではないかと思います。

ここで私自身の場合を考えると、好きなものと言えば、モーツァルト、五木寛之の作品、自分を発見する機会を与える日本酒、女、全ての原点である宇宙、旅が挙げられます。何故にこれらが好きなのかは以下のような思いがあるからなのです。

まずモーツァルトです。モーツァルトは私の心を支えてくれる重要な位置づけにある音楽家であり、さらに自分と最も波長が合う作曲家です。モーツァルトの音楽は、聴く者の心の状態に如何ようにも反応し、その人の心の状態を良い方向に導く力があると思います。

それだけ人の心の奥まで沁み込んで作用する力があるものと思われます。他にもベートーヴェンやブラームスなど素晴らしい音楽家は沢山いますが、それらの作品はある心の状態でないとその効力を最大限に発揮しないようなものだと思うのです。

それに比べモーツァルトの音楽は、どのような状態でもその時の状態に合わせて心に語りかけてくれる力があります。他の音楽家はその状態だけに効く特効薬であるとする、モーツァルトはどのような状態にでも効く万能薬といっても過言ではないと思っています。

このような意味からもモーツァルトだけはとても重要な位置付けにあるのです。また人間として完璧でなく、ある面では我々と同じ凡夫のような行動をとった憎めない、またとっても身近に感じる事ができる大天才だと思っています。

次は五木寛之です。五木寛之の作品に関しては、澁みなく流れる文体が好きです。音楽でもそうですが、自然に流れることが最も重要であると思っています。さらに難しいことを易しく平易に解説し、読む者の心に刻み込む力を発揮する文章である必要があると考えており、この点が物書きとしての原点であり、さらに最終的な目的であるとも思います。

そのためには、その作家が自分の哲学というものを持ち合わせていないと、自分の考えを文章にすることは出来ないと思うのです。さらにその哲学は、物事の根底にある事象を全て自分のものとして把握した本物でなければならないと思います。それにはそれだけの経験と体験を持ち合わせていないと、とても語れるものではないと思うのです。それはちょうど劣等感を感じた事がない人が、劣等感に関して書くことなど出来ないのと同じです。

また不思議なもので、読んでいてこの作者は本当にこのことを理解して書いているかどうかは

、それを体験した者には必然と分かるものです。簡単に言えば、言葉に重みがあるかないかの差だと思います。その点、五木寛之の文章にはそれを訴える力があると思います。

話しが逸れますが先日、五木寛之の最新著「みみずくの夜メール2」が発行された際に、大手書店で開催されたトーク&サイン本販売会で、運良くサイン入り（サインはとてもお洒落な文字で毛筆で書かれていました）の本を手に入れることが出来ました。サインの嫌い著者が書いたもので大切にしたいと思っています。五木寛之は大好きな作家です。

その次は日本酒です。酒には、ウィスキー、ビール、ワイン、焼酎等いろいろな種類がありますが、私は日本酒の持つ麴の香と日本酒独特の酷が大好きです。それも冷やでなく燗酒が何故か好きなのです。日本酒は、学生のころから飲み始めましたが、飲んででは漬れの繰り返しで自然と酒に強い身体になりました。親父が酒に強いこともあり、酒に強いDNAを受け継いでいるのだと思います。

学生のころは安い熱燗の日本酒をコップに入れ飲んでいました。あの頃はそれが格好よかったです。また当時は甘口でなく辛口が通だとする風潮があり、何ら考えを持ちあわせていなかった私は、訳分からずにいつも辛口の酒を飲んでいました。

自分に確固たる信念がない状態が続けば続くほど人間はマイナスの方向に行ってしまうものです。今振り返ると、時間があつた学生の時に何事でも積極的に行動し、失敗を通じて自信をつけることが重要であったと後悔する時があります。

また素面での失敗は少なかった反面、この30数年間日本酒を飲んで数え切れない失敗や失態を繰り返してきました。その時はそれなりにかなり落ち込みましたが、人間として成長出来ないというか、人間が出来ていないことからまた同じことの繰り返しで、自分が嫌になってしまうことの連続でしたが、それが止められないのが凡夫なのではないかと、変に自分で自分を慰めています。

酒を飲んでも全く普段と変わらず立派な人が多くいますが、とても私には真似のできないことです。これは死ぬまで直らないのではないかと思います。時として諦め開き直ることも大切ではないかと不謹慎なことまで考えてしまいます。しかし不思議なもので、こんな自分が捨てきれないのです。今後とも日本酒を飲み続けながら、不完全な自分を少しでも良い方向に成長させたいと考えていますが、所詮無理かも知れませんね。

最後はもっとも重要な女です。これは本当に難しい領域ですが、男として好きなのは女であることは間違いありません。しかしいくら女が好きだといっても、女の気持ちには絶対になれないと思います。個人的には相手の気持ちを理解するというよりは、感覚的と言ったら誤解を招く表

現になってしまいますが、人間には感覚的に合う合わないと判断する何か分からない特別の力が備わっていると思います。

これは多分、太古の昔から生き抜いてきた動物的な嗅覚に似た感覚ではないかと思うのです。一般にこちらが好意を持って接していると、大体相手も好意を持ってくれるものです。好意を持ってくれるからその後、特別な関係に発展するかはまた別の問題だと思います。そこには人として生きるという、その人の哲学に依存するものがあると思うのです。

また、男と女の間にはもっと精神的というか生きる上での支えというような、もっと大きなものが存在すると思っています。全く異なる性、すなわち対極するものとの間の関係は、常に対極するものの間を行ったり来たりしながらさらに発展するものだと思っています。ですから男と女はもっともっと話す機会を多くする必要があると思います。今の若い人は、自分だけの事を考えてしまいがちですが、異性のことを考えるべきだと思います。このような傾向が強いことが影響しているのだと思いますが、最近結婚しないまた結婚を考えない人が多くなってきています。

別に結婚という形をとらなくてもいいのですが、もっと男と女は近づくべきだと思うのです。昔の私は、考えを持たずに生きていた駄目人間でしたが、この歳になってやっと少しまともな考えが持てるようになりました。今の考えをもって昔の若い頃に戻れたならば、きっとモーツァルトのオペラの「ドン・ジョバンニ」のようになっていたかも知れません。幾つになっても男は女が好きであり、女は大切な存在だということは間違いない事実だと思います。

## 日本文化の基盤的位置付けの家紋

---

この歳になってもまだまだ世の中の事で分からないことがたくさんあり、時々情けなくなることがあります。先週は国歌と国旗の話題を取り上げました。今回は国旗と直接に関係するものではありませんが、それに近いものとしてそれぞれの家には家紋というものがあるという話題を取り上げようと思います。

年配の方に「お宅の家紋は何ですか？」と聞かれて返答に窮する事があります。機会あるごとに両親に聞いてその時は理解し覚えたつもりになっていますが、いざ必要な時に思い出せないのです。インターネットで家紋を調べてみるとなんと現時点で5000種類もの家紋があることが分かりびっくりしています。また静かな家紋ブームであるということも分かりこの点に関しても驚きです。

家紋に関しては通常の生活の中では余りお目にかかることはないのですが、よくよく見回してみると、家紋は私達のまわりの生活の中で今でもしっかりと根付いています。例えば、冠婚葬祭はそれが顕著にでるシーンだと思います。結婚式場、披露宴など和服の場合はいずれも家紋のオンパレードになるし、七五三のお宮参りには、紋付を着た男の子が千歳飴を手にポーズをとる姿を目にします。また葬儀の時もその家の紋の入った提灯がかかげられます。このように家紋は核家族化が進んだといわれる現在も身近に存在しているのです。

そもそも家紋の原形となった文様の歴史は、飛鳥時代にまでさかのぼるようです。さらに平安時代には現在使われている家紋の素材とほぼ同じ文様が使われるようになり、その後はそれぞれの時代背景に対応して家紋の位置づけが変化してきました。

例えば、室町・戦国時代には戦場での個々の戦闘集団を明瞭に表すためや識別を容易にするうえで家紋が重要な役割を果たしたし、徳川時代になり大きな戦乱がなくなると、家紋は儀式・儀礼的な役割を増すことになったようです。特に元禄時代、町民文化が花開く頃には家紋が庶民に開放され、芸能文化などの広がりとともにそのデザインが一気に多様化したといわれています。

「紋章」というのは、諸外国にもありますが、日本の紋章は、各自の苗字と共に受け継がれた、日本人の家との関係を表わす家紋なのです。また、この家紋を衣服に付ける用い方は、日本独自のもので、他の国には見られない習慣のようです。

さて、我家の家紋を両親に聞いたところ「丸に抱茗荷」という家紋でした。茗荷を中心とする家紋は、日本十大紋の一つだそうです。また茗荷は、日本原産の秋の草花であり物忘れの妙薬だけでなく麻酔作用があること、邪気を払う草花としても有名です。

さらに「みょうが」という音は神仏の加護を意味する「冥加」に通じることから昔より家紋の

対象となったようです。また煩悩を解脱させるとした「摩陀羅神」のシンボルが茗荷であるところから、神仏の加護を受けられる縁起ものということで茗荷紋が誕生したとされています。

また姓にある程度連動して家紋が決まるとのことのようだったのでインターネットのデータベースで検索してみましたが、我家の姓から「丸に抱茗荷」は出てきませんでした。もともと我家は名士の流れでなく平民だったと思われる先祖は、江戸か明治の時代に平民が家紋の使用を許された時に茗荷の家紋を選択し、本家から分家等に分かれながら「丸に抱茗荷」になったのではないかと思います。

自分と家族を大切にすることは先ず「家」という組織の最小単位を大切にすることです。この「家」のシンボルが家紋であり、さらに会社や地域等の組織には社章や組織のシンボルがあり、最終的に国という単位で国旗があるのだと思います。

現在の日本は核家族化が進み、家と家の繋がりが希薄になってきていますが、日本文化の基盤にある家紋を再度見直し、家という最小の単位の絆を再確認する一つの方法として家紋を盛り上げることも一つの活性化策になると思います。

ところでお宅の家紋は何ですか？ホリエモンではないですよ。 （笑い）

## 自分では見えないもの

---

自分では見えないものの代表としてよく言われるものにうしろ姿があります。うしろ姿というものは自分では意識できないことから、あるがままの自分がそのまま出てしまうと言われます。

これらの他にも自分では見ることの出来ないものとして、カッと怒ったときの自分の顔、自分の寝顔、そして自分の死顔があると相田みつをは、自身の著である「生きていてよかった」の中で述べています。

見えないものの中には、人間の本性が出るといわれています。この本性は、無意識に中で自然と出るものであるからして、このような状態では正にその人の本性が丸出しになってしまうのです。

この本を読んだときに、自分では見えないものがまだまだたくさんあるのではないかと思いました。寝顔、死顔、怒った顔は物理的な面から見えないものに当たりますが、人間が生きていく世界では心を開かないと見えない、また相手の想いが感じられない事が沢山あると思われま

他人が自分のために見えないところで何かをしてくれたとしても、それを実際に行っているところに出くわさないと、普通は分からないものです。しかし、その人がしてくれた行為により何らかの影響が自分に起きたときに、敏感に感じ取れれば大したものですが普通はその人が言わない限り分からないものです。

ですから今自分が生きていられるのは、多くの人の力が相乗作用として働いているからこそ安心して生きていられると思うようにしています。すなわち全ての事象に対して感謝の心をもって接することが特に重要だと思うのです。

また、歳を取ったせいで最近はお節介になり、これらのことがまだ分からない人に対して自分の目に見えないところでこのようなことが行われているのだということを、機会ある毎に話をするようにしています。

このような小さなことを通じて、少しでも人間と人間の関係が改善され良くなるのであれば、社会全体もこれに伴って変化すると勝手に思っています。

これからも常に自分が生かされていると思いながら、他人に感謝するとともに何事も他人のために一生懸命に行うことを忘れずに行動することが、結果的にはどのような場合でも恥ずかしくない本性がでるのではないかと考えていますし、反対に自分の本性を素直に出せるようにしたいものだとも思います。

また仮に自分のうしろ姿を見ながら育ってくれるような人材が育ってくれたら本望というほかありません。このようなことが少しでも早く実現するように、自分自身も頑張らねばと思っているこの頃です。

## 目に見えるものと見えないもの

---

人は誰でも自分の目に映るものが事実であり、かつ真実だと判断する行動をとるのが普通です。この私でさえ目の前で起きているものが事実であると思います。また形のない（楽譜という形はありますが）音という媒体を通してかつ自分の感情を通して何かを感じる事が出来る音楽のような対象も、これまた事実であると思います。

いまから50年程まえの幼少の頃の自分を考えると、自分の家の周りのほんの小さな範囲（今から考えると半径1km程度）が自分が把握できる世界でした。それよりも外の世界へは、一人では行けなかったし反対に行ってはいけないのではないかと思っていたほど臆病な子供でした。

この考えは今でも持ち続けています。ですから初めて訪問する場所へ行くには、行く前からいろいろ不安なことを考えてしまいます。その背景には自分の目で一度も確認したこと、あるいは経験したことがないという事実があるからです。

例え辺鄙な場所であっても、過去に一度でも行ったことがあるところではこのような不安な気持ちは起きません。それよりも、その後どのようにその土地が変わったのかを知りたくなるような気持ちになるのが普通です。

このように人間の判断には、過去の自分の経験に支配されている部分に多くの問題を占めていることが分かります。ですから自分が経験したことの無い事象は容易に認めたくないし、反対にそれは事実ではないと判断しがちです。

また、自分が経験したことを基に判断することが本当に正しいかという点、これまた疑問が残ります。なぜならばその経験が本当の事実に基づいた経験であるかが問題になるからです。偏った条件のもとでの経験は、例え貴重な経験をしたとしても普遍的な事象への対応が出来ないと思います。

このようなことを考えていると、いったい何が事実で何が正しいものなのかと悩んでしまうのが私のような普通の人のとる行動様式なのです。この課題を何らかの方法で突破できない限り、いつまでも現状維持かあるいは前進する速度が遅くなってしまいます。

これが人生であると割り切ってしまうのであれば、それはそれでまたひとつの生き方であり、正しい道かも知れませんが、ちょっとだけ欲張りな私は、怖いのですが少しでも自分が知らない世界に足を踏み入れ、自分が知らない世界がどのようなになっているのかを、確かめたいという気持ちが強いのです。

そのためには、自分だけの経験でなく他人の経験も素直に受け入れながら、より広い世界への対応を可能にしたいと思っています。その際に大きな問題にぶち当たるのが、一番最初にあげた目に見えないものを自分の中にどのような意味を持って受け入れるかなのです。

この世の中には科学を以ってしても解明出来ないいろいろな現象が起きています。人間は全宇宙の中で万能な能力を備えた存在ではないので、全ての事象を解明出来ることは出来ないのです。そうだとすれば科学でなくもっと異なる方法でこれらの現象を明らかにする取り組みも必要だと思えます。

具体的にどのような方法があるのか分かりませんが、インドで釈迦が悟りを開いて現在までその教えが仏教として伝承され、我々の身の周りに定着しています。高僧は、大変に辛い修行を通して釈迦に近い存在になるといわれていますが、その際にも霊や魂のような現代の科学では究明できていない、目に見えない何かを体験しているのです。これは修行を通じて初めて到達する世界ですが、悲しいかな私のような普通の人間には実現できる範囲ものではありません。

体験できないものはどうすればよいのかというと、これらの高僧が体験した事実をそのまま事実として自分の中に受け入れて消化し、自分のものにするしかないと思うのです。仏教のほかにも宇宙のエネルギーや波動を受けることによってさらに世界が広がると説いている例もあります。

幼少の頃とは異なり個人的には、これらの考えを素直に受け入れてる自分がいますし、そして少しでも自分の知らない世界を体験し、何らかの形で世の中に役に立つことが出来ればと考えています。

モーツァルトは大天才だといわれています。確かに短期間で交響曲を作曲するなど通常では考えられないことをした人間ですが、個人的には宇宙のエネルギーを十分に使いこなせた人間だったのではないかと考えています。

モーツァルトが感じて作り上げた音楽が、宇宙の彼方から送られてきたものをモーツァルトの頭の中で音に再現したのだと思うと、いろいろな面で辻褄が合うのです。だからモーツァルトは天才ではないというのではなく、そのような宇宙の目に見えないエネルギーや波動を素直に感じる事が出来た人間だったのではないかと考えるのです。

今回は、オカルト的な話で最後を締めくくりますが、決してオカルト推進ではなく人間の判断の基準として物質文明の中で確立された経験に基づくものだけでなく、目に見えない世界の事象等をも含めた考え方で今後対応する必要があるのではないかと、素直な問いかけなのです。

## 歳をとって得るものと失うもの

---

2011年の誕生日で60歳になりますが、正直言って自分が限りなく60歳に近づくとの意識は非常に薄いのが現状です。しかし、体力だけは自分でも歳をとったとの実感があります。この歳になると、自分の進むべき方向だけはしっかりと持っていなければならないと思いますが、なかなかその方向が見えないのが正直なところではあります。

60歳になり定年となったときに、自分はどのようにして残りの人生を過ごすかの人生設計がまだできていません。そろそろ決めないといけないと思っています。

最近になって考えることは、歳をとって失ったものと反対に得たものを考えると、非常に感慨深いものがあります。失ったものを考えてみると、まず挙げられるのは体力だと思います。40歳代の時は毎晩遅くまで仕事に没頭していました。仕事が一段落した時の打ち上げで、それまでの仕事を振り返りながら大好きな日本酒でも飲めば、それまでの体力的な疲れは吹き飛んで充実感や満足感でいっぱいになりました。今から思うと若いと思われる時です。

それが、今の歳では無理が効きません。また体力が弱ってくるとそれに伴って気力も弱くなるようです。人間は気力がある間は、それが続く限りどのような分野への挑戦でも可能ですが、気力が弱ってくるともう駄目だと思います。諦めが先に出てしまいます。

最近はどうもこの状態に陥っています。どうしてもやらなければならないことは、なんとか頑張りますが、少し優先度が低いものに関しては直ぐに諦めてしまう行動に出てしまいます。音楽を例に取るならば、疲れているときにベートーヴェンの大曲（例えば交響曲第3番や7番に該当）を聴くようなものです。確実に疲れそして消化不良を起こしてしまいます。

それよりも聴きなれたモーツァルトの優しい曲を選択してしまいます。決してモーツァルトが逃げの音楽であるというわけではありませんが、心が和むものを必然的に選択してしまうのです。さらに言えば、脂っこい洋食からさっぱり系の和食に変わるような心境です。

また、気力にも関係すると思いますが物事を熟考せずに短絡的になってしまう行動に出やすくなると思っています。困ったものですが、深く考えるのが億劫になってしまうのです。自分でも時々情けなくなることがあります。昔は絶対に諦めないで最後まで仕事を完成させたのに、今は何かしら理由を付けて自分が出来なかった言い訳を確立して、納得するような卑怯な生き方に変わりつつあるのです。

以前に知人から、よく忙しい中で毎週メルマガが書けますねとの聞かれたことがありましたが、その頃はどうしても書きたいから書くのであって、辛いと思ったことはあまりなかった気がします。しかし、最近は書きたくても書けなくなっているのが正直なところではあります。

確実に気力や気概が弱まっています。自分でも嫌になってしまいます。しかしこれは体からの言葉であって、無理して進めると本当に体のバランスを崩し自分がさらに駄目になってしまうとの恐れがあるため、いつも自分の甘えは抑えるようにしますが、心や体からの言葉に対しては素直に行動しようと思っています。これが歳をとることであると一方で思います。

歳をとることが良くない、また悪いように受け取られると困るので、反対に歳をとって得たものもあります。歳をとって身近に感じるのは死の存在です。それまでは自分の中に概念的にしか存在していなかったものが、ある時期になると身近に迫ってくるのです。恥ずかしいことですが、この死を考えることによって初めて、人生を生きるための哲学を考える機会に出会いました。この人生の哲学を考えるようになって生の重要性も分かり、どのように生きたら良いのかと悩み始めるのです。

個人的な結論は、心あるいは体が発する言葉やサインに素直に従うことだと思っています。人間は最後は宇宙や自然の中のあるひとつの存在でしかあり得ないので、その基本となっている心の動きや体からの合図が自然に調和するものであると考え、これらの事実を正しいものと考え、常に自分に対して素直に行動したりするようにしています。

これらの行動をよりスムーズにさせるのが、私にとって仏教や仏や庭なのです。ですからこれらの前に自分が立った時には、自分の存在以上に自然というか宇宙というかエネルギーというかそのような無限の存在を感じます。さらにこれらの先に死があるような気がしてなりません。最近歳を取った所為で、仕事での充実感がだんだんと薄れてきていますが、個人という小さな存在の中での充実は、反対に増えているような気がしています。

人間は最後は増えたものまた減ったもの等、すべての面で精算され、ゼロの状態に戻るのだと思っています。これが生まれて死ぬという自然のなかでの人間としての生きるサイクルだと思います。したがって歳をとってもそれなりに自分に素直で生きていくことが重要ではないかと最近特に思うのです。

## 29回目の結婚記念日を迎えて

---

先日29回目の結婚記念日を迎えました。今振り返って29年間を考えると、一瞬のうちに過ぎ去ってしまったような感じがします。一般的には25年目の銀婚式と50年目の金婚式が有名ですが、結婚記念日に特別の催しを行うという考え方は本来ヨーロッパの風習であり、日本にはなかったものです。

なんでも西洋文化にかぶれてしまった明治天皇が、明治27年に銀婚式のお祝いをされたことから一般的になったようです。西洋文化の根底にある契約社会的な基礎に則った考え方だと思います。契約社会ですから、契約が破棄されずに継続されることに意義を見出し、それを祝うものだと思います。

その観点から見ると、日本の文化に根ざした結婚感は若干異なるような気がしています。結婚すること自体が双方に何らかの縁があったことから成立するものですから、契約という観点ではなく、仏教でいうところの因縁が重要視されるのだと思います。

一方仏教では、人間が生きるにあたっての戒律として、5つの守るべき五戒があります。「不殺生戒」「不偷盜戒」「不妄語戒」「不邪淫戒」「不飲酒戒」それぞれ、殺してはいけない、盗んではいけない、嘘をついてはいけない、淫らな男女関係をもつてはいけない、酒を飲んではいけない、としたものです。

今の世の中でこれらがどれだけ守られているのでしょうか。全て守られていないのが現状ですし、反対に人間はこのような状況になるので、それを戒めるために仏教では五戒を定めて修行し、仏に近い存在になろうとしているのだと思います。

特に男女の関係を戒めた「不邪淫戒」に関しては、世の中から絶対とっていいほど、なくならないものだと思います。結婚していても心引かれる異性が目の前に登場するのはよくあることですし、仕方の無いことだと私は思います。決して不倫を薦めるわけではなく、誰にでも心の無意識の領域に存在するものだと思うからです。

さらに人間は弱いですから、越えてはいけない一線を越えることもあると思います。問題はそれをどのように心の中で処理するかが大きな問題だと思います。双方とも、人には決して言えない大きな罪を負って、生きていくことになると思います。

掟を破ったものは、必ずそれだけの重荷を背負うことになるのです。この分野に関しては、渡辺淳一の小説に沢山登場していますし、「失樂園」「愛の流刑地」などの作品がそれにあたると思います。

一方で、結婚は人生で重要な位置を占めると思います。全く異なる環境の中で生きてきた男女が、縁あって同じ屋根の下で暮らしながら、人間とはどのように生きるべきかを一緒に考えそして悩みながら生きていく必要があるのです。

ある時は向かっている先が全く異なることもあるし、反対にぴったりと一致していることもあります。そして何よりも重要なのは、相手の存在や考え方を認めることだと思います。自分の考えだけを押し付けていては、長続きしません。

不思議なもので、異なる考え方の男女が長い間一緒に暮らしていると考え方が自然と同じようになってきますし、食べものの傾向もだんだん近づいてくるものです。別の言葉で言うと結婚あるいは夫婦とは、人生に関しての運命共同体だと思います。

先日、最近の夫婦関係を分析した玄田有史著の「仕事とセックスのあいだ」を読みました。これほどセックスレスの夫婦が世の中に多いとは知りませんでした。

それだけ男性にエネルギーが無くなってきているのと、社会での女性の役割が高くまた重要になり、本来の動物的な雄と雌の関係から、より精神や知性面が重視された夫婦形態に変わりつつあるのかも知れません。少子化の傾向が強いのも、社会的な制度や考え方が整備されていないだけの理由でないような気がしました。

個人的には、セックスレスの夫婦が世の中に多いは問題だと思います。夫婦の絆はセックスだけだとはいいませんが、大きな要素になっているのは事実であると思います。セックスを通した夫婦円満という男女のコミュニケーションには、重要な要素が秘められているような気がしてなりません。

日本人はセックスに関して恥ずかしいと思う考え方がありますが、誰でもがしていることで、ある程度オープンに語れる環境も大切ではないかと思います。ただし、今の若い人の中ではちょっと進みすぎている人もいますので、反対に少し恥じらいを持つべきだと思います。

話が逸れてしまいましたが、結婚は是非ともすべきものであるし、その生活の中から双方が成長し、かつ尊敬できるような形にしていくことが結婚生活の重要な課題であると思います。

いまから約40年前の自分は、暗い高校生活を送っていました。そんな高校生活の中で楽しみだった授業が地学でした。地学が扱う範囲は、広く地球物理学、資源工学、気候学、鉱物学、岩石学、火山学、地質学、古生物学、地形学、土壌学、天文学等にまで及び、全て地球人として生きていくときに必要なものばかりです。地震、火山、台風等この日本で生きていくに当たり、いまの我々には非常に重要なものばかりだと思います。

このように地学が扱う分野自体にも興味がありましたが、それ以上に地学を担当した教諭の哲学にも通じる授業内容がとても好きでした。いまでも覚えているのは、「人間は死んだら宇宙の塵である星間物質に戻るのだ」ということです。人間としてどのように生きていっていいか分からなかった青春時代に、このような強烈な考え方を示されると、なんとなく小気味良い感じで心に響いた感覚が今でも残っているし、また自分の生き方の基本になったような気がしています。

ですから、壁にぶち当たったり、また心の中がざわざわと落ち着かない時に、何故か自然とこの「人間は死んだら宇宙の塵である星間物質に戻るのだ」という言葉が念仏のように頭の中に響いて、そして諦めというか大宇宙の中で何も出来ない無力な自分を見出して、宇宙の塵になるのだからいいやと、なぜか安心してしまうことがこの歳になった今でも続いています。

この地学の授業は他の理科の科目である、物理、化学、生物と異なりとても地味でマイナーな科目のように思えましたが、人生の基礎を作るのに役立った教科でした。その様な中で、いまから5～6年も前になりますが、高校の授業から地学が姿を消しつつあるという報道がありました。なんでもその年には全国5500校余りのうち約4割しか地学の授業を行わないとのデータが発表され、ちょっと疑問に思わざる得ない状況でした。

世界有数の地震・火山国であり、さらに台風など気象災害も多い日本において、地学教育の重要性は誰が見ても高いと思われませんが、受験対策上は物理と化学を選ぶのが無難であるという流れが主流になっているようです。文部省の学習指導要領では理科に関して、2科目必修と選定していることから、必然と大学入試では物理と化学を課すケースが多くなり、地学の授業を行わない高校が増えてしまうのです。近い現実を見るよりも、もっと将来を考えた選択をすべきだと思います。

秋から冬へと季節が変わりますが、これからの季節は夜空に星がキラキラと輝くのを観察する良い時期になってきました。いま輝いているあの輝きは数億年という途方も無く遠い過去に放たれた光がいま我々の所に届いているのです。その星と地球の間には何も存在しない暗黒の宇宙があるだけなのです。

五木寛之は、人間の世界を「物理」と「物語」の2つの面から考えるべきだと「元気」という

著書の中で語っています。「物理」とは本来の科学の世界で、物事を理論で考えるもの、すなわち物の世界です。しかし全ての事象はこの「物理」すなわち科学で解決できるものではありません。どうしても解明できないものが存在します。この科学で証明したり解明することが出来ない分野や事象を、物語のように作りあげる世界が必要だと説いています。すなわちこれは心の世界のことなのです。今必要とされているのは、この心の世界だと思います。

仏教の世界の「南無阿弥陀仏」は、この心の世界のことを言っており、光り輝く無限の生命力の根源に対して深く畏敬し、その前に頭をたれて感謝することを言っているのです。この仏教の世界でも、最終的には宇宙のエネルギーにその根源を発しているといえます。

別の面から見ると21世紀を生きる我々は、我々を取り囲む地球温暖化等の様々な地球環境問題、地震や火山さらに台風等の自然災害の問題、石油等の資源枯渇問題や将来のエネルギー問題など、数多くの課題に直面しており、これらの問題を解決していかなければなりません。そのためには、必要最低限の科学的知識を学ぶ必要があるとともに、もっともっと豊かな自然観を身につける必要があります。ところが現代は、むしろ人々の自然からの乖離が進んでいるのが現実であり、将来的に大きな問題に発展するのが目に見えているのです。

もっと自然に接しそして自然を守り、地球との共生のために自ら考え行動できるようになることが必要です。その為にも地学が占める重要性は非常に高いと思います。冬の夜空を見上げながら星座の話しをしながらロマンを語ったり、また人間とは何かとか死んだらどうなるのかのような哲学の話しながら人間として成長する、そんな教科が必要だと思います。

40年前に受けた地学の授業は、今でも心に残っており自分にとっては最も価値のあるものだったと思っています。教諭の名前は忘れてしまいましたが、今も健在であれば80歳を越えていると思います。「人間は死んだら宇宙の塵である星間物質に戻るのだ」この言葉は、一生忘れられないものであり、いつまでも自分の青春の1ページに存在するロマンでもあるのです。

## 人間のDNAと目に見えない大きな存在（Something Great）について

---

先日、DNA解明の世界的権威であり筑波大学名誉教授である村上和雄氏の講演を聞く機会がありました。演題は「志や感動が可能性を引き出す」で、とても歯切れの良い話し方で、講演時間の90分があっという間に過ぎてしまいました。

講師紹介の欄には、1936年生まれで世界に先がけ、高血圧に関わる酵素「レニン」の遺伝子解読に成功し、一躍世界的な業績として注目を集めるとあり、生命科学のなかで遺伝子の解読に取り組んでいる第一人者とのことでした。

この分野に関して全く知識の無い私にとって、話の内容はわくわくときどきする内容で、全てが目から鱗のものでした。ですから話の内容が一言も漏れずに、あたかも砂漠の砂に水がしみ込むように全て新鮮に私の中に入って来ました。当日の話を聞いて感動した点は以下に示すものです。

人は環境を変えることによりそれまで眠っていた遺伝子のスイッチがオンとなり、活発に働き出す事がある。このような時に人は大きく変わる事ができるようです。確かに人生の中で行き詰る場面に遭遇することは多々あります。一般的にその時点では、悩みに悩んで何とか切り抜けながら生き延びてきているのが一般的だと思いますが、この時に環境をがらっと変えることにより、新たな刺激を受け人間的に新鮮な感動の力で今までOFFになっていた良い遺伝子を目覚めさせることで、人は大きく伸びるのだそうです。

確かに自分にもこれに似た経験をしたことがあります。今から20年程前に全く英語が話せないのにも関わらず当時の国際部に転勤になり、全く環境の異なる中で仕事を5年ほどしました。この中で初めての海外出張の際には、言葉に表現することが出来ないほどの大きなプレッシャーの中でどうしてもやり遂げなければならないという使命感だけで対応したあの当時の行動は、正に環境を変えた状況に該当すると思います。

自分でも不思議なくらいそれぞれの局面では冷静に対応できたような気がしています。もっと大袈裟に言えば普段聞き取れない英語の内容がなんとなく分かってしまう感覚です。この経験を通してそれ以降は、人間ってというのは真直ぐに取り組めば最後の最後はどうにかなるのだという変な自信が出来ました。どこかの遺伝子のスイッチがONになったのではないかと考えています。

また、一方でほとんど全ての病気は遺伝子の働きに関係するそうです。遺伝子が正しい形で働かない、あるいは働いては困る遺伝子が働き出すのが病気であるのだとすると、良い遺伝子をONにし、良くない遺伝子をOFFにすることが出来れば、一般的な病から人間は解放されます。

この遺伝子のスイッチを切り替えるには、どうも人間の心の持ち方をプラス思考に変えることが必須条件のようです。この領域になると心と遺伝子の関係が重要になってくるのです。強い意思と素直な心を持った人のみが、これらの恩恵を受けることが出来るようです。これは人間の哲学にも通じることだと思えます。常に意識をもって行動することが結果的に遺伝子に伝わり、良い遺伝子がONとなるのです。

生命が誕生したときからこのようなプログラムが遺伝子のなかに組み込まれているのではないかと思います。全うな人生を歩むものには、それなりの人生が送れるように目に見えない自然界の大きな力がそのようにさせているのだと、今回の講演を聞きながら感じました。この目に見えない大きな存在を村上氏はSomething Greatという表現をしていました。

人間がいくら遺伝子を分析できたとしても、それを作り出すことが出来ないのが現実であり、偉大な力こそがこの全宇宙を含めたなかで眼に見えない小さな細胞の中の核という部分に納められている遺伝子を作ることができたのです。

この遺伝子は、たった4つの化学の文字の組み合わせ（AとTとCとG）で表される30億もの膨大な情報が書かれており、この情報によって私たちは生かされているのです。そして我々の中の60億に及ぶ細胞の一つ一つに、全く同じ情報のものが存在しているのです。

その組み合わせの違いは70兆通りもあるのです。まさに今の自分が生かされているのは奇跡のような感じがします。さらに驚きなのはこれらの遺伝子は人間だけではなく、すべての生物に備わっているのです。ですから我々は植物でも動物でも生き物に親近感を覚えるのは、この根底に遺伝子があるからだと思えます。

今回の講演を聞きながら、命という根源に少し触れることが出来たことと、人間としてこの全宇宙の自然の流れに逆らうことなく、意識をもって行動する重要性を感じました。

久しぶりに感動する話を聞き、自分のなかの細胞が少し活性化されたような感じを受けました。そして、この全宇宙の中に偉大な力をもつSomething Greatが存在すると思えました。

## 自分以外に対する思いやり

---

昨年9月のリーマンショック以来、世界中の経済が不安定化し、かつ成長が大幅に鈍化した。この影響を受けて多くの企業が打撃を受け、経営状況が悪化した結果、買収されたりあるいは事業を廃業したりする現象が起きている。

経済が停滞すると、人間の生活様式も大きく変わらざるを得ない状況となる。一例としては、プライベートブランドのような価格の安いものが注目され、贅沢品とされていたものの販売が激減した。生活防衛のために取るべき結果の現われであると思われる。

しかし我々庶民はそれほど困っていないのが本音だと思われる。確かに失業率は高く今だに職に就けない人がいることは事実であるが、今の日本では生活レベルを少し下げれば、どうにか暮らしていけるのが実態でありまたそれだけの力はあると思う。

昔は生きていくために必要な最低限の物の確保が大きな問題であったが、今は反対に物が溢れている状況だと思う。したがってどうしても必要なものだけを購入する行動に出ているのだと思う。

政治家はマニフェストを掲げ、今月末の選挙に臨む準備を進めているが、政権交代して日本の政治が本当に変わるのだろうかと思ふことがある。そもそも国民自体が自ら政治に係わって日本の国を良くしていこうと本心で思っている人がどれほどいるのだろうか？

日本人の生き方として、自分がやらなくてもきっと誰かがやってくれるから大丈夫だと思っている輩が多いのが現状だと思う。これは国に対してもまた企業や自分が住んでいる地域でも全く同じことが言えるのではないかと思う。

確かに自分の存在意義が最終的に最も重要なものだと思うが、個人が発揮できる力の数%でも自分以外の目的のために使ったとしたら、この日本の国は劇的な変貌をとげるのではないかと思っているが、皆さんはどのように思われるだろうか？

いまいち世の中において真剣さが無いと思われる現象の現われの例として、TV番組の内容の多くがクイズとお笑い系であることがあげられる。番組制作コストが安いのかどうか知らないが、どの番組も同じような内容であり、それを見ながら国民が楽しんでいる異常さは少し不気味である。

このような時代であるから少しでも明るくという趣旨なのか知らないが、このままでは日本は確実に世界の中で脱落する国になってしまうと思う。

今の日本人に欠けているものの一つとして、自分以外に対する思いやりがあげられる。このような心が無くなりかけている背景には、日本の教育の中に課題があるような気がしてならない。変な理屈でゆとり教育が出てきたり、制度や環境が揃っていないのに英才教育を進めるなど、地に足がついた行動をとらないところに大きな原因があると思われる。

昭和55年度から学習指導要領が改正され、ゆとりを前面に出した考え方で教科指導を行わない「ゆとりの時間」が始まった。当然その分だけ従来からの学習内容や授業時数の削減が行われた。

さらに平成4年の9月から第2土曜日が休業日に変更、平成7年4月からはこれに加えて第4土曜日も休業日となり、平成14年度からは完全学校週5日制となった。当然のことであるが、削減された時間に本来のゆとり教育が行われているはずであるが、その弊害がいまの社会に影響し始めている。端的に現れているのは、新入社員の取り組み姿勢に見られる。

戦後の復興期からバブル期に入るまでは、日本中が本当の意味でまじめに頑張って日本という国を発展させ世界の国々に追いつき、そして次の世界を引っ張って行くところまでたどり着いた。あまりにも一直線に走り続けてきた結果、ふとこのままで良いのだろうかという奥が深い疑問に対して答えがないまま、心情的な感覚でほっと一息つくためのゆとりが必要だとの大きな流れに流されるように、ゆとり＝休みのような考えで世の中が進んできてしまった。

本来のゆとりとは、自分を見つめ分析しある程度の方向性をだせる人間がゆとりという環境の中で、何かを成し遂げるものだとして理解しているが、どうも世の中はこのような考え方ではないようだ。

自分で考えたことを自分の都合で進め、自分勝手に対応することがゆとりと考えているように思われる。人間は一人では生きられないことを知らずして、ゆとりに走るの大きな誤りである。自分とは、他人があって初めて自分の存在があるということを、確実に認識した後に行動すべきである。

残念なことに、この考え方が抜けているのが今時の新入社員である。すべての新入社員が当てはまるのではないが、昔に比べると明らかにゆとり教育の弊害による人間性欠陥のある社員が多くなっている。

とにかく自分を主張するのが得意であり、変に自信をもっているから扱いが大変である。私が新入社員のときは、何をするのも自信がなくて悩みながら先輩の行動を観察し、仕事の流れをつかみ覚えたが、今はこの方法は通用しない。

マニュアルのようなものを作成し、かつ徹底的に指導して初めて業務を覚える行動に入る。このプロセス抜きで仕事を指示すると、このようなことは習っていないから出来ないと言い出す。要は何から何まで一旦はお膳立てをしなければ動かないのが現実である。さらに優しく言っても結果的にプライドが傷つけられたと感じると、もう大変で会社を休んでしまう輩もなかにはいるとのことで、扱いが非常に難しい。

これらの根本的な原因は、いままでのゆとり教育の実践と厳しさのない教育指導にあったと言える。もっと人間として考え行わなければならないことを真剣に考える時間がないまま、ゆとり教育という美名の中でちやほやされて育った団塊の世代が、これからわんさと社会で働くようになってくる。従来以上に企業での育成は大変になると覚悟しなければならない。

最も困るのは、自分と他人の関係を理解していないことだ。人間は他人があっはじめて共存できることを親も学校でも親身に教えないことが大きな原因である。自分を守ることだけに力点を置き、他人は独立した存在で関係ないと考える。困ったものである。

したがって「忘己利他」の考えが重要であり、この考えのもとに自分があるとの気づきを教えることがゆとり教育を是正する第一歩であると考えます。

過去の歴史が物語るように、全ての人間が満足する社会的なシステムやそれを支える仕組みの構築は困難である。唯一可能なのは、人間としての生き方の明確化だと思う。人間の幸せを物と心で図る尺度としたらどちらが本質的なものであろうか。私は、それは絶対に心だと思っている。

## 「呼吸」と「ギブアンドテイク」

---

毎日何気なくしている行為の中に「呼吸」があります。人は意識して呼吸するのではなく、無意識のレベルで息を吐きそして吸っています。また呼吸する順番ですが、息を吐くのが先なのか吸う方が先なのか凡夫には分かりません。呼吸という熟語を見ると「呼」は息を吐くことですからまず自分の体内にあるものを外に出し、そのあとにそれに代わるものを得るために吸うのが順番のようです。

この世に生を享けたとき、これから起きるであろう苦勞あるいは悲劇と対峙するため、赤ちゃんは体内にあった全ての空気を吐き出し、そして大声で泣き、この世で初めて外気の空気を自らの体内に吸い入れることから、短くて長いそして哀しくて楽しい人生が始まるのです。正に全てを出し切るからこそ、新たなものを思いっきり吸収することが出来るのだと思います。

生まれた後はどのようになるのでしょうか。人間として社会の中で生きていくには、どうしても人と人との繋がりの中で自分の役割をきちんと果たさなければなりません。社会の中では「権利と義務」がセットで論議されます。権利だけ主張しその裏にある義務を果たさないとすれば、それは明らかに自己中心型の利己主義に陥ってしまいます。社会に何も還元せずに、自らの為のみ社会から搾取することになるのです。これは最低の行為です。

キリスト教は「愛」を説いていますが、この愛は無償の愛であって一方的に与えることに主眼が置かれています。人間はもともと利己主義であり、得るものだけを得ようとする行動様式をとることを知り尽くしていたことから、このような教えが出来たのかも知れません。

これに対して仏教は釈迦の考え方をその時代背景やその地域によって少しずつ変化させ、その時代に生きている人間がこの世から救われることを目的としていろいろな教えが唱えられました。凡夫は東洋の端の日本という国にたまたま生を享けたので、自然と仏教に親しみを感じるようになり、またそれが自然だと思っています。仏教では、一方的に与えることが正しいとは説いていないと思います。仏教はまず自我の確立から始まるような気がしてなりません。

一般的なビジネスの世界では「ギブアンドテイク」が基本的なマナーのように言われていますし、この関係が上手く成り立たなければビジネス上の人脈が出来ないと断言する者もいます。確かに双方が対等の立場に立てるので一見してとてもハッピーなことのようには思われますが、重要なことはこの「ギブアンドテイク」が成立する前の条件としてお互いの間に信頼するという行為がなければ、この関係はかさかさとした単なるビジネスライクの乾いた関係で終わってしまいます。重要なことは、本来の人間としてのどろどろとし、さらに湿った人間関係のなかで「ギブアンドテイク」という仕組みを動かすことだと思います。

日本独特のビジネスのやり方として、富山の薬売りのように顧客に先に満足を与える伝統的な

商売方法がありました。この関係は顧客との信頼関係が確立出来るので双方にとって非常にメリットのあるやり方だと思います。西洋的な「ギブアンドテイク」でなく、日本独特のこのようなビジネスのやり方がもっと現在の世の中で採用されてもよいと思います。このように日本には古来から「阿吽の呼吸」でいろいろな場面をスムーズに切り抜ける技を持っているのです。

「ギブアンドテイク」はどちらかと言うと、与えることを先ず実行し、得ることはその次であるというどちらかと言うとキリスト教的な考えで対応すべきだと思います。よく会社の中で分からないことを聞くだけ聞いて、反対に他人には教えない人間がいますが、これは生きるルールのなかで違反者だと思います。

最終的にこのような人間はあとあと孤立化し、どうしようもなくなった時に初めて気づくのですが、その時には既に遅しといった状況に陥っていると思います。さらに哀れな人間は、最期の最期までこのような状況を理解せずただテイクだけの行動をとる人間だと思います。

自分の持っているものを全て出し切って生きている人は、それ以上に与えるものがありませんから考え方もクリアーで物事を冷静に判断できるのだと思います。世の中はよくしたもので、このような人には周りの人から暖かい支援や尊敬の念が寄せられるものなのです。本来の「ギブアンドテイク」は、正にこのように持っているものを自ら出し切った後に、何かを得るというプロセスの事を指すのではないかと思います。

兎に角真面目に生きていれば、必ず良いことが自分自身に起きると信じて行動することが大切だと思います。世の中の行為の中で順番がポイントとなる場合は、まず自ら与えることから始めると間違いないと思います。これは、凡夫の貧弱な生きる唯一の技でもあります。皆さんはどのように思われますか？ただし飲み代は割り勘ですぞ！

## 電子メールとときどき電話と心のこもった手紙

---

コミュニケーションツールとして電子メールは今やなくてはならないものとなりました。特にビジネス分野では、電子メールがないと仕事が出来ないほど密接に係わっています。仕事を進める上で電子メールは必須ですから、職場では当然のこと、外出時はPCのモバイル機能を活用し、さらに土日は自宅でメールのチェックをする位ワークホリック病にかかってしまっている人が私を含め多いと思います。

反対にメールを見なかったことにより対応が遅れ、あとで取り返しのつかない事になるよりは、多少時間がかかりますがメールを見た方が安心できるとの判断が働いてしまいます。

さて、この電子メールですが毎日見なければならない件数が多く閉口してしまいます。多いときは日に100通を超えることがあり、すべてのメールに目を通すことは不可能ですから、表題を見ながらこれは関係ないなと判断したものは未読のまま消去してしまいます。

このように内容を確認せずに消去してしまったものの中に、後から重要なものであって困った経験をしたこともありますが、自分の時間を守るにはある程度リスクは必要だと思い、機械的に毎日消去しています。

特に電子メールで困るのは、受け取り側として宛先に入っているのではなくCCで入っているメールが極端に多いことです。送る側はリスク分散をするために参考程度の軽い気持で送っているのだと思いますが、受け取る側は大迷惑です。

本当に必要であるなら宛先にきちっと入れて欲しいものです。さらにメーリングリストにでも入れられたそれこそ大変です。強いて関係のない情報がばんばん飛んで来るからです。これだけ技術が発達してきているのですから、自分宛に来ているメールで宛先に入っているもの、CCに入っているものあるいはBCCに入っているものを受信時に判別し、表題の色分けでも出来る機能があるといいと思います。

このような機能があればCCで来ているものは確実に安心して削除することが出来ます。宛先に入っていれば読まざるを得ないし、BCCであればちょっと危険な感じがしますが読まざるを得ないと思います。一番良いのは unnecessaryなメールを発信しないことですが、つつい便利なので深く考えずに、取り敢えずメールしておこうといった感じで、気軽にメールしてしまう行為が問題だと思います。

従来は電話を利用して相手と直接会話しながら進めていたので意思の疎通は取れていましたが、一方向の電子メールはそうは行きません。相手から勝手に飛んできてしまうから大変です。また、電話は話す時に緊張感がありますがメールは気軽に出せてしまうことから、中には失礼な

表現になったり、本心や本当の意図が伝わらないことがどうしても発生してしまいます。

このようなことを考えると電子メールと電話の使い方をきちんと分ける必要があります。会議の日程調整や多くの人に開催日を周知するのに使うにはとても便利なものですが、メールで重要なことをきちんと論議するのは難しいと思います。

兎角電子メールだけで仕事ができる様な幻想を抱きがちですが、きちんとTPOを考えて電子メールを使う必要があると思います。やはり相手と直接話して意思を伝える電話は重要だと思います。

また、仕事上では無理かもしれませんが、その個人の心が確実に伝わる手紙の存在は非常に大きいと思います。電子メールは確かに文章が残りますが、手紙のような残り方ではないと思います。電子メールがデジタル的な残り方とすると、手紙は愛情といった気持が込められたアナログ的なものだと思いますので、個人的に捨てられないツールです。

しかし、1年にどの程度手紙を書くかといったら年賀状くらいで、それもワープロによる印刷ですから送り手の直筆の場合と異なり愛情度は低くなります。だんだん温かみや愛情が少なくなる傾向にある今の時代にあって、このままではさらに心が乾燥するような時代になってしまいます。このようなデジタルの時代だからこそ、もっとしっとりとした湿った心になるような環境を作らなければならないのではないかと思います。

特に個人的な生活の面では、電子メールよりは電話、電話よりは心が伝わる手紙の利用が大切なのだと思います。それも直筆で書き、切手を貼って相手に無事に届きますようにと思いながらポストに入れる行為が最近極端に少なくなっている自分を発見しています。秋が深まってきているので、久し振りに手紙でもしたためようかななんて考えています。

## 「気」の重要性について

---

以前から「気」に関して興味を持っていましたが、最近益々興味を持つようになりました。この「気」に関していろいろ調べていくと、最終的には人間としての根本的な領域まで行き着くものだと思っています。例えば、この「気」は人間の健康に非常に密接に係わっているし、またさらに人間の生き方や無の世界さらに仏教の考え方にも最終的に帰着するように思えます。

我々の生活の中でこの「気」がつく言葉はかなりあります。例えば、元気、気持、気合、病気、殺気、気楽、気概、気さく、気迫、気温、天気、気位、気苦労、気孔、気性、気色、気分、気品、気前、邪気、安気等挙げればかなりの数の言葉が出てきます。また、不思議なことにこれらは全て、人間の体や心に関係しさらに内部の精神的な要素と結びついています。

特に興味を持つのは、「病は気から」というように人間が生きて行く上で重要なものがその根底にあるのだと思いますし、「気」は病気や運勢、また心の種々の悩み事と深い関わりがあると思います。「気」というエネルギーがスムーズに流れず、あるところでとまってしまったり流れが悪くなることでいろいろな症状がでてくるのだと思います。そして気の流れがスムーズでないから、その気が滞るところで病が起こるのです。何事も澱みなく流れるのが重要なのです。

一般的に「気」は時間や距離といった概念が一切無い、四次元的でのエネルギーと言われていきます。四次元での動きが可能ということは、時間的また距離的な制約がないので、時空を超える事が出来ることとなります。何事も科学で証明されないものは意味が無いとの考え方がありますが、この「気」に関しては未だ科学的に解明されていませんが、現象としてはいろいろな場面で誰もが目にしていることです。

ですから、あとは信用するかしないかの個人的な判断になります。個人的には「気」の力を信じています。科学的な解明は未だですが、気功師が出す「気」のエネルギーを丹念に、いろいろな測定を繰り返す中で、どうも発せられる「気」には全て波動（1～20ヘルツの低周波）を持っていることがわかっているようです。

個人的に思うのは、これらは超低周波であり、電波でいうと遠距離まで届く性質を持っており高周波に比べ減衰も少ないので何となく納得してしまうような感じがするのです。また無誘導コイル（電流を流しても磁界が発生しないコイル）の磁界ゼロの環境下に水を置いた状態と、「気」を入れた水（気功水）と同じような性質を示すことが判明しているそうです。とても不思議な現象だと思います。

また気の通り道を「経絡」といい、経絡上の体の表面に現れたポイントが「ツボ」であり、肩が凝ったり目が疲れた時にその「ツボ」を押すと痛いけれど気持ち良く、その後は体が楽になります。これも物理的にツボを押すことによって気の流れを良くしたことによる効果なのです。特

に疲れた時は足裏の「ツボ」のマッサージをすると体全体が軽くなる経験をされた方も多いと思います。間接的ですが既に「気」を体験していることになります。

また日常生活の中で、この「気」を感じる事が出来るのは森林とか公園等の自然の中に自分を置いた時に、心が軽くなるような爽やかな感じを受けることがあります。これは良い「気」がある場（「気場」というのだそうです。）であるといわれています。風水の良い場所には、良い気場がありますし、周りに良い気を発する樹林がある所もよい気場があるようです。また、人が集まる場合でも、仲の良い心身健康な人が集まった場所には、良い気場が生まれるそうです。

このようなことを考えると、普段の生き方を前向きに明るく生きることが最終的には「気」の流れを良くし、心身ともに健康になるのだと思います。重要な事は、悲観的にならず楽観的になることと、何よりも自分の体に「感謝」することが大切だと思います。

我々は知らず知らずのうちに自分の体を痛めつけているのだと思います。人には、それぞれ辛いことや、悲しいこと、悔しいこと、情けないことなどがあると、ネガティブに考えてしまうような行動に走りやすいですが、この時でも自分の体は何も文句を言わず休むことなく働き続け、命を支えてくれています。ですから、我々はもっと自分の体を労わる必要があるのだと思います。

体が悲鳴をあげないように労わりながら自分の体に感謝し、前向きに取り組むことが重要です。仮に体の調子が悪いようだったら「気」のエネルギーがどこかで詰まってしまっていると思います。流れを良くするような事をすれば元の体に戻ると思います。

本気で「気」に取り組むのであれば、気功を勉強する必要がありそうです。少し本を読んで実践してみたら手の平の間で気を感じる事が出来ました。これから気合を入れて勉強してみようと思った次第です。また、五木寛之も「気の発見」という本を書いています。

## 他の命と自分が生かされているという事

---

先日の新聞に奈良市における話題で、捨て犬の処分に関する具体的な方法が書かれていました。記事を読んでいて人間の勝手な行動に腹立たしさを感じ胸が詰まりました。何故にいつも簡単に、命あるものを捨ててしまうのでしょうか。命の尊さを考えない行為は人間として卑劣な行為です。捨てるのであれば欲望に惑わされることなく、始めから飼わない勇気を持って欲しいと思います。

以前にTVでも今回の記事の内容と同じ趣旨の番組が放送されていました。犬は処分される日が近づいてくると、目でその気持ちを訴えているのがはっきりと分かりました。今でもあの犬の哀しそうな目を忘れることが出来ません。

また一方で日本の調査捕鯨に抗議行動を起こしている国際団体があります。動物の命を守ることに對する抗議であることは理解しますが、我々人間は生きるために常にいろいろな命を奪いながら生き続けている事実があります。

鯨は駄目で、牛や豚や鳥や魚の命は問題ないのかとの問題にぶち当たります。根底には全て命に関する考え方が横たわっています。自然界の中ではあるものが他の生命を奪いながら生きる続けるという連鎖が行われており、これまで全ての生き物がこの仕組みの中で生き延びて来ているのです。

これらの自然界の中で人間が最も残酷な方法で生き延びていると思います。必要以上にグルメだ美食だといって多くの命を奪いながら生きています。命あるものを奪わずに生き続けることは確かに不可能ですから、ある点で割り切らなければなりません。

しかし、ここの部分が明確になっていないのが現状ではないかと思います。人間がこの現実の世界を支配しているという間違った考えが、自然界と人間界との関係を壊しているのだと思います。

また、人の命を奪わなくとも人間と人間の関係でもこれに近いことが行われています。現実の社会では、何事も他に勝たなければ生きて行けないという考えがあります。特に企業活動はその典型であるし、政治の世界でもまた特定の業界等でも生じている現象です。

勝つことが正義であるという考えですが、最近変わってきているのは地球の有限性が明らかになり、特に環境問題がクローズアップされるようになって来てからは、キーワードとして調和という考えが少し出てきたように感じられます。

他に勝つという考えと全体の調和をとるという行為には雲泥の差があります。この調和という

考えの中には、他の命との係わりが特に重要となります。自分が自分で生きるということだけでなく、他の命とともに生きるということです。

さらに突き詰めると、自分は自分で生きているのではなく、生かされているという視点に立つことが出来ると、その人もまた周りの世界も急激に良い方向に変化するものです。

しかし、多くの人は自分は自分で支えて生きていると錯覚しています。自分が周りによって生かされていることに、残念ながら気づいていないのです。さらに他の命を奪い自らの命を延ばしている事実をもっと理解し、貴重な命を頂いて生きていることを自覚すると、人間としての生き方が大きく変わると思います。

この点に気づくと、他の命を粗末に出来なくなるのが当然の成り行きです。そうすれば奈良市や日本全国で生じているような生き物の飼育放棄が無くなると思います。命の尊さを認識し、他の命を大切にすることと自分は周りに生かされているということを自覚し、より住みやすい社会にしたいものです。

最近のビジネスで話題となっているものに事業の継続性があります。事業の継続性とは、天災やシステムの不具合の発生によりビジネスに大きな影響が出た場合に、どのような対処をするかを予め想定し、かつ準備を行いいざという場面であわてずに対応することを指します。

この問題は非常に難しく事業継続性には正解がないというのが個人的な見解です。なぜならば、どのような場合を想定するかによって対応の内容が大きく異なるだけでなく、検討の範囲は限りなく発散し、検討自体が意味を成さない結論に落ち着くケースも出てくるからです。

所詮、完全な事業継続性を求めるならば、常時現行と同じ内容のシステムを別な場所で同期を取りながら稼動させておく必要があります、このように現状を継続させることは非常に大きな労力や投資を伴うものです。

ビジネスにおける継続性は難しい問題がありますが、人生の継続性はどのように考えればよいのでしょうか。人生の継続性が途絶えるときは、その人間の死を意味しています。

しかし、その死を除けば、人生は生まれたときから死ぬまでの期間の継続性は保障されます。最低限の食べ物と休息をとれる環境があれば、誰もが人生を継続することが出来るのです。単純に考えても人生は素晴らしいと思えます。しかし、どれほどの人間が人生に対してこの素晴らしさを感じているのか疑問です。

人間の素晴らしいところは、考えることが出来ることにあると思います。考えることが出来る

ということは、昨日よりも今日、今日よりも明日を良くすることが出来るということです。

一日一日の小さな行動の積み重ねが、あるレベルに達したときに大きな飛躍に繋がります。普段見ることの出来なかった新たな景色が見えてくるものです。そしてそこまで到達するまでの道のりに、ささやかな満足感がとても残るのだと思います。

その気持ちの安らぎは、ちょうどモーツァルトのピアノ協奏曲の第二楽章の楽想を聴くときに感じるものと同じだと思います。何かゆったりとした心の動きの中に、ささやかな喜びと希望と優しさを感じるのです。

しかし、命には限りがあり、いつかは現世からあの世へ行かなければなりません。その際に個人を基準に考えると、命の継続性はその時点で途切れるものであるが、その人間が生きたその様は、周りの人の心の中に残ることから、形を変えて継続することが出来るのです。

さらにその人の心を通じて、他の人へ伝承されるとすると、確実な継続性に変化します。命が心へ変化し、継続されるのです。反対に今生きている自分の心の中には、いままで他人から影響を受け、何らかの形で感動した事象の記録が残っています。すなわち他人が自分の中で継続していることにもなるのです。

このように人生を考えると、他人と自分を比べることに意味がなく、個人にとっていかに充実した人生を送るかが大きな意味をもつのだと思います。

最近、仏教を中心とした柔軟で素直な心を持ち続けることの重要性を感じながら、日々少しずつが反省と改善を行っているのです。人生は継続が基本です。

育った環境が異なれば、それだけ相手の状況を理解するのに苦労するのは当然のことだと思いますが、自分がこれだけ相手に対して良くしているのに、理解してくれないのは何故だろうと感じることがあるのは、誰もが経験していることだと思います。

そのようなときにどうしたら良いのでしょうか？簡単なのは、相手が理解してくれないのは相手に問題があるのだから、今後は当たり障りなく適当に対応するという逃げの姿勢に入ることです。

一見、正しいようで納得ができるものですが、本当にそうなのかどうか迷いが生じます。自分の事は自分が一番良く知っていると思いがちですが、自分が置かれている状況を理解していないことがよくありますし、相手も同じ状況だと思います。

であるならば、お互いに歩み寄ることが最も大切なことなのですが、残念ながら人間は自分を

正当化する方法をいろいろと考えます。所謂、保身という自分中心の世界感の考え方です。自分を可愛がることが出来ないものは、他人を想いやることが出来ないのも正しいことだと思いますが保身はいけません。

しかし、自分を守ったところで、本来の進むべき道が開かれるわけではありませんし、この世の中で、自分ひとりで物事を進めることはできないからです。たとえノーベル賞をとるような素晴らしい能力を持っていたとしても、一人では生きられないのです。

ではどうしたら良いかという、自分の周りの人との関係を円滑にする最低限の術を身につける必要があります。それには自分にとって苦手な相手であったとしても、最低限の対応をすべきなのです。具体的には、まず相手を褒めることだと思います。

決して八方美人になれとは言っていません。どんな人でも必ず良いところがあるのですが、人間は哀しいかな相手の欠点や厭なところに目が行ってしまうのが普通です。

そして、そこで感じたことでその人の全てを判断してしまうのです。その基準を変えない限り、その人との関係をより良くすることが出来ません。相手に対してそのような行動に出れば、反対に相手も自分に対して同様の対応をして来るのです。

こちらが好意的な対応をすれば、自ずと相手も同じ対応に出てきます。仮に相手が好意的に出てこなくても、こちらは常に好意的な姿勢を出し続ける必要があります。こちら側からの好意的な対応が無くなった段階で、相手との関係は単純に終わってしまい、元の状態に戻ってしまうという最悪の状態は避けるべきです。

人間は、他力によって生きているという考え方に共感し、それに基づいて行動することが出来れば、自分以上に他人に対する接し方が自ずと変わるので、必然的に相手の対応も変わるはず

です。さらに、相手が直ぐに変わらなくても変わるまで待つという忍耐力が特に必要となります。自分のためでなく、他人のために自分を捧げるといった利他的な考え方をする人が多くなれば、この世の中はオセロゲームのように、ある時一挙に変化する大きな現象が起こると思っています。

その日が来るまで、ひたすら自利でなく利他のために自分を生かすことが重要だと思っているこの頃です。これらは、全て仏教の教えです。さらに加えて、何事にも感謝の気持ちを忘れずに過ごしたいものです。

## お陰様と他力と感謝の生き方

---

文章を書いている時にたまにあるのですが、この漢字はこのような形だったろうかと時々不思議な時間に迷い込んでしまうことがあります。いままで何も疑問を感じなかったのに、いざその漢字を見た瞬間に、いままで使っていた字と同じで間違いないだろうかと心配になることがあるのです。さらに眺めれば眺めるほど間違っているように思われ、いままでに自分が如何に物をしっかりと見ていなかったのかを示すものだと思います。そして、物事をいつも意識なく感覚で認識してしまっている点が大きな原因だと思います。

これと同じように人生の生き方にも同じ感覚にぶち当たることがあります。お互いが自分の立場や思いを主張するだけで、相手の立場を思いやる余裕、あるいは全く相手を思う気持が無いような場面に出会うことが多々あります。このような場面に出会うたびに、どうしてこの人達は自分のことばかり主張し、自分が正しいといい続けるのだろうかと思しくなる時があります。このようなことを考える時にいつも思い浮かぶのが今回の「おかげさま」という言葉です。

この「おかげさま」という言葉は「お蔭様」と書きますが、古くから「陰」は、神仏などの偉大なものの陰を表し、その庇護を受ける意味として使われています。すなわち自分はいま生きているが、本来人間は自分一人では生きられないものであり、それは自分だけでなく周りの人や物やあるいは環境等のあらゆるものに守られているからこそ、生きることができるのだという考え方です。もっと端的に言うならば、自分以外の他によって生かされていることをいいます。

いやいや今の自分があるのは、自分が一生懸命に取り組んできた努力の結晶であるという方がいます。確かにその方は努力されたからこそ今の自分があると思われているのだと思いますが、この世の中で誰とも繋がりがなく生きることにはあり得ないことです。と言うことは、何らかの形で他人との繋がりがあり、そこから何らかの目に見えない力や気のようなエネルギーをもらっているのです。

重要なことは自分を謙虚に見ることが出来るようにすることであり、我が身を省みることの大切さを思うことだと思います。仮に朝目覚めた時に、今日も自分を生かしていただいたと感謝する気持ちが湧くようになれば、いままで以上に豊かな心を持った生き方ができるのではないかと思います。

このような考え方は、仏教からくるものだと思います。仏教では、「慈悲」のなかに他人に奉仕を行う考え方があり、その対象者の「おかげ」で仏に至る菩薩の道が拓けるとされています。よって「慈悲」は、させて戴くという行為で見返りを考えないものなのです。仏教における「慈悲」とは、悟りをえるための手法であって、さらに菩薩へむかう心の表れなのです。

どのような人にもまた生き物にも、さらにそこいらの石ころにも魂があると思って謙虚に対応

すると、不思議と心が休まり穏やかになります。科学は万能であると考えられる方も勿論いると思いますが、科学はまだまだ事実のほんの一部しか解明出来ていないもので、我々人間が自然の中にある大きな力の存在に気づいていないのではないかと思います。

それは自力でなく他力とよばれる力であるとともに、これらが今回のお陰様につながるものだと思っています。自分をただただ前面に出すのではなく、一旦自分を捨て他人を前面に出すような考え方を少しでも持ち合わせる余裕があると、この世の中はもっと円滑にまた自然な流れの中で生きることができると思うのです。

## 人生は縁と徳に基づくもの

---

この半年ほど、気力の低下というか心が重いと感じる事が多い日々を過ごしました。思っても体が動かないというのか、あるいは昔のようにやる気が起きないというのか、もっと大袈裟に言えば、踏ん張って力を出すようなことが出来ない脱力感のような感じでした。何事も根性で対応できるとよく言われますが、いやいや人間はそんな単純に気持ちを入れ替えて出来るものではないことが、自分自身を通して分かりました。

ただし、年齢が若いころはまだまだ気力が漲っているので勢いで何とか物事を動かすことが出来ますが、50歳の後半に近づくにつれ確かに体力というか体調も低下し、今までのようには行かなくなるのが普通だと思います。最終的には体力に依存することになるとは思いますが、気力をさらに高める必要があることは確かです。

人間はうまく行かなくなると、どうしてこのようになるだろうかといろいろ考えるのが普通です。そして考えれば考えるほどマイナス思考に陥るのです。しかし、どのようなことでもそのような事象が生じる理由や背景があるはずで、そこまで結論としてたどり着ければ最高ですが、なかなか本当の真実まで究明出来ません。

一般的に縁があるとか縁がなかったとか言いますが、この縁ってなんなのでしょう。縁とは、自分と自分以外の人間関係やものとの関係を指しますが、この縁の有無によって人との出会いやものを入手できるかどうか左右されます。

一方で、この縁は自分に関係のないところで決まってしまうものではなく、縁も努力によって作ることもできるし、結ぶこともできるし、さらに維持することもできるのだと思います。

この縁は、仏教でもその考えが出てきますが、縁は時とともに変化し、簡単にその結果が出るものではありません。この縁を引き寄せる方法として、自分の考えをクリアにしてその思いを強く持ち続けることにより、関連のものを自分に引き寄せることができるのだと思います。

この引き寄せの法則は、知人に紹介してもらって読んだ本「引き寄せの法則 エイブラハムとの対話」に詳しく書かれているので読むことをお勧めします。宇宙エネルギーとの連動や波動の話が出てくるので、個人的にはとても興味がありました。

人間の有限な命の存在は、宇宙のような無限の恵みの中から導き出されたものであるという、おそれおおく、またありがたいものであるとの意識を持つ必要があると思います。

仏教的には、この縁を強くするためには「徳」を身につけることが重要だとされています。何をやってもうまくいく人や、自然に進むべき道が出来ていくなど徳を持ち合わせた人には、この

ような状況が身の回りに起こるのです。

簡単に言えば悩まなくても、思い通りに物事が運ぶとでもいうのでしょうか。しかし、よくよく考えると、何もしないでこのような状態にはならないので、その人なりに徳を積んでいるのです。常日頃、地道で正直な生き方が最終的に徳につながり、さらに縁となって実を結ぶのだと思います。

今の世の中は、人生でもビジネスにおいても、上手く立ち回るものが上に立ち、勝ち組にすることが勝ちという価値感が支配しています。これらが今の日本という国の土台を揺るがすものになっているのです。もっと徳という考えに立ち戻り人間の弱さをきちんと理解し、自覚した上で素直なところに対応することが重要だと思います。結論的には、人生は縁と徳に基づくものといえるのです。

## 仏教という心の支えについて

---

以前は全くといって良いほど仏教に興味など持たなかったのですが、奈良や京都の仏閣さらに枯山水の庭を頻繁に訪れたりしたことが要因になっているのかも知れませんが、最近この仏教に興味を持ちはじめ、本やその他の媒体を活用してその本質を学ぼうとしている自分を発見しています。

宗教に興味をもったというよりは、人生の生き方のようなまた哲学のようなものをしっかりと持ちたいといった気持が、昔から日本人の心に何気なく定着している仏教に自然に引き込まれたというのが正しい成り行きかも知れません。

若かりし頃は、宗教とは自分やその生き方に自信のない者がすぎるものであり、そのようなものに頼って人間は大きくなれないのだという自分勝手な論理を展開し、宗教自体を自分から遠ざけていたのが青春時代の凡夫の実態でした。

しかし、その後自分なりに何らかの成果があったのかというと全くなく、年齢だけは一丁前に五十路を越えたただの凡夫で、さらに行き方に今ひとつ自信が持てない情けない存在になっていることに気づいたのです。素直でない自分に気がついたのもこの頃だと思います。

その後、人間は素直になることが自分を改善する大前提だと思い、出来るだけ自分の心に素直になるような生き方をすこしづつ始めました。そのような経過のなかから誰もが死んだ時は、迷わず極楽浄土へ旅立つためにお坊さんにお経を読んでいただく慣わしという環境に密着している宗教というのが、最終的に自分の宗教になるのだと思ったのです。ですから、そのころは全く意識を持たなかった凡夫にとっては、にわか仏教徒であるといえます。

このような過程の中で、我家の宗派が法然上人が開設した浄土宗であることを知ったり、また今更ですが仏教といっても世の中には多くの宗派があることが分かったのです。若いときに新興宗教にはまる人がいましたが、凡夫としては特に意識せずにこの歳まで来てしまい、今になって2500年前にゴータマ・シッダルタが開いた仏教を常識の範囲で学ぼうとしているのが現状なのです。

宗教という立場から考えると世界には3大宗教と呼ばれるキリスト教、イスラム教、仏教があり、これまでにいろいろな宗教が日本に布教されましたが、日本は儒教の影響が強かったためか仏教の信者数は9600万人と国民のほとんどが仏教徒です。また、日本は古来より一神教でなく多神教であったことが、民族として許容性や受容性が高くなったのではないかと個人的に思っています。

一方でお隣の韓国は、その殆どキリスト教であるのに対して日本のキリスト教徒は200万人

と極端に少ない数字になっています。また、キリスト教の信徒が少数であるにもかかわらず、クリスマス、バレンタインデー、ハロウィン等の本来キリスト教のイベントであるものに対して、キリスト教信者以外の日本人が単なる恋愛上のイベントのようファッション感覚で対応している点が多神教の民族としての面白い行動様式だと思います。

このように信仰からでなく商魂が前面に出てしまっている日本の光景を目のあたりにして、諸外国のキリスト教信者はどのように日本人を見るのか非常に興味のあるところです。

宗教は、人の心の支えとなる重要な根幹ですが、いまの日本人の心の中にどの程度宗教が入り込んでいるのかわかりませんが、凡夫にとってはこの歳になって初めて仏教を宗教として認識し、個人的に消化をしながら整理し始めたところです。

このような過程の中で、いろいろな発見や再認識や新たに覚悟するようなことが少しずつ整理され、いままで雑然としていた凡夫の心の中に何か暖かくなるような、また先が少し明るくなるような兆しが見えてきたのは確かです。

禅につながる臨済宗がありその無の境地として枯山水の庭があったり、日本に初めて仏教がもたらされた今から1500年ほど前、奈良に都があった時に鎮護国家を目的として始まった奈良仏教は、学問としての教育としての場（今でいうところの大学）としての位置付けや、さらに仏像を中心とする芸術の分野に大きな影響を与えたことは確かです。

今年は、冷静に仏教を見つめて自分の中のもやもやしたものを少しでも減らして、人並みの生き方が出来るようにしたいと思っています。その意味では五木寛之の百寺巡礼は凡夫にとって生き方を整理する上で絶妙なタイミングに出会ったものであり、感謝しています。

昔から、「夢」という言葉が大好きで、自分でもよく使う言葉のひとつです。夢はこれから先のことに関係し、かつ希望とつながっているので、誰でも前向きの気持ちになります。

しかし、人間はいつも前向きで対応することは難しく、時々落ち込むことがあります。そのときには小さな夢を実現しようと動き出すと、意外と回復が早くなる傾向にあります。また、この様な時に大きな夢を実現しようとして動き出すと、長い時間を要することとなり、さらに落ち込むことが多いと思います。

夢を追いかける一方で、自分が置かれている現実をきちんと直視していないと、これまた違う方向に自分を向けてしまうことに繋がります。自分の置かれている立場を冷静に理解することが出来る人は、素晴らしいと思います。

常に不動の考え方を持っている人であれば問題ないですが、あるときはこちら、またあるときはあちらと、その時々で傾いてしまう自分を見るたびに情けなくなります。今の現実を確実に把握することが重要です。また、今の状況が自分の全てであり、それ以外にないと素直に思ことから、次に繋がる何かが見つかるのだと思います。

日頃を生きるに当たって、人間としての基本的な考え方を確立するには哲学が必要であり、さらに人生を人として生きるためには、宗教が必要だと思います。これらが欠けている人は、やはりどこかが歪んでいます。

哲学かあるいは宗教のどちらかを持っている人は強い人です。また、哲学と宗教の両方を持ち合わせている人は、人間として素晴らしい人であると思います。どちらも持ち合わせていない私は、この年になって仏教に興味を持ち始めていろいろ勉強をし始めていますが、まだまだ自分が確立できていません。

ただし、仏教を勉強しだして、全国の寺院を拝観させていただきながら思うことは、昔の人も今の人も同じ人間であり、同じ悩みや苦しみを背負って生きていることです。今の自分を考えると、昔の時代に生きていたならば、とてもこの年まで生きていられなかったと思うし、反対に今の時代に生きられて良かったと思っています。

人間として生きることに對する考え方、またどのように生きるべきかを説く宗教は、どのような宗教であれ一人の人生を大きく左右するものであると思います。ですから「生と死」をどのように位置付けるのかを、自分の中できちんと整理しておく必要があります。

今の自分は、昨日の自分ではないしまた明日の自分でもありません。常にその時々で変化する

ものです。世の中で生じる事象を、常に変化するものと捕らえながら見ると、般若心経で説いている「色即是空」「空即是色」の「空」に対する考え方や対応が理解出来ると思います。

最近、寺院に行った際に手を合わせて祈ることが自然と出来るようになりました。それだけ仏を信頼出来るようになったからです。過去の偉大な僧侶の史実を読むごとに、素直にその素晴らしさを認められることに喜びを感じています。

夢は誰にでも必要であり、またそれ以上に自分が置かれている現実を理解し、どのように対応したら良いのかを考えながら、260余文字の般若心経を読み込み、宇宙に匹敵する人間としての智慧を整理することができる喜びに浸る幸せを感じているこの頃です。

修行を積んだ僧侶の行動や言葉に対して、素晴らしいと感じるのは私だけではないと思います。今の私にとって、夢と現実と般若心経は、生きるために必要なものになっています。

## 最近の仏教ブームと私の仏教

---

最近目に付くのが仏教に係わる書籍や講演や新聞記事の多さです。どうしてここ数年、仏教に陽が当たるようになったのか分かりませんが、確かに世の中では仏教が注目されはじめているのは事実だと思います。

このように書いている自分はどうかというと、学生のころから枯山水の庭に興味があったため、必然と禅宗の寺を訪れるようになりました。人間というのは不思議なもので、何事でも多くのものを見てくると自然と観る目が肥えてきますし、経験を積めばそれなりに物事の本質の良し悪しが少しずつ分かるようになるものです。

特に枯山水のような庭は、その作庭者の思いが顕著に現れるものです。中には感動すらなにもない庭に出会うこともあります。そのような時は、自分の心が素直でないときなのだと思うようにしています。また甚く感動した庭であっても、別の機会に再度その庭を観たときには何も感じないときもあります。このように目に映るものとは、その時その時のいろいろな要因が重なり合い、また影響しあいながらひとつの形を作り上げるものだと思います。

さて、仏教ですがこれまでにしっかりと仏教の本質を学んだことはありませんでしたし、若い頃は特に宗教というところか怪しげで、係わらないようにするのが良い選択なのではないかと勝手に考えて少し構えてしまうことがありました。

それが歳を重ね五十路を過ぎるような年代にさしかかると、ふと自分の人生とはこれでいいのだろうかと考えてしまうことがあります。この辺の感覚は、自分でも非常に面白いと感じます。それまでは全く考えもしなかったことを、真剣に考えるようになるからです。

特にこれからは団塊の世代が退職の時期を迎え、その後の人生をどのように過ごしたらよいかと考える時期に当たるからこそ、人間の生き方を支援するビジネスが生まれ繁盛するようになるのだと思います。また宗教というものを身近に感じないまま歳をとった大人が多いからこそ、このような仏教ブームになるのだともいえます。

ところで皆さんは仏教がどのような形で日本に入ってきたか、またその後どのような変遷を経ていまのような状況になったかお分かりになるでしょうか。恥ずかしながら個人的なことを述べると、最近になって仏教の本を読むまでは、その歴史や仏教の背景等に関して全くの無知であった自分を恥かしく思うことが多くありました。

最近では宗派を問わず、いろいろな寺を訪れては仏像を拝顔し、手を合わせながら自分の歩んできたいろいろなことを反省しながらそっと自分なりの決意を心の中で仏像に向かって述べる機会が多くなって来ています。

このような行為を通じて、少しずつでも自分の煩惱をさらけ出し、さらに反省しあらたな決意に基づいた行動をすることにより昨日の自分よりも少しだけでも世の中に役に立つことが出来るようになったらいいと思いながら寺めぐりをしています。

また、寺を訪れた証拠ではありませんが仏像に誓った証として朱印をいただき、時々それらを眺めては弱い自分の心を少しでも煩惱に負けないようにしています。

本来の朱印の意味は、平安時代に諸国の霊場を巡礼する際、自分や家族の無事息災等を祈願しながら写経をお寺に納めた証しとして、朱印を戴き巡礼したことが始まりだとされています。また、朱印を戴いた朱印帳は、自分の命が尽きた時にお棺のなかに入れてもらうのが慣わしのようです。したがって私も命が無くなったときは、全ての朱印帳をお棺に入れてもらい、少しでも極楽に近いところに導いていただこうと思っています。

自分なりの哲学を持って生きていればこのように仏にすぎる必要は無いのかも知れませんが、行動が伴わない頭の中にだけあるような理論的な哲学では、地獄に落ちるだけではないかと思えます。

人間思うだけでは意味がなく、その思いを行動に移してこそ初めて人間として認められるのではないかと思えます。ですから、この歳になって非常に辛いのですが思いを行動に移すように頑張っています。どれだけ世の中に布施が出来るのかが大きな課題だと思っています。

今の世の中の仏教ブームはその気になればいろいろなことを学ぶ機会が多いので、個人的には歓迎しています。時々般若心経を読みながら、本当の意味はまだまだ理解できないのですが「空」の文字には何故か宇宙的な規模や心理を感じ、感激してしまいます。

個人的にはもっと若いころから仏教に出会って少しでも興味をもって接していれば、心の奥深くにある悪魔のような煩惱を断ち切り、モーツァルトのような清々しい気持ちで生きることが出来たのではないかと思うことがあります。

しかし、人間は煩惱に苦しみながらまた日々の辛いことを経験しながら少しずつでも成長することが最終的な到達点ではないかと思うこの頃です。ただ、いまいえることは仏教に出会えて良かったという素直な気持ちが心の中にあります。

## 禅的な考え方

---

仏教に関しては興味があり以前からいろいろ学んでいますが、最近ちょっとだけ禅宗にはまっています。仏教には古来から13の宗派があるとされています。

禅宗は、鎌倉時代に始まった仏教であり、中国の臨済義玄禅師を祖とする臨済宗と道元禅師を祖とする曹洞宗が有名です。個人的には宗派にはあまり興味がなく、どちらかといえば禅宗の基本的な考え方に共感する点があり、最近これらに関連する書物を読んでいます。

これらを読みながら、禅の考え方には仏教の開祖である釈迦が唱えたものを、忠実に現しているのではないかとも思うようになりました。

特に禅には禅語と言われるものがあり、これらは禅を通じて得られた人間としての根本事項を適切にまた的確に表現した言葉です。これらを読んで理解するなかで、人間としてもっと真摯に考えなければならないと思うようになりました。いままでが、あまりにも表面的であり自己中心的な考え方であったことに大いに反省もしているところです。

例えばこんな禅語に接し、考えさせられたことがありました。それは「看々臘月尽」（看よ看よ、臘月尽く）という言葉です。意味的には大したことはないのですが、よくよく意味を考えるとその奥深さに驚かされます。

臘月とは12月を指し、「見ろ見ろ12月はもう過ぎ去ってしまう」と言う簡単な意味です。しかしさらにこれを意識すると、人生も月日と同じであつという間に過ぎ去ってしまう。だからこの今を大切にし充実させることが重要であると、言っているのです。

仏教の開祖である釈迦は、人間の悩み苦しむことに対して次のような教えを説いています。「決して戻らぬ過去へ執着したり、あるいはどのようにになるか分からない未来を心配するよりも、今現在を大切に生きなさい」と言っています。

私のような普通の人間は、いろいろなことに対して悩み苦しみます。特に過去にしてしまったことや将来のことや、あるいは近未来のことに関してあれこれと考えます。しかし、誰も今生きている現在を、一生懸命に生きる事だけを考えながら取り組むことをしない傾向にあるのではないかと思います。改めなければならないものだと思います。

このように人間の生き方を禅語として表現し、真実を求める流れにいたく感動しました。さらに禅宗との関係で別の視点から興味があるのは枯山水の庭です。この枯山水も禅宗から出てきたものです。

枯山水のほかに禅宗から派生したものとして、茶道があります。茶道の精神は、禅宗の考え方に基づいており、鎌倉時代、日本全国に禅宗が広まるのと共に茶道も全国的に広まったのです。

禅宗は中国で生まれましたが、その後確実に日本に定着しています。どちらかと言うと仏教という面ではなく、生きるために必要となる人生哲学の面の位置づけが他に宗派に比べて特に大きいと思います。

個人的には、今後禅宗や禅の文化に関してさらに学び、人生哲学に役立てようと思っているこの頃です。

## 「殺生」と「忘己利他（もうこりた）」の生き方

---

2008年、ミャンマーでのハリケーンによる被害や中国での大きな地震が発生したことにより、尊い命が亡くなりました。これらの大災害に対して世界各国から支援の手が差し伸べられています。これらの根本にあるのはボランティアの精神だと思います。相手が困っているときには助けるという考え方です。

これに関して仏教の天台宗の教えの中に「忘己利他（もうこりた）」という言葉があります。天台宗の開祖である最澄が書いた「山家学生式（さんげがくしょうしき）」（六条式とも呼ばれています）に、「悪事は自分で引き受け、良い事は他人に与える」「己を忘れて他を利するは慈悲の極みなり」という内容のものです。

一般的に我々は、多かれ少なかれ自分本位に考え行動します。まずは自分の事として考え自分を守るあるいは維持するようなことを考えながら何事にも対応するのが当たり前のことだと普通の人間は思います。

しかし、最澄は、自分のことはさることながら、他の人のために尽くすことが最高の慈悲であると言っているのです。普通は自分のことも出来ないのに、他人の事まで出来るはずがないと思うのが道理です。それを周りの幸せのために生きることが自らの幸せであると言っているのです。

この言葉に出会ったときには、理解できなかつたのですが最近になって、このようなことを行うことによって人間として救われるようなことに繋がると思うようになりました。もっと綺麗で理想的な表現で言うならば、お互いがお互いの幸せのために力を出し合ってはじめて世の中みんなの幸せが得られるのだと思います。

これと近い位置づけにあるあるいは関連するものとして、「殺生」があるのではないかと思います。殺生とは、命あるものを殺して生かすということです。人間は生きるためにいろいろな生きものの命を絶って自分たちが生きるようにしています。命が奪われる側からすると人間に命を与えることによりさらに別な形で生きることになります。

この関係が先ほどの自分を捨てて他のために行動することと似ているような気がしているのです。人間としてさらに生きるために、他人に対して自分の力を尽くすことにより、ともに生きることになるのではないかと思います。

今の世の中を考えた場合に、多くの人が自分のことだけしか考えないような行動をとっています。もっと他人のことを考えながら生きることが出来ると、世の中は急激に変化し、とても住み易い世の中になると思います。

ほんの少しでもよいと思いますが、他人のことを優先にして行動することが仮に一日に一回実践できたとすると、今生きている世の中が確実に変化してきます。大袈裟にするのではなく、もっと簡単なことからでもいいのかも知れません。

例えば「おはようございます」と言った朝の挨拶でも効果があると思います。何かを変えるためには、心で思っていることを行動に出さないと意味がありません。心で思ったことを行動に出すことは意外と難しいものですが、ちょっと踏み出した瞬間から周りの環境はその影響を受けて変わって行くものです。

仏教では、自分の身の回りに起こることを「縁」といっていますが、縁には必ず因果関係があります。自ら行動することにより積極的にこの縁を変えていくことが出来るかも知れません。

受身よりも攻める行動が自らを変える力になることは間違いありません。立ち止まっているのではなく、自ら行動を起こし、積極的に変えていくことが今とても必要とされているのだと思います。

自分の身の回りの家庭や近所、さらに仕事場やもっと大きな社会をも変えることができます。そのためには「殺生」と「忘己利他」の考え方を再度思い、行動する勇気を持つことが大切だと思います。あなたが変わると社会が変わるのです。

仏教の世界で我々のような在俗者は、5戒を守るべきとされています。この5戒とは、「不殺生」「不偷盗」「不邪淫」「不妄語」「不飲酒」のことを指します。これらは生き物を殺さない、盗みをしない、夫婦間以外の性関係はもたない、嘘を言わない、酒を飲まないことを言っていますが、これらの中で守られているものは一つもありません。これだから凡夫は成仏できないのだと思います。

これらの中で一番大変なのは不殺生だと個人的に考えます。人間が生きていくためにどうしても食べなければなりません、この食べる行為自体の裏にはそれまで命のあったものからの命を奪っている事実があります。

幸いなことにその命を奪う行為に携わっていないのでその瞬間の想いが分かりませんが、いくら仕事であるからといっても気分が良いとはいえないものと思われる。

人間がこの世界のなかで最も偉い存在だからどのようなことをしても良いのだというものではないと思います。人間もこの宇宙の中では微々たる存在価値しかないのです。自然界という大きな枠組みの中で、人間というひとつの生物としての小さな命を継続しているに過ぎないのです。

しかし人間は生きていくためには、動物や魚や野菜等を食べなければなりません。その際にどのような気持ちで食べているかが大きな問題だと思います。毎日の食事際に改めてお膳の内容を見てみると、そこには多くの命が並んでいます。私の好きな新鮮なマグロやカツオやアジの刺身ですが、それまで生きていた魚をなんと残酷なことに舌鼓を打ちながら美味しいと思いながら食べているのです。

ここでしっかりと考えなければならないのは、多くの命を以って人間が生きて行けるのです。そのことを考えると、必要以上の命を無駄にしないことが重要なポイントとなるのだと思います。

牛や豚のような動物から、魚、さらに草木のような植物に至るまで、それぞれの中で命を次の世代に受け継ぐようなサイクルを持っています。我々はそのサイクルの一部を分断させ、人間という生き物の命を継続させているのです。この仕組みを冷静に考えると、我々の命を保つためにそれらの命を頂戴していることとなります。

ですから、食事の前には「頂きます」の言葉が出るのです。自然と出てしまうこの「頂きます」の中には、非常に重い言葉の意味があるのです。頂くのはこれらの命を頂いているのです。「殺生」と言う言葉の意味は、生きているものの命をむやみやたらに無駄にすることを指します。

ですから殺生でないようにするには、これらの命を頂くときには感謝の気持ちをもって、それらの命を我々の中に取り込み、さらにそれらを意味のあるものにしなければなりません。常にこのような考え方にたち、命をいただければそれは殺生には当たらないのです。

したがって食べもしない物を注文しそれらを残すと言った事が本当の殺生に当たります。全ての物の命に感謝し、頂いた命を自らと共に生かして行くことが重要なのです。

どうぞ、皆さんも食事をする際には、食卓に並んでいる多くの命に対して感謝の気持ちを込めて命を頂きますと言っていただきたいと思います。

## 心無圭礙（しんむけいげ）わだかまりと「空」の気持ち

---

人間の心はどうしてこうも弱いのだろうと情けない気持ちになることがよくあります。このようなことは多分私だけでなく、多くの人に共通していることだと思います。さらに弱気になってしまうのは、五十路を過ぎても少しも成長しない自分の姿を見る事ほど情けないことはありませんし、さらにこの状態は絶望感に近いのではないかと思うことが多々あります。

過去に失敗したことを嫌と言うほど味わっているにもかかわらず、また同じ失敗をしてしまう自分がいます。そしていつも悔やんでばかりいます。このような状態にあるときは心にわだかまりがある時で、いつも心のどこかにそのことが引っ掛かっているのです。

さらにどうでも良いようなことをずっと考えてしまいますが、時間が経つとともに忘れてしまい、また元の状態に戻るのです。この繰り返しが私の人生そのものであると、情けない話ですが最近特に思うようになりました。

一方で歳をとるにつれて自分の本質がだんだん分かるようになってきました。若いときは何でもチャレンジすれば道は開けるとの熱い想いがあったので、何とか物事を前に進めならここまで来ました。

さらに自分の終着点がほぼ見えてくる年齢に達する頃までには、必然的に世の中の裏の話や人間の醜いものも一応経験し本当の姿が分かってきます。人間の愚かさや弱さ、さらに煩惱に支配された人間の生き様が感じられます。

このような状態になって最近感じていることの中で、不思議なことがあります。それは、たとえ物事に対して怒っていても暫くすると心の中からそんなに怒ってどうするの？怒ってもなににも変わらないし、自分自身がそのような心の状態を続けていること事態意味がないような感じを持つようになりました。

そして自然と許す気持ちが出てきます。人に対する寛大さあるいは優しさとも言うのでしょうか。自分でも不思議なくらいに素直な気持ちになります。この辺の気持ちの変化は、歳をとってから出て来たもので若いときにはなかったものです。しかし、決して物事に対し諦めたという訳ではないのです。

無限の可能性から命という有限の世界が分かると、自ずと命の大切さやそれを大切に思う心が芽生えてきます。また、自分の失敗に対してわだかまりを持ち続けることに対しては、時間という解決策により心を解き放つことが出来るのですが、この時間をコントロールすることが非常に難しいと思います。

短い時間にわだかまりから解き放つことが出来るようになれば大したものですし、この状態が般若心経等で著されている「心無圭礙」であり、もっといえばこの状態が「空」の状態だと思います。

もっと前から仏教の精神というか教えを学んで生きていれば、明らかに今の自分と異なった人生が送れたような気がしています。しかし、このまま仏教を学ばずに人生を終えなくて本当によかったと思います。そのような意味から、私にとって仏教との出会いは限りある命の下で生きるひとつの救いでもあります。

今後の生き方として、「心無圭礙」で著されている心からわだかまりを解き放ち、本来の「空」のころを持つようにすることが大切だと思うこの頃です。また情けない話ですが、五十路を過ぎてもまだまだ精神的に子供だと改めて反省しています。

## 小さな事をコツコツとひたすら真面目に生きること

---

人間には生まれついた宿命というか、自分の力ではどうしようもないことがあるものだとこの年齢になって認識するようになってきました。若いころは、この世に生まれたものは真面目に努力していればいつかは救われると思っていましたが、最近はそうでもないような気がして来ています。

いくら頑張っても出来ないものは出来ないし、反対に自分でも不思議なくらいに余り苦勞せずに出来てしまう事があります。これはいったい何なのだろうと考えますが、所詮、凡夫の浅はかな考えでは到底結論が出るものではなく、最後はまあいいかといった諦めに似た状態で満足してしまいます。

しかし、最近これでは人間としての成長が無いなあと考えるようになり、どのようにしたら少しでも人間として成長できるのかと、考えた時に浮かんだ結論が、今回の標題に現わした「小さな事をコツコツとひたすら真面目に生きること」なのです。

人間は例えその進み方が遅々としていようとも、コツコツと取り組む行動の中からは、大きな力が湧いてくるような気がしています。ただ頭の中で考えているだけの状態では、前に進みません。

自分の手や体を動かすことを通じてその小さな行動の結果が積み重なり、ある時その力が自分を大きく動かすことに繋がると思うようになりました。その力は、自分自身の中にある「仏性」ではないかと思っています。

仏教では、人間でも動物でも植物でも道端の石ころにも仏性があると考えています。自分では気づかないもう一人の自分の姿が仏性なのです。さらに、素直になればなるほどこの仏性に近づく事が出来るのです。この辺の考え方が他の宗教にないものであり、自分としても素直に仏教を受け入れられる大きな魅力だと思っています。

生まれながらにして頭脳明晰で、若いうちから世間で脚光を浴びて活躍している方が多くいます。当初は羨ましくもあり出来ることなら自分も少しでも近づきたいと思った事がありましたが、凡夫には所詮無理なことが分かりました。

それは決して負け惜しみでなく、個々の人間には個々に与えられた役割があることに気がついたからです。全ての人が先のように世の中で脚光を浴びる人間ばかりでは、世の中が成り立ちません。同じ人間でありながら世の中には階級や職業がさまざまあって、それで社会が上手く構成されているのだと思います。

古くからあることわざで「箱根山 駕籠に乗る人 担ぐ人 そのまた草鞋を作る人」がありますが、正にこの考えで社会が成り立っているのです。この考え方から行くと、凡夫は草鞋を作る人に当たると思います。

ただここで忘れてはいけない事は、それぞれの立場での自信やプライドだと思います。このような想いがなく、ただ何かを行っているのでは意味がないと思います。自分に合った仕事があればそれは幸せだと思いますが、現在携わっている仕事が自分に合っていないのであれば、それは少し不幸かも知れません。

しかし、昔から「石の上にも3年」というように、最低でも3年ほど同じ仕事を行うとそれなりに自信を持てるようになるのが普通です。この段階でも真面目にコツコツ行う事が重要だと思います。

これらの努力が必ず成果となって現われることを一度でも経験すると人間はより大きくなり、さらに成長するための次のステップに進むのです。継続は力に繋がります。

この不景気で先が読めない時代ですが、毎日小さな事をコツコツとひたすら真面目に生きることを通じて、人間的に成長し心豊かな人生を過ごす事が、釈迦が教える人間としての正しい道ではないかと最近考えています。

「小さな事をコツコツと」は凡夫が好きな言葉です。

この齢になると、いろいろ思うことがあります。昔の年寄りには口うるさい人が多くて嫌いでしたが、まさかそのような年寄りと同じような考えを持つように自分もなってしまったことに、驚きと不思議さを感じています。

最近特に感じることは、人と人とのコミュニケーションが非常に少なくなってきたことに危惧を感じています。何も言わないでいることが良いとするような風潮が特に強くなってきていると思います。例えば満員電車で人の足を踏んでしまった時であれば、素直に非を認め謝るのが普通ですが、最近は踏んだ者より踏まれた方が悪いような感じさえ受けます。

何故このような状況になってしまったのかを考えてみると、携帯電話に象徴されるような個人主義にその原因があるような気がしています。電車の中での光景ですが、昔は新聞をひろげたりや読書をする人が殆どでしたが、いまは多くの人が携帯電話を片手にメールをしたりやインターネットから情報を入手したり、あるいはワンセグTVを見たりと、携帯電話が中心となっている行動様式になっています。

このように携帯電話は個人を中心としたコミュニケーションをより強くする力を持っています

。現在は、昔のようにある個人とコミュニケーションする際に間に他人が入らずにその個人と直接出来るようになりました。ある面では非常に便利になりましたが、反対に人と人との間の礼というべきものが失われ、全てが友達感覚に陥ってしまっている感じを受けます。

個人と親しくなる事に異論はありませんが、たとえ親しい者であってもその間には、守るべき慣習があると思います。これなくして、単に友達感覚で付き合うのは問題です。このような状態では本当の友情を作り上げることが出来ずに表面的な関係で終わってしまいます。

何事も簡単に出来てしまうものから得るものには限界があり、量的にもまた質的にも少ないものです。ある程度の苦勞を伴うからこそ、その結果として得るものが充実するのが正しい考え方です。

汗や涙や悩み、さらに心の痛みなしの個人の行動から得られるものが、大きなものであるのであれば、それは偽りのものであり、あってはならないものだと思います。全ての行為には人としての努力が必要なのです。

法然が開祖となった浄土宗や親鸞が開いた浄土真宗では、どのような者でも念仏を唱えるだけで仏になれると説いています。当時の既存宗教からは敵対視されたようです。確かに念仏だけを唱えれば成仏できる教えには批判が集まり易いように思えますが、鎌倉時代の庶民の暮らしは現代の生活と比べると雲泥の差があります。

すなわち、これらの時代背景を考えると、その当時の人々は生きる事それ自体が大変なことだったと思います。ですから法然や親鸞は、苦勞している者を救う道を考え広めたものと個人的に考えています。

これらのことと、今我々が生きている現代の生活レベルを考えるとどうでしょうか。確かに世の中は二極化する傾向がさらに強くなってきています。よって弱者を助けることは重要なことですが、本当にそうなのかということを考える必要があります。

助ける前に、まず人間として行うべきことを確実に行動することが大切なのです。このような行動をとっている人には暖かい手を差し伸べる必要があると感じます。またこのような心があっても、実際に生きていく際に出来ない人も中にいます。

まず心があれば良いと思いますが、その判断は非常に難しいと思います。これらを可能とするには、仏の心を持った人に判断してもらうしか凡人には成す術がありません。

親鸞はどんな悪人であっても成仏できると言いきっています。凡人の私には、まだ理解出来ないレベルの教えです。理解出来るまでは自分の考えを大切に、また他の人の意見を謙虚に聞きな

がら、さらに自分の考えをブラッシュアップするしか凡人には生きる方法はありません。何事もその事実や事象を直視し、その中から自分なりに考えをまとめ、より良い方向に進むように対処するのが、今の自分の状況の最良な方法だと理解しています。

電車の中で携帯電話で何かの行動をしている人々が、意味のある行為をしているのであれば良いのですが、いまの日本の状況や社会で起きている事象を見ていると、安易に流れてしまっている感じがあり、とても心配です。

もっというなら日本の国が危ないと思います。危機感を持つ人がもっと多くなるべきですし、自分も微力ながら何らかの力になりたいと思っています。皆さん！日本の国を救いましょう！！そのためにはもっともっと個人レベルで切磋琢磨し、己を高める必要があると思います。人間は一生修行なのです。すなわち生きること自体が修行なのです。

個人的に禅に関しては興味があり、今までに関連の本を読んでいたが、最近道元の言葉をまとめた文庫本「道元「禅」の言葉」が発刊されたので、早速読みました。

今回のこの本を読んで少し禅に関して整理が出来たことは良かったと思います。釈迦が説いた仏教ですが、時が流れる間に仏教もいろいろな考えや教えが生まれ変化しながら今日まできています。

今回の本を通じて、仏教を学ぶ事（すなわち自分自身を分かること）に関する考え方に関して、いままで自分が考えていたものと少し異なっていたことが分かりました。

自分にはない知識や知恵や常識を自分以外の他者から学んで知ることを「学知」と言いますが、道元禅師が著した「正法眼蔵」の中で述べているのは、仏教を学ぶことはこの外に求める「学知」ではなく、自分の中にあるものを学ぶことだと説いています。

一歩外へ出て学ぶのではなく、一歩自分自身の中へ入り込むことだと言っているのです。この世の中を含む全宇宙に存在するものには、それが石であれ花であれどのようなものにも仏性があり、深く自分を見つめ考えることにより光明が得られると言っています。すなわち自分の中に知があると言っておりこれを「生知」と言うのです。

これまで、未熟な私は少しでも良くなる方法を常に外に向けて模索し、役に立ちそうなことを模倣しては自分を改善してきましたが、最終的には自分を深く見つめて考え、真理を求める行為を通じて、限りなく崇高な世界へ到達することが出来るのです。

確かに自分自身で苦しんで苦しんで涙を流しながら越えてきた根底には、最後は自分しかないという考え方があり、それに向かって長い道のりをたどりながら最終的にある状態に到達でき

るような気がします。

これらの背景には、自分の能力が無くて深い悲しみの中で涙を流しながら過ごした時間が非常に大切であることがわかります。このように涙を思いっきり流したあとの清々しさは、経験した者だけが知ることだと思います。

最終的には、自分自身の中で何かしらの解決ができる力を誰もが持っていることを仏教は説いており、素直にそのことを実践することが重要なのだと思います。このような行為を通じて、何か分からないけれど大きな力やエネルギーが得られるのです。

自分と宇宙は一体であるということが素直に受け入れられるのであれば、その人は限りなく釈迦の仏教の教えに近づいていると思います。これらの考え方は、「灯台下暗し」に近い考え方で、本当に求めるものは自分自身の中にあるのです。

求めるものが全て自分自身の中にあるということから、自分を他人と比較することなく自分の道を進むことが大切なのだと思うようになりました。若い時にこのような考え方が出来たのであれば、今の自分はもっと違った人生を歩んでいたと思いますが、このように悩みながら進む人生が、私の人生だと素直に思える心の安らぎが最近もてるようになりました。

これも仏教を学んだお陰でした。この点から考えると「学知」も重要なのです。ただし、最後は「生知」なのです。 合掌

## 知ることと理解する悦び

---

50年以上も生きています中で、恥ずかしいことですがこの歳になっても知らないことや分からないことが沢山あります。また知っているつもりになっていて、ふと自問自答した時に何故そうなのかが分からないことがよくあります。そんな時、自信がなくなり情けなくなるとともに落ち込んでしまう事があります。

誰にでもこのような経験があると思いますが、その後どのようにしているのでしょうか。仕方がないことだとただ諦めるのか、あるいは何らかの努力をして少しでも理解するようにするのか、なにも考えずに過ごすのか、いろいろな対応方法があると思います。一般的に知らないほうが幸せだとよく言われますが、知らなければ確かに悩まずに済むので楽は楽ですが、この状態だといつまでたってもある一定のところから前進がありません。

自分の人生で周りが増えている中で、自分だけ取り残されたように停滞しているのはとても耐えられません。自分の体を構成している細胞ですが、脳細胞を除いてある一定の周期で生まれ変わっています。肉体が生まれ変わるのにその肉体に宿っている精神が変わらないのは、問題ではないかと思います。

ほんの少しでもよいので昨日より今日、今日より明日と変化することが大切だと思い、何らかの行動を起すことが重要ではないかと最近特に感じています。そして行動を起すことが生きて行く上での基本であり、また重要なことなのだと思うのです。

知ることにおいて手っ取り早い手段として、読書があると思います。個人的に往復の通勤時間は3時間と首都圏に通勤する人にとっては平均的な時間だと思いますが、この時間を有効に使うか使わないかによって大きな差が出てくるような感じがします。満員で混んでいる車内ではどうも読書が出来ないので、このような時間はiPodのモーツァルトを十分に堪能しています。

また、本が読める場合は読書を少しだけでも自分が知らない世界を覗いたりまた、いままでの知識をさらに伸ばすために必要となるいろいろな情報を得て、さらに高度化させるようにしています。しかしいろいろな知識を得れば得るほど、さらに分からない未知の世界が開けてくるので、いつまでたっても終わりが無い長い道のりが続いているのです。人は、死ぬまで勉強と言われますが、その通りだと素直に思ってしまう。

例えばモーツァルトに係わる本を読んでいて、モーツァルトが生きた時代の政治体制や貴族の生活、あるいは庶民の生活がどのようになっているのか、さらにこの時代のキリスト教と音楽はどのような関係にあったのかなど、知らないことや反対に知りたくなるようなことが多く出てきます。

その時には、これらのことを少しでも分かるような書籍を探したりあるいはインターネットから情報を入手したりして、ある程度の概要を掴みますがこのような行動をとることによりさらに分からない分野のことや、新たに興味を持ってしまう分野が出てきます。

ですから知れば知るほどどんどん範囲が広くなり発散してしまう傾向に陥ります。しかし、諦めて知る行為を停止させてしまうより、エンドレスになります。継続的に知る行為を続けるほうが自分の性に合うので、今後も続けて行くつもりです。

この知るという行為のほかに、もっと大切なことは知った事実をどこまで自分のものにするかということが重要であり、言葉を替えればどれだけ理解するかがポイントだと思うのです。ただ事実を知っているだけではあまり価値のないものであり、理解して自分のものにするのが最終的な目的だと思います。

このような努力をして自分なりに理解すると、他人の人に話したり理解してもらうときに短時間で事が済みます。よく他人の話聞いてよく分からないことがあります。それは話している人が十分に理解していないことによる結果だと思います。自分でもあまりよく理解していないことを他人に説明する時は自信をもって話すことが出来ないで、結果的に分かり難い説明になってしまい、余計に聞いている人は理解しにくくなるのは当然だと思います。

個人的には知らない事はできるだけ無くすように努力してある程度の知識を持つようにし、そしてこれまでに蓄積した知識を有機的に結びつけて全体の大きな流れの中で一つの事象を理解するような方法がとても有意義であると思っています。単に知るだけでなくさらに一步上の理解するレベルまで高める努力を常に持ち続けることが大切だと思います。このような行動を続けることにより凡夫であってもさらに上の意識をもった凡夫のレベルになるのだと思います。

話しが飛んでしまいましたが、先日私のメルマガを読んでいただいている読者の方からこの凡夫に関してメールをいただきました。結論的に言うと私がメルマガのなかで自分のことを凡夫という表現で書いているのは良くないと言うものでした。その方は謙遜されて言っているのだと思いますが、私よりも低いと決めつけられているようで、その方の方が凡夫であるから私がメルマガの中で凡夫という言葉を使わずに、私や自分という言葉使うようにすべきであるとの忠告をいただいたのです。

この方からの忠告はありがたいことですが、今回の内容にもあるように自分にとってまだまだ知らないことが多く、さらに理解し自分のものにしていない状況にある私は、正に凡夫（仏教でいう煩惱に迷っている人間であり、さらにただの平凡な男という意味からして、今の自分にぴったりだと思っています）だと思っていますので、これからも凡夫という言葉で書くつもりです。ご容赦のほど！！

知ることとそしてそれを理解できた時の喜びは、経験したことのある人にしか分からない特別なものだと思います。ある事象のことが自分になりて理解できた時は、頭の中のもやもやがすーと消えて、それはちょうどモーツァルトを聴いているような爽やかな気分になります。

## 組織の活性化には八方美人とバランス感覚が必須

---

人にはいろいろなタイプの人があります。神経質だったりあるいは超大雑把だったり、何事にも突進する型の人がいれば手広く何事もそこそこに処理をしてしまう型の人だったり、融通が利かない頑固で堅物のタイプやその反対に誰にでも柔軟性を持って対応することが出来るタイプの人があります。

このようなタイプの人がある程度混じり合っただけ出来た組織は一見まとまりがない様に思われますが、ある面では団結力があって硬い絆で結ばれ力強い行動がとれる場合があります。常識的な考えの持ち主だけで構成された組織は、ある面でまとまりがあり素晴らしい成果が出そうな感じを受けますが、意外と分裂し易く弱体化した組織になってしまうものです。

昔、新しい組織を立ち上げる仕事に就いたときに経験した教訓は、全て出来る人間だけを集めた組織にすべきでないということです。純粋性や均一性は一見強そうに映りますが、半面でも弱い面を持っているのです。

反対にちょっと外れた異端児のような感覚の持ち主を入れておくと組織に活力が湧き、いつまでもさらさらと流れる組織が出来上がります。もっと単刀直入に表現すれば、組織を構成する人材が皆同じ色に染まらないような環境にすべきだということです。

全員が同じ色に染まると、その時点で個性が埋没してしまいます。個々の人間がある色を中心として少しずつ異なった表現をする独自の色を出すべきだと思うのです。さらに皆同じような優秀な人材を集めると、必ずといって良いほどその中にある割合で腐って機能しなくなる人間が出て来るのです。

玉石混淆という言葉がありますが、この考えを取り入れた組織にすべきと思います。ただし、この玉石混淆ですがただ混じり合わせれば良いというものではありません。何らかのきっかけを起さずにそのままの状態をずっと続けるだけでは組織の活性化は進みません。

玉と石という相反する対極にあるものは当然のことですが、自然と反発する関係になるのが順当な流れです。この微妙な力関係の調整を行う時に役に立つのが、八方美人的な役目をする人材です。八方美人とは、だれに対しても如才なく振る舞う人で、一見悪い代表のように思われる方が多いようですが、人間よくよく見つめなおしてみると心のどこかで誰もが八方美人の願望や要素があるのではないかと思います。

いろいろなタイプの人で構成されている組織では、これらの人間の間において円滑な調整が出来るか出来ないかによってその組織が活性化するかあるいは停滞するかが決まります。組織をまとめあげる人材を早く見出し、八方美人的な調整行動を行いながら組織内のベクトルを合わせ、

然るべき方向にまとめ前進させることがどうしても必要となります。

組織をまとめなければならない立場にある人であれば、自ら八方美人になるかあるいは側近のもので八方美人的な行動をとれる人材を見出し、行動させることが必要です。組織も男と女でも微妙な緊張感や緊迫感さらに危機感のような環境を設定する必要があります。このような微妙な環境が出来ていると、組織でもまた男女の関係でも不安定の中に安定な状態を維持する事が出来るのです。

すなわち、あらゆる要素の間で如何にしてバランスを取りながらコントロールするかが大きな問題となります。簡単に言えば絶妙なバランス感覚を身に付けて行動することが求められるのです。ある一方だけに片寄った行動をとったり、あるいは相反する勢力に対して常に敵対した行動をとり続けるとバランスが崩れるので、必然的に組織は崩壊の道を辿ります。

バランスのとれた組織運営が確立して初めて、強いリーダーシップを持った人が現れると組織は最強の軍団に変貌するのだと思います。しかし、世の中は良くしたもので、平家物語で述べられているように永遠と続く組織はないのです。ある時点で組織は縮小、崩壊、合併、拡大などを通じてまた別の組織に変貌しながら維持していくのだと思います。

どちらにしても、組織の活性化には八方美人とバランス感覚が必須であるというのが、過去の経験から学んだものです。このような経験が生かすことが出来ないのが悲しいかな凡夫なのです。所詮、凡夫は凡夫の枠をはみ出すことが出来ない宿命にあるのです。どなたか共感される方がいたら是非とも実践し成功していただきたいと思います。

## 人間の不思議な右脳とその開発方法

---

人間は持っている能力のわずか3%しか使っていないことは、今や周知の事実のようになっています。凡夫に至ってはその割合はもっと低いと思いますが、天才として知られている偉人たちでさえも7%くらいが限度とのことなのでさらにびっくりしています。さらに、何もしないと残りの90%以上の脳細胞は使用しないまま寿命が尽きてしまうのですから、恐ろしい気がしています。

反対に一般的な体の正常な細胞は決められた周期の基に再生します。例えば、皮膚は28日、血液は約4ヶ月で全部新しくなりますが、脳細胞は新しくならないのです。つまり、年齢とともに脳細胞が死滅し減少していくのですから大変です。

ですから使用していない脳細胞はそのままの状態でも温存されていることから有効に活用すべきであって、「歳をとると脳は鍛えられない」という凡夫の勝手な解釈は問題になりますし、ただの言い訳になってしまいます。最後の最後まで脳の能力を限りなく使いこなすことが重要なのだと思います。

人間の脳の働きに関しては、最近の研究でいろいろな点が解明されつつあります。左脳は言語認識や論理的思考といった論理展開をきちんと組み立てるような思考や計算プロセスを確立し、さらにこれらを記憶したりする意識脳（顕在意識脳）です。

これに対し、右脳は本能的な能力から発達した脳で、スポンジが水を吸収するように、見たまま聞いたまま感じたままを直感で瞬間的に記憶したり、さらにひらめきや芸術性、創造に関する役割を担っている無意識脳（潜在意識脳）であると言われています。

凡夫の私でさえあるのですから、皆さんにも同じような経験をされたことがあると思いますが、ある事象に関していきなり結論が導き出されその後それをどのように正当化するかを懸命に考えることがあります。多分この時に直感的に右脳が働いて結論が見えたのだと思います。また、意外とこの直感に正当性があることが多いのも不思議です。

新たな研究の成果として、左右の脳の機能分化が生じたのは人の進化の過程で限られた脳の容積を生かすために既にある能力を右脳に残し、左脳に新たな能力を割り当てるために古い能力の一部を移行したために起きたものと考えられています。これをパソコンに置き換えてみると、ハードディスクがいっぱいになったので圧縮してアーカイブに保存するような過程を、脳の中で時間をかけながら少しずつ変化してきたというべきなのかも知れません。

動物は進化するほど脊髄の先が徐々に大きくなり脳を形成しますが、これらの中で最も進化し

た脳が人間の脳だと言われています。また、人間の脳は大きく3つの進化過程の脳から構成されており、それらは爬虫類の脳、哺乳類の脳、霊長類の脳だといわれています。また、不思議なことにこれらの3つの機能は右脳のみ接続の回路があって繋がっていますが、左脳は完璧に遮断された状態にあるのです。

ですから人間の脳は三層の知的システムを持っていることと同じであり、さらに言うと三つの知的能力（例えば、爬虫類の脳にはテレパシーのような機能部分があり、哺乳類の脳にはイメージ情報を取り扱える能力があり、さらに霊長類の脳には生まれてからの新たな知識が蓄積されるようになっている。）を秘めたスーパーコンピュータ以上の能力を備えていることになります。

このような右脳の事実が分かってくると、どのようにしたら右脳をさらに開発できるのか興味が湧いてきます。先日、新宿の朝日カルチャーセンターで開催された「七田眞の右脳的人生のすすめ」という講演会を聞きましたが、この中で右脳を開発する方法として、右脳の特徴である高速性とイメージ化の能力を活性化させるために、右脳にこれらに係わる高負荷な刺激を与えると、これらの処理が苦手な左脳は機能せず、反対に右脳が活発に動き出すようになるといった具体的な方法に関して話していました。

より具体的に紹介すると、語学であれば高速（通常の2倍速や4倍速さらに8倍速）で録音されたものを継続して聞き続けると、右脳が刺激され早く話しているのが時間が止まったようにゆっくりと聞えてくるようになり、語学が驚異的に伸びるようです。事実かどうかは自ら試してみる必要があると思います。

さらに講演の中で気になった話は、仏教での業と呼ばれている修行は右脳を活性化させる能力を開発するためのものと断言していたのを聞いて、なるほどと感心してしまいました。確かに修行は無の境地に達するためのものであり、右脳が動きだす世界だと思います。また右脳を活性化することにより、右脳に秘められた生物の生きるための莫大でさらに凝縮された情報の中から、適切なものを瞬時にそして大量に引き出すことにより、天才に少しでも近づくことができるのだと思います。

モーツァルトの音楽は、すべて右脳で作成され曲として完成した際には右脳の中に出来上がった総楽譜を、実際の世界において五線紙にただ書き写すだけであったので、モーツァルトの直筆楽譜は常に清書されたものと同じように訂正が全くないのも頷けます。

さらに「気」のエネルギーもこの右脳に大いに関係しているのではないかと思います。この仮説が正しいとすると、いろいろ紹介されている超能力者の行動が理解されます。このように右脳が特に重要だと考えると、残りの人生のカウントダウンが既に始まっている凡夫としては、出来るだけ早く右脳を活性化する方法を身につけて実行に移さないと手遅れになってしまうのではな

いかと、少し焦っています。皆さんも右脳をもっと研究して自らの脳を活性化させませんか。

最近の世の中は、どの産業のビジネス形態の中にもITの技術が取り入れられています。したがって、この世の中で働くにはPC端末のようなIT機器を使いこなせないと仕事が出来ない状態に追いやられて来ています。

昔でいうところの「読み書きそろばん」の書く機能は今やPC端末のような情報機器に完全に置き換えられているといっても過言ではありません。今から30年ほど前に他の機種と互換性のないワープロが世の中に登場し、それぞれの機種の使い方を習得しながら仕事をしていましたが、次の職場に異動になった際に転勤先が異なった機種を使っていると、またはじめから使い方を覚えなければならず、苦労した時がありました。

今はパソコンで簡単に出来るようになり、つまらないところで余計な苦労をしていた当時の姿を思い出すと、思わず苦笑してしまうような場面が数多くありました。また、その当時の上司は、もはやこのような機器に触ろうとする意欲がなく、いつも原稿を渡されてワープロの前で読みにくい字体を前後の文脈から解釈し、苦労しながら入力した当時が懐かしく思い出されます。

このころはネットワークとの接続がなく、それぞれスタンドアロンでの使い方であったためその機器が故障にならない限りは仕事が出来ましたが、今の世の中は、インターネットの異常なまでの拡がり、ネットワークの故障があるとそれこそ仕事が出来なくなるような事態に陥ることがあります。

便利な世の中になればなるほど、あるひとつの故障がこれらに関連する箇所にも影響を及ぼすことになり、そのような観点から見ると、危機管理をしっかりと行うことが大きな課題であることが分かりますが、この課題のために真剣に考えると途方もない時間と費用がかかります。ですからあるところで割り切った考え方で対応しているのが現状のシステムだといえます。

この割り切った部分を実際にはどのようにしているかというと、ここの部分を年中無休で人間が監視しながら、何かことが起きた場合は人間が判断して故障を回復させているのです。しかし、サービスを利用している側から見るとこのような運用監視をしている現状が見えません。まさに黒子的な存在といえます。

何も起こらなくて当たり前で、何か事が起きた場合はユーザから怒られるという、どう考えても割が合わない仕事は現在のITサービスの世界にあるのです。これはまたITの世界だけでなく他の業界の中でも表面だけを見ていると分かりません。あらゆる場面で、これらを陰で支えている人や、これに準じる機能を提供しているものの存在が必ずあるものです。

時間365日休むことなくシステムを正常に動作させる業務は、予想外に大変な仕事です。しかし、このような仕事に携わる人がいないと、この世の中の機能はすべて停止してしまいます。それほどまでにとても重要な業務だと個人的に思っています。

真夜中でも人間がシステムの状態を監視しなければならない事から、夜間の勤務が必要となります。徹夜と同じ状態で働くのですから体力を消耗します。さらに障害が起きてその解決に時間がかかる場合は、丸2日間寝ずに対応することもあります。

昔々、仕事の内容で3K（「きつい(Kitsui)」「汚い(Kitanai)」「危険(Kiken)」）と呼ばれた業種が多くありました。いまでは多くの仕事の内容が見直され、改善されていますが、一見華やかに見えるIT業界ですが、個人的には裏で支える業務に携わっている人たちはまさに昔で言う3Kの業務ではないかと思っています。

これらの業務には、若者が多く従事しているので体力的には大丈夫だろうと思っていますが、華やかな世界で活躍している人がいるなかで、彼らのようにもくもくとITの世界を支えている仕事に従事している若者を見ながら、常に頭の下がる思いで微力ながら支援してるのが現状です。世の中にいるいろいろなタイプの若者を見ますが、いまシステムを陰で支えている若者には、何か特別な思いを感じてしまいます。

これからの世の中は少子化が進む中で、若者が確実に減ってきます。必然的にきつい仕事を避けて、楽な仕事に就くのが人間としての行動様式です。今はいいとしても、今後どのようにしていくのかを真剣に考える必要があります。これはIT業界に従事するものだけでなく、もっと国家的に考えていくべき問題だと思っています。

先日もある学会で、システム運用に携わった経験がある60歳以上の方々を対象としたNPOを設立し、いままでのノウハウを週に1回夜勤の勤務に従事し若者ととともに共有できる仕組みの必要性を発表しました。しかし、まだまだ運用現場の実態を理解する人が少ないことから、いまいちきちんと主旨を理解していただけなかったことが残念でしたが、これからも機会あるごとにものを申していこうと考えています。

この仕組みが実現すると、60歳以上の運用経験者も生きがいを感じられ、またIT業界でも人手不足が解消されるので、業界、高齢者、今の若者の3者にとって一石三鳥という欲張りのな効果が期待できるのです。

今後のIT業界の中で、少しずつでも運用の改善が図られ運用業務に従事している彼らにも陽が当たるように、ささやかではありますが頑張りたいと思っています。

## 毎日繰り返すことの重要さと生きる喜び

---

忙しいときは、何も気にならなかったことが少し自分を見つめる余裕が出来ると、いろいろな疑問が湧き上がって来て、とても憂鬱になることがあります。本来ゆとりを持った生き方が最も重要で大切なのですが、何故か暇ができると凡人はどうでも良いことを真剣に考えてしまうものなのです。

たとえば、私の場合は、家族の事情で先週1週間休みをとり愛犬ミルクの世話をしながら時間を過ごしましたが、折角の休みにもかかわらず毎日何度も会社のメールをチェックし、またそれなりの対応を行っていました。

会社と縁を切れない情けない自分を、客観的に観ながら過ごしていました。しかし、このような状況の中でも休みを取らなければ出来ないようなことを、少しずつですが取り組みを始めましたが、そしてそれが完成するまで、まだまだだため息をつきながら一方で楽しんでいる自分もいます。可笑しなことだと思えます。

しかしよくよく考えると、どのような人間でも毎日同じことの繰り返しで生きていると思います。朝目が覚めて、今日も生きられたとの感謝をもって起きる方がいたらそれは素晴らしい人です。しかし普通は、だるい体を騙しながら、今日も会社に行かなければならないと少し憂鬱になりながら、今日一日何か一つでも良いことが無いかを満員電車に乗りながら考える日々です。

会社に行けば行ったで、特に緊急を要する事がなければ通常の業務を処理しながら、今までと違うやり方で効率良く出来ないだろうかと、考えることが出来ればそれは素晴らしいことだと思えます。これが出来る状態であれば、何事も前向きに対応できますが、一度マイナス思考のサイクルに入ってしまうと大変です。悪いことばかりを考え、さらにそのような状況に陥るとさらにマイナス思考が働き、どんどん深みにはまってしまいます。

毎日同じことの繰り返しを行っていると、何故にこのようなことを毎日しなければならないのかと考え出します。たとえば専業主婦であれば、食事を作って片付けて、掃除をして綺麗になるとまた散らかってまた掃除、汚れた洗濯物を洗って乾かすとまた洗濯物が出てまた洗濯という、いつも同じサイクルで対応しなければならないのが家事です。

しかし、この繰り返しの作業が処理できないと何も進みません。美味しい食事が出来れば食べる人にとっては幸せだと感じますし、掃除が行き届き片付いた部屋だと落ち着きますし、ほのかな香りがする清潔な洗濯物だと何故か気分が良くなります。

作業内容は毎回同じですが、細かく見ると毎日異なる内容であるし、それを受ける人にとっては幸せとか感謝の気持ちが自ずと湧き上がるものだと思います。この些細な事実の繰り返しが、

大袈裟に言うとは人生であり、その人が生きている生活だと思えます。

愛犬ミルクを例にとると、毎朝夕の散歩と食事と飼い主の近くで安心して寝ることの繰り返しですが、とても幸せそうに見えます。毎日が同じ繰り返しですが、決して退屈そうには見えません。毎回散歩と食事の際にはジャンプしながら喜んでいきます。人間は、単純な繰り返しの中の幸せをきちんと感じ、あるいは理解することをしていないのだと思えます。

毎日、東から太陽が昇り西に沈み、ほぼ24時間後にまた太陽が現れる。さらに1年かけて地球は太陽の周りを公転し、それぞれの地域に四季を作り（四季の無いところもありますが）人間に趣を与えてくれます。このように地球も宇宙の中でまた自然の中で、毎日同じことの繰り返しをしています。

この世の基本は、毎日の同じことの繰り返しの中から少しずつ変化し、前進するのだと思えます。ですから、変化の少ない生活の中にも小さな喜びを見つけ生きることが、重要なのではないかと、この1週間の休みの中で愛犬ミルクとともに考えました。

## ファーストライフとスローライフ

---

現代社会は、いたるところでスピード感が重要視されています。ビジネス上でも意思決定にはスピードが求められており、そのための情報収集も必然的に早くないと対応出来ない状態になります。またお客様対応も当然のことながら早く対応しなければならない仕組みの中に全ての機能が組み込まれています。

さらにこれらに付随したかのように、我々の生活の中にまでスピードという要素が入り込んでいます。食べ物にしても人の移動や通信の速度にも、全てが早く出来ることは効率化につながり良いことだと暗黙の了解のようなものが存在し、世の中は何ら疑問を持たずにスピードを求めて進んでいます。

このような傾向は、人間の心の中にもだんだんと忍び込んで来ていると思います。例えばスピードだけを重視すると心のゆとりがなくなり、どうしても表面上だけの見方になってしまったり、じっくりと考えずに決めてしまったりと弊害はいろいろな面に出ていると思います。このような状況を打開する意味でも、スローライフの考え方がこのところ関心を持たれて具体的に活動されているようです。

個人的には、休みの日は徹底的に自分のスタイルを貫いて過ごすことを実践しています。疲れて体がだるい時は、誰が何と言おうと寝たいだけ寝たり、自分で納得すれば休みの日でも仕事をしたり、読みたいだけ読書をしたり、また聴きたいだけ音楽を聴くといった感じで過ごしています。しかし、これはあくまでも自分でコントロールできる生活範囲内のゆとりであって、社会全体のゆとりではありません。

スローライフは、社会全体にこの考え方が浸透して初めて意味があるもので、個人の限られた生活の中での実践だけでは意味がないのです。社会の動きを今のテンポから50%ほど落とした動きに変えると、人間らしい生活基盤が出来上がると思います。今の世の中は早過ぎることから何事もインスタント的なものが蔓延し、本当の意味での本物を体験する事が出来ないように思われます。

本物はそれなりに時間がかかるものです。必要な時間をかけて、その時間を感じる事ができると自らその物に対しての価値が分かるのですが、陰で他の人により時間が費やされているものは見えないので、それに伴う実感が湧かないものです。これは、時間の共有が出来ないということと同じです。自分の時間を費やす、即ち時間的な感覚が体験できると、物事の本質が見えてくるような気がします。

例えば、自ら料理をしてみると分かります。まず材料の入手から始まり、次に料理をするための準備、そして作成してはじめて本来の食べるという行動がとれるのです。食べ終わった

後は、当然ですが片付けの工程があります。これらを全て行うとかなりの時間を要します。

しかし、ここで自分が納得するような時間を費やしたとすると、食べる段になると必然的にゆっくりと味わって食べるようになります。それは食べる前の段階に費やされた時間やそれに伴う苦勞が分かっているからです。これがスローライフの原点だと個人的に解釈しています。

誰にでも平等に与えられたものは、時間しか無いと思います。ですから全ての原点はこの時間にあると思うのです。そして価値を見出すには、人の寿命と密接な関係にあるこの時間と何らかの形で比較することだと思います。しかし、今の社会は競争社会であるがゆえに競争相手に打ち勝つために時間を短くする努力が必要とされています。これは資本主義というより自由主義社会の中の一つの大きな宿命だと思います。

人間らしさを追及するのであればスローライフであり、反対に社会を重要視するのであればそこには常に現状を打開し、ある意味での進歩というものを考えなくてはなりません。この進歩ですが、確かに我々人間にとって必要でしょうが限られた資源しかない地球の中で生きていくには、アクセルを踏み続けてスピードを追求し進歩という結果を勝ち取るのではなく、ブレーキを踏みながら周りの景色やそれぞれの人間の顔を見ながら進むことも選択肢として存在すると思います。

今から数十年も前に、ローマクラブという組織が地球の有限資源に関して勧告したことがありましたが、今にして思うと先人の先を見る力に驚きを感じないわけにはいきません。社会はアクセルを踏み続けどんどん進んでいますが、これらにブレーキをかける事ができるのは、社会を構成している個々の人間なのです。

個々の人間がブレーキを踏みだし、結果がでるまでには時間はかかりますが、最終的には物が売れなくなり経済活動が停滞するのです。経済活動が停滞すると社会が一見貧しくなったように思われますが、その代わりにゆとりが生まれ人間としての豊かさが味わえると思います。今の世の中は物で溢れているので、少し質素になったほうが良いと思います。物の豊かさよりも心の豊かさを追求できるように、社会の構造を変える必要があると思うのは私だけでなく多くの人が持っている考えだと思います。

ファーストライフが全て悪いとはいえませんが、効率性を求めて時間を短縮する努力をして得た時間を無駄に過ごしていたら、何の意味があるのか分からなくなります。またスローライフが全てが正しともいえません。結局は個々の人間の考え方に依存することになりますが、本質や本物をどれだけ求めるかにかかっている人間の価値観に起因するものだと思うのです。

## 「アメリカインディアンの教え」から学んだこと

---

先日、「アメリカインディアンの教え」の第4冊目にあたる、「死ぬことが人生の終わりでないインディアンの生きかた方」という本を読みました。著者は加藤諦三で扶桑社文庫です。特別な意味があったのではなく、いつものように面白そうだなあといった感覚で購入したものです。

本の構成は、アメリカインディアンにとっての生きるということ、死ぬということ、自然という存在の3章になっていて、それぞれアメリカインディアンの根底に流れる哲学に関して記述されていました。

また、冒頭に「死ぬことが人生の終わりでないインディアンの生きかた7か条の教え」が書かれていましたが、これらの中で個人的に重要であると思ったのは、次に示す2つの言葉でした。

一つは、「あなたが生まれたとき、あなたは泣いていて周りは笑っていたでしょう。だから、あなたが死ぬときは周りが泣いていてあなたが笑っているような人生を歩みなさい。」であり、もう一つは、「生きることと死ぬことはひとつのサイクルです。だから、死ぬことは季節の移り変わりのように素晴らしいのです。」でした。

ともに人間にとって死ぬということについての死生観がはっきりと現わされています。この根底には、アメリカインディアンにとっての基本原点は自然であり、この自然に溶け込むことによって、そこからエネルギーを得て心身ともにリフレッシュするような感覚であることが分かりました。

人間にとっての死は終わりであるとの思いが私のような凡夫にはあります。しかし宗教では神が支配する別の世界が存在すると言われます。その世界を体験する事が可能であれば誰もが信用し、仮に正しい行いをしたものだけがそのような世界に行けるとなると、多分この世での過ごし方を考え直すと思います。

しかし、それが分からない現在、これらを信じるのは宗教を信じるかどうかにかかっており凡夫にとって悩むところです。しかし間違いのないことは、この現世で自分に恥じない人生を送っている限り問題ないのでないかと勝手に確信している自分がいます。この点、アメリカインディアンは自然の中のすべてのもの、例えば木とか岩が神の存在として扱われます。さらに言うならば、あらゆる物に精神が宿るとしている考え方があるのです。

また、アメリカインディアンの宇宙観として、全体あるいは統合という考え方が基本になっているようです。即ち、生と死がペアーであり、夜と昼がペアーであるように、あらゆるものの間にはこのようなペアーの考え方による宇宙の秩序があり、これらを反映したものと考えられています。

この考えを読んでいて、自分自身が常に思っている世の中の事象は最終的には、相対極する2つの要素の間の微妙なバランスで決定されており、またそれらは常に変化するという考えにアメリカインディアンのものが近いことが分かり、とても親近感を持つ事が出来ました。

シェイクスピアは生まれるという「生」に関して、人間は泣きながらこの世にが生まれてくるという言葉を残しましたが、その対極にある「死」に対して笑って死んでいくというアメリカインディアンのペアの考えはなかったようです。このペアの考え方は意外と東洋的な考えであると思います。

アメリカインディアンは、そのルーツを探ると我々東洋人と深い関わりがあるらしいと言われています。その昔、氷河時代の終わりごろ、アジアに起源する集団の一部がベーリング海峡を渡り、アメリカ大陸へ移住していったらしいのです。この事実を裏付けるような科学的な分析として1987年、日本人の一部と北米インディアンに共通のルーツがあることがDNAの比較から明らかになったことが研究成果として発表されています。

ですから彼らの自然崇拝の背景には、我々が四季の移り変りに敏感であるのと同じような感覚がDNAとして残っているのかも知れません。秋が来ると木々は紅葉し、そして静かに散って行きます。この自然の様子を見て我々は死というものをそれなりに考えます。

特にアメリカインディアンは、これらの自然の繰り返しを見ながら美しく死んでいくことを教えていると理解するそうです。即ち死は最後の人生経験との位置づけなのです。さらにアメリカインディアンは、死は我々の魂の再生であるとの考え方に立っています。これは仏教の輪廻転生の考えに近いものがあります。

今回アメリカインディアンの宇宙観を知ることで、死ぬことは人生の最後の経験であり、それは自然界の中のサイクルのひとつであるとの教えを学びました。ですから愛犬ミルクとの散歩道に少し前まで美しい花を咲かせていたものが、今は枯れて無残な姿になってしまっていますが、また来年に同じ花が別の命として誕生し、我々の目を楽しませてくれるのですね。そして、自分の最期は笑って迎えられるようにしたいものだと思っただけです。

## 小柴昌俊博士の記念講演「やれば、できる」を聞いて

---

先日あるシンポジウムに参加した際に2002年のノーベル物理学賞を受賞した小柴昌俊博士の講演を聞くチャンスがありました。演題は「やれば、できる」というもので、どのような事を話されるのか非常に興味をもって参加しました。

内容は大きく3つの部分に分けて話されました。始めは幼少のころに小児麻痺にかかった時に考えた人としての生き方、次に財団法人平成基礎科学財団を設立する際に苦労されたこと、そしてノーベル物理学賞の受賞対象となったニュートリノの話でした。どの内容も演題に提示された「やれば、できる」という観点から述べられていて聞く側に訴えるものが強くあり、久しぶりに良い話を聞いてよかったなあと感じた次第です。

小柴博士は1926年に愛知県に生まれ、1951年に東京大学理学部物理学科を卒業し1955年ロチェスター大学大学院修了され1970年東京大学理学部教授を経て1987年定年退官されました。ニュートリノ天文物理学の分野を大きく開くことになったカミオカンデに代表される宇宙線実験や、世界最高エネルギーの電子・陽電子衝突型加速器を用いた実験を行ない、素粒子物理学において、常に世界の最先端を歩み続けてきた方です。

幼少の頃にかかった小児麻痺に関しては、自分も同じ環境にあった場合にそのような行動をとれたかどうか疑問になるほどの前向きな考え方をもち行動をとられていました。小柴博士は旧制の中学に入学して数ヵ月後に、突然小児麻痺にかかったそうです。ある朝、目が覚めて起きようとしたが、両手両足が全く動かない状態になっていたとのことです。自分でも何故このような状況になったのか、冷静に判断できるまでに時間がかかったそうです。

頭の中で両手両足を動かそうと思っても、全くびくともしない状態であったそうです。それでも何とかしないといけないとの強い意志がさせたのだと思いますが、毎日動かなくとも諦めずに少しずつ継続して動かすことを続けた結果、少しずつ動くようになったそうです。

また、このころ一人で風呂に入ることが出来なかったので、20歳代の若い女性に背負って2階の部屋から1階に降ろしてもらい、さらに体を洗ってもらうのが本当に惨めで悲しかったと話されていました。思春期の中で、自分自身で何も出来ず介抱してくれる人が20歳代の若い女性となれば、誰でも嫌になってしまうと思います。

もっと吃驚したのは、このままの状態では人としての生き方に悔いが残り死んでも死に切れないとの思いから、何としても中学に通う必要があると結論を出し、数ヵ月後にどうにか動くようになった両足を引き摺りながら片道を約2時間かけて通学したとのことです。足が不自由でよく動かないのに、何としてでも通うのだという強い意思があったからこそ、成し遂げられたことだと思います。

凡夫の私であれば、きっと諦めてしまったのではないかと思います。さらに、徒歩通学の途中で転んでしまうと自分自身では起き上がることが出来ず、誰かが傍を通るまでひっくり返ったまま何も出来ない状態だったとのこと。道で倒れたまま自分としては何も出来ない状態であった時に、どのような思いが頭をよぎったのでしょうか。そしてたまたま通りかかった人に起してもらい、そして心からの励ましの言葉をもらったそうです。今の世の中に無くなってしまった大切なものがそこにあるような感じを受けました。

常に人の役に立つ研究を考えていたとのことで、一般的に予算が付きにくい基礎科学の研究分野を対象とした研究を推し進めるために、わざわざ自分の私財を投げ打って、研究を推進することを目的とした財団法人を新たに設立するために東奔西走したとのこと。その背景には実用技術に直結する応用研究ばかりでなく、基礎科学、純粋科学に光を当て、基礎科学の面白さがわかる教育の普及を進めることや、意欲と夢を持った若者を数多く育てることへの思いがあったからだと思います。

また財団の設立に当たっての資金を集める際に、国民一人一円の寄付で賄うことを前面に押し出してPRするなど、とても面白い発想で取り組まれたようです。広く国民からお金を集め、国民の為になる基礎研究を進めることが最終の目標なのです。世の中の人がこのような行動を見て賛同し、現在は各方面から寄付金が集まるようになり運営がされているとのことでした。設立までは、多くの人から上手くいかないから止めたほうが良いとのコメントが多くあったようですが、どうしても実現したかったとのことで徹底的に考えた末に実行したそうです。

国民の為に行う研究であれば通常は税金を使うのが正当な方法ですが、今の世の中の仕組みは適切に税金の分配が行われているとは思われません。その裏には複雑な力関係が働いているのが普通です。最近歳をとったせいか人間の世界では正しいことが正しく行われないと認識せざるを得ないようなことが多く感じられ、ある程度諦めることも必要なのかとってしまう中で、このような大先輩がそれも現時点で筋肉が弱ってしまう病気に罹っているのも関わらず一生懸命やられていることをみると本当に頭が下がる思いで自分が恥ずかしくなってしまうます。

最後に話されたのはノーベル物理学賞を受賞されたニュートリノに関する話で、個人的に興味のある分野であったので興味深く聞きました。とても分かり易い内容であったことも理解を深める事が出来た要因ですが、人に分かり易く話すことが出来るのはそれだけ内容を熟知している現れです。他人に対して易しく話ができない人は、その分だけ理解がまだ不十分であると思います。

最後に言われたのは人間やればできるが、その人が心底から一生懸命にやらないと出来ないという言葉が特に印象に残りました。確かに人間は、前向きに取り組むことにより前進しますが、

本当の意味での成功させるためには本気になって全身全霊の力を振り絞って臨むことが重要であると思いました。一生懸命に取り組んでぶつかれば何事も出来るという話を聞き、最近ちょっと弱気になって来た自分に対して大いに刺激になりました。

「一生懸命にやれば夢を実現できる」と、78歳になった現在でも熱い情熱を持って行動されている小柴さんを見て自分はまだまだ穴が青い手抜き的人生を送っていると猛省した次第です。世の中には、口だけで生きている人間が多い中で、小柴さんのように自らの体を動かしそして汗をかきながら物事に取り組んでいる姿勢に感動しました。

## ゆとりについて

---

最近やたらと「ゆとり」特に「ゆとり教育」についての話題があちこちで取り上げられています。当然のことですがこれに関しては賛成と反対論があります。聞いていてどちらにも正しい部分があり、また考えなければならない点があります。

この世の中に一つの方法だけにより、物事が解決するほど単純で容易なものはないと思うべきで、さらに言うならば絶対的に正しい方法なんてそもそも存在しないと考えるべきだと思います。私の持論である人間の世界での出来事は常に両極端の状況を考える必要があります。人間の世界で起こる事に対しては無常の世界の流れに併せて、何事も変化すべきだと考え、それに対応する施策を作り、そしてそれを実践し、また見直しながら良くして行く事が人として生きて行くための術の基本であると思います。

いまの日本に欠けているのは、真剣に日本という国を考える人が少ないことにあると思います。事実、国家論がどこでも論議されていないこの現状を見れば一目瞭然です。

さて、私が小学校6年生の時の年間の総授業時間数は1085時間でした。それが現在では945時間に減少しています。減少したからそれぞれの教科の内容量も少なくなるのが当たりまえです。その結果基礎学力が従来に比べて下がったから、あるいは最近の調査では前よりも良くなったとかで、「ゆとり教育」の是非を論じるのは意味がないことだと思います。

「ゆとり教育」が論議され、初めてそれが導入された1977年の時代背景と現在の世の中の様子はどう変わっているのでしょうか。1977年は昭和52年です。オイルショックの後で、その当時「四当五落」という言葉が流行しました。文字どおり一日四時間の睡眠で勉強し続けなければ入学試験に受からず、反対に五時間も寝ていたのでは入試に落ちてしまうという一世を風靡した言葉でした。

さらにこの時代は受験戦争、受験地獄などという言われ、世論は過度な入学試験に子供たちを追いやることを批判しました。しかしこの頃の学校はまだ平穏で、いじめも殆どなく、非行に走る生徒も少なかった時代でした。しかしその後のバブル経済で、世の中は虚像の社会の中で謳歌し、そしてその付けが回って低経済成長の時代となり、さらにインターネット社会に突入したのです。誰もがあらゆる情報にアクセス出来るだけでなく、サイバーの社会で生きがいを見出す若者が出てくるようになってしまったのです。

これだけ外的な環境が劇的に変わると、まだ人生を生きる術をしらない生徒は、誰でも安易な方向に走り安くなるのは自然の流れです。三つ子の魂百までといわれるように、小学生や中学生のようなどちらかと言うと真っ白な時代には、人間として生きていく際に必要となるもの（例えば極端な例ですが昔から言われている「読み書きソロバン」的なものと、さらに人生の哲学的な

基礎となる「道徳」)を、誠意をもった教師に仕込まれてこそ、次に何をやらなければならないという事が心に残り、そしてある時に心の中から腹にストーンと落ちるように分かるものだと思います。またそうあるべきだと思います。

教育の基本は、教える者と教えられる者のとの間の共感の共有だと思います。何事も感じるものがなければ無味乾燥なものとなり、人間はそのことに対して何ら興味を持たないし、さらに楽な生き方を選んでしまいがちです。そのようにならない様にする教育でなければならないというのが、私が考える教育の原点です。

ですから教育の制度の論議でなく、日本の将来を担う子供をどのように育てるかという視点に立って考える必要があるのではないかと思います。子供は素直ですから、興味を持った分野に対しては、その後いろいろと考えるものです。その考える思考を止めてしまっているのが、現在の教育だと思います。

さらに言うならば、親が子供を指導する家庭内での教育がなっていないことが最も大きな原因ではないかと思います。今の親は子供中心でなく親中心で考えていることに根本的な誤りがあります。まず親としての人生があり、その後に子供の事があるように見受けられるのです。親としての責任は、子供が無事に社会に船出するところまでであるのです。

親が生きるための基本である哲学をもっと自覚し、それを自分の子供に示す事が重要なのです。自信をもって自分の子供を叱り育てる使命をもった親があまりにも少な過ぎると感じるのは私だけではないと思います。昔の子供は特に父親の背中を見て育ちました。今の子は、インターネットやゲームやテレビによって育っているように思われます。残念ながら心や暖かさや、さらに厳しさが感じられないのです。

子供にゆとりや自由を与えることは一見理想的で美しく正しいように思えますが、この背後には子供を見守りある時は厳しく叱ったりする親の義務があるのです。権利と義務は必ずセットでなければいけません。どちらか一方が欠けてしまっただけは何の意味もないのです。

また、今の時代はやたらと個性が重要だと言われていますが、まず個性の反対の位置づけにある一般標準、言い換えれば基本をやらせる必要性を特に感じています。一般標準を身に付けたあとは、本人の自覚次第でどうにも出来るのです。ここまでやってから個性を重視する「ゆとり」にチャレンジして欲しいものです。

いまの世の中、優しい事が大切であるかのようにいわれていますが、対極にある厳しさをも併せて体験させるようにすべきと思うのです。いつの世も競争は付いて回るのですから。競争には勝たなければいけないし、またある時には負ける悔しさを体験しなければならないのです。この

ように人間として、バランスのとれた経験をさせるのがもっとも重要なことだと思います。

このような背景の結果であると思いますが、進学せず、就業もせず、職業訓練も受けていないニートと呼ばれる若者が増えてきているのではないかと思います。なんと内閣府の推計では、全国で約85万人いるとみられるそうです。日本は大丈夫なのであろうかと心配してしまいます。国家を左右する教育に関して真剣に取り組むべきだと思います。

## 夏の風物詩と日本の文化

---

8月に入ると急に夏らしくなり、30度を越える日が続き、閉口してしまいます。個人的には夏という季節は嫌いです。これは、アトピー性皮膚疾患を持っていることに起因しています。

アトピー性皮膚疾患は、汗をかくことで自分の皮膚の状態がさらに悪化してしまうのです。ですからスキンケアは一年中必要ですし、特に夏はこまめに行う必要があります。そのような意味では暑さよりも寒い冬の方が好きです。しかし、冬は冬で乾燥が凄いのので厄介です。

日本には四季があり、それぞれの季節の移り変りが生活の中の習慣と一致しているので、情緒がきめ細くなるのだと思います。季節の移り変りが曖昧な地域にある国だと、日本人のような自然に対する敏感な感じ方や、また季節を生活の中に取り入れる対応の仕方が無い様に思えます。

一般的に、夏は全体的に開放的な雰囲気にも包まれているので、人の行動面にも少し羽目を外してしまうことがありそうな季節です。昔々学生の頃の出来事ですが、同級生の女子学生達と夏休みを終えて再会した時に、妙に女っぽくまた色っぽくなった女性がいました。

男同士の中での会話では、「ひと夏の恋を経験したのだ」と酒の肴にしながら女性の変貌に関して熱っぽく語ったこともありました。今でも思うことは、男に比べて女性の方が、何かするときには、より大胆になるのではないかと思います。

所詮、男はロマンは大きくとも、実際の社会生活の中では小さなものでしかないのではないかと思います。理屈に強いが、本番に弱いといった方が良いのかもしれません。その点、女性は時としてびっくりするようなことをいとも簡単に実践してしまいます。女強しといったところではないかと思います。

夏というと思い起こされるのが、セミの声、海水浴、花火、蚊取り線香、ラジオ体操、浴衣、風鈴、団扇、金魚、お祭り、カキ氷、盆踊り、スイカ、茄子、カブトムシ等いろいろなものがあります。他の季節の風物詩よりも、夏はそれだけ季節を表現する物が多いのだと思います。

夏の食べ物の中で、思い出に残っているのは、茄子です。それも焼き茄子です。今では、熱爛に焼き茄子は最高の肴ですが、初めて食べたのが中学生のころに母方の祖父母がいる田舎に一人で泊まりに行ったときに、出されたものでした。

田舎には大きな茄子があってそれを焼いて出してくれたのです。見た目はグロテスクで、どうしようかと思いましたが、折角祖母が作ってくれたものですから、無理やり口に入れて食べた記憶があります。多分祖母はその様子を見ていたのだと思いますが、その後に焼き茄子が出てくる

ことはありませんでした。ですから、いまでも焼き茄子を食べると祖母のことを思い出します。

夏の香りとしては、蚊取り線香があります。今は昔程蚊がいないような感じがしますが、昔は蚊帳を吊って寝ていましたし、蚊帳がなくなるとあの独特な香りの蚊取り線香をたいて寝た記憶があります。いまやその蚊取り線香も庭の草取りをするときにたくくらいで、懐かしい夏の香りを体験する機会も少なくなりました。

個人的には、夏の風物詩がなくなっていくような感じがしています。昔のよきものが少しずつ形を変えながら、知らない間に消滅してしまうような気がしてなりません。その意味では浴衣もそのような位置づけにあるものかもしれません。女性が着れば妙に色っぽく見えたり、また男が着ると締まって見えたりするものです。しかし、昔程この浴衣も着る機会が少なくなっているようです。

今の時代は、殆どどのものが少しずつ西洋化する傾向にあります。本来の日本の文化をさらに掘り下げて発展させようとする意気込みがなくなりつつあるとの感じを受けるのです。日本の良き文化が時の流れと共に変わりつつある現状を考えると、もっともっと日本の良き文化を守る必要があると思います。

夏もあと半月程度で終わりです。今晚あたりは、焼き茄子を着に熱燗を飲みながら、さらに蚊取り線香の香りに包まれて昔を思い出したいと思います。

## 女房と畳は新しい方が良い

---

4月になりました。学校でも企業でも新入生や新入社員のようなフレッシュな人が新たに参加することで華やかな雰囲気になります。このような周りの変化を感じながら新たな時期が始まったのだと実感できる季節になりました。

「新しい」という思いには何か不思議な思いや感情が備わっているような感じを受けます。それは可能性であったり、新たな発見であったり、ドキドキするような期待に満ち溢れたような感覚です。しかし、人間ってというのは面白いもので、いつもいつもこのような新しい刺激に近いものを受け続けていると、感覚が麻痺してくるものです。心理学上では、このような状態を飽和というようです。

ことわざに「女房と畳は新しい方が良い」というものがありますが、確かに新しい畳は気持ちいいし、男としたら女房も若いほうがなにかといいという願望はあります。しかし、現実的に考えて畳はある一定の年数が来れば替えますが、それと同じようにある程度のところまで達したら女房も新しいものに替えることは、畳のように物ではなく血の通った人間ですから不可能です。

一方で女房は同じように「亭主元気で留守が良い」と考えているし、さらに来年あたりから突然に離婚を迫られたりする「熟年離婚」の危機にさらされます。社会がある程度安定し成熟化の傾向が強くなってくると人間はどうしても新たな刺激を求めるようになるのだと思います。このように人間の欲望をある程度歯止めをかけるために、社会の仕組みの中でいろいろな制約を設定しているのだと思います。

どんなに惚れて結婚した女房でも、毎日顔を突き合わせていればいずれは飽きてくるのが普通の流れだと思います。しかし、ここでいうところの飽きるというのは必要でなくなるというのではなく、必要だけれどその存在感が感じられなくなるような状態であり、極端な言い方をすれば空気のような存在だと思います。とっても重要であるにも拘らずその存在に気づかないと言ったものです。

「女房と畳は新しい方が良い」の反対の用語として、「女房と味噌は古いほどよい」というのがあります。じっくりとこの言葉を味わってみると、重要な考え方がこの中に含まれていることに気がつきます。それは時間をかけて作り上げた円熟だと思います。

この円熟は時間をかけないと出来ないものであり、だからこそ価値があるのです。重要なことはこの円熟味がでるところまで到達するには、生活上や表面上のものだけでなくもっと人間としてまた生きるという人生面での疎通がとれている必要があると思います。

現代はあまりにも表面的すぎることに焦点があてられて論議され、もっと人間としての根幹の

部分にある生きるという点に目が行っていない感じがします。また、凡夫が尊敬する五木寛之は現代は正に「心の時代である」と言い切っているように、社会全体が無味乾燥になりつつあります。

もっともっと日本的な心の温もりのようなウエットな感覚で考え人間としての生き方をしっかりとする必要があると思います。一方で、先行きが不明な時代であるがゆえに、いまは静かな仏教ブームになっています。

百寺巡礼から始まって仏教の出版物や仏像の販売さらに、仏教の講座等が開催されるなど心を対象とした取り組みが行われています。凡夫も正にこの仏教ブームにのって奈良・京都をはじめとする寺院や仏像さらに庭を観ることを通して、仏教の広大な宇宙ともいえる考え方に深い共感を覚え少しずつですが心の豊かさを味わえるような感覚になっています。

新しいものには新しいものの良さがあると同じように、古いものにはさらに時代を生き抜いた円熟味があるのです。円熟味という一見刺激が無いような感覚をもちますが、とても大切なものがあるのです。ですから「女房と畳は新しい方が良いが、女房は古いほど円熟味がありさらに良い」といえるのではないかと思います。

女房がもっと若かったらなんて考える前に今の女房のよさに気づく必要がありますし、さらに古る女房のよさはあるのです。一方でもっと古さの良さを再発見することが重要であると思うこの頃です。

## 夜空に広がる星座とロマン

---

余裕とか夢がなくなった訳ではないのですが、最近は夜空を見上げることが殆どないことに気づきました。歳をとって情熱がなくなった証拠なのでしょう。こんな自分の状況に焦りを感じています。囚人のなかであるものは天を見上げ、ある囚人は地面を見ながら過ごした話を思い出しましたが、人間の生き方としては常に天を見上げる行動の方が、前向きで希望をもって生きられるような気がします。

高校生の時に北アルプスを縦走した際に経験した、全天いっばいに広がる星達のまたたきの光景は今でも忘れられません。手を差し出すと星達に届くようなまた、あの星達が天から落ちてくるような不思議な錯覚に陥りました。しかし、ひとつひとつの星を覗いていると何故か自分に語りかけているようにまたたいている様子は優しさと懐かしさを感じ、全宇宙と一体になったような気になります。

このような思いは、我々の人類の歴史上にいた人も同じ思いをしたと思われれます。現に、古代の人々にとって夜空の星座には神あり英雄あり、そして美しい王女や想像上の怪獣たちが作り出すロマンあふれる物語の舞台でした。これら登場する星座は今から約5000年ほど前、メソポタミアに住んでいたカルデア人によって作られたといわれています。

彼らは、目ぼしい星たちに名前をつけることを思いつき、これがいろいろな民族の言い伝えとともにギリシャに伝わり、プトレマイオスによって整理され星座の原形となったようです。星座の物語は殆どがギリシャ神話にもとづいたものが多く、星座の数はその後少しずつ増えていき、紀元前270年ごろには44個、紀元200年ごろになると48個になったようでし、さらに世界の各地で作られた星座を合わせると100個以上になったようです。

そこで国際天文連合の学会で、昔のイメージ等を出来るだけ壊さないようにして88個の星座を決定し世界共通の星座を作り上げたことから、現在の星座の数が88になり、我々が夜空を見上げる時には、皆同じイメージで星達を見ることが出来るようになったのです。

話が飛んでしましますが、宇宙から得られるのエネルギーを受けたとされる空海に関して、そのゆかりのある有名な四国巡礼の霊場が88であることも考えると、星座の88という数字は奇妙に思えます。また仏教の修行は究極的に右脳を鍛え、右脳にある人間の潜在的なエネルギーや能力を引き出すことにあると言われてしています。この右脳も宇宙のエネルギーが関係しているような気がしてなりません。

右脳に良いとされるモーツァルトの音楽ですが、一方でモーツァルトは右脳を十分に使った作曲家ともいわれています。ひょっとしてそのエネルギーが全天に散りばめられた星座の彼方から届くものだとすると、今まで以上にロマンが広がりモーツァルトや空海のような大天才だけで

なく、凡夫も皆この宇宙の久遠の流れ中のほんの小さな一つの存在となるのです。

凡夫は12月生まれなので星座はいて座になります。なんでもいて座は、上半身は人間、下半身は馬という姿で、弓矢が得意なケンタウルス族で、タイタン族の王クロノスと妖精ニフのピリュラの間生まれたケイローンだとされています。上半身が人間で下半身が馬とはちょっと情けない姿ですね。動物的な世界から行け出せない未熟人間なのでしょうか。

星座と血液型の総合的な占い（いて座でB型）では、野性的・本能的で衝動的な行動が多く、熱しやすく冷めやすいタイプで束縛が嫌いとありました。野性的な面は凡夫にはなく、また冷めやすいという表現よりあきらめやすいという表現であればあとは全て納得してしまいます。しかし12月生まれでB型の人間が全員このようなタイプかということそうではないと思います。例が悪いかも知れませんが、皇太子妃雅子さまは私と全く同じ誕生日で血液型も一緒です。だからといって先ほどのような表現で表される人ではないと思います。

話しが脱線しましたが、脱線ついでにこのいて座のケイローンは、音楽の神アポロンから音楽を、月の女神アルテミスから医術を学び賢く育ちますが、一族が英雄ヘラクレスと戦った時に毒矢がケイローンに命中し、普通であればこれで人生が終わりになるのですが、ケイローンは自分の不死身の力のために死ぬことが出来ず毒に苦しむのです。

そして不死身の力をタイタン族の英雄プロメテウスに譲ることでようやく死ぬことが出来たのです。神々の王ゼウスは、ケイローンの死を哀れみ、「いて座」として天空に上げたと言われています。ちょっと哀れな話しです。

昨年暮れ、家庭用のプラネタリウムを購入し家族で天井を見ながら北半球に広がる夜空を眺め、安らぎというか心の故郷のような懐かしさや静寂な心の調べのようなどとも不思議な体験ができました。時々流れる流れ星を見ながら時間の感覚が無くなりモーツァルトのように澄み切った音楽のように無や空の感覚になりました。

今後、心が疲れたときは家庭で天井に広がる宇宙を眺めながら心のエネルギーを充電しようと思います。改めて人間は宇宙の中で生かされている存在であると再認識させられました。皆さんも一度夜空を眺め星達のメッセージを聞いてみるゆとりをもったらいかがですか。現在の社会は余りにも理詰めによる行動が優先し、人間の心の配慮がない状況だと思います。せめて夜空を見上げる余裕が必要だと思います。

## 3月は別れの季節です

---

暖かい日が続くと思うと突然冬のような寒さに逆戻りの不思議な季節ですが、暦上では3月も下旬で正に春ですね。特に3月は卒業の季節でもあります。新たな旅立ちの人もいれば、ゆっくりと人生を考える時期を迎える人もいるなど、それぞれに異なった状況下でこの季節を迎えているのだと思います。

先日は学生時代に助手をされていた方が70歳で定年退官されるとのことで10年振りに研究室のOB会がありました。40名弱の方が参加していた中で、知った顔は同期かその前後の方しか分からない状況でしたが、同じ研究室に所属していたという事実がベースにあるので、最終講義の後のパーティでは初対面の方であっても昔からの知り合いであったかのように、楽しく話をする事が出来ました。

教授の最終講義ということで、40年ほどの研究生活の中で取り組んだ研究テーマを交えながら、その時代の思い出を語る内容でした。学生の頃は良く理解出来なかった内容が、今回の講義では研究の流れが手に取るように分かり納得しました。当時如何に勉強をしていなかったか、はっきりと分かりました。

教授が淡々と語る中で、表面上は特段の苦勞が無いように思われがちですが、細かく見るとその時々大きな壁にぶち当たったり、また空回りするようなことがあったと思われれます。教授の話の中で、研究に対する考え方が明確に示されていることを聞きながら、その取り組み姿勢に頭が下がる思いでした。

一言で言うと他の研究者が手をつけない、あるいは手間ばかりかかり面白みがない領域をこつこつと取り組み、そこから得られた事実に基づき、それを既存理論の中で整合性をとり体系化する姿勢です。

個人的にはものすごく共感する内容です。脚光を浴びている研究テーマをターゲットとするのも一つの方法ですが、教授のように地道にかつ確実にステップアップして行く姿勢が重要であると思っています。これは所属していた研究室の精神的なDNAかも知れません。そのような面からも、この研究室での経験は現在の私にとって生きる上で非常に役に立っています。

また講義の中で、教授の人間性が前面に現われていたこととして、次のようなことがありました。全く同じ研究テーマに取り組んでいる方がいた時に、その方を訪問し、自分も同様の研究を行っていることを丁寧に伝え、その後も研究テーマとして扱うことを明言するという非常にオープンな姿勢から、教授の素直な人生の生き方を学びました。

この先生の研究領域は、電波伝搬です。とても地味な研究領域ですがまだまだ体系化されてい

ない領域があるのも事実です。70歳を迎えた先生の話聞きさらに一緒に酒を飲みながら、時間が40年ほど逆方向に戻りましたが、当時の自分と今の自分の間に何の成長もないことが分かり、少し不安になりました。凡夫はなかなか成長しないものなのでしょうね。

先生がこの3月末で定年退官されますが、この私も今の会社で役職定年になります。来週に退職の手続きを済ませ、この4月からは契約社員という形で再雇用されます。このご時世では、仕事があるだけ良しとしなければなりません。

当然給与も減額となるので4月から生活スタイルを変えなければなりません。しかし簡単に生活スタイルを変えるのは難しいので、当面は外で飲む機会を減らせば小遣いの面での減額対応は可能となります。また反対に健康にとっても良いかもしれません。

先生にとっても私にとっても、今年の3月は人生の中での一つの節目となる時期となりました。さらにこの3月は多くの人の中で何らかの卒業や別れがある季節だと思います。卒業や別れがあるから新たな出発や出会いがあるのも事実です。

この春は、咲く桜と散る桜を見ながら人生を考えようかなあとも思っています。春は哀しい面もありますが嬉しいこともあるはずです。

先日、私の尊敬する恩師が94歳で亡くなりました。4月だというのに冷たい雨が降る中、通夜に参列し先生を偲びました。先生との出会いは、学生の時に電気磁気学を受講した際の教授であり、さらに電波工学研究室のゼミで電波工学を学んだ際の担当教授であったことです。

外見からは非常に優しい印象を受けますが、授業やゼミの時は非常に厳しい先生でした。先生がもっとも嫌いであったことは、一生懸命に取り組まず手を抜くような行為であり、このようなことをした学生に対しては、激怒されたことを今でも思い出します。

ただし、真面目で一生懸命に前向きに取り組む学生に対しては、出来が悪くても褒めてくれる先生でした。何を隠そうこの私は、成績は悪かったのですが、電波が好きで真面目にそして前向きに取り組んでいたのも、先生からは可愛がられた学生であったと思っています。

人間って不思議なもので、他人から可愛がってもらえている事を実感できると、何事でも一生懸命に取り組むものです。褒めたり優しくしたりすることの重要性をこの先生から学びました。

先生はお酒が弱いにも関わらず、ゼミで飲み会を設定すると必ず出席しさらに多大な寄付までいただくなど、幹事としてとても助かった思い出があります。学部を卒業し就職するか大学院へ行くか悩んだ時に、先生に相談したところ大学院で勉強するのであれば学内推薦をしてあげると

言われ喜んだことが、昨日のように思い出されます。

結局は大学院へ行かず就職したのですが、就職の時も学校推薦で内定した会社を最終的に断り、先生が大学に来る前に居た会社に入社しました。当時世の中では、会社が指定する大学の学生が優先的に入社出来る指定校制度がありました。

一流の大学を出たものは苦勞をせず一流の企業に入社できるシステムが公に存在していました。どんなに優秀でやる気がある者でも、この指定校になっていない大学の学生は一般公募の枠が設定されていればそれを受けるしか入社する手段はないのです。

2流の私立大学にいた私は、この指定校制には泣かされましたが、当時はそのような制度が当たり前で、誰も疑問に思いませんでした。

先生の出身会社を一般公募枠で受験し、1次試験をパスし2次試験に進む際に人物推薦書の提出が必要となりましたが、既に学校推薦で内定が決まっていた会社があったので、学校から新たな人物推薦書をもらう事が出来ない状況でした。

困った挙句の果てに先生に頼みに行きましたが、当時先生は就職担当でしたので学校推薦で入った会社を断ることはルール違反になるので駄目だろうと思っていました。しかし先生は暫く考えた後に、先生個人による非公式な人物推薦書を書いて渡してくれました。

この先生の非公式な人物推薦書を携えて2次試験に臨みましたが、面接官の中に先生を知っている方が多くいた関係で何の問題もなくスムーズに終わりました。そして、この会社から内定通知をもらった際に、先生に報告に行った時は満面の笑みで非常に喜んでくれました。

今の会社で採用の仕事にも携わっていますが、学校には拘らず人物本位で採用し少しでも公平性を保つようにしています。このような考えの背景には、自分が経験した指定校制に対する疑問があったのは事実です。多くのチャンスを与えることが今後とも企業としての責務だと思っています。

社会人になった後に先生にお世話になったのは、結婚する際に仲人をお願いしたことです。当時の結婚は、仲人を立てて執り行うのが通例でした。会社の上司をお願いすると後々までいろいろな関係で大変になりそうだったので、迷わず恩師をお願いした次第です。先生の家へ愚妻とともに仲人のお願いに訪問した際には、いつものようににこにこしながら一つ返事で受けていただいた日の事を思い出します。

その後は、数年に一度開催されるOB会でお会いしたり、最近では年賀状を通じての挨拶だけ

になってしまいました。年賀状にはいつも先生のコメントが几帳面な細かい文字で書かれているのを読むのが楽しみでしたが、これからは先生のコメントはありません。少し寂しい気持ちです。

先週の日曜日に、秩父34所観音霊場巡りを終わりました。最後の34番札所でこれまでの先生への感謝の気持ちを持ちながら、今後は自分が先生から学んだ大切なものを後輩に教えなければならぬと新たな決意でこれから取り組んで行くことを誓うとともに、先生のご冥福を祈りました。

今こうして自分があるのは、先生のお陰だと思っています。先生と出会う事が無ければ、今の自分の人生はあり得ないと思っています。先生本当にありがとうございました。 合掌

## 人を育てることの難しさと人生教育の重要性

---

どこの企業でも新入社員の配属が行われ職場が明るく、またフレッシュな雰囲気になる時期になりました。企業は人なりと言われるように、企業の実力はその企業で働く人の力に大きく左右されます。今回は人を育てるに際しての思いや指導するに当たっての考え方、さらに範囲を広げて人生教育の重要性に関して自分なりに整理したいと思います。

何事も初めて取り組む事には、誰でも不安が伴います。果たして上手く仕事を覚えることが出来るだろうかとか、一人で最後まで遂行できるだろうかとか、兎角心配事が付きまといまいます。個人的なことで恐縮ですが、初めて仕事に就いたときに言われたことは、先輩の仕事を盗んで覚えるでした。

その頃は意外とスパルタ的な仕事の伝授方法で行われていた時代で、今日のように手取り足取りのように丁寧に教えてもらった記憶はありません。常に先輩や周りの人の仕事を観察しながら、自分なりに消化し進めるのが普通でした。

このような遣り方に慣れてしまったので、この歳になっても自己流で仕事をしてしまいます。しかし自己流の良さは、上手く行かなかったときに改めて考え直し、何故に上手く行かなかったのかを自分なりに分析したり、反省したりする過程の中で、原因が分かったときの嬉しさは、体験した人しか分からない貴重な経験だと思います。

昔は今日のようなスピードを求められていない時代でしたので、少し遠回りしても最後で踏ん張れば何とか追いつくことが出来たので、今にして思えば良き時代でした。いまやインターネットの時代で情報があらゆる場所から入手できる大変な時代になったので、毎日緊張感の連続でストレスが溜まり、体調を崩してしまう人も出てくるまでになりました。

このような時代で、人をどのように育てたらよいかの正解を見出すのは非常に難しいと思われまます。教える側も日々必死で対応している中で、新人をどのように指導していくかが大な課題となります。

単純な表現で言い表せば、最終的なポイントは個人のやる気だけだと思います。今の若者には、情熱を持って前に進むタイプ人間が少なくなった気がしています。どの若者も外見からは幸せそうに見えますが、残念ながら人生を生き抜くという気力が足りないような雰囲気を感じます。

自ら飛び込んで仕事をするのではなく、周りから与えられたことを無難にこなすタイプが多いと思います。自らの夢を熱っぽく語る若者が少なくなったのは、それだけ物質面が充足されており、生きるということに対しての危機感が弱まっているのだと思います。

また真面目に取り組むけれど、意外と淡白でさらっとした仕事内容で終わってしまう例が目につきます。もっと良くしようというような前向きな気持ちが欠けています。先手をとって進むタイプが少なく、全てことが起きてから取り組むリアクティブな対応も良く見かけます。

これは明らかに生きることに対する生き方の自己確立が出来ていない証拠であり、このままの状態が続くと、これから数十年後の日本がどのようになってしまうのか心配になってしまいます。

このような状況の中で個人的に出来ることは、一人でも多くの若者が情熱をもった取り組みで仕事や人生にぶつかって行けるような人に育てることです。そのためには、相手に分かりやすい言葉や事例で説明し、納得してもらうことが最優先だと考えています。

分かり易い説明を行うには説明する側が本当に理解していないと出来ません。したがって教える方もまた教えられる方も、真剣勝負で対応する必要があるのです。このような方法で仕事に関してはどうにか解決策が立てられたとしても、最後に残る大きな問題は、人生の生き方そのものです。

この問題だけは、最後は自分自身で取り組まなければならない分野です。これは生きること自体の哲学を自ら見出すことにつながります。今の若者に最も欠けているのが、この生きるための哲学だと思います。

高度経済成長の中で物質面に恵まれた環境に置かれていた人間に対して、心の奥深くに眠る人間の本質をしっかりと受け止め、如何にして生き抜くかといったことを気付かせるチャンスをも今の教育で行ってこなかったつけが、ここに来て表面化してきたのだと思われます。

現在、教育の問題が国会で論議されていますが、道徳教育は必要ないと単純に判断するのではなく、もっと教育現場にいる若者の実態をしっかりと把握し、本当に必要なものは何なのかを実体験した上で判断して欲しいと思います。

人生を確実に生きる上で道徳教育は絶対に必要だと個人的に確信していますし、さらに道徳教育から人生哲学が始まるのだとも思っています。

## 真珠のイヤリング

---

「真珠」という言葉から連想される事は、私が婚約時代に妻にプレゼントした「真珠のイヤリング」です。それは今から35年も昔のこととなってしまいました。当時はまだ私が入社して3年目の時期だったので、自分の給料でどうにか私一人が生活できるような状態でした。ですから、婚約者に「真珠」のような高価なものをプレゼントするには、かなりの決断を要しました。

丁度その頃、会社の仕事で発展途上国の人々に、4週間程度の技術指導をする仕事を手伝ったことがありました。人生の中で初めて接する外国人との意識も働いて、片言の英語を駆使しながら汗だくで、色々な国の方とコミュニケーションを図った思い出は、今でも鮮明かつ強烈に残っています。

質問されて即答出来なかった事項については、その日の内に調べて資料にまとめ、次の日に説明するという日々が続きました。私にとっては、かなりハードな仕事であったと記憶しています。この仕事の御蔭で、後日の英語検定2級の試験はすんなりとパスすることが出来ました。

しかし当時はまだ現在のように国際化が叫ばれていた時ではなかったので、英語を使って何かをするというのは、かなり特別な事だったとの記憶があります。このような状況にあったので、後日この仕事を手伝った事に対する特別手当の様な名目で、当時3万円程度の報酬をいただきました。

6月生まれの子が、以前から真珠を欲しがっていたのを知っていた私は、いつか真珠を買ってあげたいと思っていました。そこで、この念願を叶えるために、私がかかなり苦勞して得たこの報酬により購入したのが、今も二人の思い出を凝縮している「真珠のイヤリング」なのです。

当時の3万円では、妻が気に入るような素敵な真珠のイヤリングは購入出来なかったのですが、その時妻は3万円で購入できるイヤリングを選んでくれました。当時の私が、豪華なものを買ってあげられる余裕のない事を知っていた妻の優しさだったと、今でも当時を思い起こす度に、妻への感謝と良い伴侶を得て幸せだと、思っております。

結婚して15年、いままでに色々なことがありました。血のつながりが無く、また生活習慣や価値感の異なる者どうしが、一つの屋根の下で暮らすのですから、喧嘩をし口を聞かない事が何度あっても当然だと思えます。しかし良くしたもので、喧嘩をすればする程、後で相手をより一層理解することが出来るようになるものです。夫婦という絆と最小社会構成単位の不思議な力の素晴らしさに、いつも感動しています。

今では、子供を留守番させ、映画鑑賞や美術館めぐり、食事等、ほんの少しですが余裕とゆとりを持った生活が出来るようになりま

した。現在の社会生活レベルは、15年前の当時に比べると格段の差があります。街には物が溢れ、どのようなものでも差ほど苦労せずに購入できるようになった今、「真珠のイヤリング」を購入した当時の様子を子供達に話した時、何といわれるのだろうかと思います。「お父さんも意外とやるんだネ。」と冷やかされるのが落ちだろうと思います。

息子達が、将来私と同じように婚約者に「真珠のイヤリング」を買ってあげるのを想像する時、今よりももっと良い社会になっていることと、いつでも楽しさと優しさのある家庭生活が送れるようになることを、祈るばかりです。

6月の誕生石は「真珠」です。清楚、大和撫子、淑やかさ、奥ゆかしさのイメージを持った真珠は、正にジュンブライドの花嫁さんにピッタリです。

15年前は新婚だった私達二人も、既に40歳を越え、俗に言う叔父さんと叔母さんになってしまいましたが、機会ある度に妻がする「真珠のイヤリング」を見るたびに、私は当時の純粹だった気持ちと、真珠が持つ清楚、大和撫子、淑やかさ、奥ゆかしさのイメージとが重なり合わさって、心に浮かび上がってきます。

いつまでもこの時の気持ちを忘れずに、妻とそして息子達と幸せな生活が続くことを祈るばかりです。私にとって「真珠」、特に「真珠のイヤリング」は、青春そのものを象徴しているものとして、今でも心の中にキラリと光る位置付けにあります。

## 鞆の中の手作り弁当

---

私に通勤用の鞆の中には、常にB5ノートPCが入っており、何かあった場合でもインターネットが繋がる環境であればその場でほとんどの仕事がこなせるので重宝している。

しかしこれらを普通の鞆に入れて持ち歩いているが、普通の鞆にPCとそれに付随する電源ケーブルやインターネット接続機器、さらに最低限の書類と筆記用具、新聞、読みかけの文庫本、常用の薬、さらにモーツァルトだけが入ったI podで、ほぼばんぱんの状態である。

このような窮屈な状況の中で、今年から愚妻が作った弁当を入れることになった。愚妻が弁当を作るきっかけとなったのは、年末年始に仕事で出勤したことに端を発している。年末年始は勤務先のビルは全ての店舗が閉まっているので、どうしても昼食を用意して行かなければならなかった。

その際に愚妻におにぎりを3つ頼んだのがきっかけとなって、今年から手作りの弁当を作ってくれるようになった。昔々子供が学校に行っている時には弁当持参が原則だったので子供用のついでに作ってくれていたが、さすがに子供が卒業した後は一つだけ作るのは大変なようで、自然と弁当がなくなり外食をするようになった。

しかし、時々愚妻に対して外食は脂っこいとか、味が濃いので胃がもたれたり、さらに食べるメニューが限定されてしまうようなことを話していたが、当時は手作り弁当の復活はなかった。それがどのような気持ちの変化があったのか知らないが、今年から弁当を作ってくれるようになった。

正直言って手作り弁当は、どのような高い外食よりも美味しいと感じる。結婚以来数十年間食べなれた味であるからだと思うが、本当に昼食を美味しく食べられる幸せを感じている。

歳をとって感じることは、食べるものに対して体から自然に発するものがあり、結果的に食べるものが限定されてくるような気がしている。脂っこいものよりもよりさっぱりとしたものとか、味も自然と薄味の嗜好になるとともに、食べる量も数十パーセント減少している。

昔から言われている腹八分目というのが今の自分に合っているように思える。さらに歳を重ねるうちに量は七分目、六分目と少なくなり、最後は仙人のように霞を食べて生きるようになるのではないかと思う。

食べる量は少なくなっているが、反対に最近日本酒の量が多くなってきているのが気にかかる。毎日のように飲みの誘いがあり、もともと断ることが出来ない性分であることと酒が好きなこともあって、こここのところ飲む量が増えてきているので、注意が必要だと思っているし、胃の調

子も良くない。

また歳のせいだと思うが、さすがに昔のように午前様になるようなことはほとんどなくなったが、一つだけ大変なのは、帰った後に弁当箱を洗うことだ。弁当を作ってもらっている事に対する最低限の感謝の意味でも洗うように心がけているが、一度だけうっかり洗うのを忘れて鞆の中に入れたままになっていたことがあった。

そんなときは当然のことであるが翌朝、愚妻はすこぶる機嫌が悪い。丁重にお詫びし何とか弁当を作ってもらって出勤したことがあった。なんだかんだで弁当を作ってもらうようになって、弁当だけでなくいろいろなことに対して感謝する気持ちが強くなったことは事実である。仏教でも感謝する気持ちは重要だと説いているが、何事も経験して初めてそのことの大切さが分かるのだと思う。

仕事に出かけるときに愚妻が作ってくれた弁当を窮屈な鞆の中に入れるのはちょっと難しいが、工夫しながら入れ、ぱんぱんとなった鞆を持ち出かける小さな幸せは大切にしなければならぬと素直に思っているこの頃です。今日も朝は重い鞆が帰りには少し軽くなった鞆をもちながらほろ酔い気分で帰宅する平凡な日々が続いています。 合掌

## 香と香道と性フェロモン

---

以前から気になっていたのですが、最近の世の中ではいたるところでいろいろな香が感じられるようになりました。世の中が豊かになった証なのでしょう。海外では昔からいたるところで香を感じる機会が多くありましたが、日本でも同じように香が氾濫するようになるとは、思っても見なかったことです。

もともと日本人は、体臭が少ない民族であると言われていています。これは食生活や気候、さらに生活文化等にも関係していると思われませんが、もともと体臭がない人がほとんどであるために、他人に気を使う日本人の中では反対に「体臭」というものが余計に気になるものとなるのでしよう。

私のような年代になると、お洒落とは縁が遠くなるので香は贅沢な部類に入ります。ですから、すれ違い様に感じる上品な女性の香には、気分がリッチになってしまいます。また個人的な香の好みがによるものだと思いますが、全ての香に対して良い印象や感覚を受けるとは限りません。派手な香というのか上品でないというのか強烈な香はいただけません。どちらかと言うと香がするかしないかの程度で、ほのかな香が日本的でありお洒落だと思えます。

人間には、視覚、聴覚、味覚、触覚、嗅覚の5つの感覚が備わっています。中でも、においを感じる嗅覚は、もっとも原始的な感覚であると言われていています。さらに、脳生理学に見た場合は、嗅覚以外の感覚は脳の視床という部分を通して大脳皮質へ伝達されるようですが、嗅覚だけは脳辺縁系に直接伝えられることから、最も本能に根ざしている感覚だと見なされています。

ですから太古の昔から宗教的な場面では、香が占める役割は大きかったのも頷けます。そのような面を考えると、香の世界は、視覚中心の近代文明からいにしえの世界に戻る際に最も有効な手段なのかも知れません。

動物の進化の過程でもこの嗅覚は大きな役割を果たしています。動物界は弱肉強食の世界であることから、敵と自分達の仲間や異性の存在を敏速に感知することはきわめて重要なことであり、これらを見極める方法として嗅覚を利用して仲間か、敵かあるいは自分が優位に立てる餌かを識別している事が多いそうです。

これらの動物には敏感な嗅覚の持主が多く、犬は勿論のこと、象、兎、蝶、なども超能力的な嗅覚を持ち合わせているようです。特に鮭などは、大海から自分が生まれた川に戻ってくるのことができるのも、この嗅覚の能力が優れているから可能なことのようにです。

一方で香の効用は、何と言っても良い香をかいで、良い気持ちになるというものです。この心地よい香について、ヨーロッパでは香水の文化、日本ではお香の文化となりました。そのお香の

伝来は、日本書紀に記述されているところによると推古3年(595年)に「沈香が淡路島に漂着した」というのが最初で、これが朝廷に運ばれ正倉院の宝物として伝承の蘭奢待となったようです。

いずれにしても、日本の香は仏教の伝来とともに始まったといえます。当初は宗教儀式に用いられた香でしたが、その後平安時代になると、貴族達が生活を楽しむために香が愛用されるようになり、さらにこれが香道と呼ばれるような芸の道にもなったのです。

香道とは、文字どおり香りを楽しむことを基本とした芸道で、茶道や華道と同じく、その中に精神的な落ち着きを求めるものであり、その歴史は茶道や華道と同じく室町時代にまで遡るものです。さらにこの香道は、この香を東南アジアから運ばれてきた香木をその産出地名や出国港等を基準にして六つに分類し、さらにその香りを「酸っぱい、塩辛い、甘い、苦い、辛い」の五つに分けて「六国五味」という体系を策定し「香道」という日本独特の文化を確立するまでになったのです。香の世界もまた奥が深いのですね。

また数年前から急に話題となり始めた「アロマセラピー」は、植物から抽出した油成分を温めて香をたたせ、その香気を吸入することで、さまざまな効果を得ることを目的としている西洋の香の道とでもいうものですが、これに対して日本の香道は、この香を芸術にまで昇華させ、精神性を追求するもので他に例を見ないものと言えます。

生活の中での嗅覚は、ある限られた化学物質に反応を表す機能があり、嗅覚を刺激する化合物を「におい」と定義しているようですが、現在知られているこれらの化合物は約200万種くらいあり、さらに臭いを感じさせる化合物はこれらの中で40万種あるといわれています。しかし日常生活で用いられるものは800種から1000種くらいだそうです。

最近「性フェロモン」に関していろいろ話題となっていますが、この「性フェロモン」はもともと動物が体から出して、パートナーを惹きつけ、発情させるための物質です。これに対して、従来より人間にはフェロモンを感じる器官がなくさらに効果がないとされてきましたが、最近の研究ではこの器官の存在が確認され、数々の実験でその効果が報告されているようです。

個人的にこの「性フェロモン」は邪道だと思っています。なぜならば、動物が性フェロモンを出すのは、人間のように言葉というコミュニケーション手段をもたず、さらに生殖に適した時期が限られているために、このタイミングの逃さずに異性を惹きつける必要があるからです。

しかし、我々人間には発情期というものがなく、いや場合によっては一年中発情期なのかも知れませんが、他の動物のように性フェロモンを出さなければパートナーが見つからないようなものではないと思うのです。見つかる見つからないその人間の人間性だと思います。そのような意味

で言えば、人間性の表現が難しいですがある意味で「心の香」だと思います。

現在では、香は個人に浸透し、多くの方が何らかの香を持っているようです。香を付けることには否定しませんが、付けるのであればほのかなものにして欲しいし、どちらかと言えば化学的な香よりも心の香を付けていただきたいと思います。

## 幸せの飽和と意識

---

一昨年のリーマン・ショック以来、世界の景気は後退し、日本でもデフレスパイラル現象が生じ、多くの業界で先行きが不透明になって来ています。このような状況の中で、我々が唯一対応できることは、節約を含めた消費を減らす行動です。

1980年代後半から始まったバブル経済の時期は、誰もが右肩上がりの状況が続く訳がないと思いながらも、その時の大きな流れの中で禁断の果実を味わっていたのです。何事も金で解決がつくことから、自らの立ち位置を誤解し、あたかもその状況が相応しいものだと思いながら、物の購入に走った時期でした。

バブル期は自分の欲しい物が何でも手に入れられたので、戦後の物が無い時期から見ると天国のような錯覚を覚えたに違いありません。そして物を得ることで、自分は幸せだと感じる日本人が殆どでした。

物が無かったと言うひもじい経験をしている戦前派は、物の価値が分かるのですが、これらの経験がない戦後派はこの本質の点で見極めが弱いのです。また、戦前生まれの人と戦後生まれの人の価値観が、ここで大きく変わったのではないかと思います。

このようなバブル時代に育った若者が、今は親となり子供を面倒見るようになって、今の世の中は激変しました。何が変わったかという、自分の子供たちにいとも簡単に物を与え、さらに常に最善の道を選ぶようにルールを敷き、子供に選択権を与えないような育て方をしてきたのです。

失敗を経験させない生き方が最も危険です。安全な生き方が最も危険である事に何故気づかないのか残念で仕方ありません。自然界の動物の育て方に見習う必要があります。

これらの背景には、常に今よりも幸せのレベルを上げることが必須だと考えているのだと思います。というのも、今の親はバブルの時期に最もその恩恵を受けた世代であるから、自分自身がまず現状の幸せレベルを上げたいとの想いが強いのだと思います。

常に成長することが重要だと今の世の中で言われていますが、その意味をもっと真剣に考える必要があると思います。極端な言い方をすれば、今の親はまず自分があって、その次に子供があるのです。昔の親は、自分よりも子供の事を考え行動していました。今の親は、行動の順番を変える必要があるのです。

一方で今の若者を批判する事がありますが、最終的な問題は学校教育にあるとの残念な結論がよく引き出されています。個人的には、教育は学校ではなく家庭での教育が最も重要と考えます

。もっと言えれば親が子供をきちんと教育していないことが、今の日本を弱くしているのだと思っています。言葉を変えて言えば今の親は、こどもを教育する基本部分を持っていないので、子供を指導することが出来ないとも言えます。

確かに便利なものを手に入れることは大切かも知れませんが、また美味しい物を食べるのも時には必要だと思いますが、最も重要なことは人間としてどのように生きるのか、何を価値観として持って生きるのかという基本的なところが欠けていることが、不幸なことだと思っています。

成長が極端に遅くなった時代の生き方として、物に執着するのではなく人間としての生き方に執着するような方向に転換すべきだと思います。60歳を間近にしている凡夫にとっては、日本全体が貧しかった時期を少しだけ経験しているので、物の価値もある程度分かりますし、それ以上に物が全てではないとの考えが染みついています。

物が中心の幸せは、飽和状態が必ず来ますが、心の幸せは飽和しません。毎日が幸せを感じる生き方は十分に可能であることを今の親は再認識し、この考えに従って自分の子供を再教育して欲しいと思います。

このような時代であるからこそ、もっと人間としての幸せが何かを真剣に考えてほしいと思うのです。特に今の親の意識を変えることが、日本を変える大きな要因になると考えています。政権交代以前の大きな日本の問題であると認識しています。

個人的にはこの数カ月間、仕事上でなにかと忙しい日々が続き自分の時間が持てなかったのが残念でした。読みたい本は机の脇に積み上げられたままであり、また、個人的に興味を持っている分野の勉強も手を付けることが出来なかったのも、はっきり言って心の安定が得られない時期でもありました。

時々、全てを忘れて自分の好きな時間を過ごしたいと思いますが、こころのどこかであの案件をそのままにして置くと後で困る事態が発生すると思ってしまうことから、好きなことをしているのに集中出来なくなりストレスが溜まってきます。

やらなければやらないで済むのかも知れませんが、貧乏性とでも言うのでしょうか、少しでも良くなるのであれば休みを削って対応してしまう自分がいます。決して褒められたいと思うのではなく、やっていないことに対する申し訳なさというか、自分が怠けているような感じを自然にもってしまう自分がいます。

この点は特に日本人の最も悪いところだと思いますが、毎日が日曜日の状態になるまで、続くのではないかと思います。西洋人に比べ働き過ぎの悲しい一面が出てしまうのだと思います。

正直言って1年のうちで本当に休みを自由に使ったという記憶はほんの僅かです。このような状態は、社会人になって部下を持つようになってから続いていますので、もうかれこれ30年以上の生活様式です。本来のあるべき姿でないことは良く分かっていますが、つつい現実のことを考えてしまい、結果的にはいつも仕事をしている感じです。

このような光景を結婚以来見続けている我家の愚妻は何も言いません。多分このようなことが世の中で普通の事であり、誰もがやっていると思っています。さらに、最近のこのような不況の時代に至っては、反対に会社を首にならないようにしっかりと仕事をして！と、叱咤激励されてしまう始末です。

人間は何事に対しても徹底的に行うことが重要だと時々思います。仕事をしないなら徹底的に仕事をしない、仕事をするのなら徹底的に行うことです。この辺のスイッチの入れ方を間違えると何事も上手く動かないことになります。

好きなことを優先に行い、仕事はそこそこに対応するのと、徹底的に仕事をしながら僅かの時間を利用して自分の好きなことを行うのとどちらがよいのか迷うことがあります。

しかし、あと数年で完全に退職する時期が迫っていることを考えると、その時点で毎日が日曜日になるから、好きなことはその時まで少し伸ばそうと考えてします貧乏性な私です。

肝っ玉が大きくて自分勝手に振舞うようなことができる性格であったら、このような悩みに陥ることはないと思いますが、今の自分が全てであるので、これが自分らしさだとも思っています。結局、今の自分にしかできないのが自分の人生だと割り切って生きることが、この齢になると重要だと思えるようになりました。

## 厳しさと優しさについて

---

厳しさと優しさと題して少し今の想いを述べたいと思います。自分でも不思議に思うのですが、興味を持つ分野は今回の厳しさと優しさように、それぞれ相対極するものに関してなのです。

いや世の中のものは、もともと全てが相対極するものから出来ているのです。それらは男と女、愛と憎しみ、天才と大馬鹿、物事の明暗や表と裏、宇宙と素粒子、未来と過去等、例を挙げればきりがありません。

このような中で最近、厳しさと優しさに関して考えてしまいます。私が若い頃に人生の生き方として学んだのは、己に厳しく人に優しくすることが重要だと言われて育って来ました。ですから私の人生は、出来る限り他人には優しく接するようにしています。しかし、時代の流れとともに、この考え方を少し変えないといけないのではないかと、最近思うようになりました。

我々の時代は、皆個人がそれなりに一生懸命頑張ってきたので、それぞれの節目で辛い経験やそれとは対称的にとても嬉しい出来事に接し感動したことなどがあり、心のバランスとでもいうのでしょうか、上手く調整が取れていたように思われます。

しかし今の世の中を見渡すと、人として育つべき過程で、基本とでも言うべき重要なものが抜け落ちているような気がしてなりません。物質的な面で豊かな世の中が進めば進むほど、人の心の世界が荒廃し、見た目は豊かで美しく見えますが心のなかは空洞化し、人の命の重さや愛の深さ、さらに生きるための哲学を持ち合わせない若者が、ここ最近多く育っているように思えます。

これは日本だけでなく世界的な兆候ではないかと思えます。個人的に心配するのは、物の豊かさと心の豊かさのバランスの確保です。どちらか一方だけ良くては駄目なのです。レベルの差はあれ、物と心のバランスが適切に保たれていないと意味がないのです。

昔の時代を経験した方達への対応は、常に優しく接すれば問題ないのですが、今の若者にもこれと同じような対応を行うと、最終的に誤った方向に行ってしまうのです。何故ならば、今の若い世代の人たちは、本当の意味での苦しさや悩みを味わったことがない世代なのです。厳しい環境の中で歯をくいしばって頑張るような若者は、今となっては稀な存在になってしまったのです。

このような世代に対して昔と同じように優しく対応しては、さらに悪い方向へそれも加速度を増して進んでしまいます。ですから若い世代に嫌われても仕方がないと諦めて、厳しく接し、ものごとの基本を学んで貰うことが重要だと思います。

しかし一方で、今更この歳になって若い世代に嫌われてまで厳しく指導することが自分の為、さらに若者の為になるのだろうかと自問自答したりします。自分の人生を大切にすることも一方で重要なのだ、との内からの声も聞えて来ます。

また、世の中の仕組みは必ず相対極するものがあるのが常です。ですから自分があり、そして他人がいるのです。確かに自分自身、五十路をかなり過ぎてしまっていることを考えると、他人へのお節介よりもまず残りの自分の人生をしっかりと考え、そして進むことも人としての正しい道です。

このような状況の中でいろいろ考えた末に出した結論が、今後若者に対しては厳しく接し、今のうちに大切な人生の生き方や仕事の進め方、他人への思いやり等を覚えてもらうことが重要であるとの思いに至ったのです。ちょっとお節介的な行動になってしまうかも知れません。

今後は厳しさを先ず出して、その後に優しさを出す方法に変えようと思った次第です。

## 分かり合える素晴らしさに

---

最近感じることは、人と分かり合えることの素晴らしさです。この事に関しては、誰でも納得していただけるものだと思います。中には理屈っぽい方がいて、どんな状況においても人間は本当の意味で分かり合える事はないと言われる人が居ることも確かですが、そのような事を考えていたら人間とても寂しい一生を終わらなければなりません。

極端な言い方をすれば、お互いにああ勘違いであってもその一瞬において分かり合えることが出来たら素晴らしいことだと思います。またこのような状況になったとしても、自分の馬鹿さ加減を素直に笑い、次に進むことも重要なことだと思うのです。

相反するものが引き合うのは電気でいうと「+」と「-」が引き合うことに他なりません。しかし、人間のように心と心を引付け合うのは、お互いが同じ要素や志を持ち合わせないと出来ないことだと思います。このような状況を「電気」に対して「心気」とでも呼ぶのでしょうか。

最近歳を取ったこともあるのだと思いますが、この分かり合える大切さを実感しています。一見違った考え方で行動している人だと思っていたのが、いろいろ話してみても全く同じ考え方であったとか、反対に凄く自分と考え方が近く分かり合っていたと思っていたら、お互いの勘違いで方向がずれていたことに気づくことがあります。

だからといってその人間が駄目だといっているのではなく、人を理解する上で相手に対して自分の素直な考えを直球にして投げていい人と、そうでなく変化球を投げて相手の反応をみる必要があるかどうかを事前に考える必要があると言っているのです。

お互いが違っていたと気づくことは人間が生きていく上でどうしようもないことなので、分かった時点でいままでの方向を素直に修正する必要があると思います。しかし、その時に考えなければならないことは、自分の考え方はその時点でしっかりとしていたのか、少し曖昧な点が残ったままでも互いに分かり合っていたような錯覚で進んできていなかったかを、今一度考えてみる必要があると思います。

人間は変化するものであるし、反対に変化しないものも持っています。この微妙な動きの中で、それぞれ人に与える影響というか「気」の流れのようなものが相互に作用しているものだと思います。お互いの意見を述べても相手を理解する気持やあるいは尊敬する気持が少しでもないと人間の心は近づかないと思うのです。

このような状況の中で一番重要な事は、いつも言っていますが素直になることだと思います。この点、動物は素直です。我家の愛犬ミルクは正直に自分をさらけ出します。ですからこちらが本心で素直に応えると犬との間で通じ合えるものを感じることが出来ます。

犬との間で出来ることが、どうして人間との間で出来ないのかは、全て素直になって自分をさらけ出しているかにかかっているのだと思います。変に気取って自分と異なる自分を出そうとすると、本当の意味で分かり合えることは出来ないと思います。

男と女の間、または同性同士、さらに動物との間など、お互いに分かり合える喜びを通じてさらに素晴らしい関係に発展させ、幸せな時間と充実した人生を過ごしたいものだと思うこの頃です。

## 伝えることと相手への期待の関係

---

人は一人では生きていけないので、どうしても他人との関係維持を図らなければなりません。その際には自分が思っていることをきちんと伝えなければなりません。意外とこの思っていることを十分に相手に伝えることが出来ない場面に直面することが多くあります。

日常生活において、言葉は共通の日本語で話しているにも係わらず真意が伝わらないという現象が身近によく起きています。それも電話でなくフェイストゥフェイスで相手と直接会話しているときにも発生しますから困ったものです。

この原因としては、話している言葉に託した意味が相手に理解されないことが挙げられると思いますが、この言葉に託された意味を完全に一致させることは、非常に難しいのではないかと思います。

表面上は理解したと相互に思っている、ある時にその意味合いが異なることが原因で双方の関係が崩れてしまうことがあります。このようなことをなくすにはどうしたらよいのかと考えますが、いつも結論が出ないまま時間が過ぎて行きます。

同じ環境で育った人間であれば、かなりの範囲で意味の同一化が出来るかも知れませんが、まったく異なる環境で生きている人との間での意思の疎通は、永遠の課題かも知れません。

しかし、どうしても相手に伝えたい事がある場合は、丁寧にまた分かり易い言葉で例を挙げながら対応する必要があります。この分かり易い言葉でしかも例を挙げながら伝える行為には、それまでの人生の経験が大きな役割を果たします。

過去のいろいろな経験の中からその場に合った事例を紐解き、それらを分かり易いものに変換して行う必要があります。このようなことが出来ない人は、最悪の場合は誤解された内容で相手に伝わることもあります。

確実に自分の思っている思いを伝えるためには、日頃から相手とのコミュニケーションを良くしながら伝える環境を整える必要があると思います。また自分の方に勝手な思い込みがあって、期待された反応が返って来なかった場合には失望感を味わいますが、それは自分自身の中に勝手な思い込みがあるからです。

人間はどうしても自分を分かって欲しいという欲のようなものを持っています。この想いが強くなればなるほど、期待道理に事が運ばなかった時に大きなショックを受けます。これに対する結論は、相手に期待しない心を持つことではないかと最近になって思うようになりました。

相手に期待しない心をもって対応すると、意外と人生を楽しく生きることができると思いますが、なかなかそのような心境になるのが難しいのが一般的な人間の行動だと思います。

未熟な自分を少しでも良くするために仏教を自分流に学んでいますが、今回の問題を少しでも解決するには、仏教で説かれている「布施」の心をもって対応することが重要だと思います。

またこのような考え方になるためには「空」の概念を理解する必要があります。そして仏教を学びそして得るものは、浄化された自分でないかと思えます。やはり自分を高める事が、最終的な目的だと思うこの頃です。

## 最近思うよろずの事

---

一般的に歳をとると日々の時間が早く感じられると言われていますが、いやいやどうして時間が長く感じることもあるこの頃です。また世の中の仕組みとそれに対する対処方法が自分なりに分かってくると、どうしてこうも上手く行かないのだろうと思うことや、人間ってどうして素直になれないのかとか、「後悔先に立たず」とよくいうけれどもっと前に気がついていれば今よりもっと有意義に生きられたのにとか、どちらかというとも愚痴に近い感覚で生きているように思えます。

このような生き方は良い生き方でなく反省すべき点が数多くあります。反面、自分の実力を分からずにやりたい事があまりにも多すぎるのも問題なのかも知れません。人間張って生きるのは良くない事と分かっているのですが、人生の終わりがいつ来るのか分からない状況の中で、限られた人生を最大限有意義に過ごすことは凡人ではなかなか出来ないことです。

つつい欲張った考え方で対処してしまうことから結局は無駄が多くなり、後で後悔することになるのだと思います。しかし、これもやりたいあれもやりたいと思うのは万人の思うことだと思います。このような欲望がなくなった時点が人生の終わりではないかとも思います。

現に、今携わっている仕事に関しては、従前に比べて質の高い内容に早く変えたいし、個人的なものに関してはそろそろ過去の文章をまとめて形あるものにしたいし、興味のある分野であるモーツァルトや仏教・仏像・庭に関してはしっかりと勉強してその本質を見極めたいし、さらに日本の良さを発見する旅をしたいし、この歳になってやりたいことばかりが頭に浮かびます。しかし、結局はそれらが実践できずに終わってしまい、残るのは不満や後悔や情けなさだけになってしまいそうです。

だいぶ前に五十路を過ぎたら自分の人生を大切にす意味からも、人生を半分降りるような生き方をしようと一度は決めたのですが、目の前にある仕事を見てしまうとつつい手が出てしまい、昔と同じように土曜も日曜も関係なく自分の時間まで仕事に費やしてしまうことが多くなって来ています。

ほったらかしにしておけば誰かが遣ってくれるとの楽観的な考え方が持てると良いのですが、この仕事の内容からすると自分が動かないといつまでたっても今のままで前進しない様子が見えてしまうので、自分の時間を犠牲にして手を付けてしまいます。

若い頃はこのような行動をとってもそれはそれで充実していたのですが、人生の下り坂をゆっくりと歩いている今の立場から見ると、自分の夢や生きがい仕事に費やす分だけ削り取られている感じが若い頃よりも強く、そして全体として寂しさが感じられるようになりました。

世の中の景気が回復基調にある中で、今の会社はまだ課題を多く抱えているので上昇の波の乗り切れていないのが現状です。ですから余計にやらなければとってしまうのです。しかし、よくよく考えるとこのような状態になったのは何らかの要因があるはずで

です。ですから、原因を究明して正常な状態にして物事を進める方法も正しいやり方だと思いますが、個人的に分析して自分が動いた方が総合的にメリットがあると判断してしまうので致し方ないことなのだと結論付けています。

人の生き方としては、自分の望みのなかである程度レベルを下げて対応するか、あるいは項目を取り下げて少数の項目に集中して行うしか具体的な進め方は無いように思えます。欲を捨てるのが重要になるように思われますが、なかなかそこまで自分をコントロールできないのが悔しいところでもあります。

話しが変わりますが、最近来年に採用する方の面接を行っていますが、この面接を通じて特に感じられることが一つあります。それは今の若者が持つ夢の大きさが、昔の時代の若者に比べて極端に小さくなっていることです。

夢に関する質問をすると今の若者の80%以上は、結婚をして幸せな家庭を築きたいと答えるのです。あまりにも現実に近いそれも夢とまではいえないようなことを、自分の大切な夢であると真面目な顔をして答えられると、こちらはびっくりするとともに将来の日本の国は大丈夫だろうかと心配になってしまいます。

このように今の自分を取り巻く環境や細かい事象の雰囲気全体に暗く包み込み、最終的には気力が高まらない状態になってしまいます。自分でも前向きに進めようと思いますが、五十路を過ぎると気力も昔のように短期間で復活するのではなく、弱って来ているのが正直なところ

です。このような状況になると人間はどうしても逃げ道を作って楽をしようとする行動に出てしまうのが人の常だと思います。しかしここで逃げていては、また後悔することになるので老体に鞭打って正しい道に進まなくてはと思っています。このような状況から脱出する最も早い手段は、モーツァルトを聴きながら素直な心を取り戻し新鮮な気持になることだと思っています。

どこまで耐えられるか分かりませんが、仕事と自分の好きなことを如何にしてバランスをとるかを考えながら進みたいと思っています。そして最終的に我慢出来なくなったときには潔く仕事を捨てて、自分のために残された人生の時間を好きなことに費やしたいと思ってこれからも頑張るつもりです。

最近は生きていてドキドキするようなことが無くなりつつあります。この点も気力が下がってくることに繋がっていると思われます。刺激は常に必要ですが、ある程度の歳を越えると体に過負荷がかかるので、それがないように自然と体の気力が下がるようにDNAに予め仕組まれているのかも知れません。

人間の生き方の原点は、何事にも素直になり生きることなのだと思います。皆さんは如何でしょうか？

## 幸せの種類と形

---

最近ちょっとした光景の中に幸せを感じる事が多くあります。歳を重ねた結果なのかどうか良く分かりませんが、いままで気づかなかったようなところに幸せを感じてしまいます。幸せと言うよりは、ほっとした暖かさを感じる安らぎなのかも知れません。

例えば、最近こんなことがありました。朝の出勤の際に駅までの遊歩道を歩いていた時ですが、80歳をゆうに超えたと思われる老夫婦がゆっくりと歩いているのです。遠くから見たときは気づかなかったのですが、近づくに連れて分かったことはおばあさんの方が足を悪くしているようで普通に歩けない状態なのです。もちろん杖を突いてゆっくりと歩いているのですが、ちょっとした拍子に転んでしまいそうな様子でした。

そのような状態のおばあさんの横には、手を軽くおばあさんの腰に回し、体を支えてあげながらゆっくりと歩いているおじいさんがいるのです。お二人伴に清楚な着こなしで、さらにお洒落だなあと思ったのはお二人伴に帽子を被っておられました。

この光景を見たときに、昔ある洗剤のCMでお上品な老夫婦が手をつなぎながら歩いている映像（記憶が定かではありませんが、二人でスキップでもしていたように明るい幸せそうなものでした）が思い出され目に浮かんで来ましたが、あれは全く作られたものであって、世の中にはあのようなことはありえないと素直に受け入れる事のできない自分がいます。反対に、人生って表面上の綺麗さや華やかさあるいは楽しさではなく、もっと内に秘めたものが重要なのだと自分で決め付けている自分がいるのです。

ですから、今回の遊歩道で出会った老夫婦の様子は目に焼きついており、正直言って二人の光景を見たときに何故か胸が締め付けられるような感じを受けました。さらに変な話ですが、あの二人の老夫婦が仲良く極楽浄土へ自然に溶け込んで行くような錯覚さえ覚えたのです。ひょっとしたら幸せと死は表裏一体のものなのだと悟ってしまったような気になりました。

この地に引っ越してきてから、この遊歩道を何十年も使っていますが、今回の老夫婦に会ったのはこれが初めてでした。とても不思議な感じでした。幸せってこのような支えあう光景の中にその本質が潜んでいるのだとも思いました。

若い頃に感じた幸せって何だろうと思いがしますが、はっきりしたものが浮かんで来ません。確かに幸せだと感じたような記憶がありますが心の中に実感として残っていないのです。

それらは好きな女性と一緒に過ごせたとか、好きなことが出来たとか、自分の希望が叶えられたというような、どちらかという心の中底からじわじわと湧き上がってくるようなものではなく、直接的でかつ一瞬の感情や快楽や満足という表面上のものだったからなのかも知れません。

勿論このような幸せも非常に大切であることは分かっていますが、これらばかりだと砂上の楼閣のように簡単に崩れ去ってしまう感じもするのです。この歳になると何か確実なものが欲しい気がして来るのです。

また、幸せには未熟で青臭いものや、円熟味の溢れたもの、そして枯れて朽ち果てる寸前のような段階があるように思います。どの段階もそれなりに重要ですが、大切なことは自ら行動する結果から幸せが現れてくるという認識だと思っています。

この歳になると生きている証しと表現すると大袈裟になってしましますが、これに近い感覚の中で欲求不満になっていることは間違いないのです。ですから、心の奥に響くような何気ない光景等に出くわした時は、今までにない幸せを感じる事が出来るのだと思います。

## 団塊世代と熟年離婚と人生の目的

---

最近よく熟年離婚という言葉が聞かれますが、個人的にはメスメディアの過剰な取り上げ方が一つの要因だと思っています。特に1990年代後半から中高年齢層の離婚がメディアで取り上げられる機会が増えたことによる影響があるとともに、さらに昨年の秋から放映されたレンドラの「熟年離婚」が、さらに拍車をかけているのではないかと考えています。

熟年離婚とは長い結婚生活の末にする離婚のことを一般的に指します。この場合の「長い」とは人によって解釈は異なりますが、一般的には20年以上の結婚生活を過ごした夫婦の離婚を熟年離婚と定義しているようです。従って50歳で結婚し、60歳で離婚しても熟年離婚と呼ばないのです。

熟年離婚という言葉が使われる前の時代における離婚に関わる事実としては、次のような数値があります。平成16年の離婚件数は約27万組で、前年の約28万4000組より1万4000組程度減少したことになっています。しかしこの離婚件数の減少は、熟年離婚とリンクする2007年に向けた問題が潜んでいるのではないかと考えられています。

この「2007年問題」とは、団塊の世代がこの年から定年退職を迎える年であるとともに、この年から年金分割の法律が施行されるのです。この法律は、夫婦が離婚をしたとき、離婚する女性の老後の所得水準の保証を目的に、妻は年金の分割を受けることができるようになることから、この年を境に離婚が増えるのではないかとされているのです。

弱い立場の者を救済する目的の法律ですが、本当に法の精神どおりの運用がなされるのか疑問です。そこには単にお金だけの打算的なものに視点があてられて進められるような気がしてなりません。

現にこの事実を裏付けるようなデータがあります。この法律ができたのが2003年であり、正にこの年から熟年離婚が減少したのだそうです。ということは熟年離婚を決意している妻は、現時点で静かにそして計画的に2007年の4月を待っているとも言えます。その数は2万4千人から3万人いると見られているので、男性にとっては恐ろしいことです。このような意味からも2007年は「熟年離婚の年」と呼ばれているのです。

結婚とは、男女の出会いがありそしてお互いにときめきの心をもって人生を一緒に過ごすものですが、人が生きるこの世の中で何事も初心のままに永遠に継続するものは残念ながら無いと言わざるを得ません。即ち年の経過とともにお互いの新鮮さが失われて行きますが、それとは反対に時間とともにじわじわと癒しの心が出来てくるのです。

そこに本当の幸せ感があるのですが、高度成長期以降の我々の生活の中には人間的な湿り気の

あるものが少なくなって来ており、ITで代表されるように非常に便利な世の中になり過ぎた反動として心を充実するようなものが少なくなり、余りにも無機質になり過ぎていているように思えます。

男は外で仕事をしているのである程度の世の中の動きが分かるのですが、以前TVのCMで大受けした「亭主元気で留守がいい」といった考え方や風潮は、少しずつ真のあるべき姿を變形させている感じをもちます。人生に正解が無いように結婚生活の中でも正解はないと思います。結果よりプロセスが重要なのであり、またそこに価値を見出す必要があると思います。

結婚生活は、全く血のつながりのない男女が人生を共にする大きな意味のある共通の場であるのです。この場ではお互いを尊重する心があれば最終的には破局のようなものが二人に訪れることはないと思います。

しかし、2001年の「国民生活選好度調査」における離婚観に係わる調査結果をみると、離婚を容認する人の割合は、男女別では男性より女性のほうが高く、年齢別では30代でもっとも高くなっています。この結果を信用すると結婚しても双方が満足出来ないのであれば離婚も止む無しとする考え方が30代の女性が最も高いことを示しています。

この30代の女性の多くは多分仕事を持っていて経済的な面の心配がある程度ないような人ではないかと思います。ですからこの段階で双方納得の上の離婚であれば、まだまだ人生的には豊かなものを送ることが出来ますが、60歳を過ぎた段階での熟年離婚はいろいろな面で困難な要素が出てくるので、個人的には避けるべきだと思います。この考えは凡夫が男だから男性を擁護するというものではありません。

人生の終わりに近い段階での生き方として本当に熟年離婚が良い事なのかという問題提起をしたいだけです。熟年離婚に至る前に、もっと双方で意思の疎通を行う必要があると思います。離婚は一方だけが悪いことは余り無く、双方にそれなりの問題があったからこそ、それが積み重なって最終的な破局を迎えるのだと思います。

日本経済を支えてきた団塊の世代が2007年以降に、熟年離婚の危機にさらされようとしている中で、この世代の方はもう一度自分達の結婚生活を振り返り、双方で冷静にまた真剣に考える時間を是非ともとって欲しいと思います。なにを隠そう凡夫は団塊の世代ではないですが、その数年後の予備軍のような存在なので今回の熟年離婚に関しては他人事として思えないのです。

熟年離婚が法律で守られた正しい道のようにマスメディアで取り扱われることに対して憤慨しています。正しい真実の姿を映したり、また正しい道に行くように何らかの手助けをすることがマスメディアの使命だと思います。視聴率や販売部数だけにフォーカスした取り組みは是非とも

改めるべきだと思いますし、団塊世代の人の今後の奮起に期待したいと思います。

## 年齢や性別に合わせた内面外面からの身だしなみの勧め

---

最近歳をとって感じていることは、ただ歳をとった経験だけで生きているのは問題ではないかという意識です。なにかひとつでもプラスαのものがないと寂しいと思うようになりました。プラスαのものとして趣味に係わるものもありますし、これまでに培った経験を社会に活かすこともこれに該当すると思われまます。

凡夫のなかでそれを探していますが、なかなか思い当たるものが見出せません。モーツァルトは単に好きなだけの自己満足の世界であるし、好きな日本酒はストレス発散の場作りの欠かせない要素であるし、絵画に至ってはただ観るだけの範囲のものであるし、書くことも勿論好きですが、これも内容がイマイチ充実していない未成熟な状態です。

このような凡夫の置かれている現状を考えると、この歳になって出来ることは周りの人に嫌な思いをさせないで生きることであり、さらに最低限しなければならないのは身だしなみをきちんとすることではないかと思うようになりました。

「人を外見で判断してはいけない」とよく言われることですが、初対面で相手に関する情報が何もない場合、皆さんはどのようにして相手を認識し位置づけるのでしょうか。普通の方であればまず相手の服装や持ち物や見た目の雰囲気判断してしまうのが常ではないかと思います。すなわち「身だしなみ」がその人の第一印象を形作る重要な要素になっているといっても過言ではありません。

それでは、凡夫のように歳をとってから身だしなみに気を使うようにするということは、反対に今までは何だったのかという疑問につながります。若い頃は、どちらかと言うと知性や内面性でなく、外観重視のルックスに片寄った考え方になるのが一般的です。

顔がよいとか、背が高いという生まれつきのものに比重が置かれた評価になってしまいがちですが、歳を重ねるに従いその比重は外観よりもむしろ、内面的な知性や間接的な要素にその視点が移るべきであると思われまます。しかし初対面は、どうしても外観に係わる要素である身だしなみやファッションセンスがどうかということに判断基準が移行してしまいがちです。

このような考え方が一般的であるのならば、凡夫のようなむさ苦しい中年はどのように対応したら良いかという課題を解決しなければなりません。一般的に、モテる中年男性やモテる中年女性というのは外観よりも、どちらかと言うと身だしなみがきちんとしている人ということではないかと思われまます。

凡夫が考える素敵な中年の必須条件は、自分なりの哲学や美学を持ち、それに伴った考え方で行動し自分を表現して生きることではないかと思われまます。さらに人は、その身なりや内面から生

じる何気ない立ち振る舞いで、その人の品格が分かってしまいます。

老いというものは誰にでもやってくるものですが、身体も心も老いを受け入れてそれに対して戦うのではなく、老いを認めて共存することから始まるのだと思っています。本当の意味での素敵な中年の条件とは、生まれもった容姿の端麗さや男らしさや女らしさだけではないことは言うまでもありません。

一方、巷では中高年に対するいじめの言葉だと凡夫は解釈していますが「加齢臭」という言葉が飛び交っています。歳を取ると中高年特有の体臭である「加齢臭」を生じるようになりますが、特に男性は女性に比べて臭いと言われがちです。

そもそも体臭とは、皮膚の表面にすんでいる細菌により、汗や皮脂などが分解された時にできるノネナールという不飽和アルデヒドの一種の物質がその原因になっているのだそうですが、この原因を減らすためには、脂質の酸化を防ぐことが大切であるようです。そのためには若いときに食べていた脂っこいものを控えることと、体を酸化させないような工夫をすれば避けられるようです。

加齢臭で悩んでいる中高年の方は、是非とも取り組んでいただきたいと思います。また酸化防止や免疫力の向上にはビタミンCが有効であることは昔から言われています。愚直な凡夫は30年以上毎日ビタミンCを摂取しているので、風邪はめったにひきませんし、現時点で加齢臭で悩んでいません。

取り敢えずの対策として、凡夫は人に不快感を与えないための配慮として身だしなみに気を配るとともに、内面を充実されるようなことを進めて行こうと思います。年齢や性別を問わず、誰に対しても好感を与え、時間、場所、目的に合わせた最低限の身だしなみを実践することも重要であると思います。

「おしゃれ」は自己評価であるのに対して「身だしなみ」は他人評価が原則でしかもこの場合、人によりその判断基準が異なるのでちょっと厄介かもしれません。ポイントは他人に不快感を与えないことだと思います。

皆さん、明日から少し身だしなみに関して関心を払ってみませんか？ただし、やり過ぎは禁物です。何事も中庸が重要であることは歴史が証明しています。

## もったいない、人と自然と物を大切に作る心

---

幼少の頃から物は大切にしなければならないと周りの人から教えられて来ました。ですからいままでも物は大切にしてきたつもりですが、歳をとるにつれて益々この傾向が自分の中で強くなりつつあります。

幼少の頃を考えると、戦後の復興の中で、今ほど物が溢れているようなことはない状況であったので、必然的に物を大切にしていたのだと思います。使えるものは修理したりしながら長く使うのが常識的なことで、世の中全体がそのような考え方の中で進んでいたため、このような行動様式をとるのが当たり前だと考えていました。

それが経済の成長により見かけ上の豊かさが目も前に拡がりだすと、消費することが良いことのように思われる時代になり、次から次へと新しい物を買って求めたり、まだ使えるものを捨てたりする時代の中で生きようになってから、人間の心がどんどん乾燥し、暖かい情や思いやりが失われて行くような感覚を味わいました。

ちょうど西岸良平の「ALWAYS 3丁目の夕日」のようなほんのりとした時代から、ビジネスライクで合理的な感覚の時代へと変貌して行く様を見ながら、本当にこのようなことをして良いのかと正直思ったことが何度もありました。

例えば石油資源は有限であるにも関わらずどんどん消費するし、それに伴い二酸化炭素が発生したり、また産業廃棄物のようなものを捨てれば環境に影響を及ぼすことが分かっていたが、これだけ大きい地球の中で少しぐらい汚染されても全体から見ると薄められるので問題ないような考え方が広がっていたことは確かです。人間は目の前で起こる現象には納得感をもって理解しますが、まだまだ自分の目の前に現象が現れない場合は、勝手に問題がないと思ってしまうものです。

どのような現象でも無限に同じ状態が続くことはありません。必ず変わる時期が来ます。バブル経済がそうであったし、反対に不況が続いてその状況から抜け出せないことは過去に一度もありません。

物事や状況は必ず変化するのが必然なのです。良い事は延々と続くと思いがちですが、世の中では良いことの後には必ず悪いことが続いて起こるのです。また、反対に悪いことが延々と続くこともありません。ある時、必ず良い方向に転換します。

このようなサイクルが過去何千年も前から繰り返されてきている事実があります。このような中で、人間は冷静にならなければいけないと思いつつも、つつい自分の都合の良いことだけを考えて行動してしまいます。とても恥ずかしいことですが、誰でも陥りやすい行動だと思います。

。

結局人間としてどのように生きてらよいかというと、良いときもまた悪いときも常に変わらずに基本となる考え方を守り生きることだと思います。なにか古めかしい時代に乗り遅れた生き方のように感じますが、結局は正しい生き方だと思います。

時は移り行き変化するものですが、その時の基準を短期間で見るとあるいは長期間で見るとの差であって、大きな視点から見ると人間の営みは変わることのない時間が続いているのだと思います。

技術進歩や技術革新が重要だと言われていますが、それは人間の判断だけであって、この宇宙を含んだ自然の中ではまったく意味をなさないものだと思います。自然の中でゆっくりと変わるのが真実ではないかと思います。

身の周りの人や、物や、自然をもっともっと大切にしなければならない心が失われつつある現状を見るにつけ、なにも出来ないのですが、ただ老婆心ながら心配になりつつあるこの頃です。もっと暖かくそして優しく、大切にすることが必要だと思います。

## 過去・現在・未来と反省・行動・希望について

---

一般的に過去は思い出が詰まっている次元、現在は悩み多い正に生きている次元、そして未来は不確定要素が多くどのようになるかは分からない次元であると個人的に受け止めています。

また一方で過去は反省、現在は行動、未来は希望というようなジャンルに分けることができるように思えます。人間的に弱い者は過去へ逃避するし、前向きな人は未来を志向します。そしてどっちつかずの者は現実の中で悩みもがくのです。過去・現在・未来の中でどの過程が最も重要かは冷静に考えると誰でも分かると思いますが、残念なことに多くの人は最も重要な現在を疎かにしていると思います。

過去と未来はともに現実から目を離し、自分自身を正当化し逃避するのにもってこいの次元です。また過去と未来の空想の領域に入ってしまうと事実が歪められ美化し、あたかも完全・完璧なことをしたような錯覚に陥ってしまいます。自分自身を守るためにはこのようなことは多少は必要かもしれませんが、やはり根本的なところで勝負をする必要があるのです。

逃げてばかりいると知らず知らずのうちに逃げのモードに入ってしまう。「現在」は常に自分との戦いだと思います。やりたくないことでも目を瞑って行動する、気が向かないことでも一歩踏み出してみる行為の中から、少しずつ物事が改善されていくものなのです。諦めずに、また自分の弱さに対して叱咤激励しながら、一步一步前進することが特に重要だと思っています。「継続は力なり」です。

特に不安になるのは、未来はどのようになるのかということです。ある程度の近未来に関しては想像がつきますが、本来の未来に関してはわからないものはいくら考えてもわからないのです。このような時にはまず素直になることが重要です。わからないことは分からないと認識しあきらめることが必要なのです。ここでのあきらめは一般的に使われるあきらめではなく、物事を明らかにして理解したうえで極めることを指します。

ですから、過去を追わず、未来を求めない。過去はすでに過ぎ去ったものであり、未来はまだやって来ないのです。従って、我々が取り組まなければならない事は、今なすべきことをしっかりと実行することなのです。今生きているこの現在をしっかりと生きられない者には、充実した過去やさらに未来はないと言ってもよいと思います。

今生きているこの現在の次元で、出来ることをしっかりと行うことが重要であると分かっているても、どれだけの人が真剣に思いながら現在を生きているのか疑問が残ります。人間はどこかで弱い面がでてしまい、後悔する動物です。

また個人ごとに実行する方法も異なるし、絶対的に正しいものはこの世にはないと思います。

それぞれに異なっていて良いのだと思います。

般若心経の一部に、「色不異空 空不異色 色即是空 空即是色 受想行識 亦復如是」がありますが、これは存在は空にほかならず、空が存在にほかなりません。存在がすなわち空であり、空がすなわち存在なのです。また感じたり、思ったり、意思をもったり、認識したりすることも、これまた空なのです。要するに固定的なものはなく実体がないのが空なのです。

この空の実体を理解することで、人生を如何に生きるべきかのヒントが得られると思います。すべてがこの空の考え方から始まるのです。ですから過去・現在・未来の次元を考えるならば、過去や未来でなく、生きている今を生き抜くことが重要だと思うのです。

人間、誰でも歳をとると体のどこかが悪くなるものです。私は30歳を過ぎたころに受診した健康診断で、コレステロール値が高いと診断され、それ以来30年近く薬を飲み続けて生きています。コレステロールを下げる薬がなければ、とうの昔に心臓発作で死んでいたと思います。

長期間飲み続けていても、一般的に管理値と定められている値を現時点でクリアすることが出来ていません。あとは、適度の運動とコレステロール値を上げないような食事療法を確実に行う必要があります。

若い頃は、コレステロールを上げる食べ物をなるべく取らないようにしてきましたが、人生50年を過ぎ、残りはおまけの人生のようなものだと思うようになって、つついいい加減になってしまいます。本当に困ったものです。

また、幼少のころは小児喘息で苦しい思いをしましたが、中学生になる頃には発作が出なくなりました。それ以来これまで一度も出なかったのですが、最近加齢による体力低下によるものと思いますが、朝晩喘息が出るようになりました。昔、小児喘息で苦しい思いをした記憶が蘇りました。

幸いにも現在掛かっている医師（年齢はほぼ凡夫と同じ女医さん）からアレルギー疾患治療薬をもらっているので、朝晩薬を飲み発作を軽減しています。薬に頼るようになると人間も終わりがなあと思いますが、もう少しやってみたいことがあるので、しばらくは薬の厄介にならざるを得ないと思っています。

先日もいつもの医者薬をもらいに行った時の会話ですが、「喘息がでたの？そう。でもあなたはもう齢なのだからしかたがないのよ。」と言われ、納得感と自分の年齢を改めて認識した次第です。

さらに「あなたは、お酒が好きだったわよねえ。週に何回お酒を飲むの？飲みすぎは駄目よ。お酒の飲みすぎで消化できないものは体の中に蓄積し、最終的に脂肪に変化するのでコレステロール値が上がるから、注意なさい」と言われ、その時は少し反省し、お酒の量を控えようと思うのです。

しかし、目の前に大好きなメカジキや鰯や秋刀魚の刺身、さらに燗酒にぴったり合う鍋があると、つつい日本酒の量が増えてしまいます。我が愚妻曰く、「好きなお酒を飲んで死ぬるのだから本望でしょう」と皮肉っぽく逆説的な良い方をされると、これまたへそ曲がりの凡夫にとって意地でも飲んでやろうと思ってしまいます。

昨年健康診断で高脂血症と胃にピロリ菌がいるので治療するようにとのコメントがありました。高脂血症は遺伝性のもので、かれこれ30年程薬を飲み続けていますが、それでも基準値をクリアできない状態です。

このようような状態の中で、さらにピロリ菌ですからたまりません。すぐに行きつけの医師に相談し適切な専門医を紹介してもらいましたが、結局行かずに今日まで来てしまいました。

常日頃ピロリ菌に関しては気になっていたのですが、日経新聞の健康欄のところ連載されている「菌とつきあう」という内容に興味を持ってからは、今更ですがヨーグルトを毎日欠かさず食べるようにしています。

それもピロリ菌と戦う力をもったLG21という乳酸菌を食べています。統計上数週間食べ続けると少し効果が出るとのデータを信用して取り組んでいます。人間とは面白いもので効果があると初めから信じて取り組むと、その気になるものです。

LG21を食べ続けて1週間程たったときに、不思議と胃の調子が良いと思われるようになったのです。それ以来毎日欠かさず食べています。さらに先日TVを見ていたら腸内には100兆個の細菌が生息し、これらは善玉と悪玉に分けられると聞いて笑ってしまいました。

高脂血症の原因となるコレステロールにも同じように善玉と悪玉があるからです。これらの菌やコレステロールと同じように、自然界の中にもこの相対するものの存在があり、これらが上手く調和して最良の状態を保っているのが通常ですが、どこかでこれらのバランスが崩れたときにいろいろな弊害が生じるのです。

また、人間の心の中も善の心と悪の心が常に同居しています。善の心で行動している間は、人間として当たり前前の状態で過ごしますが、反対に悪の心の下で行動すると、人間としてしてはならない行動を引き起こすのです。

このように人間の体もまた心も全て相対するものや状況が存在し、常に周りの環境や要因に従ってバランスの調整が行われますが、調整が出来ない範囲まで達すると問題が発生するのです。

どんなに素晴らしい心の状態を維持できる人間でも、また強靱な肉体を持っている者であっても相対する要素のバランスが崩れると、それ以前の状態が嘘のように壊れてしまうのです。

このような状態にならないようにするためには、相対する要因に対して常に中庸という考え方に従って冷静にまた素直に行動することが重要だと思いうのです。ただ中庸という概念ですが、凡夫にとって着実に実行するのは難しいものだと思うこの頃でもあります。

また仏教を信じ、少しでも自分の中の仏性を高めようとしている身でありながら、情けない行動しか取れない自分を恥じることが多々あります。これでは、良い死に方ができななあと反省の日々が続いています。

仏教や禅の本をそれなりに読んでいますが、考え方だけ身に付いて、実践が伴わない情けない結果となっています。しかし、気分が乗っている時とか、あるいは心が充実している時は、般若心経を唱えたりして、一時的ですが無心の世界とでもいう状況を体験しています。

最近はこのように歳をとって体力的にも人生的な面でもちょっと問題の状況に陥っています。ただ一つだけ言えることは、人それぞれに異なったものだと思いますが、自分なりにいろいろな経験を通して、今の自分のある部分は形成されたと言って過言ではないと感じています。

歳をとったらそれまでの経験を生かすことが重要であるし、また一方で、体力は必然的に低下するのでそれに合わせた生き方を行うべきだと最近感じています。人生1回だから味があり、また失敗を通じて賢くなるプロセスを学ぶことができるのが、人生の醍醐味であることを考えると、いまのままが最高だと思います。

歳を積み重ね加齢によるいろいろな不具合が出てきても、それを良しとして進む人生をすべきだと思っていますし、自分には、モーツァルトと仏教があれば人生迷わず前に進むことが出来ると確信しています。モーツァルトと仏教に出会ったことが最高の喜びです。

## 秋の風に揺られるススキを眺めて感じたこと

---

11月に入り、秋がより色濃く感じられるようになりました。今の季節に何となくしっくりと合うのが、秋の風に揺られるススキの光景です。近所の遊歩道の一角にススキが寄り添って生えているところがあります。

毎朝、毎晩その光景を見ていると、高校生の頃に流行った「昭和枯れすすき」の歌を思い出し、何か遠い昔にタイムスリップしたような感じになります。今思い出してもあの頃は、何となく暗い思いが蓄積したような青春時代であったと思います。ですから今でもススキはどちらかと言うと悲しいイメージと結びついてしまいます。

このススキですが、いわゆる秋の七草の中のひとつであり、他にハギ・クズ・ナデシコ・オミナエシ・フジバカマ・キキョウで構成されています。またイネ科の植物で、多年草であるとともに、屋根を葺く材料として使われている「かや」とも呼ばれ重視されました。

ですから昔の田舎ではどこかに必ずカヤ場があったようです。東京でも株取引の中心となっている茅場町がありますが、昔はススキが沢山生息していた地域だったのかも知れません。

秋の七草は春の七草に比べるとどちらかという地味な存在です。このススキの花言葉ですが、「活力」「精力」「心が通じる」というような意味が込められている花のようです。さらに薄自体に悪霊からまもる霊力があるとされるとのことで、竹取物語の中でかぐや姫が月からの使者とともに飛び去っていく光景のなかにこのススキがあるような気がします。

しかしこのススキですが、見れば見るほど何か無限の世界に入ってしまうような変な感じを受けます。ススキ自体がモノトーンの世界の代表格のような感じがあり、ススキとの組み合わせといえば中秋の名月と収穫物やさらにお団子とか、あるいは月の表面の様子から兎との連想が浮かびます。これらは華やかさではなく、どちらかと言うと内面的な面との関連が強いような感じがします。

このような構図は、日本人の心の中に自然と定着したものであり、それが日本人の心の根底にあるのだと思います。日本人特有の無の世界観や感情を表に出さずにじっと堪えるような心情がまさにぴったりと合うのがこのススキだと思うのです。

ですからススキが群生していることで有名な奈良県中部の曽爾村にある曽爾高原や、箱根の仙石原には、多くの人が秋を感じるために訪れるのも納得できます。個人的にはこのようなススキを見たことがないので、夕陽に映えるススキを見ながらどのような感動を覚えるか想像ができませんが、音楽でたとえるのであるならば、ススキの光景はブラームスの渋い音楽であり、また楽器で言えばオーボエの音色が似合いそうです。

このススキですが、荒れ野にも生えることでも有名で、いまは札幌の歓楽街となっている「すすき野」ですが、きっと昔はススキしか生えない荒れた土地だったのだと思います。また、このような荒れ野には、まず帰化植物であるセイタカアワダチソウが茂り、その後ススキが後を追いかけて生え、共生する構図が出来上がるようです。

ススキは荒地でも生息する事が出来るだけでなく、見る人にある感動を与える事ができ、さらに萱葺き屋根の素材になるのですから、人間の世界でいうと縁の下の力持ちに該当するといえます。全ての人がこのような事実を知ることなく、しかし人間に対して最大限の貢献をしているススキを考えると、少し大袈裟ですがその偉大さに感服してしまいます。

人の前で目立ちたがる、あるいは威厳があるのだということを強調したい人もいれば、このススキのように余り目を向けられずに陽の当たらないところでこつこつと役目を果たしている人もいる人間社会の様子を浮かべると、複雑な気持になります。

個人的には目立つことは苦手なので、ススキのように自然の流れに従って着実に生きる方が性に合っていると思いますが、ススキのように荒れ果てた土地でも自分の定められた生き方を実直に進めている様子を見ると、自然に素直な気持になるとともに直向に努力をする大切さを考えない訳にはいきません。

## 秋と老化とオマケの人生

---

秋という季節は他の季節に比べて何故か感傷的になりやすい時期です。それまでは考えもしなかったことを、真剣に考えてしまう自分を再発見する機会を与えてくれます。家の近くの遊歩道では、木々の葉が色付き、早いものは既に散り始めています。

自然界の摂理というか定めというか毎年同じ現象が生じるにも拘らず、人はその光景を観ながら儂さや憂いを感じます。とても不思議な心の動きだと思います。春に美しく散る桜にも同様の感情を持ちますが、秋の木の葉が散る光景はさらに哀れというか成熟した最期の姿とういような、人生の終わりを感じさせます。

人間で言うと秋は、成熟した体が老化という自然の法則に則った事実が顕著に現れだした50歳代後半の人間を、象徴しているようにも感じます。50歳を過ぎれば髪には白いものが混じりだし、目は俗に言う老眼というやつで近くが良く見えなくなる現象が現れだし、歯は抜けはしないがしっかり磨いていても歯周病にかかりだします。さらに男であればバイアグラのような手段を使わないと男性自身が機能しなくなるとか、要は体のいろいろな機能がそろそろ悲鳴を上げ出してくる時期にさしかかっているのです。

若い頃は誰でも自分にこのような時期は当分来ないので、考えもしない時間を過ごしてしまいがちですが、人生の中で50回以上も秋という季節を迎えだす頃には、自ずと老いというものを体で感じるだけでなく、心でも老いの人生を感じるようになるのです。

さらに気力も少しずつ薄らいでくるという話を、退職される方から聞いたのを昨日のこのように思い出します。「光陰矢のごとし」というように、時間は沢山あるように思えるのですが、いざその時を迎えると非常に早い感じを受けます。また「後悔先に立たず」とは正に私のように、いろいろな問題を先送りにし、その時になって考えればいいなどというどちらかという、いい加減な人間に対して当てはまる教訓だと思います。

また50歳を過ぎると時間の進み方が非常に早く感じるようになります。これは人生の最終ゴールである「死」というものをきちんと考え出すからだと思っています。若い頃は人生のゴールすら見えないので、まだまだ無限に時間があるような錯覚を覚えるのですが、老化が始まると何事もこの世の中は有限だと認識せざるを得ない状況になるのです。すると突然にいままで見えなかったゴールが、遠くの地平線にぼんやりと浮かんでくるように思えて来るのです。

人間というのは不思議な動物で、先が分かるとその瞬間から慌て出しどうしたらよいかとあたふたするのです。現に私も40歳の後半に人生は50年だからそれを過ぎたらオマケの人生と割り切って自分らしい考えで生き様なんて適当に考えていましたが、織田信長のような戦国時代の武将であれば、「人生五十年、下天の内とくらぶれば夢まぼろしのごとくなり」となるところ

でしょう。

まだまだ未熟なる自分に猛省し、今後はきちんと考えを整理しながら進まないといけないなあなんて真剣に考え出しています。やりたいことは山ほどあるのですが、日々の中で時間がどんどんなくなって行き、自分のための時間がなかなかとれない現実を見つめながら、少しでも自分の夢を実現するように時間を有効活用しながら何とか進めて行こうと切実に思っています。

ここ数日で急に寒くなったと感じる秋を迎え、有限な自分の人生を如何にして満足したものにするのかを考えさせる秋という季節に素直に感謝しながら、人生の最終ゴールをきちんと見極めて、戦国武将であれば50歳以降はオマケの人生に当たる時間を過ごしたいと思っているこの頃です。

最期に季節の冬は双六で言うところの「あがり」の季節だと思います。何周目の冬に人生のあがりがあるかは、個人によって異なるのだと思います。60周目？70週目？になるのかは正にゲームと同じです。

## 知足を知る心

---

「知足」とは、足ることを知ることを意味しています。しかし人間は、多くの煩悩を持っていることから、足りていると思うことはあまりなく、心のどこかには常にいろいろなことに対する欲が存在します。またこの欲を捨てられないのが反対に人間なのだと思います。

ですからこの言葉の意味を真剣に考えている人は、私を含めあまりいないような感じがしています。というのも、これだけ世の中に物が溢れ、欲しいものは大体手に入る時代ですし、昔に比べると確実に生活レベルも上がり安心して暮らせる社会になりました。私の両親の世代は戦争を経験しているので、特にこの辺の感覚は戦争を知らない私とは大きな隔たりがあります。

仏教では生きることを「苦」と言っていますが、この背景には人間が持つ欲が関係しています。何事も上手く物事が運んでいるときは「苦」を感じませんが、反対に思い通りにならないときには不満を感じたりまた「苦」を感じるものです。人間は誰でも自分に対して都合よく行動するようになっています。

人生の中で思い通りに事が運ぶことはまれで、殆どの場合が上手く行かないことだと思います。残念なことに上手く行っている時には、人間は感謝の気持ちを忘れがちです。さらに自分のことばかり考えるのではなく、他の人のために行動するような気持ちが重要なのだと思います。まさに「利他の心」を持つことだと思います。

そして常に感謝の気持ちを持ち続ける事がこの世を生きるに当たって大切なことだと思います。この世で生かされていることの喜びを感じる事が重要だと思いますが、なかなか来ないことです。

以前のCMで「物より思い出」といった表現がありました。まさにこの感覚だと思います。物ではなく人間の心に訴えかけるあるいは心で感じる動きが必要なのです。もっともっと心が満たされるようなことを進めるべきですが、残念ながら世の中は経済成長とともに心ではなく経済活動の生産物である物で溢れています。物面で豊かになっても、人間の心の中が空っぽでは意味がありません。

ケニア出身の女性環境保護活動家で環境保護活動だけでなく、アフリカ女性の権利向上にも貢献したことが評価され、2004年にノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイは、来日した際に「もったいない」という日本語を消費削減（Reduce）、再使用（Reuse）資源再利用（Recycle）、修理（Repair）の4つのRを表していると解説し、日本人が忘れかけている環境の問題と物を大切にすることを、我々に再認識させてくれました。

本来、日本人は物を大切にし環境にも配慮を払った生活様式で暮らしてきましたが、戦後1955年以降の約20年間、日本は奇跡と呼ばれるほどの経済成長を遂げました。さらに1980年代後半のバブル期は世の中全体が狂っていました。この時期を通して、日本人の心から人間が自然を支配しているとの驕りや、物を大切にすることを失われてきたのだと思います。

最も大切な事は、物に対する欲でなく心を如何にして豊かにするかという視点で考えるべきだと思います。四季を肌で感じ自然とともに生きて来た生活様式を守り、次の世代に引き継ぐことが今を生きる人間に求められています。

我々は日常生活の中で、もっと自然と人と物を大切にそして心を豊かにして、素直な気持ちで生きることが大切だと思うこの頃です。今の日本人は何事にも足りていることをもっと知るべきなのです。「知足」の心です。

## 歯周病との闘い

---

最近、大嫌いな歯科医に通っていますが、今にして思うともっと早い時期に行っておけば良かったと思ひ後悔しています。初めは虫歯がちょっと気になったので、仕方なく歯科医を訪れましたが、虫歯の治療の前の総合的な検査で歯周病が相当進んでいるとの事で、虫歯の治療も重要であるが、それ以前に歯周病を治さないとそのうち歯が全部駄目になりますよとの忠告を受けました。

それまで自覚症状は殆んどなく、そういえば最近になって歯を磨くとちょっと血が出たり、また朝起きた時に口の中が何となく気持悪い感じがあったのは事実ですが、痛みがあるとかその他に不都合はなにもなかったもので、初めは歯医者さんの金儲けの手口かなあなんて思っていました。

しかし、レントゲンの写真を見せられたり、歯周病の内容の説明を受けているうちに、これはちょっとやばいかもしれないと思うようになり、最終的には局所麻酔を行い歯肉の中に隠れている歯石を丁寧に除去するとともに、プラークや歯石によって汚染された病的なセメント質も併せて取り除き、歯根の表面を滑沢に仕上げる治療を受けることにしました。

局所麻酔と聞いただけでも嫌になってしまうのに、さらに保険の適用外の治療であることで治療費もバカにならず、金銭面でもとても痛いものになりました。ですから、家族の中で今回の治療の話をしたところ、バカ息子が曰く「放っておくと歯が抜けて総入れ歯になるのなら、今のうちに全て抜いて入れ歯にした方が効率的だよ。」などと馬鹿な発言を聞きながら、自分の歯でものを食べる美味しさは重要だと考え、保険の適用外の治療を受けることにしました。

これまでに、局所麻酔をした治療を2回程受けましたが、麻酔する時はドキドキし、注射針を刺す時と、またさらに麻酔薬が入ってきてじわっと薬が広がるあの感覚はどうしても好きになりません。さらに麻酔が切れるまでのあの何ともいえぬ歯と唇が麻痺した感覚にも正直言って嫌なものがあります。毎日歯磨きをしていたのに、なんでこのようになるのかと、情けなくなりました。

これまでも歯の磨き方に関して、いろいろ異なった意見があり、その都度正しいとされる方法に切り替えてきましたが、それも今回翻された感じで歯に関してど素人の私は、歯科の専門家に対して不満が爆発してしまいそうです。

もっともっと真面目に研究をして欲しいと思いますし、早く事実が判明した場合はその防止予防策を広く公にし、普及を図って欲しいと思います。そのためには国の協力が当然必要ですし、普及のための手段の確保も必要になると思います。

特にこの辺の普及活動に関しては、国は財団法人のような組織に金をばら撒くだけで、実質的な機能がなされないのが実態だと思います。これらに関する普及が充分に行われていたにも拘らず、受け手側の怠慢で症状が悪化するの、全て受けて側の責任に帰すべきものだと思います。

しかし、現時点で日本人の場合、歯肉炎は10～20代前半ですでに60%がかかっているといわれ、50才代ではおおよそ80%の人が対象となっていると思われている病気です。さらに歯肉炎と歯周病を加えると45歳から55才までの年代では88%になっているとの報告もあり、何らかの対策が必要と思われます。

製薬会社のPRではなく、国民の健康を推進する国としても、もっともっと歯の健康を守るような施策が必要だと思います。特に北欧の国はこの歯を守る予防策を推進してきているとの話を聞く度に、日本の行政の取り組みの遅さと、官僚の保守的な行動様式に疑問を感じます。

さらに毎日の歯磨きの方法で間違ったことを今でもしている人がいると思うと、これらの人に早く正しい歯の磨き方を周知徹底するような方法をもっと真面目に考えることが、国としてまた個人としてもメリットのあることだと思うので、これらに関する取り組みに期待したいところです。

いまでも歯の治療に際して、治療の身体的な痛みと金銭的な痛みを耐えながら、歯周病と闘っている私にとっては、決して個人的なことではなく国民全体に係わることだと思っています。

歯周病は自覚症状がほとんどないとっても怖い病気です。ですから歯周病がサイレントな病気と言われる所以です。皆さん！私のようにならない前に、嫌でも歯科医を訪ね検査をすることを勧めます。

## 体力と気力と年齢

---

10月の3連休は久しぶりにちょっと充実した時を過ごしたという感じが残りました。一日は仕事の残務整理、もう一日は所属する学会へ出席し発表、最後の一日は読書と部屋の掃除と、全体的にバランスのとれた行動をとった気がしています。

ただし、明日からどうしようという気力が起きないのが難点です。緊張感が無いといった方が正しいかも知れません。人間、心の緊張感が切れてしまうとどうしようもなくふらついてしまうものです。

この10月に入ってから疲れが抜けない状態が続いており、体調が優れません。従来であれば2~3日で肩こり等も解消するのですが、人生で初めて10日間程肩こりに悩まされている日々が続いています。

ゆっくり寝た翌日は、少し回復しますがまた夜になると同じ状態に逆戻りです。体の老朽化は進んでいるのは当然ながら承知のことですが、なかなか抜けない疲労には閉口してしまいます。

体の調子が今一步のときは、それに比例するように心の気力も下がり気味です。テションが上がらないのです。ただ体調が悪くても学会での発表は、IT産業のシステム運用現場の状況を学術の世界で生きている先生方にお伝えし、理論だけでなく実務も重要であることを訴えるチャンスなので、力が入りました。どれだけ分かっていたかには分かりませんが、自己満足感だけは十分に感じて帰ってきました。

個人的な考えですが、毎年参加している学会での多くの研究発表内容は、学術的な内容がほとんどで、実務の研究が無いのが非常に残念です。どんなに著名な教授が素晴らしい内容の発表をしても、現場の実務に生かされない研究は個人的に見て寂しいものがあります。

現場の問題を解決しながら、その成果を公にし最終的にこれらの研究の成果が体系化される喜びは、携わったものしか分からないものだと思います。いま日本に足りないのは、このような現場の情報や動きや現状を確実に捉え、またその問題点や課題をきちんと把握して解決の道筋まで持って行く流れが、どこかで詰まってしまっていることであり、これらが多くの産業界の中で閉塞感に繋がる最も大きな要因でなはいかと思います。

昔は、現場主義という言葉がはやった時期がありましたが、いまの日本は物づくりから大きく離れて行ってしまうような傾向にあります。多くの人々がきれいで安全で格好がよい業種に就きたがり、社会の基盤を支える物づくりから離れようとしていることに危機感を持っています。

自分が若ければ、敢えて物づくりの製造業へ飛び込み、日本の製造業に革新を起こしたいとの

野望を持って進んだかもしれませんが、この体調のように疲れが10日以上も抜けられないような歳になっては、残りは気力でのみ生きるだけになります。

今の日本は私の体調のように弱りきって来ており、非常に憂うべき事態だと思っています。今後は若者が、この日本を変えるために一致団結して動き出すことを期待していますが、そのような気力を持った若者が少なくなっていることも気になります。五木寛之が述べているような「鬱の時代」に入っていると個人的にも実感しています。

## 老いることの喜びと生き方

---

人間は生まれた瞬間から死という最終ゴールに向かって生きる定めを持っています。若いころは死ぬという意味すら考えずに毎日生きていましたが、今思うともう少し考えながら生きていれば確実に異なった人生を歩んでいたと思います。

悲しいかなこの事実に気がついたときには、既に遅しの状態なのが殆どです。しかし、そこで諦めてしまうと先には進みません。例え手遅れ状態であっても前向きにチャレンジしながら進む過程の中からある生き方というか、漠然としたものが浮かび上がってくるのではないかと思います。

若いころは自分自身に自信が持てず、常に周りの人が賢く見えました。なんて自分は出来が悪いのだろうと悩んだものでした。その時に周りの人も同じ悩みを持っていたとは気づく余裕もない状態でした。

常に糸がピンと張っているような状態でゆとりがなかったように思います。このような中で失敗をしたりまたちょっとだけ上手くいったことなどの経験を通して、少しずつ要領がよくなってどうにか一人前として生きられるようになるのだと思います。

辛い仕事でも、それをやり遂げたときの充実感を味わいたくて頑張っていた頃が、人生の中で一番輝いていた時期だと思います。一般的に言う心身ともに充実していた時で、年齢的にいうと40歳の後半までの時期が該当すると思います。

それが50歳を過ぎるようになると急に気力が弱ってきます。いままで頑張れたことが、長続きしなくなるのです。これは体の中からの正直な信号だと思います。世の中では60歳を超えても経営の第一線で活躍している人がいます。とても尊敬しますが、これらの人の周りにはこの人を手助けするブレーンがいるからこそ出来るのであって、すべて一人で行える人はいないと思います。

歳をとったら取ったなりに周りの協力を得ながら、昔のような行動を実践することは可能と思いますが、悲しいかなこのような環境に身をおくことが許されるのは極一握りの人だけだと思います。

凡夫は凡夫なりに自分の力を上手く工夫しながら対応しなければならないのです。限られたリソースを如何にして最大限の効果を出すようにするかが勝負だと思います。すなわち若いときのように体力勝負で行うことは不可能になるので、どうしても取捨選択をしなければなりません。やりたいことの中から優先順位を考えながら処理をしていかなければならないのです。

昔であれば同時に2つのことを平行処理しながら対応することが出来ましたが、今は無理です。したがって優先順位に従って着実に進む方法を取らざるを得ないのです。ことを進めながら昔ならこの辺で手を休めて、異なるもうひとつの事を処理できたのになあと焦る気持ちが出てきます。

焦れば焦るほど効率が下がるので困ったものです。あれこれと過去のことを考えることは禁物とわかっている、悲しいかな凡夫は過去を振り返ってしまうのです。お釈迦様は、この辺のことを次のように説いています。「過去を追うな、未来を願うな。過去は過ぎ去ったものであり、未来はまだ到っていない。今なすべきことを努力してなせ」

一番重要なのは、生きている正に今を考えて行動することだと言っているのです。あたりまえのことですが、なかなかこのようにクリアな考え方で対応出来ないのが普通の人だと思います。

過去のよき時代を思い浮かべ、過去はこのようだったのにとか、実現もしない都合の良い未来のことを考えて気を紛らわせることが通常です。今という最も大切な時を考えることが重要なものにも拘らず全力投球をしないのは最低の行為です。生きている今の瞬間を前向きに取り組みながら行動することが大切なのです。

このようなことが分かり始めるのが残念ながら50歳を超えてからなのです。だからこそ老いるということは大切なのかも知れません。今まで気がつかなかったことが分かり、残りの人生を有意義に生きることができるのですから、老いることは捨てたものではないと最近思うようになりました。

老いる喜びを感じながら、残された時間を確実に過ごしていくことの素晴らしさを味わうことができるのですから、老いることは最高だと思うようになりました。

## 3年B組金八先生のような熱い想いがありますか！！

---

最近感じることのひとつに、何かに夢中になって取り組んでいる人が昔に比べ少ないような感じがしてなりません。さらに自分のためでなく、人のために尽くすといった人物に出会うことが少なくなって来ました。

個人があって、そして周りの人がいるのが世の中なので、まず自分を確立することが先決ですが、それにしても今の世の中は余りにも自分中心になっているような気がします。互いに助け合うという行動が薄れつつあると思います。

確かに世の中では、NPOの活動が各地で盛んになって来ていますが、昔であればそのような組織を作らずとも、本来その社会構造の中で自然に作られていたものだと思います。

それが経済の成長に伴い、物質面が豊かになるにつれて表面的な心のゆとりが出来てきたことから、お互いを助けあう心が薄らいで来たのだと思います。この背景には、物質面と精神面が同じだと表面的に納得してしまう観点に、誤りがあるのではないかと思うのです。

偉そうに言っているこの私も、触れられたくない自分のある領域を少しでも侵害された場合は、拒絶反応を示してしまうので、結局は自分が中心になってしまいます。しかし、自分の労力を他人のために支援したり、また使うことには抵抗がありません。仏教の教えで言えば「布施」にあたるものだと理解しています。

昔TVで放送されていた、3年B組金八先生のような熱い想いをもった人が沢山いると、世の中は大きく変貌すると思いますが、現実にはあのような教師はいたとしても、それは稀な存在だと思います。

また、存在したとしてもその周りの人が同じ心をもって進んで行かなければ、空回りするだけで何の進展もありません。熱血漢の人がいてそれを支えるあるいは賛同する者がいて初めて可能となる構図です。

これは教育の現場だけでなく、一般の企業でもさらにもっと大きな国の運営の面でも同じことが言えます。元気がある会社は、ひとりひとりの社員の考え方がはっきり決まっていて、全員が切磋琢磨しながら働いています。

反対に活気がない会社は、ある一人の人物が熱くものを語っても、周りが冷ややかな目で見たりあるいは、全く聴く耳を持たないような状態にあるのが普通です。

重要なことは、互いを助け合うことだと思います。ある時は、他の人に自分が助けられることも

あるだろうし、また反対にある時は、他人のために一生懸命に行動することが特に大切だと思います。

他人のために汗をかくといった行動は、決して無駄になるものではなく、それは最終的に自分に戻ってくるものなのです。打算的に目先のことばかりを考えるのではなく、世の中のスピードは確かに従来よりも早く動いていますが、焦らずに少しゆとりを持って長期的に考えながら進むことが、今求められていると思います。

会社や国レベルでの問題においては、目の前の壁を如何にして取り除くかを真剣に考え、そしてそれを進めるための小さな一歩を踏み出すことが重要です。初めからこれは難問であり実現が難しいと判断し、チャレンジしなければ物事は何も進みません。立ち止まって嘆いていてもそれは時間の浪費です。

今の時期ほど、3年B組金八先生のような熱い想いをを持った者の出現と、それを支える理解者や支援者が求められていると思います。あなたは金八先生ですか、それとも金八先生と行動を共にするサポーターですか、それともただの傍観者ですか・・・

## 人前で化粧をすること直すこと

---

毎朝ハイヤーが自宅に横付けするような身分になれば別の話になりますが、朝の通勤ラッシュアワーに慣れることは、サラリーマンの必須条件だと思います。三重にいた頃は、マイカー通勤だったのでその2年間は楽な通勤でしたが、東京に戻って来てからはもとの生活に逆戻りで、懐かしいラッシュアワーの時間が復活し1年が経過しました。

このラッシュアワーの中でも、人前で堂々と化粧をする女性がいるのにはびっくりします。身動きが出来ない状態でもしっかりと鏡を手に、いろいろな道具を駆使しながら最終的な顔を作り出すまでの芸術的な創作過程を客観的に見れるのは結構楽しいもので、何も出来ない朝の通勤時間を充実したものにしてくれます。

しかし、何故に満員電車の中で化粧をしなければならないのかがとても不思議です。前の晩遅く朝寝坊してしまったのか、緊急事態が発生したのか分かりませんが、公衆の面前で平気で化粧することが出来る感覚に脱帽してしまいます。

きっとあの女性はどんな苦境に立たされても自分を見失うことなく、物事を最後までやり遂げるのではないかと反対に尊敬してしまう程です。ただ、あの行為は、周りに人がいるにも係わらず一人で納得し、さらに自分だけが良ければいいという、自己中心的な状況に陥っているのです。電車の中が公共の場ということを理解出来ていないのです。世界がとても狭く、可哀想に思えてきます。

ところで化粧の歴史は古く、紀元前3000年のエジプトではアイシャドー、マスカラ、マニキュア、かつら、紅といった化粧法が行われていたし、近隣の中国でも同様のことが540年ころから行われていたようです。女性に化粧をするなどは言いませんが、せめて人前では遠慮して欲しいし、自分の恋人が人前で化粧していることが分かったらそれだけでも幻滅です。

人の顔で醜いものはないと思うので、すっぴんで良いのではないかと思います。どういうわけか分かりませんが人類は化粧をする習慣を身に付けたのです。確かに人間は、綺麗になると自分に自信が持てるようになります。ですから化粧をするという行為は、人から評価される以前に自分自身に対して納得し綺麗になるという実感を得ることであり、自分の思い込みという内面的な要素が大きいのだと思います。

何事においてもそうですが、自分に自信を持つことが出来るようになると不思議と人との接し方が変わり、人間関係も変わります。さらにそれが良い方向に循環していくと、人間関係がどんどん開けていくのです。ですから女性が化粧をして美しくなることには賛成です。ただ、夜明けのコーヒーを飲みながらすっぴんの女性の素顔を見るのも良いのではないかと思いますし、その中に自分と他人というアイデンティティを見つめる原点のようなものがある気がします。

例えば仮面を被ることにより自分自身が外部の人に分からないことが保証されれば、人間は普段思っていて出来ないようなことにチャレンジするものです。それは一方で自分の中に住むもう一人の自分が活動することなのです。このように何らかのきっかけで新しい自分を作ることが出来るのです。

そのためにもまず外見を整えることは一つの解決手段だと思います。しかし、本当の美しさとは、どんなにすばらしい外見であっても、その人の言葉遣いや立ち居振る舞いやある程度の教養の要件が伴っていないと美しくは見えないものです。

化粧をするのではなく、クマやシワを消すといった美容整形などのような、人工的に自分の体に対処して即効的に美を手に入れるやり方が流行っているようですが、これは「ファーストビューティー」であり、本来の美しさは薄化粧や適切な言葉遣いや立ち振る舞いさらに教養等の「スロービューティー」にこそ本来の価値があるのではないかと考えます。もっと言うならばじっくり時間を掛けて自分本来の美しさを引き出すことが重要だと思います。

また厚化粧すると、肌が荒れるのは道理でありその肌の荒れを隠すため、さらに厚化粧するという悪循環に陥りやすいものです。さらに、アイ・ライン、つけまつげやマスカラをつける時はそれらを自分のものとしてこなしていないと、お化けになることだけは女性の方は覚えて置かれた方が良いでしょう。電車の中で化粧をする人は、殆どがこのタイプの人が多いので注意が必要ですぞ！

2005年は例年になく地震が多く、それに伴いかなりの被害が出ている地震の当たり年だと思います。これは日本だけでなく世界的な傾向のように思われます。昔は地底に鯨がいてそれが暴れると地震が起こるのだというようなメルヘンチックなことが言われていましたが、現在のように地震のメカニズムが科学的に分析され、以前よりもかなりの確率で地震の発生を予測できるようになってきました。

地震には5つのタイプがあり、それらは「プレート間地震」：プレート（岩盤）という、人工的な衝撃によって起こる地震で、お笑いの下ネタで出てきそうな男女の営みによって起地球を覆っている岩盤の境界で発生する地震、「プレート内地震」：プレートの内部で発生する地震、「火山性地震」：火山活動によって起こる地震、「誘発性地震」：ダムに貯水した際に地下の岩盤にかかる力が変化して誘発される地震、「人工地震」：爆発などの人工的な衝撃によって起こる地震で、お笑いの下ネタで出てきそうな男女の営みによって起こるものではありません。

これらの中で一番身近な地震と言え、プレートと呼ばれるものに起因するものが大多数です。地球の表面は20枚弱のプレートに覆われており、これらの中で日本は「太平洋プレート」、「北米プレート」、「ユーラシアプレート」、「フィリピン海プレート」の4つのプレートが折り重なる場所に位置していることから、昔から地震の多い国なのです。

これらのプレート同士のズレによって歪みがエネルギーとして蓄積され、限界を超えた時にプレートが跳ね上がり、この時の巨大なエネルギーが地震を発生させているのです。これらの歪によって蓄積されるエネルギーの限界値を超える時期を予測することが出来れば、被害を少なくすることが出来るのです。また、地震がある一定の周期により発生することが過去のデータから窺われますが、この周期性もその根底には蓄積エネルギーの蓄積度合いに依存するのだと思います。

このように地震の発生は、地球のエネルギーの発散によって正常に戻るためのプロセスであると考え、地球も人間と同じように意思を持った生き物のように思われて仕方ありません。そのように考えると地震は地球のストレスの発散の結果だと思われ、

今後とも人間が地球を破壊し続けると、ストレスは従来よりも加速して蓄積されるので、今後さらに多くの、また大きな地震が起きるのではないかと思われて仕方ありません。地球の環境問題が論議されていますが、もっと真剣に対応すべきではないかと思えます。地球の温暖化が進んだ結果が異常気象の発生に繋がり、その結果が米国の巨大ハリケーンの発生になるのです。

これらは全て、人間の驕りから来ているものだと思うのです。人間として自信を持って行動す

ることは重要ですが、極端な自信は驕りに繋がります。このような事態に陥らないためのブレーキ的な役目をする行動が、謙虚という言葉に現されるものだと思います。

何事もまず自分自身を知ることになりますが、ともすると人間は驕りを極めた行動に陥り易いと思います。自信とは、自分の中にそれが正しいと確証できるための根拠となるものを持ち合わせている状態を言うのだと思います。

しかし自分が常に正しいと思うのはひょっとすると誤りであるかも知れないと思う余裕がもう片一方にないと、独善的になってしまいます。人間の生きる世界に絶対的なものはなく、あるとすればそれは人間は必ず「死ぬ」ということだけだと思うのです。

また、不思議なもので世の中には自信がなく悩みながら生きている人の方が多いのに、社会全体あるいは地球規模で見ると、全体としての行動様式には大きな自信の基に動いているようで、その根底には人間の驕りが見え隠れしているようです。

反対に皆が本当の自信をもって生きていくようになると、驕りの現象が消えて本来の姿に戻るのかも知れません。このようなことを考えると、人間の社会やその行動って本当に摩訶不思議だと思います。現在そして未来を明るくするには、常に謙虚にそして自信をもって事にあたるのが重要なのだと思います。やはりここでも謙虚と自信というそれぞれ対極する要素を如何に調和させて行くかがポイントになるのです。

話題が少し外れてしまいますが先日の日経新聞の夕刊に、男性の性機能障害や勃起不全（ED）で悩んでいる患者が全国で1130万人もいるとのことが報じられていた記事を読んで思ったのは、このような男性が自信を失っていることが、最近の日本に元気がなくなった原因の一つにあるような気がしてなりません。

パートナーや恋人を男として抱けないとなると、これは男性として自信が持てない一つの要因になりうるものだと思います。もっと日本を元気にさせるためにも、雄としての役目がキチンと出来るようになって欲しいものだと思います。

EDの原因の多くはストレスだそうです。このストレスを溜めない方法は、適度に発散することです。悩むことはある面においては人間を成長させる重要なものですが、余りにも悩み過ぎるとストレスとなり、体の「気」の流れが悪くなり、流れなくなったところに病が起きるのです。

これを防ぐためには体やさらに心に変調が起きないように適度に発散することが大切ですが、いつも発散し続けるとこれも問題になると思います。やはり中庸が重要なのです。EDに関しての記事の中で、明かりが見えたのは患者の7割は治療することで回復するそうです。男性自身の機能を回復させ、楽しく男女の営みを行い人工地震を起すことにより、最終的に日本を元気にした

いものです。

近い将来大きな地震が起こることは間違いありません。首都圏の直下型の地震が起きた場合は、現在発表されている数字以上の被害が起きると陰で言われています。正しい被害想による数値等が公表されない背景には、仮にその数値を公表するとパニックが起きるからだと思っています。

例えば新宿の高層ビル群に関して言えば、地震とそのビル構造が持つ固有振動数が一致すると大きな被害が発生しますが、そのようなことが果たして起こるか予測がつかないというのが専門家の考えです。今後、大きな地震に遭遇した場合は、慌てずに日頃からの避難方法等に従って自信をもって対応すべきだと思います。そのためには自分自身の体（勿論男性身の機能も含めて）と心を鍛えておく必要があると思うこの頃です。

## 「有言実行」より「不言実行」で行うべし

---

四字熟語に「有言実行」と「不言実行」という言葉があります。一般的に前者の方が正しい生き方で格好が良いような感覚を持つのに比べ、後者は卑怯なやり方で自分から逃げているような感覚で捉えられているように感じられます。

しかし、言葉が持つ本来の意味は、ちょっと異なっていて「不言実行」は、「あれこれ言わず、黙って（善いと信ずるところを）実行すること。」広辞苑第5版（岩波書店）とあります。この意味をよくよく考えると、いままで持っていた考えと全く異なる意味をもっていることに気がきます。

すなわち、「不言実行」に対して今まで持っていた思いは、何かを行う際に人には黙って何も言わずに事を進めることと書いていたが、そのような意味ではなく、事を行う時にああだこうだと言うのではなく、己の信ずる所をよりどころとして事に臨み実施することなのです。世の中には物事を始める際に、兎角ああだこうだといろいろ述べてからでないという行動に移さない輩がいますが、それは始めに言い訳をしているのと同じで、逃げているのと同じだと思えます。

これに対して「有言実行」のイメージは、始めに皆に宣言をして実施する正々堂々としたフェアなやり方のように見えますが、本当にそうなのでしょうか？個人的に思うのは、どちらの場合も個人の気持ちの持ち方であって、宣言するやり方は西洋的なやり方であるのに対して、「不言実行」は東洋的な考え方だと思うのです。

特に宣言をして行うやり方は、キリスト教的な考え方でありその根底には、人間は心が弱く兎角安易な方に流れてしまう傾向があるので、初めに神に誓うような感じで先に実行することを述べる傾向にあるのだと思えます。西洋社会は契約社会ですから特にこの傾向が強いのだと思えます。よい意味で自分にプレッシャーを与えて、自分を奮い立たせて物事を推し進め、能力を最大限に活用して実施するような方法だと思われれます。とても理路整然とした西洋的な香が漂う進め方です。

これに対して「不言実行」は、全て内面的な要素を重要視する考え方が根底にあるのではないかと思います。ですからどちらかと言うと東洋的な感覚になり、日本で言うところの美德だとか奥ゆかしさの考え方に繋がるのではないかと思います。この裏返しの考え方として、上手く行かなかったら黙っていて、上手く出来たら皆に言って凄いなと思わせるような感じがありますが、これは最初に述べたように本来の正しい意味ではないのです。

さらにこの言葉を他の面から考えて見ると、例えば英語では「不言実行する人」をa man of action と言うようです。即ち英語は非常に単純な考え方に則っていて、行動を起し何かを行う人

が「不言実行」なのです。これに対して「有言実行する人」は英語に該当するものはないようです。イメージ的には有言実行の英語があって不言実行がないように思われますが、事実は反対なのです。

さらに面白いことに「有言実行」と言う言葉の意味を調べたところ、「不言実行」をもじって作られた語であり言ったことは必ず実行することの意味でした。ですから本来は「不言実行」しかなかったのですが、不言の持つ意味を十分に理解せずにその反対の有言という造語を作って新たな「有言実行」をつくり、そしてこれに新しい現代的な意味づけを行ったものと思われま

す。このように我々の身の回りで使われている言葉の中には、本来の意味と異なる形で使われている、あるいは違った意味合いに理解されているものが他にもあるのではないかと思います。そのような意味からも、日本古来からの言葉は、それぞれに重みがあり意味が込められていることを再確認する必要があると思います。

兎角現代人は、西洋の文化がスマートに見えることが多々ありますが、我々はもっと日本の文化をきちっと理解し、その上で西洋文化との差異を理解して行動すべきだと思います。過去の歴史を見ると、時間とともに文化は融合し新しい形に変化して行くのが常ですが、一つの文化が形成されてきた過去からの時間を再認識し、個々の文化の持つ良さをしっかり見る必要があると思います。

選挙にあたって候補者が訴える政策等は今回の意味から言うと「有言実行」の分類になるような気がしますが、各政党の公約を集約したマニフェストは、「有言実行」というべきでなくあえて言うならば「公言実行」という言葉で対応した方が分かり易いと思います。

最近感じるものの一つに、昔に比べギラギラと脂ぎったエネルギーを感じさせる人が周りにいなくなったことがあります。どの人を見ても、角がとれているだけでなく丸みを帯びてさらに上品であり、ギリシャ神話に出てくる神々のように均整がとれて美しく、整然としている感じを受けるのです。

別の言葉で言うならば「スマート」になったとでも言うのでしょうか。見た目には清潔感が溢れて好感を持つ事ができるのですが、何か足りない感じがしてなりません。あまりにも綺麗過ぎると反対に、物足りなさを感じるものですね。過去のことに関われることは良くない事ですが、過去にあった事実は学ぶところが多くあり参考にすべきだと思うのです。

今の世の中は余りにもおとなし過ぎる感があります。その背景には、物が溢れ殆どの欲求が何らかの形で満たされているからだだと思います。欲しいと思うものが容易にそして直ぐに手に入ったり、また自分でも何が欲しいのかが分からなくなるくらいに物が溢れた世界になっています。

このような時代になると人間は、心の底から欲しいと思う欲求が無くなるので、全体的におとなしくなってしまう傾向があります。即ち活動的でなくなり、エネルギーが発散されなくなるのです。この状態は非常に危険なものだと思うのです。欲望が無くなりつつあるということは、それらを追いかける行為がなくなることを意味しており、最終的には進歩しない、また進めるにあたってのいろいろな経験の積み重ねが出来なくなることと同じです。

人間って欲しいものがあつたり満たされないものがあると、それを手に入れるためにあらゆることを考えながら行動に移すものです。このときは自分でも気がつかないくらいに物凄いエネルギーを使って対応しているのです。

先日読んだ本の中で、この話題に触れているのがあったので、ここで披露したいと思います。内容は、指揮者の小澤征爾と文学者の大江健三郎の対談で、中公文庫「同じ年に生まれて」（音楽、文学が僕らをつくった）からのものです。

この中で、小澤は次のように話しています。「人間のエネルギーの中心というのは案外簡単なものじゃないかと私は思うわけです。女への、あるいは食いたいというハングリー、あるいは生きていくために何かしなければいけないという切羽詰まったもの、女がほしいとか、男がほしいとかっていう現実的な欲求、あるいはおなかがすいたとき、喉が渴いたときにどんどん水飲みたいというような切羽詰った欲望というものがだんだん、だんだんなくなっているんじゃないか。」と言っています。

個人的にこの思いは小澤と同じです。このような欲望を表に出さずに、ただひたすら平静を装って生きている人間が多いような気がします。もっともっと欲望を表に出して生きるべきだと思います。この行動が起きると、人間は必然的にエネルギーにならざるを得ない状態になります。そうするとそこに生きている人間の姿が現れてくるのです。

欲望があるとないのでは、人間が使うエネルギーの充実度が異なるのだと思います。また反対に、このエネルギーは使い続けると錆びてしまうものだとも思うのです。良く言われますが何事も使い続けてはじめてその本来の機能が磨かれて、さらに高度なものになって行くのだと思うのです。その意味でも、常にハングリーな思いをもって何事にもぶつかるのが大切だと思います。

極端なことを言えば、常に欲しいものを求め続けるそんな気持ちがいまの人に欠けているものだと思います。一見世の中は幸せそうに思えますが、人間の心の中はがらんどんで、本当は空しい中で生きている人が多いのではないかと思います。欲望をむき出しにして何かを進める過程の中から本当の姿がわかり、さらに心から必要としているものが分かるのではないかと思います。

今の時代の流れは、効率良くそしてスマートに何事も処理をすることがポイントのように位置づけられて動いています。しかし、根本的に欠けていることは、昔は非効率であったという事実と、それがどのような状況であったかを身をもって経験した人であれば問題ないのですが、これらを全く理解せずに、また遠回りをせず無駄な苦勞もせず、ただただ効率化等を追いかけることには疑問を感じるのです。

自分のエネルギーを使い切るぐらいの行動をとり、かつ何かに向って前進することがいま必要とされていると思うのです。人間には108の煩悩があり、昔から人間はこれらに悩まされて生きてきているのです。この煩悩から逃げることなく、人間の身心の苦しみを生み出す精神の働きをもっと活性化することが重要だと思うのです。

人間は、もっともっと夢を追いかけるように、また貪欲に欲望を満たすように自ら努力し生きるべきだと思います。そして正しいエネルギーを思いっきり発散して欲しいと思います。

## 真実の裏と嘘の表

---

最近思うことの一つに世の中の真実と嘘の関係があります。この歳になるまで世の中には裏があるということは承知していましたが、いやでもこの歳になるといろいろな面である時は表の世界である時は裏の世界と切り分けて行動する必要が発生します。

本来であるならば表の世界で堂々と生きていたのですが、なかなかそのように出来ないのが世の中なのでしょう。一番分かり易い例が芸能界です。TVや一般大衆の前ではとっても誠実で正義感に溢れた人物が裏ではとんでもないことをしていたり、またとっても純情そうなアイドル女優がとんでもない男好きだったり、表と裏では正反対のことが起きている世界だと言われています。きっと閉じた世界なので、その中ではどのような事が行われ様ともお互いに守り合う暗黙の了解があるのでしょう。

この傾向は芸能界だけでなくあなたの周り（近所のお付き合いでも会社でも学校でもサークルにでもあることと思います）でもあるはずですが、また悲しいことに、今の世の中では何が起きてもおかしくない状態にあります。いままで隠し続けられたことがどうしても隠しきれずに表に出ざるを得ない社会的環境構造になって来ています。

日本の国内の会社や銀行でもそろそろ潰れる大手企業があるとか・・・多分それは事実でしょう。今まで隠し続けてきたのですが、もう堪えきれない状況にまで来ているのです。これから出てくる事実はひょっとして万歳するタイミングはもっと前にあり、そこで公表していれば傷が小さくて済んだところもかなりあるのではないかと思います。とても残念なことです。

世界に目を向ければ、北朝鮮の経済状況は最悪でいつ暴動が起きてもおかしくないと言われているのに北朝鮮のTVは国が豊かであるように見せかけています。

このように嘘で固めた世界には必ず終わりが来るのが道理であり、だからこそ真実は重要なのです。しかし一方で、真実ばかりで対応する世の中はちょっとギスギスした感じになるので、少しは夢のある嘘を混ぜた潤滑油的な役割が必要となります。

これは芸術分野でよく言われる「あそび」という部分です。人間っておかしな動物で嘘のない生活を求めています、それだけでは生きられないやっかいな動物なのです。小さな秘密や嘘を持ちながら、少しだけスリリングに生きることを求めているのです。ですからよく言われる不倫も起こるし人を陥れたりすることが起きるのでしょう。

ばこれらは必要な事で 人に迷惑をかけることはいけない事です。でも迷惑をかけない範囲で行うのであれば、これらは必要な事ではないかなあと思います。でもでも真実は絶対に必要です。真実の裏にある嘘はいけませんが嘘の裏はまた真実でもあります。



## 1 億人の無縁社会

---

先日NHKで無縁社会を扱った番組を見ました。見終わって感じたことは、人間としての一つの命とこの命に繋がっている他の人との関係でした。TVの中だけの事実をもとに考えれば、確かに無縁社会が広がっていると思います。

しかし、このような状況になった真の原因は分からないままとなっています。個人的には個人と個人をつなぐ手段があまりにも多様化したことにより、最も重要である本来の人間の心と心の触れ合いを基盤とした仕組みが薄れてしまったのだと思っています。

世の中で生きていくには、普通は働かなければなりません。働くということは、何らかの形で他人との接点がでてきます。一緒に仕事をするとか、また作ったものを他人に買ってもらうとか、他人のために何かをしてあげることで生計を立てるなど、何らかの形で人間としての繋がりが発生します。

ところが最近の世の中は、他人との直接の接点を持たなくとも生きていけるような時代になりました。それを支えているのがITだと思います。ITが進めば進むほど、従来の人間としての係わり合いがだんだんと薄く疎になって来ています。

極端な言い方をすると、ITが発達し便利になればなるほど従来の人間の直接的な関係が薄らいてくるのです。もっと言えば、情と愛が無くなって行く傾向にあると言えます。

また、他の人間と係わりを持たずに生きていくことが出来ること自体が問題だと思います。しかし良く良く考えると、どんな場面でも生きている以上、他人との接点があるのですが、それを本人とその関係した人が意識を持たずに対応しているから、その時点で縁が切れてしまうのです。

確かに人間は生まれてくる時もまたこの世を去る時も一人であるという大きな真実があります。しかし、この世に生きている間は決して独りで生きているわけではなく、他の人の力を借りて生きています。また、この他人の力を借りて生きていることに何も気づかずに生きている人間が多過ぎるのです。

さらに自分自身も何らかの形で、他人が生きることに際して力を貸していることにも気づいていないのだと思います。なぜならば、人間は自分のことを中心に考えるので多くの場合、自分にとってメリットのあることを考えながら行動するからです。即ちまず自分が良くなる事を考えて行動するのが基本であり、そこに自分としての正当性を確立するのだと思います。

今の世の中の風潮は、めんどくさいことを如何に避けて、快適で自由な生き方をしたいと思っ

ている人があまりにも多すぎるのではないかと思います。多少苦勞してでも、他人のために何かをすることを自ら進んで行うところから、他の人間の大切さが実感できるのだと思います。

人間は不便であれば不便であるほど、関係する人との連携が必要となり、そこで本来の人間としての交わりが出来るのですが、今の世の中は凡夫の年代からすると余りにも便利すぎる世の中となっていました。

この便利に成り過ぎた世の中で生まれた時から育ってきた人は、人間との関係で何も苦勞せずに人生を歩んでいることになります。これでは、他の人間を敬うような考え方は出てこないと思うのです。

もっともっと不便でお互いに直接話さなければ解決できないような状況であれば、人間はもっとお互いの距離が縮まって、そこに情や愛を基盤とした縁の関係ができるのだと思います。

NHKの番組を見ながら、無縁社会を報道することは重要であるが、いま世の中が置かれている状況をもう少し深掘りした内容になっていると、見た人が次のアクションを打つきっかけが多くなると思いました。

世の中の人間の間を もっともっと暖かくする流れになるようにしたいものです。

## プロフェッショナルの仕事の仕方

---

以前から言われていることですが、日本の製造業の競争力や品質が落ちて来ていることに関して、その根本原因のひとつにプロフェッショナルとしての自覚が薄くなりつつあることが挙げられます。7月の下旬に開催されたあるコンファレンスの中で、このプロフェッショナルとしての自覚や認識の欠如があると、厳しく指摘されていたのを聞きながら、個人的にも納得するものがありました。

昔のプロフェッショナルは何事にも拘りをもって厳しく対応していましたが、最近の製造業のような物づくりの分野では、徹底的に物事を進めるのではなくある程度のところで止めてしまい、最後の詰めをしっかりとしない傾向が強くなって来ているとのことでした。

日本の製造業の地位が、世界の中でだんだん落ちて来ている原因として、中国やアジア諸国に比べて日本の労働力賃金が高いので負けてしまう要素は確かにありますが、いまの日本に一番欠けているのは、プロとしての意識や意欲が弱くなって来ていることです。

ですから、意欲や意識の点でお隣の韓国に負けてしまっているのだと思います。先日仕事の関係で、韓国の企業の方と話をしましたが、彼らの話を聞いていて強く感じるのは、意欲や意識が強く、さらに自信に漲っている感じを受けました。

これに比べ日本人は、全体的に疲れきってしまっているのか、あるいは厳しさが陰を潜め優しくなった気がしています。世界を相手にもう一度競争に勝つためには、情熱を持った取り組みをしないとこれからの日本は危ないのではと思うのは私だけでしょうか。

さらに、これらの傾向がこのまま続くと日本は大きな問題にぶち当たり、そこから脱出出来なくなるような感じもします。これを防ぐには、上に立つ人間が厳しさををもって部下に接することによって解決することも出来ますし、反対に厳しく言うのではなく、仕事を全て任せて自分勝手にやらせながら、ポイントポイントで指導を行い、自己修正をさせながらプロとしての意識を高める方法があると思います。

今の時代は優しい物分りのよい上司が理想のようですが、この優しい物分りのよい行動の中に、仕事に対する前向きな姿勢を植えつけることがよりも重要であり、これによって厳しさをもった仕事の取り組みが出来れば、最高だと思うのです。

ある仕事に就いたならば、最終的にはプロと呼ばれるようなレベルにまで到達する必要があります。何事も2万時間を費やすとその分野で一応のことは語れるようになり、またほとんどのことが出来るようになるものだと言われています。

この数字は1日8時間働き、年間の実稼動日を240日とすると10年の期間に該当します。一般的に考えると、10年間同じ仕事をし続けると一応プロと呼ばれる領域に到達すると言えるのではないかと思います。

また、「石の上にも3年」といいますが3年間の総時間数は26,280時間です。1日5時間強の睡眠時間以外を全てある一つのこと、例えば仕事に費やすと3年間で2万時間になり、2万時間という数字が持つ意味に、ある根拠があるような気がしています。

このように一つの仕事に対して、プロと呼ばれる仕事をこなすようになるまでは、ひとつひとつの過程を大切にすることでなく、何事もいい加減にしないで取り組み最後の最後まで細かく詰めて検討する習慣を身に付けて、仕事をするのが大切なようです。

個人的な経験で言えば、仕事とは自分の好きな事をするのであれば、誰もが手を抜かずに一生懸命取り組む姿勢を取り続けます。ですから、私は常に自分で企画をし、それを上司に提案しそして了解をもらって仕事を進める方法を取ってきたので、上司からこれをやれあれをやれというような仕事は殆ど来なかったことは、大変に幸せだったと思います。

また、このような方法で仕事を進めて行く中で、確かに大変なことがありましたが、それは自分で選んだ道なので何とかして突破しなければとの意識がありましたし、さらにそれを突破できた時の喜びは、経験したものでないと味わえないものだと思います。

このように、仕事とは最後は自分で結末を迎える事が出来るようにする事が大切です。これがプロの仕事だと思います。たとえ自分が望まなかった仕事であっても、その仕事に従事したならば、まずその仕事のプロになるように自分自身をもっていくような取り組みを行う事が大切であると思います。

始めは嫌な仕事であっても、それをやりながら徐々に自分で切り盛りが出来るようになると、仕事自体が面白くなり、さらに仕事全体をアップするような企画を考え出して実践するのが前向きな仕事の方法であり、プロの仕事だと思います。

一番情けないのは、自分の仕事に誇りを持たずさらに何事も受身の姿勢で仕事をし、上手く行かない時には他に責任を転嫁するようなやり方です。また、最も軽蔑したくなるのは、自分の仕事が増えるような案件が来ると、まず拒否の態度に出るやり方です。

これだと何も進歩がないのです。最終的に拒否をするのは良いのですが、受けるためにはどのような方法や手段を経ると円滑に仕事が動くかを考える過程を経て、最終的に出した結論が仕事を受けないとのものであれば、それはそれで立派なプロとしての仕事方法だと思います。

少しでもプロフェッショナルとしての仕事をする人が増えて、先行きが暗い日本を何とか活性化して前に進むような行動をとって欲しいと切望している今日この頃です。この年になるといまさらITの細かい機器に関する技術を学ぶにはチョット意欲が低下して来ていますが、学びたい気持ちだけはあるので今の若者に負けないように適宜技術をマスターするために、老体に鞭打って頑張りたいと思います。

何事も諦めたらその時点で終わりです。諦めない限り可能性は未来に繋がっているのです。よく言われることですが、諦めるのはいつでも出来のです。ですから常にチャレンジし続けることが大切だと自分に言い聞かせながらプロフェッショナルの道を歩みたいと思っています。

## 主体性の欠如と祖国日本について

---

最近感じることの一つに「主体性の欠如」に関することがあります。もっと言うならば自ら物事を深く考えることなく、ただ周りに流されて動くような受動的な面が目につくのです。日本の全ての世代にこのような傾向が窺われますが、特に若者の世代にこの傾向が強く現れているのではないかと考えています。

この問題をもっと突き詰めていくと教育に係わる問題にぶち当たります。昔の教育と今の教育で根本的に変わったのは、「自由」とか「ゆとり」のような言葉で表されている民主主義のある種の美しい幻想に踊らされているような気がしてなりません。

義務教育においては自由ではなく、昔の「読み、書き、そろばん」のような基本的なことをどちらかと言うと強制的に学ぶものだと思います。このような重要な時期に「自由」や「ゆとり」というような、ある種の成熟した過程に係わる要素を取り入れてはならないと思うのです。

基礎を学ぶ時期は、厳しい環境のなかで基礎をみっちり学ぶことが大切なのです。このような時期を過ごすことにより、主体性をもって行動したり考えたりすることを学ぶのだと思います。優しさやゆとりは、これらの基礎が確立したあとに導入すべきものなのです。

先日「国家の品格」の著者である藤原正彦氏の講演を聞きましたが、内容に関して非常に興味をもちました。いままで世の中で騒がれている事象を全て否定した面から述べており、考えさせられるものがありました。

特に気になったのは、「論理」に係わる考え方です。科学万能的な考え方で進むと「論理」が正しければそこから導き出される結果は全て正しいとなりますが、人間に係わることをこの論理の考え方で展開すると、誤った結論に導かれることがあるのです。従ってこの場合でも、人としての主体性が明確に出されないと、正しい判断や行動が出来ないこととなります。

1980年前後を境にして、日本は経済成長期に入り経済的な豊かさだけでなく、国民の多くが物質的な豊かさを享受できるようになり、米国のように極端な貧富の差が生じることなく、国民総中流化が加速されました。しかしその一方で、精神的な面での成長が進まず、仮にあったとしても、それは表面上のものでしかなかったのではないかと考えています。

精神的な面での成長を阻害した一つに、TVや新聞や雑誌のようなマスメディアの力が大きく関わっているのだと思われます。これらは一方的に事象の内容や考え方を勝手に、それも毎日大量の情報を吐き出している、まさに情報の怪物のような存在になっていました。

受けとる側はこれらの事象の事実や信憑性を自ら確認する術を持ち合わせていないことから、

全てを正しいものと判断し精神面での自己の確立が出来ないまま育ってしまったのです。

また1990年代にはインターネットの急激な技術伸展により、これまでに考えられなかったような仮想の世界がその中に出来あがり、現実の社会から逃避しその中で精神的な幸せを享受するようになってしまったのです。このようにマスメディアの一方的な流れに対して、自ら情報を選択して考える機会が少なくなったことが、大きな問題なのです。

いまの日本という国は、国全体がこの主体性が欠如した状態になっています。なぜならば、国民ひとりひとりに主体性がなく、周りに流されているからです。恐ろしいことに民主主義では、ものを申さぬ国民で構成された国家は、今の状態が正しいと判断され、国民の総意として国が勝手に動いてしまうのです。

主体性を取り戻し、あるべき姿の国家にする必要があると思います。そのためには、我々は常に主体性を持って考え、そして行動する必要があるのです。そうでないと世界でも有能な国民で構成されている祖国日本が、崩壊してしまうことに繋がるのです。

## 最近の日本はちょっと狂っていませんか

---

個人的に感じていることなのですが、最近特に世の中が狂っているのではないかと感じる事が多くなりました。自分自身も完璧ではありませんが、最近の日本は明らかにおかしいと思います。

簡単に人を殺してしまったり、あれだけ食品にかかわる偽装問題がたたかれているのに、まだ懲りずに同様の問題が発生したりしています。政治に関しては昔から自党のことだけで日本の将来を本当に考えて行動しているようには、与党と野党よもに思われません。最低だと思わざるを得ない様な国の舵取りをしています。将来の日本が本当に心配です。

人間としての感覚が麻痺しているとしか言い様がありません。自分だけ良ければ良いといった自己中心的な人間が増えてしまっています。このようなことが発生する背景には、日本の社会に大きな歪が時間をかけておきているのだと思います。

大陸プレートの移動による歪が溜まり、ある限界値を超えると地震が発生するように、今の日本の社会は人と人との関係が複雑に絡みあい、大きなストレスが溜まりそれが弾けてしまうことにより発生する事件が後を絶ちません。

人と人との間で最も重要なのは、お互いの考えや思いをきちんと相手に伝えることができるかということだと思います。コミュニケーションが上手く行っていないとお互いにストレスが溜まります。

ほんのちょっとした言葉の会話だけでも心に響く言葉で話すと人間は動くものだと思いますが、今はそのコミュニケーション能力の低下により、個人もまた近所の隣人もさらに会社の組織もそして最終的には日本の社会が澱んでいるように思います。

毎日のほんのちょっとしたことが積み重なり、良しき悪しきにいろいろな形で社会が変化していきます。このほんのちょっとしたことの中に占める大きな事柄が、人間関係を良くするための潤滑油的な行為だと思います。別な言葉でかっこよく言えば、「愛」や「慈悲」といった言葉で表されると思います。

表面的な「愛」や「慈悲」でなく、心の底から思うものでなければ人の心を動かすことは出来ません。反対に今の世の中は、本物が少なく贗物が多くなって来ているのかも知れません。上辺だけ見ていると本物のように見えるものが増えて来ているのだと思います。

昔の人のように何事も直球勝負で行うのではなく、今の世の中は表面上を上手く見せるような方法が多く、その中に秘めた本心の心が伝わらないような感じを受けます。分かり易い言葉で言

えば、多くの人が直球でなく変化球で勝負し、相手の裏を斯くようなことをしているのだともいえます。

今の世の中のように本心が伝わらない時代では、直球勝負で話すことが最も早く誤った方向を修正することが出来る最強の道具だと思っています。ただし、直球勝負は一時期とはいえ場合によっては相手に不愉快な思いをさせることもあるかと思われませんが、正しい道にするには多少の問題が発生するのは致し方ないことだと認識しなければならないと思います。

皆さんも是非とも、本心でまた直球勝負で対応し、少しでも日本を正しい方向に修正するように行動していただければと思います。もちろん私も直球勝負で対応します。

## 戦略不在の日本のMOT

---

先日、久しぶりにアカデミックな学会のシンポジウムに参加してきました。シンポジウムの内容は、「世界のMOT, 日本のMOT」と題されたものです。20年ほど前に、大学院で政策科学という新しい学際的な分野を学んでいた時にお世話になった指導教授が、今回基調講演を行うことも参加する一つの理由にありました。

当日少し早めに会場に行ったところ、たまたまこの先生が基調講演の準備をされていたので、挨拶し10年振りに話しをしました。先生も歳をとられ白髪が増えていましたが、その他は以前と全く変わりなくいつもの調子でいろいろ話してくれました。

2005年の3月で退職した現況を簡単に先生に話すと、そのような歳になったのだなぁと感慨無量のような顔をされ、最後に組織論に関する良い論文があるから送ってあげるとも言われました。私にとって先生はいつまでも先生であり、私はいつまでも生徒なんだなぁとつくづく感じた次第です。

先生の基調講演は、「MOTの生い立ち」と題したもので、MOTのルーツから現在に至るまでの流れを非常に分かり易くまとめ、さらに日本が何故に世界で1番になれず2番手になっているのかを、戦略の面から分析されたものを提示されました。個人的に頭の中が非常にクリアになり、あたかも昔に遡り先生の講義を聞いている様な錯覚に陥りました。

特に戦略に関したことは、先生は次のようなメッセージを聴衆に投げかけていました。それは、「悪い戦術は良い戦略があれば救えるが、悪い戦略はどんなに良い戦術を行使しても救えない」というものであり、良い国家戦略なくして世界の一流国になれないということを示されたのです。

より具体的な例として、日本のゲノム解読プロジェクトに関して、和田昭允・東京大学名誉教授が最近「なぜ米国に逆転されたのか」という記事の中で戦略の重要性を指摘されているものを紹介していましたので、以下にその部分を引用します。

日本のゲノム研究の国際競争力は海外に絶対見劣りしない。日本人研究者には世界有数の獨創性がある。それなのになぜ日本は、宇宙、南極・・・そしてゲノムと、大きな舞台で二番手なのか。その原因について私なりの分析を述べたい。最大の問題は国家的な「大戦略」の欠如だ。

具体的に言えば科学技術政策の戦略や知財戦略に先見性が無く場当たりのことである。科学の競争は産業の競争と違う部分もあるが、ゲノム解読にみる「日米技術覇権競争」は、解読の大義名分を挙げた米国に、理念のない日本が席を譲った典型的な負けパターンといってもいい。

言い換えれば、産業の方ではいくつか例があるらしいが、米国の世界戦略と”手慣れた”国際インシアティブに日本はねじ伏せられてしまったのだ。「戦略がない」といったとき「戦略の重要性は気がついているけれども戦略が立てられなかった」と言う場合と「そもそも戦略の重要性に気付いていない」場合がある。ゲノムもそうだが、その他多くの場合日本は後者だった。と述べています。

個人的にもこの和田教授のいう通りであると思いますし、日本は戦略に基づいた国家論を論じることがない不思議な国だと思います。どの国でも国家的なプロジェクトとして国のあり方をしっかりと論じるものですが、日本は形だけの有識者による会合で、結論は官僚がすでに作成した結論に導くやり方で進められるのが普通です。

従って日本の国を良くするには、霞ヶ関の官僚に戦略立案能力を持たせるような仕組みを作らなければいつまで経っても日本は二流国家のまま何も進展しない国になってしまいます。学歴が高く頭が良ければ戦略がたてられるかという、これは全く違うといえます。

戦略は頭の良さでなく、過去・現在・未来を考え関連する分野の状況を十分に把握し、最後は直感のような才能が重要になるのだと個人的には考えています。常に変化している世界の現況を考えた場合、変化することに対応した政策が必要です。「戦略なきは座して死を待つがごとし」です。変化に対応するためには、戦略が不可欠だと思います。

現在の日本が停滞しているのも、根本的にはこのような要因もあるのだと思います。今回、学会のシンポジウムに参加したことにより、いままでもやもやとしていたことがすっきりと晴れたような気がして有意義な時間を過ごす事ができました。

大きさの大小は兎も角、良い戦略を基にきっちりとした戦術で物事に取り組み、多くの課題を解決していくことが、現在の日本の置かれた現況を打破する重要な鍵だと思います。官僚が悪いと言うだけでなく、我々国民も常に意識を持ち、ものを申す姿勢がないと悪い方向に国が進んでしまう要因にもなります。

官僚もまた国民もさらに政治家も、もっと意識をもって物事に対応しなければ日本はこのまま停滞どころか下降し、2流国家からさらに落ちてしまうのではと危惧しています。

## 歳をとって改めて考える日本のこと

---

7月に入ってから通勤電車の混み方が急に緩和され、従来よりは少し快適に過ごせるようになりました。最も大きな要因は、夏休み期間に入ったことが挙げられます。

さて、夏休み期間は比較的混雑しないので不愉快な状況が発生しないので良いのですが、それまではこの通勤電車の中で、毎日のように起きる現象に閉口していました。以前は、降りる駅に到着すると降りる人は、周りの人に「すみません」とか「降ります」とか、何かしら一言声を出して出口ドアの方へ移動するのが通常でした。

しかし、今はほとんどの人が無言でさらに他人に体当たりするように強引にドアの方向に行く現象が起きています。年配の方以外は、この無言の行動をとる人が殆どです。何が原因でこのようになってしまったのか、不思議でたまりません。日本の文化は、おくゆかしさが基本にあり相手への思いやりを大切にするものでしたが、ここに来て変わりつつあるのです。

これらの行動をとっている全ての人が自分勝手な方だとは思いませんが、せめて一言声をかけて行動すると、周りの人も気持ちよく対応でき、お互いに不愉快にならずに済むのです。以心伝心という言葉がありますが、これはお互いを知っているもの同士の間で成り立つものであって、全くの他人の間で成り立つものではありません。声を出し、最低限の意思を確実に伝えることが大切だと思います。

夏休みを利用して海外に出掛ける方も多いともいますが、以前に海外へ出掛けた際には、時間を見つけて美術館やコンサートホールへ足を運びましたが、日本とどうしてこれほどまでに違うのかを感じたことが多々ありました。

海外の美術館ですが、どこの美術館を訪れてもゆったりとそしてゆっくりと名画を観ることが出来ます。日本の満員電車のようにように人でごった返しになっている光景を見たことがありませんし、また展示されている絵に関して知識や見識をひけらかす人もいません。

他人は他人、己は己との区別すなわち自我が確立出来ていることが、大きな背景にあるのかも知れません。日本では、必ずといっていいほど、他の人にひけらかす人がおり、それも小さな声で話すのであれば少しは許せますが、周りの人にも聞こえるように話す行為には閉口してしまいます。

この行為は単なる親切心から素直に出てきているものではなく、他人に対する優越感が先行しているように見受けられます。本当に親切心から話す方は、とても控え目で話される方が多く、その話し方自体が異なるので、周りにいる誰もが分かるものです。

また、海外のコンサートホールに演奏を聴きに行くと、聴衆は演奏に真剣に耳を傾け良い演奏には最上の拍手で対応しますが、自分自身でよい演奏ではないと思ったら、素直な態度でそれなりに対応しています。ですから、演奏家は甘やかされずに反省しそして次のステップへ歩みだすので、プロの演奏家のレベルが上がるのです。

これに比べて日本の聴衆は、全体的に良くなくとも一部がよければ全てが良かったと判断し、絶大なる賛辞を与えます。これでは、演奏家が甘やかされて伸びません。駄目なものは駄目とし、指摘することが次に繋がるのです。

このように最近歳をとって改めて日本のことを考えることが多くなってきました。日本の根底にある全体的な調和と、欧米の個人主義の良いところを融合した考え方とによって行動が出来ると、今の日本を更に飛躍させることが出来ると思いますが、今は全てが逆の考え方なので最悪の状態になっていると思われます。一人一人が少しだけ考えて行動することで、これからの日本は大きく変わると思います。

以前から感じていたことですが、現在の世の中は何故か先が見えない、ただ時間が流れていて誰も知らないうちにストレスが溜まる一方で、一向に改善の兆しが見えない状況ではないかと感じています。

確かにかなりの企業がリストラを推進して経営が好転している傾向は見受けられますが、これは真に企業や社会の力によって改善されたものではないと思っています。あくまでも一時的な措置からのものであり、恒久的な対策の結果ではないのです。

経済は人間のバイオリズムと同じように成長と衰退の過程があります。これを上手くコントロールして急激な変化をさける仕組みを作ったり、また有効な対策を策定するのが経済学ですが、この経済学も最後は市場の中の人間の心理行動も含んだ行動様式により左右されます。ですから有効と思った施策を実施しても、常に期待される効果が出るとは限らないのです。

現在の停滞感のある社会の何処にその根本的な原因があるのだろうかと考えることがありますが、明確な答えが見つかりません。これは正に、酒を飲みすぎた翌日の二日酔いの状態であり、頭の中に雲がかかってよく分からない状態です。脱力感というのか虚無感とういか、体に気が入っていない状態のように思われます。夢が真剣に語られていないし、個人個人が夢を持っているのかも分からない状態だと思えます。

高度成長期の日本では、「努力をすればなんとかなる」とある程度の夢が実現できた時代でした。現に労働者階級出身の子どもである凡夫の私でさえも、高度成長の中で二流の私立大学であってもなんとか出れば、すんなりと職を得る事が出来ただけでなく、最終的にある程度の管理者までなるといふ夢を実現することが出来ました。自分自身ではとても運が良く時代の巡り合わせがよかったのだと思っています。自分の実力以上の結果だと思っています。

本当の意味で言えば、何事も努力でなく実力で判断するのが合理的な方法だと思えます。本当に個人の実力を発揮して出来るのであれば誰もが問題なく納得できますが、兎角世の中はそのようにならないのが常であって、大きな声の人が最終的に勝つのです。ですから、実力があり夢をもって生きている人間にとっては、とてもやりにくい世の中だと思えます。

高度成長期にある程度の夢を実現可能とした背景には、経済成長がありました。高度成長時代から安定成長時代には、どの企業も右肩上がりの業績拡大を可能とすることができたことから、必然的に組織拡大を続けられたのです。これに伴い専門職や管理職のポストも増え、多くの人間が上層のホワイトカラーになることができました。

しかし、バブルがはじけ低成長時代となり多くの企業が組織の見直しを通してリストラを実施

、あるいは基幹業務以外をアウトソーシングすることによりコスト削減を推し進めてきました。その結果、昔のように多くのポストはなくなり、組織自体もスリム化されました。今後は、本当の実力主義にならないと働く人間のモチベーションが維持できなくなりますし、次の世代に円滑な受渡が出来なくなると思います。

仮に今の世の中に自分が生まれたら、到底現在の自分と同じようなレベルまで達する事が出来なかったと思います。これまで日本の社会は急速に中流化や平等化が推し進められたために、経済が低迷すると多くの問題が表面化してきます。従ってこれらを推し進める場合には、事前に適切な社会システムづくりを行うべきだったのです。

どのような時代でも餅屋は餅屋の考え方があってしかるべきだと思います。特に重要なことは、現場の業務を理解した人物がホワイトカラーの中にいないと駄目だということです。その企業で実際に金を稼いでいるところはサービスを提供している、あるいは物を作っている現場なのです。

この現場でどのような事が起きているのか、あるいはどのようにして製品が製作されているのか、また実際のお客さま接してサービスを提供しているのは現場なのですから、これらをきっちり把握する必要があります。これらを把握して始めてホワイトカラーの中で企画や戦略が生まれれると思います。

ですから、ホワイトカラーとブルーカラーはきちんとその役割分担を行い、それぞれの中では、実力による人物評価の判断が下されて組織運営が円滑に動くようにすべきであると思います。このようにはっきりと役割を分けるのは不平等ではなく、反対に平等だと思います。

この意味から言えば全ての人間に対して通常の高い学歴は必要とされず、ある分野に特化した専門知識を持った人間の育成が必要となるのです。その意味では専門学校等に期待するところは大きいものがありますし、これらをもっと充実する必要があると思います。

勉強が嫌いな人間に無理やり勉強させて大学に行かせても意味がなく、仮に手先が器用であれば、昔のドイツにあったマイスター制度のように物づくりの基本となる専門技術を身につけ、その分野のエリートになることが重要だと思うのです。また手先が器用でなくアイデアや企画が得意な者は、ホワイトカラーの仕組みの中で頑張れば良いのです。

以上より、ホワイトカラーやブルーカラーの仕組みの再強化を行い、それぞれの中で個人の夢が達成出来るようなシステムを構築し、努力よりも実力を重点に置いた評価システムで物事を判断することが重要なのです。このようにすることにより、意識あるものは努力し実力をつけるようになります。

また、今後は従前のような全ての人が中流でかつ平等であるような社会システムは維持して行けないので、個人ごとにどのような人生設計を行うかを考えるべきであり、その結果で中流のレベルを維持でき得るのであれば良いのですが、出来ないのであれば出来るようになるまで生活レベルを下げる必要があります。特に若い人はこの点に早く気付き対応する必要があります。

今後は益々厳しい時代になって行くと思われます。今の若い人は自分なりの夢を持ちその実現に向けた人生設計を行い、自分に適した生活を送るようにして欲しいと思います。その際に重要になるのは、努力は避けて通れないものですが、努力だけでなく確実に実力を身に付けることが特に重要だと思ひます。努力は取り組む姿勢でありまた過程であり、実力はこれらの最終結果なのです。

## 菩薩と如来と救われること

---

昔に比べて今の世の中って少しおかしくなっていると思うのです。子供がいとも簡単にそして平気で親を殺したり、また友達を傷つけたりと、どの行為も何か短絡的で自分と他人との関係を考えない自分勝手な流れがあり、さらにその結論に至るまでの過程のプロセスが欠如している観があります。

このままこの世の中が続くとその先はどのようになってしまうのかと心配になってしまうことがあります。かといって自分で世の中を良くするために行動しているのかというと、常に傍観者的立場に立っている自分があるのに気付きます。その裏には、自分が生きるにも精一杯なのに何故に他の人のために行動をする事が出来るのかとの考えも頭の中を過ぎります。

今の自分に世の中を動かす力があつたならば、進んで実行しているかも知れませんが、何の力もない今の自分を省みて出来ることは、大袈裟かも知れませんがその日を自分なりに生き抜くことではないかと思っています。

兎角、日常の流れの中に埋没してしまい楽な生き方を選んでしまうのが、凡夫の悲しさという無力さなのだと思います。しかし、無力な人間でも何とかして良くなりたいと思う意識があれば、少しでも前向きに動き出す事が出来ると思います。

若い時は哲学や宗教などの支えや助けが無くとも生きて行けましたが、流石に五十路を過ぎそろそろ自分の人生の全体を見渡す事が出来るような時期にくると、ふと不安になることがあります。それはちょうど幼少の頃に、空の上をどんどんどんどん行くとその先には何があるのだろうか、そこに壁のようなものがあるとするとその壁の先にはいったい何があるのだろうかと考え悩んだ、正にあの感覚と同じです。

この様な時に役立つのが人生の生き方である自分の哲学を持つことであり、また壁を越えた先にある世界のことを扱うのが宗教を少しでも学ぶことだと思います。この壁は言葉を代えると死であることから、仏教で言えば極楽浄土の考え方を理解することに当たります。

この歳になって初めて哲学や宗教の重要性に気付くのでは手遅れなのですが、無視して生きるほど人生に自信を持っていないので、何らかの拠り所が必要となるのだと思っています。生きるために物に執着する人が多い中で、以前に車のコマーシャルの中で出ていた「物より思い出」のような価値観を持てるようになると、人間は心にゆとりが出来て人生が充実するものと思われまます。究極は、物のような物質でなく精神だと思うのです。

個人的な人生の悩みの中で、これらを解決するにあたって個人的に救われているのは、五木寛之という作家に巡り合ったことだと思います。五木の考え方にはほぼ抵抗なく素直に受け入れる

事が出来る自分があります。心に染み渡るといふかそれはちょうどモーツァルトの音楽を聴いているのと同じ状況です。

もともと素朴な奈良の寺のたたずまいや京都の禅寺の枯山水の庭が性に合っていたこともあってか、五木の百寺巡礼のシリーズが始まると自然と奈良や京都の寺巡りを始めてしまう安直な自分があります。これまでに奈良や京都の寺を訪れ、多くの仏像に接しながら少しずつ人としてのあるべき生き方が、おぼろげながら分かってきたような気がします。

仏像との出会いが多くなるに連れて、そこにはいろいろな役目をもった仏像があることも分かりました。いままで気にかけることなくただただ手を合わせていた菩薩像や如来像にもそれぞれの役目があるのです。

例えば、菩薩は、仏になる前の段階にあり、ひとりでも救われない不幸な人がいる間は世の中の最期の一人を救うまで自分は仏にならないと誓いをたてた方なのです。ですから菩薩さまがいる限り、この世の中にいる私のような凡夫も救って頂けると思うのです。

悟りを開く即ち仏になったのが如来です。如来には薬師如来、釈迦如来、阿弥陀如来、大日如来などが有名ですが、この中で釈迦如来と阿弥陀如来には何故か親近感を覚えます。釈迦如来はこの世から送り出す際にお世話になる如来であり、阿弥陀如来はあの世でお世話になる際に重要となる如来です。

このように菩薩と如来に救われて、極楽浄土への道が保証されるのであれば、この現世の中で一生懸命に生きてみようかなあと手遅れ状態ではありますが、五十路を過ぎた凡夫が一人、思うようになった次第です。これも全て五木寛之のお陰と思って常に感謝しています。

蛇足になりますが、この釈迦如来と阿弥陀如来の二つの如来像が本尊として並ぶ寺として、京都の嵯峨野の小倉山の麓にある二尊院があります。以前にこの寺を訪れたことがありましたが、小倉百人一首にゆかりのある地で何故か風雅な趣を感じました。

特に本堂で釈迦如来と阿弥陀如来を拝した時に、何か不思議な感覚を覚えました。普通は如来像の左右には菩薩像（例えば、釈迦如来では一般的に左に文殊菩薩、右に普賢菩薩が配置されます）が伴うのが普通ですが、二尊院の本尊は釈迦如来と阿弥陀如来の二つの如来像がこじんまりとあるだけでした。

優しさが表情に表れた二つの如来像を拝しながら、現世で救われ、来世は極楽浄土へ導かれる気配を感じられたのではと勝手に思ってしまいました。さらに本堂の脇にはこじんまりとした庭があり心が癒されるものがありました。二尊院を訪れた際の印象はまた別の機会に書こうと思っ

ています。

最近、体調が若い頃と比べるとあまり良くないこともあって、余計にこのように菩薩や如来に頼ってしまう心の弱さが出てきてしまう年齢に達してきました。人生は思っていたよりあっという間に時間が経過してしまい、何もやっていなかったなんて反省している今日この頃です。正に人生は光陰矢のごとしだと思えます。

一昨年のリーマン・ショック以来、日本社会全体に活気の無い状態が続いています。さらに国債や借入金などをあわせた国の借金残高が2009年度末に初めて900兆円を超え、10年度末には過去最大の973兆円に達する見込みであることが財務省の集計で明らかになりました。

この数字はあまりにもおおき過ぎて、庶民感覚ではどの程度の状況なのか判断がつきませんが、現時点で日本経済が閉塞感の中から抜け出すことが出来ない状況にあることは、誰もが肌で感じているところだと思います。

こんな景気状態であるから税収が伸びず、この税収で来年度予算の約40%程度しか補えないとのことですから、普通で考えれば絶望的な状況だと思います。企業であればすでに倒産していることになります。

このような状況の中で、いろいろな対策が打たれていますがどれも即効的な効果が出ていない状況です。とても不思議な気がします。いったい何が原因なのか素人的に考えて思い当たるものが一つ浮かびました。

それは、日本人が持つ国民性とでも言うのでしょうか、ある事象に対して悲観的な感覚で対応することが大きな要因となっているような気がします。今の状況が悪いから将来に備えて貯蓄をするために消費を抑える行動に出ます。庶民的には正しい選択肢であり、何を言おうこの凡夫でさえ無駄な消費を抑える行動をとっています。

物が売れなくなれば、売る側は価格を下げて売ろうとします。価格を下げればコストを削減しなければなりませんから、その分社員の給料やその他外部からの調達が増減します。そうすると全体的に経済の規模が減少するのは当然の成り行きです。

このような負のスパイラルのプロセスに入ってしまうことは当然のこととして考えられますが、個人的に経済はこのような理論だけで簡単に表わすことが出来ないものだと考えています。もっと人間的な要因により大きく影響されていると思っていますのです。

このような状況の中で日本人が敢えて取るべき行動はただ一つ、今できることを前向きになって行動することだと思います。いままで米国に次いで2番目の経済大国であったという自負がありました。しかし、いまや隣りの中国の高度成長に驚異を感じて悲観的になっている感があります。しかし、日本は捨てたものではないとの自負を再度認識すべき時が今だと思うのです。

米国ではトヨタが叩かれ、日本の自動車産業の行末が心配されますが、日本はまだまだ外に現われていない底力があることに目覚め、本来の日本的な素晴らしさを世界にアピールする必要がある

あると思います。

日本人は他の国に比べて貧富の差が小さく、本来の勤勉な国民性を最大限に発揮すれば必ずやこの閉塞的な経済状況を打破できると確信しています。もっと自信をもって行動することで経済は復活し、高度成長期の状態には戻らないにしても、バランスのとれた社会に到達することが出来ると思っています。

無駄を省きながら質を高めることにより、世界に通用するあらたな局面を迎えることが出来ると思います。そのためには国は子供手当のような表面的な支援でなく、労働市場を確保するような、社会の基盤を支える仕組みを構築し、積極的に投資すべきだと思います。

働きたくとも働く場が無いことがもっとも大きな問題だと思います。そして、日本人の持つ底力を発揮し、健全な社会を取り戻したいと思うこの頃です。

生意気なことを言うようであるが、この齢になると何事にも先が見えてくるような気がしてなりません。若いうちは全く考えもしなかったことですが、この齢になると全ての事象には有限性があるとの視点に立つことが出来るようになるので、自ずと見えてくるものがあるのです。

最近特に憂いていることは、日本という国の将来のことです。政権交代した時は、これで日本もあるべき姿の国に変わるのではとの大きな期待があったが、今は国の責任を預かる鳩山首相のリーダーシップの無さにより迷走しているのが現実です。従来の自民党とほとんど変わらない、あるいはもっと悪い状況に陥っているような気さえしています。

国だけでなく家庭でも会社でも方針や方向を決めることは、大きな意味を持ちそれだけ覚悟を持って取り組むのが普通です。家庭において景気低迷で給与が減額になれば、それなりの対応をし、生活レベルを変えなければなりません。従来と同じスタイルを続けることは出来ない事は誰にでも分かることであり、自分の欲を抑えるのが普通です。限られた資源のなかで如何に生きていくかを考えなければ生活ができないのです。

会社であれば、如何にしてコストを削減するかを真剣に考えそれに対応する施策を定め、実行することが経営者の責任です。特にコスト削減は、いろいろな所から不平不満が出てくるが、断固とした決意で臨まなければ会社が成り立たちません。

部下からの人気を気にしながら会社経営を行うような者は、始めから会社を動かす人物として不適格なのです。良く言われる事ですが、厳しい経営者ほど本当に優しい経営者であると思います。

厳しい判断を下した時は、周りから批判が多く出るが危機が去った後に初めて厳しい経営者の判断が正しかったと評価されるのです。このように、経営者は辛い立場を何度も経験して最後に評価を得る割の合わない仕事であるがゆえに、それなりの覚悟を持った者が行うべきなのだと思います。

それに比べて国の対応はどうかのでしょうか。強いリーダーシップをもって国のために真剣に考え対応している政治家や官僚がいるとは正直いって思えません。誰もが、自分の利益や権限を守るために慢心しているだけで、あるべき姿に向かって直球で進んでいる人がいないのが現状です。ただ意味のない調和を考えているだけだと思われます。

痛みを伴わない改革はあり得ないことは誰でも分かっていますが、いざ自分がその判断を下し実行する際には、自ら傷つきながら前進する気概をもった大物がいないのです。その点、評価は二分されますが、小泉純一郎は一直線に進んだ政治家だと思います。良い悪いは別にして、好きなタイプの政治家です。

全ての面で正しいことを成し遂げることができる人間なんていないと思いますが、判断しなければならぬときには、何らかの決断をするのがリーダーの責任であり、それが出来ない者はリーダーを降りるべきだと思っています。リーダーは孤独であるのが宿命なのだと思います。

友愛という言葉で人に優しくすることは重要であり否定はしませんが、痛みのない改革はあり得ないことを肝に銘じて、あるべき姿の国にして欲しいと思います。弱い者に味方することは間違っていないし、仏教を信じている私としても絶対に行うべきであると考えますが、全てが丸く収まることはあり得ないと思っています。

ある程度の犠牲は仕方のないことだと思うのです。仏教を信じる者として、釈迦と会話ができるのであれば、ある程度の犠牲の上に成り立つ多数の幸せの是非に関して、どのように考えたらいいのか、教えを請いたいと思っています。

日本の国の公的債務は、国内総生産の2倍近くに達し、世界に例を見ないレベルにまで来ているというのに、まだ友愛路線で突き進むのかと心配を通り越して最近は怒りを感じるようになって来ました。今は良いかもしれないが、いつかはそのツケが自分たちの子孫に回る確実な事実があることを、もっと認識しなければならないのだと思います。

このままでは、日本の国が危ないと真剣に考えるようになりました。国民の意識を変え、多少の犠牲を払ってでも正しい道を進む勇気を持たない限り、日本は世界から取り残され全体が駄目になってしまいます。

そのためには、全ての者が自分だけの視点で考えるのではなく、全体の立場で考え多少の犠牲

は受け入れることをすべきであると思います。また、犠牲による心の哀しさは仏教が癒してくれると個人的に考えるこの頃です。この状況を打破し、立ち上がれ日本！

## 国旗である「日の丸」と国歌である「君が代」

---

入学式や卒業式で国旗である日の丸の掲揚や国歌である君が代の斉唱を強要するのは不当だと  
して、東京の教育関係者などの教職員が都教委などを相手に、起立や斉唱義務がないことを求め  
た訴訟の判決が最近あり、東京地裁は起立、斉唱義務がないことを示した判決がありました。

個人的に政治問題や思想問題を語るのは好きではないのですが、今回の判決はこの訴訟以前の  
国旗とは何かとか、国歌とは何かという本来の問題がきちんと整理されていないことが大きな問  
題を抱えている原因だと思います。

世界のどの国でも、国の独立を示す象徴として国旗と国歌を持っています。そして各国は、互  
いの国旗や国歌を尊重し合い、敬意を払っているのが現実なのです。確かに時代の背景として、  
アジア近隣諸国への侵略を進めた大日本帝国による不幸な戦争の時代があり、その際に国旗や国  
歌が戦争推進に利用されたとの意見があるようですが、国旗が日の丸だから、あるいは国歌が君  
が代だから戦争になったわけではないのです。

憲法19条が保障する思想・良心の自由の侵害を前面に出し、教育の現場で国歌や国旗を認め  
ずに育った子供は、日本という国に対する帰属意識や自分の国と同じように他の国を認めたり尊  
重するような気持を持たずに育ってしまい、あくまでも自由が良いのだという風潮に流されて最  
も根本の重要な点が空洞化されてしまうことに非常に大きな危機感を持っています。

今の時代はあまりにも自由を尊重しすぎて、本来行わなければならないことを後回しにしてい  
るようで心配です。そして団体と個人の違いきちんと身に付けなければならない時期に国とは何  
かというものを学ばずに育ってしまっただけではないのです。

ですから今の日本は世界の国ときちんと相手は違う国だと認識した上で付き合ったりするこ  
とが出来ないのです。いい加減な考え方で他の国と付き合えることが出来ないことをもっと認識す  
べきだと思います。

私が当時通っていた小学校は、その時開校したばかりで校舎が工事中であり、さらに教室が少  
ないことから低学年は2部授業（午前と午後に分けて授業を行う）を行うほどでした。その時の  
思い出ですが、その当時出来たばかりの学校だったので校歌がなかったのです。

ですからバスで遠足に出かけた際に学校戻る道のりで決まってバスガイドさんが、「それでは  
皆さんの校歌を歌ってお別れしましょう」という時に、皆でシーンと黙ってしまう光景が何度も  
ありました。その話を聞いた当時の校長先生が急遽知り合いを通して校歌を作ってくれました。  
出来た時にはとても嬉しかった記憶があります。ですから、いまでも当時の小学校の校歌を歌う  
ことができますが、その後の中学や高校の校歌は完全に忘れてしまっています。

校歌と国歌は違いますが、それは集団の単位が異なるだけで基本は同じなのです。もっともっと集団の意味を重要視する教育を行って欲しいと思うのは私だけでないと思います。個人的には1999年に制定された日章旗・君が代を法制化した国旗国歌法を認めますし、きちんと行って欲しいと思います。

変な話ですが、日本の国の国歌と国旗は法律的に決められてまだ7年しか経過していないのです。その意味では世界でもっとも新しい国歌と国旗なのです。

## 愛犬ミルクの誕生日

---

我が家の愛犬ミルクがこの9月7日で満13歳の誕生日を迎えます。早いもので、我が家の家族の一員になって13年が過ぎようとしています。人間の歳に換算すると70歳です。13年前に片手にのるくらい小さな子犬であったのが、今や8kgの大きな身体に成長しました。

最近は何歳をとったからなのか非常にもの分かりがよく、手がかからない本当に良い犬になったと思います。大好きな事は、散歩と食べることです。散歩とごはんの言葉を聞くと尻尾を振りながら駆け寄って来る様子は、心から可愛らしいと思います。

犬と人間の付き合いの歴史は長く、人がこの世に現れてから間もない頃からとか、あるいはオオカミを飼いならしてきたというような説があり明確ではないようですが、昔から犬が人間にとって非常に大切なパートナーであったことは間違いないことです。

また2002年11月には、DNAを分析した結果から犬の祖先は、家畜化されたオオカミであるとの見解が発表されました。我が家のミルクにもオオカミの血が流れているのです。いつも優しい眼差しで見っていますが、何か異変に気付くと鋭い目になり、一瞬野性の動物に戻るような感じがします。

犬の嗅覚は全動物の中で最も優れており、人間の1200倍ともいわれているようです。また、聴覚ですが人間の数倍も聞き分けられ、高音は4万ヘルツまで聞くことができるということです。遠方の物音や獲物の声を素早くキャッチし、嗅覚と聴覚の両方で獲物を見つけるのです。ただ鼻や耳は素晴らしい能力があるようですが、目は近視なのだそうです。ただし、動くものには敏感に反応するようですから、我々人間と比べてもどの機能も皆素晴らしいものといえます。

我家の愛犬「ミルク」はシー・ズー犬です。まずはじめにシー・ズー犬の歴史から紐解いてお話しをします。

シー・ズー犬 シー・ズー犬の歴史にはいろいろな説があって統一的な見解は示されていないようです。ただ現時点ではっきりしているのはチベット原産の犬が大きなかわりを持っていることと、中国の宮廷でシー・ズーの原型が作られたということです。

チベットのラマ教では古来より優れた霊を持つ動物としてライオンを神聖化していたことから、このライオンに似た犬を育てる事にラマ僧もまた一般の人も熱心に取り組んだとのこと。こうして生まれたのがラサ・アプソ（ライオンドッグの一種）と言う犬です。

このような中で中国の唐の時代（西暦618年～907年）には、チベットから宮廷へしばしば贈られたライオンドッグがその後中国の宮廷で飼育に力を入れ、数百年にわたり飼育されてい

たペキニーズとラサ・アプソの混血によって現在のようなシー・ズー犬（中国語で獅子狗（シー・ズー・クウ）ライオンのような犬）が出来上がったのではないかとされています。特に清の時代の女帝西太后が特に寵愛したことによりシー・ズーは中国の宮廷で飼育され、何千人かの宦官によってより小型化とともにライオンドックへと改良されていきました。

このような過程を経てシー・ズー犬は発展しましたが、西太后が亡くなった後の中国革命を含む混乱の時期に多くの宦官は職を失いそれとともにシー・ズーも忘れられ、宮廷内のシー・ズーの多くは殺されていきました。このような中で生き残ったシー・ズーは中国人の家庭において飼育されていったようです。

また、中国人はシー・ズーが外国に持ち去られることを非常に嫌い、どんな手段を使っても防いだとも言われていますが、外国人高官の手に渡ったシー・ズーが中国からヨーロッパへ持ち出されヨーロッパでも知られるようになったようです。その後第二次世界大戦後にヨーロッパからアメリカに渡り広まりました。

日本ではシー・ズー犬がJ K C（ジャパン・ケンネル・クラブ）に初めて登録されたのは東京オリンピックが開催された1964年です。我家のシー・ズーは一体どの流れから来たのでしょうか。どちらかというヨーロッパ系は少し大型、アメリカは小型のようです。大きさの面で見ると我家のシー・ズーは現在体重が8Kgあるのでヨーロッパ系かもしれません。歴史の面からたどってくるととても奥が深く深淵な犬って感じがします。

J K Cのシー・ズーの定義（標準書第8版）で示されている性格の項目には次のような記述があります。「非常に明朗活発で、陽気で敏捷である。誇らしげで自尊心が強い。反面遊び好きの性格を有する。」正に我家のシー・ズー犬「ミルク」の性格そのままって感じです。貴婦人のような優雅さと子供のような茶目っ気があり、陽気で活発な行動の中に高いプライドを持っています。

無駄吠えは殆どなく利口で感情表現がとても豊かです。ただし適度に頑固で人に媚る事が少ないって感じです。飼い主の性格にそっくりな気がします。

犬に血液型があるのか分かりませんが、人間であれば「B」型だと思います。我家の愚息達も「B」であることから、我家の男性陣（「ミルク」は雄の13歳です）は私を含め全て「B」型ってことになります。これらの関係からかの知れませんが、意外と我家の男性陣は団結力が強いのです。

今も「ミルク」は私の足元で、このご主人さまは一体なにをしているのだろうと言う目でこちらを見えています。まさか自分のことが書かれているなんて考える術もありません。犬の年は人間

の約7倍の速さで年を取るようです。

これからも頑固な「ミルク」と散歩しながら男同士のいろいろな話しをしたいと思っています。そして私と同じようにモーツァルトを沢山聴いて（私がモーツァルトを聞いている時はほぼ傍にいたので一般の方よりもモーツァルトに接する機会が多い犬です）長生きをして欲しいとも思っています。

「馬の耳に念仏」ってのがありますが、我家では「犬の耳にモーツァルト」って感じですが、いや意外に我家の犬はモーツァルトにうるさいかも知れません。

この13年間、ミルクに助けられたことが沢山あります。一番大きいのは、家族の絆とでもいえるのでしょうか、結びつきが直接人間同士でなく、犬を仲介しての結びつきは人間と人間との間のクッション役のような機能が働いて、とても円滑に事が流れると思います。

また、こちらが落ち込んでいるような時には近くに寄ってきてちょこんと座り、何もせず一緒にいてくれたりします。犬にとってはただ飼い主の近くにいるだけであって、普段と変わらないのですが、人間からするとこちらに同情してくれているのかといい方向に勝手に考えてしまうことが往々にしてあります。

辛いことがあったときには、帰宅した際によくミルクを捕まえてその内容を話したものでした。じっとして最後まで聞いてくれます。ミルクにとってはいい迷惑かも知れませんが、おとなしく最後まで聞いてくれるのでとても良い捌け口的な役割を持ったパートナーです。話している言葉は分からないと思いますが、目を見ると感情を通じてこちらの心からミルクの心へ確実に届いていることが分かります。

このようにミルクに助けられたことが多いので、出来る限り散歩には一緒に行くようにしています。30分程度の散歩ですが、こちらの健康のためにもなるし、ミルクも喜んでくれるので一石二鳥です。また、散歩道を歩くことにより四季の移り変りを目や香や音で感じる事が出来ることも、素晴らしいことだと思います。

犬の寿命は10年から15年だそうですが、我が家のミルクには長生きして欲しいと思います。時々自分の子供よりもミルクのほうが可愛らしいし、大切なような気持ちになる時があります。自分自身、このような感情の変化がとても不思議に思えます。この背景には共通の言葉を持たずに、お互いにどのようなことを思っているのかを、素直な心で探りあいながら相手を知ろうとしていることがあるからかも知れません。

9月7日は我が家の愛犬ミルクの誕生日なのです。当日は年に1回だけですが上等な肉を食べさせてあげようと思っています。ミルク！お誕生日おめでとう。

## 「犬と私の10の約束」に関して

---

2007年の夏に発売された「犬と私の10の約束」という本が話題になっているようです。さらにこれを元に映画化され、来年の3月にロードショーが行われるようです。昔から犬は人間のパートナーとして非常に近い位置づけにある動物だと思います。

幼少の頃に犬を飼っている家庭が少なかったのですが、今は多くの家庭で犬が飼われています。平成13年の厚生労働省の統計によるとこの時点で全国の登録犬数は約600万頭です。4～5軒に1軒の割合で、犬を飼っている計算になります。しかし、現時点で近所を見渡して見ると3軒に1軒程度の家庭で犬が飼われているのではないかと思います。

10の約束の内容は以下に示すとおりです。どれも深い意味を含んでおり、感慨深いものがあります。

- 1 私と気長につきあってください。
- 2 私を信じてください。それだけで私は幸せです。
- 3 私にも心があることを忘れないでください。
- 4 言うことをきかないときは理由があります。
- 5 私にたくさん話しかけてください。人のことばは話せないけど、わかっています。
- 6 私をたたかないで。本気になったら私のほうが強いことを忘れないで。
- 7 私が年を取っても、仲良くしてください。
- 8 私は十年くらいしか生きられません。だからできるだけ私と一緒にいてください。
- 9 あなたには学校もあるし友だちもいます。でも私にはあなたしかいません。
- 10 私が死ぬとき、お願いします、そばにいてください。どうか覚えていてください、私がずっとあなたを愛していたことを。

愛犬ミルクと一緒に暮らしていると、これらの約束の内容は痛いほど分かります。我が家のミルクは既に10歳を過ぎたので、特にこれらの約束の中で7番目以降の約束が特に重要だと考えています。

時々、ミルクと共通の言葉があったらミルクはどのようなことを話してくれるのだろうかと思うことがあります。これまでに個人的には、愛犬ミルクに助けられたことが何度もあったので、これからは今まで以上に大切な仲間として付き合い、最後はきちんと見届けてあげたいと思っています。

このような意味において、ミルクは私にとっては重要なパートナーというか同士のような気持ちで対応しています。誰でも同じだと思いますが、何事も分かり合えることは非常に重要なことだと思います。

今も私の側でモーツァルトを聴きながら日当たりのよい場所でゆったりとしています。犬の聴力ですが、人間が20000Hz程度までしか聞こえませんがその倍以上の50000Hz程度まで聞こえるようです。どれだけモーツァルトの音楽を理解しているかわかりませんが、飼い主と一緒におとなしく聴いています。

人間はお互いを理解する共通の言葉を持っていますが、相互に理解できないことが多くあります。そのような状況の中で、犬とは理解し合えることは一体何なのだろうかと思うことがあります。個人的な結論ですが、これは根底にある相互の信頼感だと思っています。

ミルクのことを考えながらよく思うことは、人間ってどうして最後まできちんとお互いを理解しそして助け合うことを自然な形で出来ないのかと、悲しくまた残念になることがよくあります。犬との約束も重要ですが、人と人との約束はさらに重要だと思うこの頃です。

## もの哀しいオーボエの音色と自分と愛犬ミルク

---

読書の秋ではないですが、最近立て続けに五木寛之の本を読みました。「仏教への旅 ブータン編」「仏教への旅 日本・アメリカ編」、「弱き者の生き方」、「私訳歎異抄」です。個人的に見ると偏った作家とさらに特定の分野の本であると思いますが、無性に読みたくなり、読んだ後は心が穏やかになるという表現が当たっていると思います。

自分の考えた方に合致してる人の本を読むと何故か素直になれます。やはり人間には合う人と合わない人がいるのは仕方のないことだと思います。いくら理解しようと思っても最後は理解できないことは多々あります。そこまで努力しての結論であれば、それで良いのではないかというのが最近の考え方です。諦めることの重要さや大切さが分かったきたような感じがします。

自分の人生は20代の若者や30代の仕事盛りの年代と異なり、正に登りつめた山頂からゆっくりと安全に下山し始めたところだと思っています。プロのアルピニストに言わせると、山は登るよりも下山するほうが難しいとのこと。現に登山での事故は、圧倒的に下山時に集中するようです。きっと登ったという達成感から、気が緩んでしまうのだと思います。

同じように、自分の人生の山の下り方にも注意を要すると思うのです。ですから、昔のようがむしゃらに物事に取り組んで行く、どちらかというに登山をするようなものではなく、山の周りの景色を楽しむように、物事の真実やそのようになった経過や根底にある人間のどろどろとした思いに興味を沸いてくるようになりました。歳をとった証拠です。ちょうどモーツァルトのオーボエ協奏曲の第二楽章のオーボエの、もの哀しいけれど暖かい音色に似ています。

時々自分の書き綴りながら自分を見つめ、またどのようにしたら良いのかを考えながらただ時間が流れていました。自分の残された時間を考えると、もっと自分に素直に生きなければならぬと思うのです。

もっともっと自分に合った本を読みたいし、新たなモーツァルトが発見ができる演奏に触れてみたいし、自分の思いを正直にそして分かり易い文章にし、賛同していただける人に届けたいと思います。

そしてこれからは特に自分を大切にしようと思い始めています。時々若い人に、自分のやりたいことや好きなものを見つけ、思いっきりチャレンジしたほうが良いよなんて、自分が出来ないのに余計なお節介をしていた自分を笑ってしまいます。

最近話題にしていますが、我が家の愛犬ミルクも2007年9月に10歳になりました。人間で言うと60歳から70歳です。昔のように元気に走り回るようなことはせず、自分の好きな居場所にじっとしている時間が多くなりました。きっとミルクなりに何かを感じながら、そのよ

うな行動をとってるのだと思います。

仏教では輪廻転生という考え方があります。輪廻転生とは、肉体は滅びても魂は滅びることなく永遠に継続することをいいます。そして自分が行ってきた行為の良し悪しによって、六道輪廻（神・人間・非神・地獄・餓鬼・畜生）のいずれかの世界に生まれ変わるとされています。

ですから次に生まれ変わるときには人間になるとは限らないのです。ひょっとするとミルクのように犬になって命を授かるかもしれません。そのように考えると、全ての生き物の命の重さは、みな同じであることに気がつきます。

もう少し若いときにこのようなことに関して真剣に考える機会があれば、今の自分はもう少し変わっていたのではないかと思っています。しかし、これが人生なのです。

まだ気がついたから今からでも遅くはないと思っています。これからは今までと違った自分の生き方をしようと思います。このようなチャンスを与えてくれるのが五木寛之の本なのです。いつも心の安らぎを与えてくれるモーツァルトの音楽と、人生の生き方に示唆を与えてくれる五木寛之には常に感謝しています。

## 年末年始を愛犬ミルクと過ごし「自」と「他」を認識しました

---

2006年の年末年始は12月29日から1月8日までの11日間、訳あって愛犬ミルクとずっと一緒に過ごしました。このように年末年始を自分以外の事に時間を割いたのは初めての事でした。朝夕の散歩から始まって食べ物の世話だとか、ブラッシングとかその他の身の回りの世話を通じて、ミルクは毎日このようなやり方で時間を過ごしていたのかと改めて認識しました。

それまでは、朝と夜の行動しか見ていませんでしたが、今回は24時間一緒でしたのでほぼどのようなパターンで生活しているかが分かりました。今年10歳を迎えるミルクは、人間で言うと60歳を越えており、寿命という年齢の物差しで比べると当に飼い主の私を越え先輩になりました。

生まれて1ヶ月も経たないうちに我が家の一員となった当時は、ちょこまかちょこまかと家の中を歩き回っていた昔に比べると、最近は年のせいか動作が遅くなって来ていますし、10年近く我が家で一緒に居ることからこちらの言うことが分かるようになってきています。

言葉は分からなくとも、たぶん人間の行動を犬なりにしっかりと把握できるようになった証拠ではないかと思います。その意味では、犬はかなり賢い動物といえると思います。

さて、ミルクと一緒に11日間ですが仕事はいっさいせずにモーツァルトを聴いたり、読書をしたり、いままで手付かずであったことを少しずつ片付け、自分なりに充実した時間を過ごしました。自分でも仕事しなくていいのかとの強迫観念に押されてしまうなど、心の葛藤がありました。正直言って、気になる仕事もあり少々不安でしたが、仕事に手をつけることなく自分のためとそしてミルクのために時間を費やしました。

その背景には、私一人が頑張ってもあるいはいなくても世の中とか組織の動きは短期的には変わらないものだとの考えがあつてのことです。今にして思うと、昔は休暇中であっても仕事をするなど自分の何かをぶつける先として、仕事を選んでしまっていた時期の自分は、まだまだ未熟であり、自分が確立できていない証だったのです。

今回の長期の休みの中で唯一自分のためにしたことは、以前に奈良の薬師寺金堂に鎮座する薬師三尊像（薬師如来、日光菩薩、月光菩薩）を拝顔しに訪れた時に、僧侶から人としての生き方や薬師寺の復興の歴史を拝聴した後に般若心経の写経セットを購入しましたが、これまで写経する時間がなく新しい年を迎えてしまいました。

今回の長期の休みを機に、般若心経の262文字を写経したのでこれを薬師寺に送り、永代供養していただくことにしました。262文字を書きながらたったこれだけの文字の中に、宇宙に匹敵するような無限の広がりを感じましたが、まだまだ真の意味を自分のものとして消化する段

階までになっていないので、般若心経の流れるような響きからさらに一歩進み内容を理解し、これから本当の般若心経の世界とその心を体感したいと思っています。

今回のようにミルクと一緒に過ごした時を振り返ると、同じ時間の流れの中にあっても、のんびりと感じられる時間の流れと、えっと思えるほどに早く時間が過ぎてしまう体験を味わいました。絶対的な時間の流れの中で、感情や意識がその時間に対する感覚をコントロールしているように思われました。今回の体験を通じて、時間という概念がますますわからなくなって来てしまいました。

若い頃に過去の偉大な人々の遺産や業績である書物をもっと沢山読んでおけば、少しはこのようにときに役立ったのではないかと、この歳になって悔しく思っているところでもあります。

また、この11日間自分よりも他の者のために時間を割いたことが自分にとって非常に勉強になりました。今までは、何事も自分を中心に物事を考え対応して来ましたが、今回は極端な言い方をすると自分を捨て、他を中心として考え、如何にして他のためになる事が出来るのかを考えながら過ごしたのです。

はじめから計算ずくしで行動する人も中にはいますが、そうではなく素直な気持ちから手を差し伸べるとか行動を起こすというような自然な流れが、特に重要だと思っています。また、押し付けでなく自然とそのように感じられるようなもって行き方が大切だと思います。

「自」と「他」を無限的な次元にまで押し広げてその意味を考えると、ブッダのように悟りを開く事が出来るのだと思います。ただ、いい加減な私が一時的にでも自分のためでなく、他のために行動したことを振り返って考えると、とても気持ちがよく後味の良い経験をした感じがしました。

これは決して遣ってあげたとかいうような感覚でなく、素直な気持ちで取り組んだからの結果だと思います。この気持ちの延長線に無の世界や悟りの境地につながるヒントがあるような気がします。

## 愛犬ミルクとの散歩で見つけた遊歩道の土竜（モグラ）さん

---

愛犬ミルクとの散歩でいつも感じることは季節の移り変りとでもいうのでしょうか、何気ない自然の中の変化に対して驚きを感じるが多々あります。空の色や、木々の葉の色や、空気の香りや花の色など、どれ一つをとっても永遠に変わらないものはなく、時間の流れに従って変化しています。

あるものはゆったりとした時間の中で徐々に変化していくものもあれば、翌日には様変わりしているものもあり、自然の持つ摂理に従って素直に受け入れる様は、何故か真理のようなまた生き方の哲学のようなものを感じます。ですから、愛犬ミルクとの散歩は1回あたり30分程度のものですが、運動不足解消や愛犬と飼い主の意思の疎通維持だけでなく、大袈裟に言えば人生の勉強の場でもあるとも言えるのです。

さて、先日ですがいつものようにミルクとの散歩で遊歩道を歩いていた時ですが、遊歩道に面して建っている教会の前の庭にある桜の木の根元周辺の土が、こんもりと盛り上がっている箇所が数箇所あるのを見つけました。今までにもこのような光景を何度も見ていましたが、今回は特に興味を持って眺め、モグラがどうしてこのような場所に生きているのか何故か考え込んでしまったのです。

モグラは、哺乳類、食虫目、もぐら科の動物で、オーストラリア以外の世界各地にいる動物のようです。モグラそのものの餌は、ミミズが主食で、あとは昆虫くらいしか食べず、作物を食べたりはしないのですが、その掘る力で作物の木の根っこを痛めてしまうことから畑を持っている農家の方に嫌われているようです。1日に自分の体重と同じくらいのミミズや虫を食べるとの報告があり、びっくりしています。

確かに遊歩道では、夏になると何故かアスファルトの上で暑くて動けなくなっている大きなミミズによく出会います。それだけ遊歩道の周辺の土が肥えている証拠なのだと思います。ですからモグラがこの遊歩道の周辺で生きていけるのだと思いました。

モグラの天敵はきつねや狸さらにへびとのことですが、東京郊外の遊歩道ではきつねや狸はいないし、近所にへびが出る話しも聞かないし、さらにモグラ退治の機器が設置されている様子もないので、モグラにとっては天国なのかも知れません。

モグラは、ぬいぐるみなどで子供には人気のある動物ですが、農家やゴルフ場の経営者からは作物に間接的な被害があったり、また芝生のコースが凸凹になったりするので嫌われもののように扱われています。しかし一方でモグラは、コガネムシの幼虫や根切り虫などの害虫を食べたりしてそれらを退治したり、また好気性バクテリアなどが落ち葉を土に変えるのにもモグラの通路が空気の通り道として役立っていることも考えられます。この自然の中でその存在自体が全て悪

であるようなことは決してなく、どこかの面で役に立ってそれが全体的に循環しているのだと思います。

モグラは、地中の生活空間を生き抜くために、光のない闇の地中世界で不要な目を退化させ、その代わりに穴を掘るために手や爪が特殊に発達しているし、またミミズ等の虫を確保し易くするために、42本の臼歯は虫を食べやすいように、とがった突起があるなど、ある意味では進化させて今に至っているのです。

また昼夜の区別なく活動し、ミミズを効率よく捕獲するためにトンネルの中を前進と同じくらいすばやく後退することが可能とのことなので、ちょっとその行動を想像するとユーモラスな感じさえます。

英語のイディオムに、make a mountain out of a molehill の表現があり、直訳は「もぐら塚から山を作る」ですが、「なにかの重要性や難しさを誇張すること」との意味で使われているようです。英語でモグラはmole（モウル）ですが、商店街はmall（モール）で、発音やスペルが異なりますが、モグラの動く行動様式と人間が商店街で買い物をする様子が何故か同じような感覚に思え、笑ってしまう自分がいます。

さて、我が家の近くの遊歩道に生活しているモグラですが、未だにその正体を見たことがありません。今頃地中の中を掘りまくっているのかも知れません。ささやかですが、このような自然はこれからも残しておきたいと愛犬ミルクとの散歩をしながら考えました。

## 奈良・思い出の寺を訪ねて

---

今から35年ほど前の春のことになりますが、高校の修学旅行で奈良と京都にいきました。その当時の修学旅行としては全国的にも珍しく、全て自分達で訪問先を計画し少数のグループ行動をするものでした。私は仲の良かった4名（残念ながら全て男性でした。他のグループは男女混合でしたが・・・）と奈良・京都の寺社仏閣を回りました。今思い出しても1ヶ所だけ印象に残っている以外、どこへ行ったのか記憶が定かではありません。唯一心に残っている寺が奈良にある秋篠寺なのです。

この寺にあった白木蓮と優しく美しい形をした国宝の本堂、そして技芸天立像が心の片隅に何故か残っているのです。ある時、五木寛之の百寺巡礼を読んでいて、この秋篠寺の文字に触れた時、過去の記憶が一挙に蘇ったのです。

出来れば行きたいと思い奈良の道路地図を購入して眺めているうちに、ますます行きたい気持ちが募り、とうとう先の土曜日に愛車で奈良の土地へ踏み入れました。なんと津から1時間30分で天理市に到着するほど奈良が近かったことに驚きを感じています。

国道25号で一路奈良へ走り桜峠を過ぎると突然に眼下に奈良盆地が広がるのを見た時、何か嬉しさというか優しさのような感じを受けました。昔の旅人も急に眼下に奈良とそしてその背後に広がる奈良と大阪の稜線を作る生駒山、信貴山、葛城山、金剛山等の山並みの美しさを見た時、その光景はそれまでの疲れを忘れさせてくれたと思われまます。

目的の秋篠寺には10時過ぎに到着しました。津を出てちょうど2時間でした。時間が早かったのだと思いますが、秋篠寺の駐車場にとめることが出来ました。期待を膨らませ本堂へ向かいました。白い砂利を一步一步踏みしめながら本堂の前に立ったとき、35年前と何も変わっていないことが何故か嬉しく、そしてこれからもここにずっとあるのだと思うと、この寺が建立された奈良時代の末期（776年）から今までと同じように今後ともこの土地にあり続けるという当たり前ですがそれがなんとも言えず凄いことに感じてしまいました。

ただ一つだけ残念だったのは、季節が終わってしまった関係で白木蓮が咲いていなかったのが心残りでした。暗い本堂の中に入るとそこには愛染明王、帝釈天、不動明王、薬師如来、日光菩薩、月光菩薩、十二神将、地藏菩薩、技芸天、五大力菩薩が薬師如来坐像を中心に配置されていました。

目的の技芸天立像は、大自在天（ヒンズー教のシヴァ神）の髪際から化生せられた天女で、衆生の吉祥と芸能を主宰して諸技諸芸の祈願を納受するものとされています。芸術の神様とでも言えばいいのでしょうか。頭部は奈良から平安時代に作成された乾漆によって作られていますが、胴体部分は平安時代の大火で損失し、鎌倉時代に木造で補強されたとの事です。

首を少し左に傾け、右手を上、左手を下に示し優雅で優しさをもった顔つきで美しく立っています。像の高さは2m強ですが肩のなだらかな曲線がそうさせるのかもしれませんが、その大きさに見えないのが不思議です。スポットライトにより影がくっきりと浮かび上がっていますが、その姿は女性でなく強い勇者のシルエットに見えるのがまた不思議です。芸の道の厳しさが表れているのかと思ってしまうのは考え過ぎでしょうか。

時代と多くの時を経ているので、表面の色彩は殆ど薄らいでしまっていますが、作成当初の色彩が鮮やかであった時に見た場合、どのように感じられるかも興味があります。今は薄れてしまった像を見ながら安らぎを得ることが出来るだけで満足です。

また、本堂の中心に座している薬師如来坐像も大変に素晴らしいと思いました。優しく流れるような、どちらかという表現が変ですがつるつるした感じの如来で、苦悩を救うより全てに安らぎを与えていただける感じがします。

また仏像は一般的にそうだと思いますが、耳が大きく（この薬師如来坐像は額から顎まであります）それが異様でなく美しいと感じました。昔から耳の大きい人は大成すると言われていますが、なるほどと納得してしまいます。

本堂の中で仏像を見ながらいろいろなことを考えていると1時間も経っていました。その後、西塔跡と東塔跡（特に東塔跡には基礎石が残っており、当時の建築技術の高さが窺えました）を見ました。そして新たな思いを秋篠寺に残しながら後にしました。

また、この秋篠寺の苔庭は大変に美しいので苔の美しい時期に再度訪れてみたいと思いました。秋篠寺は単純そして素朴がぴったりの寺だと思います。奈良を訪れる機会がありましたら秋篠寺まで足を延ばして下さい。きっとあなたの心に響く何かがあると思います。

この日はこの後、秋篠寺の近くにある平城宮跡に立ち寄りしました。平城京は元明天皇の和銅3（710）年に飛鳥の藤原京から遷都して以来、途中で恭仁京や紫香楽宮へ遷都された時期を除くと、784年の長岡京遷都にいたるまで、日本の政治の中心でした。

7代70余年の間、都が置かれた所です。あのような広大な場所に築いた都が長い歴史の中でたった70余年しか都の機能を果たさなかったとは不思議な感じがしてなりません。

平城京の規模は東西4.3km、南北4.8km、東に外京（げきょう）と呼ぶ張り出し部分（東大寺等がこのエリアに入っています）をもった壮大なものです。京の正門にあたる羅城門（らじょうもん）から朱雀門（すざくもん）まで幅74mにおよぶ朱雀大路が貫き、これを中心に大路、小路

が碁盤目状に走っていたようです。

当時ここに20万人（10万人説もある）が住んでいたと推定されていますが、その数の多さに驚いています。この中で、平城宮は京の中央北寄りに東西1.3km、南北1km、甲子園球場の30倍という広さを占めていました。

平城宮には、天皇が住む内裏や大極殿、朝堂院ほか、さまざまな政治を行う役所の建物が建ち、大勢の役人たちが働いていたようです。平城宮跡にある平城宮跡資料館では、遺跡の発掘の様子から当時の暮らしまでを分かり易く展示・解説しており、私のように古代の歴史に初めて触れる者には勉強になりました。なんと入館料は無料です。太っ腹！！

現在大極殿の復元工事が行われており、あと数年後には壮大な建物の姿が現われるようです。また、内裏跡には、その柱跡に円筒状に刈ったツゲの木が植えられていて、見る者の目を楽しませてくれます。広大な平城宮跡を、ありし日の姿を想像しながら歩きましたが、この場所で当時の人は、何を思い、どのように生きていたのか興味が尽きませんでした。

北に平城山（ならやま）、東に大仏殿の大屋根、若草山、春日山が見え、大和青垣の山々が南の三輪山へと伸びています。西は生駒・信貴の山なみがあり、どこまでものどかなゆったりとした風景が過去の時間へと繋げているような錯覚を覚えました。雑多な日常生活から抜け出し、1300年ほどの時間をタイムスリップしてこのような古代の都の跡を訪れて、暫し現在の時を忘れるのも良いことだと思った次第です。

このような体験をした後に、先日雨の中でしたが、津から車で30分ほどの三重県多気郡明和町にある齋宮歴史博物館を訪ねました。飛鳥の時代から南北朝時代のはじめまでの、約660年間にわたって歴史の舞台となった齋宮（歴代天皇に代わって伊勢神宮に遣わされた齋王の御殿とその事務を執り行った齋宮寮のこと）跡に建てられた博物館であり、その中の展示品や齋王を分かり易く解説した映画を観てまた新たな発見をしました。

三重県には伊勢神宮があることから、このような歴史ある場所が県内に多くあります。さて、齋王に関してですが、簡単に言うと天皇に代わって伊勢神宮に仕えるため、天皇の代替りごとに皇族女性の中から選ばれて、都からはるばる伊勢に派遣される制度のことです。

最初の齋王は、天武天皇（670年頃）の娘・大来皇女（おおくのこうじょ）で、制度が廃絶する後醍醐天皇の時代（1330年頃）までに、記録には60人余りの齋王の名が残されています。すなわち延べ60人の齋王が、この地に住まい、年3回（6月、9月、12月）伊勢神宮に天皇に代わって詣でていたのです。

源氏物語の中にもこの齋王のことが出てきます。王朝文化の華やかな時代です。また齋王は独

身の皇族女性なので、都から三重のこの地に来るのは天皇の命とはいえ女性として寂しい思いをしたのではないかと思います。

ここを訪れて興味を持ったことは、京から伊勢への旅（群行（ぐんこう）と呼ばれる）です。齋王に仕える官人・官女に加え、京極まで見送る勅使などを含めると500人を越える壮麗な規模のものだったようです。

京を出発したのち近江国の勢多（せた）・甲賀（こうか）・垂水（たるみ）、伊勢国の鈴鹿（すずか）・一志（いちし）に設けられた頓宮（とんぐう）と呼ばれる仮設の宮に宿泊し、5泊6日の行程で伊勢に赴いたようです。歴史博物館でこの様子を映画でみる事が出来ますが、観ているうちにその当時にタイムスリップしたような錯覚を覚えます。

今まで知らなかった世界がそこに開け、当時の皇族の生活が想像できましたが、この時の一般の人の暮らしはどうだったのか気になるところです。仮にこの時代に生きていたら自分は庶民の位で生きていたと思うので興味があります。きっと現代人よりもたくましく生きていたと思われます。反対に弱いものは簡単に死んでいった時代だと思うのです。ですから、ここに神とか仏のような神道や仏教が栄えたのだと思います。

今回、平城宮跡と齋王歴史博物館を訪ねて、今から1300年も前の時代を生きた人々の地を訪れ、そして古人に想いを巡らし歴史の重みというか人生の巡り合わせというか、はたまた悠々たる久遠の時間の流れのようなものを感じたひと時を過ごしました。生きるっていうことは凄いことだなあと妙に感じいった次第です。

## 中将姫の當麻寺を訪ねて

---

前に奈良の秋篠寺を訪ねた話しをしましたが、今回は秋篠寺を訪れた帰りに立ち寄った當麻寺についてお話ししたいと思います。この寺に興味をもったのは五木寛之の小説に数回出てくるからです。私の知る限りでは「大人の時間」と「風の王国」の作品の中で主人公がこの當麻寺を訪ねる場面があり、そしてこの寺の「奇跡伝説のヒロイン」である中将姫像を見た主人公の感想がそれぞれ書かれています。

當麻寺は二上山（にじょうさん）の麓にある寺で、二上山は生と死の世界を分ける山として万葉の時代には畏怖の念を込めて「ふたかみやま」と呼んでいたそうです。朝日が昇る東の三輪山と夕日が沈む西の二上山、そしてこれらの山の間広がる大和の大地を現世とし、日が沈む西の彼方を来世と考えると、この二上山を生と死を分ける山と考えたのも頷けます。

現に聖徳太子や推古天皇、孝徳天皇といった多くの天皇や皇族たちの墓が二上山の裏（當麻寺から山を見ると西にあたる現在の河内）に作られているのも納得がいきます。奈良のお寺はそれぞれに歴史がありさらに政治や権力さらに宗派等との軋轢のなかで生き抜いてきたのですから素晴らしいと思います。

その中でもこの當麻寺は、宗教等を超えた人間の生と死を二上山という地勢的な山を背にしてさり気なく示しているところが他の寺と異なる点であろうと思います。二上山に係わる事実を知らなければ牡丹が美しい寺や中将姫像や當麻曼荼羅図がある寺で終わってしまいます。それでちょっと寂しい気がします。二上山や當麻寺の歴史を知ると、人間が死んだら何処へ行くのといった小さい頃からの疑問が直に解けてしまう感じがするのです。

さて、この寺の「奇跡伝説のヒロイン」である中将姫について少しお話ししましょう。中将姫は奈良時代の右大臣であった藤原豊成の娘といわれており、幼くして実母を亡くしたのち、継母から命を狙われていたことで16歳の時に二上山の落陽に導かれて當麻寺へたどり着いたとされています。

しかし当時は女人禁制であった當麻寺へは簡単に入山できなかったのですが、一心に念仏を唱えついに尼僧となりその後29歳の若さで亡くなったとされています。この間に阿弥陀如来や観音菩薩の加護を得て、5色に染めた蓮糸で現在国宝となっている「當麻曼荼羅」を一夜にして織り上げたと伝えられています。

本堂の右脇の部屋には観音菩薩像がありここで織り上げたとされています。この中将姫の像は本堂の右手に祀られていますが、その像は袈裟をまとい手に数珠を持って合掌しています。若々しい顔は、少し目を細め、唇には鮮やかな赤い紅がひかれています。顔の頬の部分は時の流れによるものだと思いますが、汚れているとともに色も少し失せています。

口元がかすかに開いているようで全体的に微笑んでいるような感じを受けます。ちょっと不思議な感じですが。ちょうどモナ・リザの微笑みのような雰囲気があります。五木寛之はこの中将姫像を見て、「大和のモナ・リザ」と言っています。

また、この中将姫が一夜にして織り上げた「當麻曼荼羅」は西方極楽浄土の壮麗さを表したもので、難しい教理の説明でなく誰にでもよく分かるように絵にして示したものです。内容はインド宮廷の秘話に阿弥陀十六想観と九品往生の姿を物語風に配置したものです。描かれた絵にはそれぞれ物語があります。この内容をまとめた「當麻寺曼荼羅絵説き」という本が寺にあったので購入し現在読んでいるところです。これにより新しい世界が広がるような感じがしています。

宗教に関して余り関心がなかったのですが、奈良の寺を巡っているうちに何故か自分の心に潤いが出て来た感じがしています。それだけ心が乾ききっていたのかも知れません。五木寛之が最近盛んに述べている中に「心の乾き」があります。本来あるべき日本の湿り気のある心や生活が必要だと訴えている根底の一端に触れたような感じがしています。

また、金堂には白鳳時代の国宝である弥勒仏坐像がありますが、顔が優雅で優しさを感じる弥勒仏でした。自然と手を合わせて合掌してしまいます。さらに奥の院には浄土を現した庭園があります。この當麻寺に来ると浄土のことが全て分かってしまうような気がします。

皆さんも一度訪れたらいかがでしょうか。二上山を背にして誰もいなくなった境内をゆっくりと歩きながら當麻寺を後にしました。心が軽くなりまた弾んでいる感じで奈良路を後にし軽快に愛車を飛ばしながら津に帰ってきました。

## 女人高野「室生寺」を訪ねて

---

7月の下旬の土曜日に女人高野で知られる「室生寺」を訪れました。この室生寺は三重県の西側にある名張市から車で20分程度の山の中の渓谷沿いにあります。訪れた時は夏真っ盛りで社務所の横の仁王門から奥の院まで、なんと700段の石段が続きます。

夏の暑い中、汗を拭き拭き石段を踏みしめながら登りました。女人高野というだけあって参拝客の8割程度が女性でした。今までに奈良の寺をかなり回りましたがこれほど女性が多かった寺はありませんでした。

室生寺のあるあたりの一帯は、太古の火山活動によって形成された場所で、その中心が室生山のように、大和の日の出の山として知られている三輪山の麓に、松原神社という古社があるそうですが、ここは古墳時代の初頭に太陽の神として天照大神を祀った所とされています。不思議なことにこの室生山はこの松原神社の真東にあり、さらにその真東に伊勢内宮の元の社地とされる伊勢の斎宮跡があるようです。

このような太陽祭祀にまつわる「太陽の道」の線上にこの室生山があるのも、偶然のことではなく古来からこのような信仰の歴史が背景にあるのです。そして奈良時代の末期に皇太子の山部親王（後の桓武天皇）の病氣平癒の祈願のため、五人の僧がこの聖なる室生山の山中で祈禱をして優れた効果があったことから、ここに室生寺が建立されたとのこと。

室生寺で有名なのは五重塔ですが、屋外の五重塔としては、16.1mで日本一の小ささとか、実際に見ても可愛らしいものでした。1200年前の建立と言われており、それを取り囲む周りの杉の大木が樹齢およそ600年とか気が遠くなるような静寂な時間の流れが漂っている感じを受けました。

室生寺を訪れて頭に浮かんだ音楽は、フォーレのレクイエムの中の第5曲目にあたる「神の子羊」です。暗い教会の中へ突然に一条の光が差し込んで明るくなる感じで、静寂でとても美しい旋律がびったりするような感じです。仏教でもキリスト教でも最終的には人間の精神と心の根本のところを扱ったものですから和洋東西関係無く共通のものがあるような感じを受けました。

仁王門から石段を登りだして途中に金堂そして700段を登りきったところに奥の院があります。途中にある五重塔は、平成10年の台風で木が倒れたことにより損壊しましたが、国内だけでなく海外からの支援もあり当初予定より早く2年がかりで修復されたようです。

それぞれが古い建物でしたが、それがまた素朴さや清楚さを感じる要因になるのだと思います。汗を垂らしながら登りきった喜びと、時折流れる山の清々しい風の爽やかさがまた格別です。信仰心とは、このような外部環境要因も大きく影響しているのではと思います。

奥の院までの石段を登っている時に遠くで雷の音がしました。全て参拝し、社務所まで戻ってきた時に小雨が降りだし、車を止めた駐車場へ向かう前に大雨となり仕方なくお土産やの軒を借りていたら、お店のおばあさんが中に入りなさいといって椅子も貸してくれました。

落雷を伴い時々雹が混じるほどの豪雨が30分ほど続きました。小降りになった段階で、お礼を言って駐車場にもどり室生寺を後にしましたが、名張市内に入って驚いたのは雨が降った形跡もなく室生寺のあの豪雨はいったい何だったのだろうと思ったほどでした。

人間の人生でめぐり合ういろいろな困難も、今回の室生寺の豪雨と同じようにじっと待てばそれが嘘だったように青く晴れた青空が広がるものだと思います。人間が持つといわれている108個の煩惱も考え方や見方を変えれば少しでも解決できるものだとも思いました。何故ならば煩惱は、我執（自己中心の考え、それにもとづく事物への執着）から生ずるからです。

今回真夏の暑い中、室生寺を訪れたことは少しだけ人間として成長する機会になったような気がしました。真言密教の根本道場である高野山が、厳しく女人を禁制したのに対し、室生寺は女人にも開かれた道場「女人高野」として広く親しまれるようになった背景にも何か室生の地が持つ開かれた気の流れが影響しているのだと勝手に思った次第です。

## 奈良の寺と心の安らぎ

---

ここ2ヶ月程、こころの安らぎといったものがなく、こころが乾燥しきっていた状態が続いていました。良くない事が重なる時は本当に容赦なく来るものだとし振りに感じました。

若い頃にもこのようなことは何回かありましたが、この歳になってこのような状況に直面すると以前よりも、もっと深く考え込んでしまう自分を発見します。

良かれと思って行動したことがまったく別の結果を起こしてしまい、さらに悩みが広がってしまうこともありました。自分だけの人生であれば、どうにでも出来ますが他の人を含めたものであると、なかなか自由に対応できないもどかしさも感じます。

相手に思いを伝える難しさ、そして相手の言っている内容を100%理解する難しさを感じました。時々逃げ出したくなる気分になります。そのような事態になっても逃げ出さずに頑張ろうとする心がまだ少し残っているので、何とか続けているのが本音のところでは。

この歳になるとそろそろ自分を痛めつけなくてもいいのではとか、もっと自分の好きなように自分らしく生きてもいいのではないかと思います。一方で他の人とともによい方向に持っていくことができたらなあと思う心が存在し、またその気持ちが大いことからずるとこのような気持ちを引きずりながら生きているのだと思います。

このような状態の中で、久しぶりに奈良を訪れる機会がありました。生駒の宝山寺、奈良の般若寺、新薬師寺、白毫寺を周りました。

般若寺の文殊菩薩像は、小さいながらもきつい目から放たれる威厳のある理知的な不思議な力を感じました。天平7年(735年)に聖武天皇が平城京の鬼門を守るために「大般若経」を基壇に納め塔を建てたのが寺名の起こりとされています。般若経に興味を持つものとして訪れて良かったと思った寺でした。

また、本堂の周りに33の観音石仏像も素朴な面影で接してくれるので、ほっとする安堵感が得られます。別名コスモス寺とも呼ばれ、コスモスの咲く時期に訪れるとまたなった感じを受ける寺ではないかと思えます。

新薬師寺は、なんといっても天平時代の本堂と、本尊の薬師如来坐像はもちろんのこと、本尊の周りに配置された12神将像です。これらは土をこねて作った土の芸術であり塑像と呼ばれています。

これらの12神将は薬師を悪魔から守るための軍隊の大將でそれぞれ7000人の兵士をもつ

ていたといいますから全部で84000人の兵が薬師を守っていたことになります。

大将とそれぞれの兵は十分に心が通じた関係にあり大将のほんの少しの動きに対して敏感に対応しそれぞれの役目を果たしたようです。どの神将の顔も怖く威厳のある顔立ちですが、その心はとても穏やかなのです。本当の大将とはこのような資質を持ち合わせていなければならないと思います。個人的には、本尊の薬師如来坐像よりも12神将像に感銘を受けました。

また、本堂の作りが天平時代の作りであり、こころが和む素朴な美しさ持つ建物で、長時間眺めても飽きない作りです。人間の心と一体化する力があるような気がします。同様の思いがするのは他に秋篠寺があります。

白毫寺は高校生の修学旅行で行った場所であったので新薬師寺の後に訪問しました。当時の記憶は全くありませんでした。高円山のふもとにある白毫寺ですが、その場から眺める奈良の都の景色は趣があります。

奈良を訪れた日は晴れた暑い日であったため、汗を拭き拭き石段を登り白毫寺を目指しました。到着後に飲んだ水のおいしさは忘れられません。大袈裟な言い方をすれば何かをやり遂げた後の達成感のような感じでした。

久しぶりに奈良を訪れ、それぞれの寺で心の安らぎが得られてことはとても良かったと思います。やはり奈良は日本人のこころが残っている数少ない土地だと思いました。

## 京都大徳寺（龍源院）で観た小宇宙

---

昨年京都を訪れた時に大徳寺界隈に足を運び、枯山水を中心とした庭を観て感動した話について書こうと思います。大徳寺は、紫野の一角にあり21の塔頭からなる洛北随一の禅宗寺院です。鎌倉末期の元応元年(1319年)に禅林の双壁と称された大燈国師によって創建され、それ以後時の政治権力と深くかかわりあって、ある時は栄えまたある時はその地位が下落するという正に栄枯盛衰の華々しい流れを生き抜いた寺でもあります。

政治権力が形として現れるのは、建武元年(1334年)に後醍醐天皇がこの大徳寺を保護し、京都五山の上位に位置づけましたがその後、足利氏が天下を取ると後醍醐天皇と関係の深い大徳寺は五山十刹から除かれてしまい、至徳3年(1386年)には、なんと五山十刹の十刹の第9位までに落とされることになったのです。

このため大徳寺は、五山十刹から離脱し本来の座禅修行に専心する独自の道をとったのです。このように五山十刹の寺院を通常「叢林」と称するのに対し、同じ臨済宗寺院でも、大徳寺や妙心寺のような在野的立場にある寺院を「林下」と呼ぶようです。

今回の旅では妙心寺にも立ち寄りしましたが、この妙心寺も大徳寺と同様に当時のランク付けによる政治からの締め付けがかなりあったとの話を聞きました。また、石庭で有名な龍安寺はこの妙心寺の末寺であることはあまり知られていないようです。

さてこの大徳寺には、千利休と関係の深い「聚光院」や織田信長の菩提寺「総見院」、沢庵和尚が住んだとされている「大仙院」、さらにNHK大河ドラマ「利家とまつ」で有名となった「芳春院」など、大徳寺は鎌倉末期から江戸時代にわたる多くの文化財を諸大名が競って塔頭を建立したことから、どの寺院でも歴史上の人物との関係を多く見ることが出来ます。

前置きが長くなりましたが、この大徳寺の中で常時拝観が可能な寺は、龍源院、瑞峯院、大仙院、高桐院のわずか4院だけなのです。駆け足になってしまいましたが、この4院を拝観しました。どの寺院も素晴らしい庭があり、心が落ち着きました。中には再度訪問したい寺院の庭もありました。しかし、商魂たくましい寺院もあり、ここまでやるのかと思うところもありましたが、今回は寺院の経営方針には触れずに、純粹に枯山水の庭について感じたことを書きたいと思います。

### ○阿吽の石庭【龍源院】

龍源院の書院軒先にある石庭で、左右にそれぞれ「阿の石」と「吽の石」の2つの石で構成された本当にシンプルな石庭です。阿吽とは吸う息と吐く息のことで、天と地、陰と陽、男と女、電気の+と-など、どの一つをも切り離すことの出来ない宇宙の真理を、この阿吽の庭に表現し

ているのです。

またこの石庭の東と西の基礎石は、昔秀吉が建てた聚楽第のものだといわれています。この世は常に相対極する2つの要素が調和しながら一つの事実やその時の状態を作り出して流れて行くのだという考えは、私の根底にある考え方と一致し、とても素直に心に沁み込んで来た庭であり、さらに安らぎを感じた庭でもありました。訪問した日は暖かく体も心もぽかぽかという気分でした。

#### ○東滴壺【龍源院】

この東滴壺は、龍源院の方丈の東にある壺庭で日本で最も小さい庭だそうです。大きさは2坪ほどではないかと思います。一滴の波紋から大海原の広がりイメージさせる枯淡な壺庭です。全てがまず一滴から始まりそれらの一滴が集まって大海（悟り）につながるという禅の教えがこの庭に思いとして込められているのだと思います。

両側を廊下で挟まれたこの庭は、2箇所から小さな波紋が広がっているように作られていて、観るものの心に静かな問いかけを投げかけているように感じました。また、時間と共に陽が射すその方向や光の強さやその時の色等が微妙に変化し、それぞれの白い石に映している時間が移り行く様子を見ていると、とても不思議な気持ちになります。

このように枯山水の庭は、その庭自体の大きさでなく観るものの心にどれだけの問いかけがあるかで、その庭の持つ質の高さが決まるような気がします。確かに龍安寺や南禅院の虎の子渡しの庭など、京都には名庭が沢山ありますが、小さな庭から大きな庭に匹敵するようなエネルギーを出しているこの東滴壺の庭は特に素晴らしいと思いました。

まさに小さな限られた中に無限の宇宙が広がっているような、ちょうど小宇宙の感覚がぴったり合うような感じがしました。先の阿吽の石庭とこの東滴壺は、龍源院が建立された文亀2年（1502年）の室町時代のものではなく、近代になって作庭されたものだそうです。

この龍源院は、大徳寺の中でも最も古い寺であり大徳寺の山号（竜宝寺）の竜と今日の臨済禅で唯だ一つのみ存続している松源一脈の源の両字よりなっているところからも由緒ある禅寺であることが分かります。

禅の思想から宇宙にまで発展させて物事を考える事が出来る枯山水は、とても自分に合うのでこれからも全国の庭を観ながら儚い人生の中で少しでも悟りが感じられるようにしたいと思っています。

龍源院だけでなく他の寺院の庭も良かったのですが、今回は小宇宙を感じられた龍源院の庭についてまず書いた次第です。他の寺院の庭については別の機会に書きたいと思います。そろそろ春が近づきますね。春の京都も良いですね。機会を見つけてまた訪問したいと思っています。今月末まで、多くの寺院で期間限定の特別公開をしているので今がチャンスだと思います。

## 奈良と京都への小さな旅（その1）

---

11月中旬のことですが関西への出張を利用して、晩秋の奈良と京都を歩いて来ました。紅葉の季節に重なった関係だと思いますが、京都の宿は既に満室で、仕方なく金曜日の晩は大阪に泊まり土曜日の早朝に大阪からJR大和路快速に乗って奈良へ向かいました。

天王寺を過ぎてしばらく経つと周りの景色が一変し、そこには山あり川ありの自然の中を電車が走り、とても身近に自然を感じる事が出来ました。また斑鳩の里を過ぎる頃には、1年前の夏に訪れた法隆寺や中宮寺の思い出と車窓から目に入った柿木に生った夕陽のようなオレンジ色に輝く柿の暖かさが重なり、何とも言えぬ心の故郷のような漠然とした感覚が到来しました。

大阪から約40分程度で奈良に着きました。今回の目的は薬師寺と唐招提寺、さらに東大寺を訪れることでした。この3寺とも今から35年以上も前の修学旅行で訪れていますが、その頃の記憶が全く無く、以前から訪れたいと思っていた寺だったのです。

近鉄奈良から各駅停車で途中の西大寺で乗り換えて西ノ京で下車、季節の良い秋の土曜日というのに何故か人が少なく、ゆっくりと薬師寺を見ることが出来ました。平山郁夫画伯が30年の歳月をかけて完成した玄奘三蔵求法の精神を描いたとされる壁画の作品がこの時期一般公開されていたので大唐西域壁画殿で観ましたが、日本画の素晴らしさを堪能しました。

ルノワールやシャガールの絵画はもちろん素晴らしいですが、油絵と異なる日本画の絵画はまた趣が異なり、心の奥深いところにある魂のようなものが込められているような感覚を覚えます。満天の夜空に輝く星たちを描いた天上画も素晴らしく、次元の異なった空間に迷い込んだような感じを受けました。

また、修学旅行の時に見たと思われる白鳳時代の真っ黒で艶やかな薬師三尊像は、昭和51年に新たに再建された金堂の中に鎮座していました。当時は木造の金堂であり暗いイメージがありましたが、今回は朱色の色も鮮やかなものになっていました。薬師如来像の左に立つ月光菩薩像、また右に立つ日光菩薩像とも中心に座す薬師如来像の方に軽く腰をひねって立っている姿は、あまりにもエロチックで艶かしい感じを受け、ちょっとドキドキしました。

さらに薬師如来が座す台座には、ギリシャの葡萄唐草文様、ペルシャの蓮華文様、インドの力神の裸像、さらに中国の四方四神が彫刻されていて、奈良時代における世界との交流が行われていた様子がはっきりと残っており、今よりも多くの時間を要したものの、白鳳時代の雰囲気のようにゆっくりと文化がペルシャ、インド、中国を結んだシルクロードを経て奈良の都に伝わった時間を思い浮かべると、何故かホットする感覚を覚えました。

スピードが重要視される現代の社会に比べ、時が止まったようなゆっくりとしたなかで、徐々

に広がって行く人との交流や文化のあり方が本来の姿ではないかと思ってしまう。そのようなことを考えながら入った鎌倉時代に再建された東院堂の中で、僧侶が数人の参拝者に人生の生き方に関して説法している中に私も加わり聞きました。人としての心を持ち、助け合うことが重要だという当たり前のことを話していましたが、歴史ある建物の中でまた聖観世音菩薩像の脇で聞くと、素直に心に響いてくるから不思議です。

心の目で見えることを「観」といい、色なき色を見、音なき音を聴く、これがすなわち「観」なのだそうです。最後に全国の人に写経をしてもらいそれを納めると永代にわたって保管されるということで、現在700万巻を越えたとのことでした。この世に生きた一人の凡夫の証しとしてこの薬師寺に写経したものを残そうと思い、写経セットを購入しました。これから時間をかけて写経し、薬師寺に送りたいと思っています。

薬師寺で心が充実した後に、歩いて次の目的の唐招提寺に行きました。唐招提寺は現在金堂が工事中で、ほとんどの仏像は見る事が出来ませんでした。修学旅行の時に、南大門からみた金堂の眺めを期待して行ったのですが、実現できず残念でした。

ただし、この金堂の屋根の両側に乗っている鴟尾を新宝蔵の中で直接見る事が出来ました。左側は天平時代のもので、右側が鎌倉時代に作られたものでした。名古屋城の金の鯨のように華やかさはありませんが、天平の葺につけられた質素な鴟尾には時代の移り変りをじっと見守ってきた不動の精神のようなものが宿っているような気さえして来ました。出来れば金堂の修復工事が終わる2010年にまた訪れてみたいと思いました。

奈良の古寺めぐりの最後は東大寺です。西ノ京から近鉄電車に乗って奈良に戻った後、少し冷たい風が吹き始めた中を、東大寺を目指して歩きました。先ほどの薬師寺や唐招提寺と異なり、人の波が繋がっていてかなりの人出でした。東大寺の敷地内は何処へ行っても人が多くちょっと閉口してしまいました。

東大寺は何と言っても大仏です。小さい頃に初めて見たものは、だいたい大きく感じるものでその印象をその後持ち続けることから、再度その物を見ると今までの思いの大きさと現実の大きさの間にギャップが出るので、意外と小さく見えるのだと思います。

その例として、京都の名庭を再度見て周っていた時ですが、龍安寺の石庭に再会した際に意外とこじんまりとした広さであったり、また昔は大きく感じていた仏像が数十年の時を隔てて再会すると、凄く小さかったりした経験が多いものだと思います。これは決して凡夫の私が成長したのではなく、心の中の思いや印象が時間と共に勝手に大きくなってしまふのが原因なのかも知れません。

このようなことがあったので奈良の大仏もそれほど大きくないのではと思いながら見上げたところ、その大きさにびっくりしました。いま思い出しても大仏の大きさは大きく、またその大仏殿の大きさも木造建築物で世界一のことで納得してしまいました。

大仏を拝んだ後は、お水取りで有名な二月堂、不空羂索観音を本尊とした三月堂（法華堂）、そして四月堂を周りましたが、特に法華堂にある日光菩薩と月光菩薩の穏やかな立像が特に美しく思われ、これらの菩薩を眺めていると心が1300年ほどの時空を飛び越えて遙か昔の天平時代にタイムスリップしたような感じを受けました。

今回の奈良の旅は、実質1日の旅でしたが、昔の自分と今の自分を比較することが出来ただけでなく、人生の心の旅を確実に実行している自分の姿を客観的に見ながら満足することが出来た旅になりました。この日は、奈良で泊まり翌朝は小堀遠州の庭を観るために、京都に向かいました。

奈良に宿泊した翌日は、早起きをして若草山方面から昇る朝日をホテルの窓からありがたい気持ちで眺めました。日の出を見ながらありがたい気持ちになるのは、確実に歳をとった証拠ではないかと思えますし、思わず若草山から徐々に昇る朝日をデジカメに収めてしまう自分の行動に笑ってしまいました。

前日の晩にコンビニで購入したおにぎりとおカップラーメンで朝食を済ませ、奈良駅で8時過ぎの快速電車に乗り込み、40分強で目的の京都に着きました。昨年の秋に車で京都を訪れた時は、奈良から国道24号線を北上し京都に入りましたが、今回は電車に乗り込み一人のんびりとした上洛です。

前日の奈良は、寺を訪れ仏に逢うことが目的でしたが、京都は小堀遠州が作った庭を観ることが大きな目的であり、併せてその庭に近くにある寺を訪れることにありました。京都駅前の観光センターで京都観光一日乗車券を購入し、早速9番の西賀茂車庫前行きのバスに乗り、一路正伝寺のある神光院前のバス停を目指しました。

途中、バスは京都の街中を走りますが、今までに京都を訪れた時に通った道や名庭園を持つ寺などが目に入ると、その時の思い出が蘇り、懐かしさの中に浸っている自分を見出しました。

さて、一番最初に訪れた正伝寺ですが、神光院前のバス停から歩いて15分程度のところにある臨済宗南禅寺派の寺で、小さな山門は、静寂とした森林のような中にありました。バス停から寺への入り口まで誰にも会わなかったことも手伝ってか、自分だけが世の中から取り残されたように異次元に来たような錯覚を覚えました。

正伝寺は鎌倉時代に創立された禅宗の寺で、ここの方丈は、伏見桃山城にあった遺構で御成殿

と称されていたものを、承応二年に移建したとのこと。問題の庭ですが、江戸時代の初期に小堀遠州が作ったとされている獅子の児渡しの庭で、霊峰比叡山を借景し白砂敷の庭に七五三の数を反映したつつじの刈り込みにより構成された、こじんまりとした庭であり何よりも質素でその中から優しさが醸しだされているような印象を受けました。

つつじの刈り込みを使った遠州の代表的な庭に、岡山県の備中高梁にある頼久寺がありますが、このつつじの刈り込みにはダイナミックな動きが感じられ、人の年齢で言うなら青春時代にあたると思われます。

その庭は、私が学生の時の休みを利用して一人旅をした時に備中高梁で偶然にも小堀遠州の庭に出遭ったのです。あの時に受けた強烈な印象は今でも忘れられません。この時から変わることなく、小堀遠州の庭との出会いを求めて多くの寺を訪れています。

その頼久寺に比べると今回訪れた正伝寺の庭は、穏やかな人生とでも言うべき円熟味が増している老年時代であるといえます。方丈からこの庭を覗いていると何故か安心するような気持ちになるから不思議です。

方丈の広縁の天井は、関が原の戦いで伏見城が落城する際にこの城に立て籠もった武士が割腹した際の廊下の板を天井に使用しているとのことで血天井と言われており、良く見ると板に400年程前の血痕が残っているのが分かりました。武士道の気迫の凄さが、庭を覗いている人に天井からその気が伝わって来るようです。

寺に着いた時には2人しかいませんでしたが、30分程経つと10人ほどの観光客が到着したのを機会にこの寺を後にしました。この後は、京都駅前の観光案内所でもらった簡単な地図を頼りに、鷹峰三山の麓近くにある紅葉と本阿弥光悦で有名な光悦寺と二代目吉野太夫の墓がある常照寺を訪れました。

紅葉が綺麗な時期と重なったこともあり、特に光悦寺は人の列でごった返していました。ゆっくりと紅葉を楽しんだりあるいは、当時を偲んで時の流れに逆らっているいろいろと想いを巡らすようなことが出来ませんでした。

また近くの常照寺に立ち寄った際に、ちょうど住職が観光客に対して二代目吉野太夫の話をしてくれていたところでした。全く知識のなかった私にとって、その時代の新しい世界が開かれ、太夫とは何かを知り、また芸の奥深さや厳しさ等について再認識しました。

正伝寺から光悦寺、また常照寺までは全て徒歩でしたが、歩いている途中で400年前に天下を統一した豊臣秀吉が、京都のまちを守るために市内をとりかこむ約22kmの土のかべや堀で作られた「お土居」の一部が残っている脇を通りながら、中世のヨーロッパで行われていたこと

が日本でも行われていたことを知り感慨深いものがありました。

さて京都での最後の訪問先は、豊臣秀吉の夫人である北政所（ねね）が秀吉の死後にその菩提を弔うために開創した寺である高台寺です。この寺の庭園は、小堀遠州の作とされており開山堂の東の臥龍池と西の偃月池を中心として作られています。

この庭は午前中に見た正伝寺のような枯山水の庭でなく、本物の水すなわち池と木と石で庭を構成しています。正直いってここでも人が境内に溢れ閉口しました。ゆっくりと庭園を観賞するような余裕はなく、そこに立ち止まっても自動的に押し出されてしまうようでした。

小堀遠州の庭で枯山水以外の庭をじっくりと観たことがないので、どのような面から庭の良さを見たらよいのか分からないまま、帰りの新幹線の時間を気にしながら高台寺を後にしました。蛇足ですが、帰る途中で八百伊の漬物を購入し家族への土産としました。

今回の旅では奈良の薬師寺と東大寺の法華堂（三月堂）の仏像に遭えた事と、京都では正伝寺で小堀遠州の優しい枯山水の庭を観られてことが大きな喜びでした。また、関西への出張の機会を見つけて奈良や京都の寺や庭を周りたと思いました。

## 奈良と京都への小さな旅（その2）

---

昨年11月下旬に奈良・京都を訪れましたが、今回も前回と同様に仕事で関西方面に来る機会があったので、それに便乗して土日の2日間を京都で過ごしました。今回は鞍馬寺、二条城、神泉苑、醍醐寺、西本願寺、六波羅蜜寺、建仁寺を周り以前の自分より少し賢くというか精神的に成長したような感じを持ちました。今回は、これらの中で鞍馬寺を訪れた時に感じたことを書きたいと思います。

鞍馬寺は洛北の奥に位置し平安京から見ると鬼門の方向である東北の位置にある寺です。以前に読んだ書籍ではこの鬼門の位置にこの鞍馬寺を置き邪悪なものを防ぎ都を守ったとされています。また、一方でこの鞍馬寺は、唐招提寺を開いた鑑真和上の高弟である鑑禎上人が、宝亀元年（770年）、草庵を結び毘沙門天を安置したのがはじまりと言われています。その後、延暦15年（796年）には藤原伊勢人が堂舎を建て、千手観音を併せ祀ったとされています。

また、鞍馬寺は牛若丸（後の義経）がここで兵法修行したと伝えられていることでも有名であり、奥の院へ通じる僧正ガ谷は牛若丸が天狗に出会った伝説の場所として、現在に伝えられています。現実にもその場に立つと天狗でも出てきそうな雰囲気があり、その地域全体が聖域のような感じがしました。さらに義経に係わる遺跡も随所に多く見られました。

このように鞍馬寺は不思議な魅力がある寺院なので、以前より訪れてみたいと思っていましたが、なにせ他の寺院に比べると地理的にも厳しいところにあるのでつい足が遠のいてしまいがちでしたが、今回は時間的な余裕があったので頑張ってみました。

その日はホテルを8時にチェックアウトし、出町柳駅から叡山電鉄で鞍馬へ向かいました。鞍馬駅着9時30分。時間が早かったこともあり殆ど観光客がいない中、仁王門から由岐神社を参拝しながら昔の信者の人が歩いて登った九十九折参道を歩くこと約30分で本殿金堂に到着しました。

途中は坂道あり石段ありで運動不足の凡夫にとってはかなりきつい山道でしたが、ひたすら一歩一歩着実に登ることだけを考えて登りました。広大な敷地のほぼ全体がモミヤツガの原生林であり、山道は直射日光が木々で遮られるため昼でもちょっと暗い感じがありますが、空気はひんやりとするだけでなくマイナスイオンが効いているのか分かりませんが美味しく感じられました。歩きながら周りから何かエネルギーを与えられているような不思議な感じを受けました。

その時はたまたまiPodに入っていたモーツァルトのヴァイオリン協奏曲を聴きながら歩いていたのですが、曲の流れと歩くテンポさらに周りの環境というか雰囲気のようなもの位相がすべて同調したような感じになり、あたかもモーツァルトと凡夫と鞍馬寺の3つが一体化した錯覚を覚えました。その時は、とても気分が良くなり快適にスキップをしているような感じでした。

あとで思ったのですがあれが「気」のエネルギーだったのではないかと勝手に想像してしまいました。

10時過ぎに本殿金堂に到着し参拝を終え、さらにご朱印を頂いた際に「尊天」と書かれた内容に興味を持ったことから、その場で鞍馬寺の尊天信仰の内容を著した本を購入し、その概要を読んだところ、その考え方の凄さにびっくりしてしまいました。

この尊天信仰とは、宇宙の大霊であり大光明・大活動体である「尊天」を本尊と仰いで信じ、「尊天」の心を我が心として生きていくことなのだそうです。特に「尊天」とは、人間を初め、この世に存在するものを生み出している宇宙生命、宇宙エネルギーを指すのだそうです。

この内容を読みながら頭に浮かんだことが3つありました。一つは真言密教を開いた空海のことです。空海もこの世は宇宙が中心となっており中心となるものは物とか人ではなくエネルギーであると説明しています。次に浮かんだのは現代の物理学に大きな貢献をした、一般相対性理論のアインシュタインです。アインシュタインも最終的にはエネルギーが全ての世界を支配するような考え方を持っています。そして最後に凡夫が今興味を持っているところの「気」ですが、これもまたエネルギーの一つだと言えます。

これらのことをただ単純に併せると、この世の中は宇宙を中心とした何らかのエネルギーによって動いていることになります。昔からよく言われることですが、高僧が修行をしている時に、ある時、天から光のようなものが高僧の額に当たりある啓示を受けたり突然に超能力を得るようなことが記録に残っていますが、これらは嘘でなく「気」のようなエネルギーという事実なのではないかと思うのです。

話を鞍馬寺に戻しますが、残念なことに鞍馬寺の殆どの建物は鉄筋コンクリート製であり、木造建築を想像していた凡夫にとっては非常に残念なことでした。さらに鞍馬寺の仏像は霊宝殿の3階に安置されています。当時の平安京を守る役目の毘沙門天尊像や毘沙門天立像、さらに女性美の表情が仏像全体から感じられた木彫聖観音菩薩立像は心が清められるような感じでした。

やや細作りのこの聖観音像は左手で蓮を持ち、それに調和した右手のしぐさは何気ないものの中にモーツァルトのような美のエッセンスが凝縮されているような感じを受けました。この感じは以前に奈良の秋篠寺で観た技芸天立像と同じ感覚でした。

休憩等を含めて山歩きに約2時間程要したことから、昼前に下山する時は膝がだるくなる程、五十路を過ぎた凡夫にはちょっと大変でしたが、精神的には充実するものがありました。鞍馬寺一帯には清しいエネルギーが存在し、邪悪なものを取り除き本来あるべき状態に戻すような聖

域の大きな力を感じました。正直鞍馬寺を訪ねて良かったと思っています。

## 小堀遠州と龍安寺の石庭の謎

---

最近また枯山水の庭に興味を持つようになり、いろいろとその手の本を読むようになりました。以前のメルマガにも書きましたが、私が庭に興味を持つようになったのは、学生の頃岡山県の吉備路を旅した際に備中高梁にある頼久寺という寺を訪ねた時に観た庭が素晴らしかった事から始まるのです。また、その庭を作庭したのが小堀遠州だったこともあり、その後は必然的に小堀遠州の庭を追いかけることになったのです。

小堀遠州はその本名を小堀正一といい、1579年に滋賀県坂田郡南郷里村小堀（長浜市）で生まれたといわれています。慶長13年（1608）に駿府城建設にあたっての作事奉行をつとめ、その功により諸太夫従五位下遠江守に叙せられ、これより「遠州」と呼ばれようになったようです。

遠州は、江戸幕府の作事奉行として当時の桂離宮、仙洞御所、二条城、名古屋城などの建築・造園に才能を発揮しました。大徳寺孤篷庵、南禅寺金地院などは、代表的な庭園です。また茶道を古田織部に学び、三大茶人と呼ばれ、遠州流茶道の創始者となり、三代将軍家光の茶道師範を務めたように多才の持ち主であったようです。

最近読んだ本によると小堀遠州は、当時日本に来ていた宣教師から西欧手法を伝えられた宮廷付工人である可能性が高く、西欧の庭園の作造方法やパースペクティブやヴィスタ手法さらに黄金分割の手法を身に付けたとされています。

このように小堀遠州は日本の和の伝統的な美と、西欧の均整がとれた手法を取り混ぜて各地に素晴らしい庭を造っているのです。東京では、現在非公開になっていますが浅草寺の中にある伝法院庭園が寛永年間に作成されたとされています。先日浅草寺に行ったときに、塀の間からこの庭園の一部を観ました。

さて、今回はこの小堀遠州があのかの京都の龍安寺の石庭を作った人物ではないかと推理した宮元健次著の「龍安寺石庭を推理する」という興味ある本を読みます。龍安寺の石庭を作った人物が小堀遠州ではないかと思うようになりました。これまでいろいろな研究者がこの龍安寺の石庭を作った作者を調査していますが、未だ決定的な結論が出ていないようです。

龍安寺は、1975年に英国のエリザベス女王が訪れ、石庭の庭を絶賛したことから世界中にこの話が広まったとされています。それまでは日に数十人しか訪れなかった静かな寺が、一夜にして世界的に有名になり今では日に1000人も訪れることがあるような名所になってしまったようです。

龍安寺は宝徳2年(1450年)室町幕府官領細川勝元が、徳大寺家の別荘を譲り受けて寺地とし、妙心寺の義天玄承を開山として創建されたものであり、臨済宗妙心寺派に属し、大雲山と号した禅苑の名刹です。ただし京都の禅寺の中で妙心寺は当時のいわゆる京都五山(天龍、相国、建仁、東福、万寿寺)に列さず、禅寺の中でも一番低い地位に甘んじていたことから、妙心寺の末寺である龍安寺の地位も押して知るべしであったようです。

そのような寺で、世界的に有名になった枯山水の庭があることが非常に不思議なことなのです。この方丈の前庭は枯山水の石庭で、東西約25m、南北約10mで三方を築地塀で囲み境内の植栽を借景とする、とてもシンプルな作りの庭になっています。

私が以前に訪れた時には、思ったほど広くなくこれがあの龍安寺の石庭であったかと思うほどでした。ただし、方丈の廊下を奥に進みそして振返って庭を見るとびっくりするほど今度は大きく見えるから不思議です。

庭内は一木一草も用いず、地表に白砂を敷き15個の自然石を配し、見る人によって自由な解釈や連想を欲しいままにさせる庭であり、この庭を造った者は、見るものにどのようなメッセージを投げかけているのか、この庭の前でじっと白い砂やそれぞれの石を眺めていても無用の時間がただただ流れていくような感じがする観るものにとっては難解な庭です。

見た目にはすこぶる単純な構成であるが故に、その中に込められたメッセージを掴み取るため、観る者が自分の心に自問自答するとともに、その答えは見る者それぞれに異なったものであるような気がします。それだけ秘められた魅力は大きく、言い知れぬ簡素な落ち着きと心の宇宙を発見するとともに見る人に深い感動を起こさせる庭だともいえます。

また、この庭は限られた空間をいかに広く見せるために、築地塀から方丈の正面の廊下にかけてだんだん低くなっており、また廊下を奥に進むに連れて庭が高くなっています。ですから、私が最初に思った奥から振返って見ると広く感じるのはこの庭を設計した者が、西欧のパースペクティブという手法を巧みに使って見るもの錯覚を利用しているのです。

さらに15個の石の配列もよくよく調べてみると黄金分割の手法で置かれていることも分かっているのです。またこの石には刻印が記されていることも最近分かったようです。その刻印の謎も解読されると、現在進んでいる作者の特定化に役立つのではとも思っています。

個人的にはこの龍安寺の石庭の謎は解明されることなく、この寺を訪れた人がそれぞれの心に何らかの思いを持って帰れば良いのではないかと思っています。しかし観れば観るほど不思議な庭だと思えます。皆さんも是非自分なりの思いをこの龍安寺の石庭を観ながら自分の宇宙を彷徨ってみて下さい。

## 年老いた両親との奈良・京都の旅

---

津での生活も残すところあと2週間程度となりました。本当に時間の経つのは早いもので2年間があっという間に過ぎてしまった感じがします。2年間津で生活しましたが、この間に年老いた両親以外誰も訪ねて来ませんでした。チョット寂しい気がしています。

年老いた両親が三重に来たのは9月の下旬でした。仕事で名古屋に行った帰りに両親と名古屋駅で待ち合わせ、近鉄特急で津に来る予定でしたが大雨と雷の関係で2時間ほど近鉄が不通になり名古屋駅で足止めを余儀なくされました。

7時過ぎに親父は腹が減ったのか駅の売店でお弁当を買い込み駅のベンチで食べようとした時に、特急の運転を再開するとのアナウンスがあり急いで飛び乗りました。途中の区間で徐行運転がありましたがどうにか津に到着しました。結局この駅弁は翌日の朝食としてホテルの部屋で食べたとのことでした。

その夜は津の居酒屋で久しぶりに親父と酒を酌み交わし楽しいひと時を過ごしました。そこで食べたかつおの刺身、じゃこのサラダ、串焼きは両親に好評でした。かつおの刺身の話しは以前のメルマガにも書きましたが本当に新鮮で美味しいと思います。

翌日は車でホテルに迎えに行き、母親の希望であった奈良の室生寺と當麻寺を訪ねました。室生寺では心臓の悪い母は700段の階段の先にある奥の院までは行けませんでした。修理の終わった五重の塔を見たいといい、はあはあ苦しそうにしながらゆっくりと階段を登っている母の姿を見ながら、今の自分があるのは両親がいるからだ当たり前のことですが、それが非常に強く心に残りました。

室生寺の五重の塔は日本一小さい塔で知られていますが、派手さが無く600年以上の歴史を知る樹木に囲まれた中にひっそりと建っており、小柄の母親と似ている感じがしました。塔をバックに母を入れた写真を1枚撮り、そしてゆっくりと階段を下りながら仁王門まで戻り、赤いアーチ状の太鼓橋の端にある橋本屋で山菜そばを食べながら小休憩しました。

時間が止まっているような錯覚を受けるくらいに素朴でのんびりしている室生寺の周辺は精神の修行を積むには適している土地なのかも知れません。空気も川のせせらぎも山々も皆新鮮で心が綺麗にまた軽くなるような感じがします。

また、當麻寺に関しては私が五木寛之が好きで當麻寺の中將姫や二上山の話しをしたのを覚えていたからかどうか分かりませんが、案内して欲しいと母から言われ訪れました。私にとっては二度目の當麻寺ですが、中將姫を再拝したときは最初見たときとはまた異なる印象を受けました。

それは見る側の心を映し出している現われ

ではないのかと思いました。中将姫の像は変わることなく同じ位置に座し、そして同じ微笑みを見る者に投げかけていますが、見る側の心の状態により受けるものは大きく異なるのです。今後異なる状況で見たときにはどのように変わるのか楽しみでもあります。中将姫の像は、心を映す鏡のような気がしています。

その日は京都まで愛車を走らせ、京都駅前のホテルに泊まりました。晩酌兼食事をしたあとは両親の部屋でさらに日本酒を飲みながら久し振りに両親と夜遅くまで話しをしました。東京にいる時でもゆっくりと親父と酒を飲む機会が少ない中で、旅先での酒はまた異なった趣のある酒盛りとなりました。

翌朝は親父は新幹線で大阪へ、私は紅葉の季節には未だ早い高尾にある神護寺を訪れました。母親も時間があるとのことで私の車に同乗し神護寺へ行きました。神護寺は階段が急で心臓の悪い母にとっては所詮上まで登るのは無謀なことだと思っていましたし、母もはじめは下で待っていると言っていたのですが、入り口に着いた時にはどうしたことか上まで登ると言い出したのです。

そして心臓発作が起きた時に苦しさを和らげるためにいつも持ち歩いているニトログリセリンの錠剤を舌の下に含ませ、ゆっくりゆっくり階段を登りました。きっと息子とこのようなかたちで登ることはもうないと思ったのではないのかとそのとき感じました。

母のペースにあわせゆっくりと登りました。紅葉の時はさぞかし綺麗な景色が神護寺の山々を飾るのではないかと思われました。この神護寺は809年に弘法大師(空海)が入山して14年間常住したとともに真言密教の重要な道場となり、平安新宗教の一拠点として栄えた寺でもあります。空海はこの土地を大変に気に入っていたとの話もあります。奈良とはまた異なる風情があり心が安らぐ感覚があり、何らかのエネルギーを吸収した思いがしました。

人間には寿命がありますが、両親には出来るだけ長く生きて欲しいと素直に思うとともに神護寺の薬師如来像に手を合わせ祈りました。今年親父は80歳、母親は77歳を迎えました。昔に比べれば年老いた姿になりましたが、私には両親は2人しかいないし、この両親がなかったら今の自分が無かったのだと思うと人間の命の久遠の継続性が心の中で宇宙的に広がるような不思議な感覚になりました。

津での生活の最後に年老いた両親と2日間奈良と京都の古寺を親子水入らずで訪れる事が出来たのは良かったと素直に思う自分がいるのに気がつきました。そして、どんな親でも親というものの子供がいくつになっても子供だと思っているのだとも思いました。

## 金閣寺と銀閣寺

---

三重にいるころは、奈良や京都の寺をゆっくりと周りながら、穏やかな仏像を眺めては心の安らぎを求めています。一般に寺を観るポイントは建物、仏像、庭の3つに大きく分類されると思いますが、個人的に興味のある順番は庭、仏像、建物です。今までに奈良と京都の寺を全て回った訳ではありませんが、奈良と京都を訪ねて感じた点は、庭なら京都、仏像なら奈良が良いとの結論に至りました。この見解は多くの人から賛同を得られるのではないかと考えています。

さて今回は、修学旅行の定番である京都の金閣寺を訪ねた際の感想を書きたいと思います。金閣寺は30年以上前に修学旅行の時に行った記憶がありますが、その時にどのような印象を持ったとか何を感じたかは全く記憶にありませんし、その当時は歴史的な背景も理解しないまま、ただ物見遊山的に訪れただけだったような気がしています。単純な思いとしては、情けないことに建物に金箔が貼られて派手な作りであるという印象を受けた程度でした。

今回、修学旅行から30数年という長い時を経て訪問したのは昨年秋でしたが、一人ゆっくりと建物と庭に関して堪能できました。この金閣寺では仏像を見る機会がなく見終わってしまいました。もともとこの金閣寺は寺というよりも権力を象徴するシンボリックな要素が強かったのではないかと考えられます。

普通お寺には仏像がつきものですが、金閣寺を訪れた人からあそこの仏像が良かったという話を聞いた事はありません。ちょっと不思議ではないですか？あの金箔に煌々豪華さに圧倒されて全てを忘れてしまったような感じを受けるのは私だけではないと思います。ひょっとして仏像等は無いのかもしれません。

さて、時代は室町時代に遡りますが、当時の貴族と武士の折衷文化を北山文化といいます。その象徴が今回訪れた金閣寺です。JR京都駅から市バスに乗って1時間弱、北区の左大文字山南麓にあの金閣寺がありました。

金閣寺は「日本国王」を自認した室町幕府三代将軍である足利義満が造営したものです。義満は、1397年（応永4年）に西園寺家の山荘を譲り受け北山殿を造営したのです。また義満の死後、遺言により義満の法名鹿苑院殿から二字をとり、鹿苑寺と名づけられました。ですから本当は金閣寺ではなく鹿苑寺が正解なのです。

室町幕府は時の足利尊氏が興しましたが、その時代は天皇が京都と吉野に2人立つという前代未聞の異常事態を経て、最終的には1392年南北朝時代が終了しどうにか統一がなされました。3代将軍の足利義満は、何かにつけて朝廷よりも幕府の方が上であると印象づけるため、天皇を超えるために当時の明との直接交渉を行い、「日本国王」という国際的に通用する称号をもらい、権力の象徴とするだけでなくこの野望を具現化し贅を尽くして改築したのがこの金閣寺な

のです。

金閣寺を建物としての目で細かく観察すると非常に面白いことに気づきます。先ず金閣は3層構造になっており、この3層はそれぞれ異なる建築様式になっていることです。1階は平安時代の寝殿造りで、これは寝殿ですから通常貴族や天皇が住むものです。2階は武家造りです。すなわち武士が貴族や天皇の上に住むということは、言葉を代えて言うと武士の方が偉いといっているのだと思います。

さらに3階は中国風の造りになっており、当時の世界を支配していたのは中国であり、この中国から「日本国王」として認められたということで一番上の層に中国風の建物を作ったのでしょう。また、屋根の上に鳳凰が飾られています。一般的に寺であれば屋根の上には魔除けや水煙のようなものを置くのが普通ですが、金閣寺は何故か鳳凰なのです。この鳳凰は、聖なる天子が出現した時に祝福する鳥なのです。

このように義満の時代は、中央集権的で公家文化と武家文化の影響や中国文化の影響の中で一つの北山文化が繁栄したのだと思われます。このような事実を目の当たりにすると、金閣寺を作った足利義満という人物は、大きな権力のもとに野望を膨らませた人だったのではないかと思います。

この義満が金閣を造営した時代は、京の都は内戦や飢餓更に疫病が絶えない正に地獄絵のような街であったとされています。これらがその後1467年の応仁の乱に繋がって戦国時代へと時代は動いて行くのです。

しかし、当時の権力者は庶民の暮らしには無頓着で何らこれらに対して手を打つどころか無関心のまま生きていたようです。ですから都のあちこちでは、亡くなった人の死体は放置したままの状態であったようです。底辺社会に目を向けなかったのは何故なのか心が痛みます。

このころ世阿弥は、これら都で無念の死を遂げた多くの死者をテーマにした夢幻能を作り、將軍の意識改革を行ったようですが、全く効果が無かったようです。自分だけよければ良いという当時の為政者の考えそのものだったようです。

また、金閣寺を取り囲む庭園は、衣笠山を借景としたもので中心の鏡湖池には名石や奇岩を配し、九山八海を表現する池泉回遊式庭園が広がり、極楽浄土をこの世に現したともの言われています。確かに黄金に輝く金閣が、鏡湖池に写り爽やかな風に水面が応えている様を観ると日本の文化の素晴らしさを一瞬感じますが、この繁栄の影に散った多くの命がちょうど水面のざわめきの様に思われました。これは極楽浄土の中に地獄があるような感じにも取れました。

30数年前に訪れた時には感じる事のなかった華やかさの影にある哀しさを味わったひと時でした。何事も目に見えるものが全てでないことを、ここを訪れる人が感じる事が出来れば、この金閣の大きな意味があると思った次第です。

銀閣寺を訪れたのは中学と高校の修学旅行以来3回目でした。金閣寺に比べ地味で渋い味が出ている銀閣寺は、個人的に捨てがたい大切なものがあるような気がしてなりません。この銀閣寺は、1482年（文明14年）に室町幕府八代将軍足利義政が、祖父である三代将軍足利義満の造営した北山殿金閣（鹿苑寺）にならって隠居生活を過ごすために山荘東山殿を造営したのが、この銀閣寺の発祥であり、義政の法号である慈照院にちなんで後に慈照寺と命名されたのです。

八代将軍足利義政は、1436年（永享8年）に6代将軍義教の二子として誕生しましたが、1441年に嘉吉の乱が起こり父である足利義教が家臣に殺されその後、兄の足利義勝が7代将軍になりますが、2年後の1443年にこの兄が病死するなど不運の連続で、その後1449年に義政は14歳にして、8代将軍になったのです。

しかし幕府の力は衰える一方で、各地で土一揆や徳政一揆がしきりに起こりましたが、幕府には弾圧する力がなく、さらに義政は13回も徳政令を多発するなど、世の中は本当に苦しい時代となっていたのです。

また、義政は将軍になったものの政治の世界では、義政よりもその正室である日野富子がしきりに政治に口出しするなどしていたようです。もとより義政は将軍の器ではなく、政治よりも庭園、和歌、書画等芸術の分野にその才能を持っていたと言われています。

さらに悪いことに義政に世継ぎが出来なかったことから、義政は、弟の義視に跡を継がせようとしたのですが、やがて正室富子に実子義尚が誕生してしまい、世継ぎの争いから最終的には応仁の乱（1467年～1477年）の原因となり、京の町を廃墟と化したのです。

この頃の京の様子を記した書に以前このメルマガで紹介した鴨長明の「方丈記」があるのです。さらに民衆のなかでは、浄土真宗の中興の祖と言われる蓮如が活躍していたのです。この時代は、人心が疲弊し、末法の思想ともあいまって新しい教えが求められていたことから、蓮如は親鸞上人が明らかにされた本願念仏の教えを、仮名まじり文の「御文」を用いて、民衆に教えを平易に説くという積極的な活動をしていたのです。

このような時代背景の中、義政はその後も政治を顧みず雅風に興じていましたが1473年に、子の義尚に将軍職を譲って東山に隠居し、1482年に義満の北山山荘（金閣）にならって、東山山荘（銀閣）の造営にとりかかったのです。特に庭園作りに際しては、自らも土を運び草木を植えたといえますから、人間自分に合っていることはどんなことでも行うものだと思います

また、これらの庭園を作る際に義政は、当時蔑まれていた山水河原者と呼ばれていた人々を使ったとされていますが、社会から疎外されていたこれらの人々を差別せずに使える心があったのですから、その心をもっと政治に向けて対応したら、きっと変化があったろうに思うのです。

最近感じることは、歴史の断片的な知識がある時さらにもう一つの歴史の知識を知った瞬間に今まで未整理状態であったものが全て連結してひとつの大きな流れになるように感じる時があります。今回も使った銀閣寺を訪れた際に、過去の歴史をおさらいした時に、いくつかの知識がつながりました。そして感じたことは、義政の政治に対する取り組みが異なっていたとしたら、歴史は変わっていたかも知れないとの事です。

銀閣寺の庭園は西芳寺(苔寺)の庭園を模して作庭されたと言われています。それは上下2段構成になっており、上段は枯山水庭園（銀沙灘や向月台で構成されたもの）、下段は池泉回遊式庭園で中央に錦鏡池が広がっています。

個人的には、ここの枯山水庭園は共感出来る要素が少なく、侘び寂びの世界感は多少なりとも伝わってきますが、再度訪れたいとの気持ちが湧き上がってこないから不思議です。ひょっとすると、まだ完成されていないからかも知れません。というのも、この東山山荘（銀閣）の造営の完成を見ずに、義政は1490年（延徳2年）に55歳で亡くなってしまったからです。もし仮に完成を全て見る事が出来たならば、現在のようになっていたのか興味があるところです。

以上のようなことを考えながら、銀閣寺を後にし、哲学の道と呼ばれている小道を琵琶湖疎水の支流に沿って、歩き出したのです。この琵琶湖疎水の支流は、蹴上から南禅寺を通過して北に流れ、高野川や鴨川の下を通過して堀川に至る流れですが、そのうち若王子橋（南禅寺側）から銀閣寺橋までの約2kmにわたる疎水ベリ的小道を哲学者の西田幾太郎が散策し、思想にふけたことから「哲学の道」の名が付いたと言われています。

哲学の道のほぼ中間点に西田幾多郎の碑があり、その表面には、彼の人生哲学である「人は人、吾はわれ也、とにかくに吾行く道を吾は行くなり」の文字が刻まれています。内容的には納得するものがあります。

たまたま私が訪れたのが平日でなかったこともあり、この道を多くの観光客が行き来していたことから、お互いにぶつからないように歩くのが精一杯で、とても哲学を考えながら歩けるような状態ではありませんでした。

## 京都、妙蓮寺の16羅漢石庭を観て

---

人間というのは不思議なもので、何か期待して行った時に、目の前の現実の様子を観て期待以上だとすごく感激するが、期待外れの場合はひどく落胆するとともに、無駄な時間とお金を使ってしまったと思うものですね。

今回京都訪問は、本法寺を訪ねるのが大きな目的であり、大きな期待を持って行きました。今回本法寺を訪れたのは2つの理由があり、一つは長谷川等伯の「沸涅槃図」と本阿弥光悦の「巴の庭」を観ることでした。

「沸涅槃図」は原本でなく原寸大の写真が展示されていましたし、また「巴の庭」も国指定の名勝とされていましたが、書院から眺める庭は室町時代の書院風枯山水の影響があるような気がしましたが、いまいち心に伝わってくる力が弱い感じを受けました。

このように期待して行った本法寺でしたが、テンションが下がってしまったと言うのが正直な感じでした。本法寺を訪れた後のこのような状態の時に、道案内標識にあった妙蓮寺の名前が自然と目に飛び込んで来たという不思議な縁で、何気なく妙蓮寺を訪れました。

妙蓮寺は、本門法華宗の大本山で、卯木山と号し、日像上人を開基としています。永仁2年（1294）に、柳屋仲興入道妙蓮法尼が、日像上人に帰依して、西洞院五条の邸を寺に改め、柳寺と称したのがこの寺のはじめとのことでした。その後たびたび寺地をかえ、天正15年（1587）に豊臣秀吉の聚楽第造営のとき、今の地に移り現在の建物は、天明の大火（1788）後の再建だそうです。

寺務所に拝観出来ますとの看板が掲げられたいたので、ちょっと寄ってみようかとの軽い気持ちで扉を開けました。奥には女性の方が一人だけおられ、拝観の旨を伝えあがらせていただきました。

この寺には、石庭があるのと奥書院の襖に描かれた幸野豊一画による四季の襖絵があるのでゆっくりと観てくださいとの説明があり、石庭に面した表書院に案内されました。

そこで観た石庭の素晴らしさは言葉にならないものでした。今まで、京都の有名な枯山水の庭は多く観てきたのでそれなりに目は肥えていると思っていましたが、また新たな発見をした石庭でした。

この石庭は、桂離宮の造営に携わった妙蓮寺の僧侶 玉淵坊日首（ぎょうくえんぼうにつしゅ）の作庭で「十六羅漢石庭」（じゅうろくらかんせきてい）と呼ばれているものでした。

庭の中央にある青石は、臥牛石といい、豊臣秀吉公によって伏見城から移された名石であり、

よく観ると涅槃像とも観えるし、他の15の石は羅漢を表し、真理に呼応する地涌の菩薩を現しているともとれます。

16羅漢の庭であるにもかかわらず何故か石は15個しかないので、一つ石が足りない理由に関して謎になっているとのことですが、私はこの庭を観る人が最後の一人の羅漢であり、観るものを入れてこの「十六羅漢石庭」は完結するように作られているのではないかと思いました。

臥牛石（青石が永遠の仏陀を表現）と15の羅漢石の間は白砂が敷き詰められており、かつそれらの間には心の繋がりが波紋に表現されているような感じさえ受けました。これらの庭が無限の宇宙を現しているといっても過言ではないと言えます。

この庭ですが火災による損傷が激しかったとのことで、近年に至って造園当時の姿に復元されたとのこと。京都でも妙蓮寺は意外と知られていない寺にもかかわらず、素晴らしい石庭があり、さらに現代画家の作ではありますが四季の襖絵は素晴らしいものでした。特に「秋の山」は日本人の心を素直に表した、何故かほっとする心を感じました。

今回の京都訪問は、何か不思議な縁で妙蓮寺を知り、そこでまた新たな感動の出会いがあり、世界が広がった感じを受けました。縁とは本当に不思議なものですが、必然的なものでもあると思っています。紅葉の季節にまた訪れてみたいと感じた妙蓮寺でした。

先日、関西に出かけた際に奈良に寄ってきました。奈良を散策した日は快晴でゆっくりと奈良を歩き満喫しました。今回訪れたのは、興福寺、元興寺、法華寺、海龍王寺です。

奈良は、万葉の時代、「大和は国のまほろば」と言われたところです。また、奈良には当時の伝統的な木造建築が多く残っています。木造建築からは何故か生きていようなエネルギーが伝わってくるような気がしてなりません。暖かさや優しさがそのまま伝わってくるようなそんな感じを受けます。正に生きていくといった感じです。

特に今回まわった4つの寺は、それぞれ当時の面影が残る寺でした。興福寺は、五重塔や三重塔、さらに東金堂が有名ですが、なんとと言っても国宝館にある国宝や重要文化財には素晴らしいものがあり、それらを観ながら来て良かったと思いました。中学校の美術の教科書でしか観た事がなかった仏像類を直接拝顔し、安らぎを覚えました。

有名な阿修羅像、銅造仏頭、金剛力士立像（阿形と吽形）、天燈鬼立像、龍燈鬼立像を観ながら、仏教自体とその芸術性を含んだ仏教美術の世界に浸かり、奥深いところにある何か重要なものに触れたような気がしました。

特に阿修羅像は、もっと大きなものだと思っていたのですが、153cmと小さくまたすらりとした細身でびっくりしました。顔だけから判断すると少年のようにも見えるし、また少女のようにも見えるのが不思議です。

もともと阿修羅は、西域では大地にめぐみを与える太陽神であったが、インドでは熱さを招き、大地を干上がらせる太陽神となり、常に帝釈天と戦う悪の戦闘神でしたが、仏教では釈迦の教えに触れた守護神とされています。

言い換えればあるときは悪でもう一方では善であるといえる神です。それを示すかのように阿修羅像を見る方向によっては、その目が優しくみえたりまた反対に鋭い眼差しで見えるから不思議です。その目から何かが人の心の奥深くに入り込んで来るような感じがしました。

また、金剛力士立像（阿形と吽形）、天燈鬼立像（阿形）、龍燈鬼立像（吽形）は、それぞれ阿吽の形になっているところに興味を持ちました。阿吽とは始めと終わりを示し、さらに考えると善悪や男女、さらに無限と有限など相反する状態を示しているものです。仏教の奥深さを感じとても爽やかな気持ちになりました。

さて、今回は興福寺の大圓堂（本坊）の秘仏（聖観音菩薩立像）が800年の歴史を経て初めて公開された時期（10月20日から11月25日まで）に訪れることが出来たので、幸運で

した。ただし、かなり遠くからしか拝顔できないので、はっきりと観ることがとが出来ませんでした。美しい容姿でした。

ホテルを出た時間が早かったことで、興福寺ではほとんど団体と出会うことなくゆっくりと見ることが出来ました。特に三重塔が質素な中に気品が感じられ、ほのぼのとした安らぎを体感しました。

元興寺ですが、もとは蘇我馬子によって飛鳥にある法興寺（現在の飛鳥寺）でしたが、平城遷都の際に今の地に移転され名も元興寺と改められました。かつては、南都七大寺（東大寺、興福寺、薬師寺、元興寺、大安寺、西大寺、法隆寺あるいは唐招提寺）のひとつとして栄えた寺です。

しかし世の中には不変なものではなく、栄枯盛衰のなかで元興寺も平安時代半ばにその勢威が衰えたのです。現在残るのは極楽堂と禅室で、これらの建物の屋根は「行基葺（ぎょうぎぶき）屋根」でできていますが、この行基葺の瓦の中には飛鳥時代創建の「法興寺」の屋根に使用していた瓦があり、約1400年もの昔に作られた瓦が現在も当時のままの姿で何も言わず素朴な中に長い時間を耐えた重みが見る側に伝わってきます。

しかし、その重みは重厚なものではなくほっとする安らぎのある重みを感じました。元興寺は、これらの建物の瓦の歴史を、無心で眺めるだけで価値があると思います。確かに収蔵庫には奈良時代の国宝木造五重小塔や木造阿弥陀如来坐像・智光曼陀羅図がありますが、個人的には歴史ある瓦をゆっくりと見ることができたのでそれだけで十分でした。

法華寺ですが、大和三門跡に数えられる品格ある尼寺で、聖武天皇御願の日本総国分寺である東大寺に対して、光明皇后御願の日本総国分尼寺として創められた法華滅罪之寺です。寺は尼寺であることからとても清楚で心和むものがありました。

特に秘仏となっている本尊は、光明皇后の姿を写したという「十一面観音像」です。良質の榿材の一木造であり、木肌は緻密でこの上ない優美さを感じます。さらに女性らしい魅惑的でかつ官能的な香りがする仏像です。「秘仏」は厨子入りでいつも拝することが出来ないのが残念です。ただし、秘仏の右側にレプリカが置かれているので、その雰囲気だけは感じ取れます。

このような官能的な仏としては、同じ奈良で法華寺の近くにある秋篠寺の「伎芸天像」があります。「十一面観音像」にしる「伎芸天像」にしるとともに腰をちょっと捻った仕草は、本当に写実的でありまた官能的なエロスを感じました。仏教と尼寺と仏像が微妙に絡み合いながら心の奥深いところにある人間の清楚な欲望をそそるものがあります。とても不思議な感覚を感じた法華寺でした。

旅の最後に訪れたのが、法華寺の裏に隣接した海龍王寺です。海龍王寺は、飛鳥時代に毘沙門天を安置して建立された寺院を、天平3年（731）に光明皇后により海龍王寺としてあらためて創建したものです。また初代住持となった玄が、一切経五千余巻と新しい仏法とを無事に我が国にもたらすことを願うことと、平城宮の東北（鬼門）の方角を護るためにの役目も担っていたようです。

海龍王寺の本尊は、鎌倉時代に慶派の仏師により造立された十一面観音像です。檜材で金泥が施され、衣の部分の彩色は朱・丹・緑青・群青など諸色の地に唐草・格子に十字などの諸文様を切金で表されています。法華寺の十一面観音像もそうですが、この龍王寺の十一面観音像に対しても何故か、色っぽさを感じました。

また本堂は奈良時代特有の素朴な美しさをもった建築様式の構造で、これと同じ様な建物として法華寺と秋篠寺の本堂があります。これらの素朴な建築様式にふれるだけで、何故か心が和みまた安らぎを覚えるのは、奈良時代に人間の原点があるからではないかと思います。

奈良は日本人の心のふるさとではないかと思うのも、この辺の感覚からきています。

## 六波羅蜜寺を訪ねて！！

---

六波羅蜜寺を初めて訪ねたのは、2006年の3月下旬のことでした。六波羅蜜寺は、天曆5年（951）に醍醐天皇第二皇子である光勝空也上人により開創された西国第17番の札所です。この寺に興味を持った背景には二つの理由がありました。

ひとつは、中学生の頃の美術の教科書にこの空也上人立像の写真が掲載されており、空也上人の口の中から六つの像のようなものが飛び出しているのを見て、とても不気味な感じを受けどうしてこのような表現を用いたのかが不思議であり、そのことが長年にわたって心の片隅に残っていて、どうしても実物をこの眼で拝顔したかったからです。

昨年春に六波羅蜜寺を訪問したときには、その色彩にびっくりしました。現本堂は昭和44年（1969）開創1000年を記念して解体修理が行われたことにより、朱色で塗られておりとても華やかで、当時の様子が再現されたようでした。

古い寺というのは、見るからに歴史を感じさせるものだと先入観があるため、このように当時の華やかな色で再現されるとイメージが崩されるようで困惑してしまうことがあります。しかし世の中にあるどのような物でも、すべて新鮮で華やかなものから始まり、年を経る際に時間という要素が加わって全体の調和が取れて成熟し、そして最後は朽ちていくのです。そして朽ちたあとは再度もとの姿を再現するというサイクルで永遠と続いて行くのだと思います。

本堂の脇にあるお堂の中に、今回の目的であった空也上人立像がありました。この像は、鎌倉時代の有名な運慶の四男康勝の作で、胸に金鼓、右手に撞木、左手に鹿の杖、草鞋をはき、体全体は贅肉が全くなく質素を越えた外見は弱々しい様相のなかで、ひときわ目立つのが念仏を唱える口から六体の阿弥陀が現れた表現となっていることでした。

空也上人が森羅万象に生命を感じ、ただ南無阿弥陀仏を称え、今日ある事を喜び、そして歓喜躍躍しつつ念仏を唱えたというその行動が、この立像に事実の形で凝縮されていました。さらに目からは人の心に訴えかけるような気のようなものが出ている感じを受けたのは、私だけではないと思います。

六波羅蜜寺を訪れたもうひとつの理由は、この寺の名である六波羅蜜の意味に思いがあったからです。興味を持った六波羅蜜という言葉ですが、正確には仏教でいうところのこの世に生かされたまま、仏様の境涯に到るための六つの修行の事を指しています。

具体的な六つの修行ですが、布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧を指しています。蛇足ですがこの波羅蜜という言葉は、般若心経の写経をするとこの言葉が何回も出てきます。それだけ重要な言葉ですので、それぞれの意味を簡単に解説すると次に示すようになります。

布施：見返りを求めない応分の施しをさせていただき事をいいます。施しをするのではなくさせていただく点が重要です。

持戒：戒律を守り、自分のしたことを常に反省することです。

忍辱：他人から如何なる辱めを受けても、堪え忍ぶことを通して自らが他の存在に生かされていることを理解し、仏の慈悲に通じることです。

精進：人の生命は限りがあるので、ひとときも無駄にすることなく日々誠心誠意努力を怠らず取り組むことが大切です。

禅定：精神統一で心を安定させ、冷静に第三者の立場で自分自身を見つめることをいいます。

智慧：人は仏様の智慧を頂いてこの世に生をうけてきますが、人の貪りや怒り愚痴によってその大切な智慧をだめにしないようにすることです。

このような行動をとりながら、人としての正しい道を進むことをこの六つの言葉で表しているのです。最近はこちらの言葉の意味を理解しながら日々を送っています。仏教にはまだまだ多くの深い教えがあり、日々心を新たにして学びながら生きるようにしています。

## ぶらり京都へのひとり旅で考えたこと

---

今回の1週間の休暇の中で、3日間は京都への旅に費やしました。ここ数年、仏教・仏像と庭園に興味をもち、時間を見つけては奈良や京都あるいは関東周辺の寺院を訪ねています。三重にいた2年間は、よく車で奈良に出かけ古き時代の仏像や寺の歴史に触れていましたが、今回は久しぶりに京都を訪れました。

京都滞在は実質2日間であり、さらに天候が良くなかった中でよく回ったなあと思います。正直言って一日が終わり夕食がてら途中で軽く飲み、ほろ酔い気分でホテルに戻って部屋に入ると足が棒のようになっており、あとは心地よい眠りだけが待っているような状況でした。

今回訪れた所は、訪問順に法然院、永観堂、青蓮院、知恩院、相国寺、円通寺、三千院、修学院離宮、曼殊院、圓光寺、詩仙堂でした。これらの中で特に庭としては、知恩院、円通寺、修学院離宮と曼殊院が印象的でした。それぞれが異なる魅力をもっており、優劣付け難いものでした。

もともと大徳寺・龍源院の東滴壺のような枯山水の庭に興味があるのですが、今回修学院離宮の上御茶屋にある隣雲亭からの眺望は、正直言って本当にびっくりさせられました。水と木々と地形とさらに遠くの山々との流れが見事に融和しており、人工的である庭にも係わらず自然な美しさがあり感動しました。

また、仏像では、永観堂の阿弥陀如来立像（みかえり阿弥陀）の美しさと、三千院の阿弥陀如来座像、観世音菩薩と勢至菩薩の阿弥陀三尊像中で、特に勢至菩薩の微笑みのある顔に釘付けになってしまいました。永観堂の阿弥陀如来立像といい三千院の勢至菩薩といいこれらの仏像を拝顔しながら、ずっとこのまま観ていたいという無の心境になった程でした。

これは、心を落ち着かせる何らかのエネルギーが出ているのだと思うのです。最近特に思うことですが、優れた芸術とか人の心の支えとなるしっかりとした宗教（怪しげな新興宗教はこの分野に入りません）には、目に見えない「気」のような、あるいはエネルギーのようなものが存在しているからこそ、芸術を通してそれが心の琴線に触れ感動したりまた、宗教の教えにより悩める心がすうっと軽くなり、明日への生きる力が湧くのでないかと感じています。

これまで、哲学は重要であると認識していましたが宗教を信じるまでには至っていなかったのは事実です。しかし最近、歳をとったことが影響しているのかも知れませんが、仏教が説く考え方に何か心の安らぎを感じるものがあります。さらにこの背景には五木寛之の影響もあると思いますが、自分自身を客観的に見た場合、昔からおじん的な考え方であり、派手でなく地味だと思っています。さらに若い人と比べれば五十路を過ぎると死というものが手を伸ばせば届くような距離に近づいているからこそ、余計に興味を持たざるを得ない状況にあるのも確かです。

台風14号の影響で丸2日間雨の京都を歩きながら、仕事のこと、定年退職後のこと、生きることと死ぬこと、自分の好きなことや好きなものとかやりたいこととか・・・、いろいろなことを考えました。結論は、他人を気にすることなく自分の生き方や人生をしっかりと進めてみようというものでした。

いろいろ考えても、所詮凡夫の考え方は浅く薄いので、最後はまたもとの出発点に戻って来てしまい完全なループ状態になってしまいます。ならば、自分の心に素直な生き方で無理せず、少しずつでも前に進めればいいのだと思いました。それらを進めながら途中で命が続かずに絶えてしまえば、そこまでと思えば良いのだし、反対にそれしか出来ないと思うです。

このようにある点で割り切ると人間の心は急に軽くなります。そして、周りのものが急にありがたいものに見えてくるのです。さらに周りの人の力で自分は生かされているのだと思うようになるから不思議です。

今回の京都の旅の中で、台風の影響で特に湿度が高かったせいもあるのだと思いますが、雨の中を歩いて目的の寺院で休んだ際に、扇子を取り出して扇ぎ、ある程度涼んだ後に閉じようとしても、扇子の骨に貼ってある布が湿気を帯びて閉じられず、びろーんとした状態に何度もなりました。

この現象は、今までの仕事中心の行動様式を改めよという自分自身に対するメッセージなのだろうか勝手に考えてしまいました。今まで、どちらかという仕事中心で生きて来たことは間違いないことで、ある面で自分自信を可愛がったことは少ないと思います。この奇妙な現象にはびっくりしましたが、不思議なものでその後、布が乾くと元通りぴしっと綺麗に閉じることが出来たのです。

何事も時間が経過すると解決するものだと良く言われますが、正にその通りだと実感した次第です。人生もこれと同じで焦らずにまた無理せず、さらに待たなければならない時もあるのだと気付くと共に、自分を大切にする必要を素直に感じました。

今後は、休みの日には仕事をせずに、けじめをつけた生き方をしようと、心に決めた旅でもありました。それぞれの寺院で感じたことは、今後機会を見つけて書きたいと思っています。台風14号に追いかけるように、東京に戻って来た有意義な3日間のぶらり京都ひとり旅でした。

。

## 三重県立美術館を訪れて

---

平成16年2月11日の祝日に津の住まいから歩いて15分程のところにある三重県立美術館に行ってきました。以前より一度は行かなければと思っていましたが、約1年ほど増改築のために休館していたこともあり行くチャンスがありませんでした。11日は週の中間の祝日であり、またこの日は天気も良く暖かかったので散歩がてら楽しむことができました。

去年の11月にリニューアルオープンした関係で館内はとても綺麗でした。また常設展だけの期間であったためか、鑑賞のために訪れている人の数もまばらでゆっくりと鑑賞することが出来、海外の美術館にでも来ているような錯覚を覚えました。

所蔵品は約5000点とのことでしたが、常設展の2階のフロアーには全部で100点もないこじんまりとしたものでした。しかし、個人的には新たな発見がありました。

まず今まで全く知らなかった日本人画家の作品を観て、大変に失礼な言い方ですが油絵の分野でも日本人は捨てたものではないなあと考えた次第です。知らないということは恐ろしいことでもあるのです。

具体的には、佐伯祐三の「サンタンヌ教会」と荻須高德の「街角（グルネル）」作品で、ともに昭和初期に描かれたものでした。

ともにパリの様子を描写したもので、芸術の都パリでは新たな表現を求めている画家達が世界中から集まっていた時期で、この2人もパリで作品を描いていたとのこと。画家の名を伏せて展示していればフランス人画家が描いたものだろうと思ってしまうほどです。

日本的という表現が当たっているのか分かりませんが、そのようなものが感じられないインターナショナルを感じる作品でした。油絵が日本人は向いていないとの個人的な偏見は今後もたないことにしました。

次の新たな発見は、なんと三重県にシャガールの作品があったことです。「枝」という作品で、シャガールの作品に描かれているいろいろな要素（エッフェル塔、花束、恋人達、街並み、鳥等）が詰め込まれているもので、ほのぼのとした感じを受ける作品でした。

作品の大きさは中型？（150×120cm）で、十分に存在感のあるものでした。何と云ってもおじさんの大好きなシャガールのブルーで描かれており、見た瞬間に心の中でヤッターと飛び上がってしまった感じでした。

また、シャガールは1956年にパリの一室で次のように言ったとされています。「私はニヒリズムを好まない。確かに人生は暗く悲しい。しかし、芸術は愛によって悲哀を歓喜に変えるのだ。ジョットの絵やモーツァルトの音楽のように。」個人的に納得してしまう内容です。シャガールの名を聞くといつもパリオペラ座の天井に描かれた絵を思い出します。

もう一つの発見は、ルノワールの絵に会えたことです。事前にルノワールの「青い服を着た若い女」があることは知っていましたが、実際にどのような絵なのか興味がありました。初めて観た瞬間にルノワールの作品と思える特徴のあるもので、期待を裏切るものではありませんでした。

おじさんが好きなルノワールの作品は裸婦を描いた作品です。助平なんて言わないで下さい。男は皆助平なのだから。。しかしルノワールほど本当に女性を美しく描く画家はいないと思います。話題が少しそれてしまいました。

この「青い服を着た若い女」を観て感じたことは、ルノワールの作品の中では全体的に暗い感じを受けるものでした。作成年代が1876年頃と記されていたのでパリのオルセー美術館にある有名な「ムーラン・ド・ラ・ギャレットの舞踏会」とほぼ同じ時期ですが、画風が異なるのはおじさんの個人的な思い違いなのでしょうか。

若い女は青い服を着ていて白い襟と胸の紺のリボンによりコントラストがついている感じです。なによりも透明感がある若い女の肌と澄んだ綺麗な目がとても印象的でした。その目はこちらを見ながら「あなた真面目に生きている？」と私に問いかけているような感じを受けました。

その目はとてもクールで厳しい目ともとれるし、温かい励ましを送っているような目でもあり暫くそこに立ち尽くして彼女とお話をしたような不思議な感じがしました。とても素敵な女性でおじさんのタイプでした。またこの女性に会いに美術館に行くような予感があります。魂が入っているようなとても不思議な絵でした。

今回三重県立美術館を訪れ、当初予想もしなかったいろいろなことがあり、本当に充実した休日の午後を過ごしました。入館料が300円と安かったし、あとはモーツァルトを聴けば大満足の日です。

## 女性美の極致【上村松園展】を観て（三重県立美術館）

---

平成16年4月の中旬に三重県立美術館のリニューアル開館記念として開催された女性美の極致「上村松園展」を観て来ました。最終日のそれも閉館2時間前だったためか、多くの人で混みあっていました。上村松園のことは全く知らずというより予備知識なしにただ絵を観ました。大変に失礼な話しですが、上村松園が女性の画家であることすら知りませんでした。

上村松園は女性の日本画家であり、明治8年に京都の四条に生まれ幼少時から画才を発揮して、小学校卒業後京都府画学校に入学、その後鈴木松年入門し絵の勉強をし、28歳の時に画家として独立したそうです。

当初は女性の情念を強く表現した作品を描きましたが、昭和に入り格調高い女性像の他、市井の女性を題材に清潔感あふれる女性像を描き、女性として最初の文化勲章を昭和23年に受章し翌年に74歳でこの世を去った日本を代表する日本画家です。

全体を観て感じたことは、日本画は西洋画と比べると平面の中に立体感を出す細かな技があるような気がしました。そしてよくよく観察して気づいたことは、形を模るための線がとても重要な役割を果たしているように思えたのです。

絵自体の色はどちらかと言うと単調にそしてシンプルに塗られています。油絵のように絵具をべたべたとキャンバスに塗りたくったものではなく、形を現す線と線で囲まれた部分を色の濃淡で複雑な様相を表しているような感じがしました。

ですからどの絵を観ても脂っこくなくさらっとした感じで正に和食の感じですね。そして今回の絵は全て女性を描いたものであり、美しくまた心のちょっとした気持ちが画面に表現されており繊細な絵であったと思います。

また、どの画家でもそうですが年代により描く絵の心が変化することです。この上村松園の場合もそうであり、同じ女性を描いても対象やそこに込める心が異なっていて、その画家の絵に対する考え方とかそれに伴った生き方の時間の流れを感じました。

今回の美術展は約80点と大下絵が展示され、美しい女性と日本画の素晴らしさを認識しました。その美人画は、凜とした気品を漂わせ、描かれた女性の表情、仕草、着物の描写、そして時代の背景や風俗を反映させた描写なされ、独特の世界を作り出していました。

女性を描いた画家で好きなのは勿論ルノワールですが、これは洋画の世界であり日本画では今回の上村松園が素晴らしいと思いました。有名な作品が多い中、私は「初春」と題された作品が気に入りました。帰りにカタログを買って帰ろうと思いましたが、好評なのか既に完売でとても

残念な思いをしました。

今回の絵とは関係ありませんが、子供を描いた絵ではいわさきちひろが良いですね。古今東西を問わず女性と子供を描いた絵は心が和みます。

## 「ゴッホ、ミレーとバルビゾンの画家たち」（名古屋市美術館）

---

平成16年5月、名古屋市美術館で開催されていた「ゴッホ、ミレーとバルビゾンの画家たち」を観てきました。このGWには渋谷での「モネ、ルノワールと印象派展」を観たところですが、名古屋の展覧会の企画も価値のあるものでした。

最近の美術展は単に作品を展示するのではなくさらにそこに付加価値を付けたものが多くなり、観る側にとって大変に勉強になります。以前のメルマガでゴッホのことを書きましたが、今回はこの美術展の企画でもあるゴッホ、ミレーとバルビゾンの画家たちとの関連をまとめながら観た感想を書くことにします。

ゴッホはモーツァルトと同じ様に多くの書簡を残しています。この書簡の中で興味深いのは174回もミレーの名前が登場することです。それだけゴッホは、ミレーに対して尊敬の念を抱いているとともに、ミレーの作品に感銘を受けていることが分かります。

ミレーは農民画家で1814年フランス北部のグリュシーに生まれ、農作業に励む傍ら絵を描いていましたが本格的に絵の勉強を始めたのは19歳の時だったようです。その後幾度かの挫折や新たな出発があり1849年にバルビゾンに移り、そこで自然の中で働く農民や農村の様子を題材にした絵を描いています。

ミレーの描く絵は、本質の姿をありのままに堂々とそして威厳をもって描かれています。バルビゾンに来る前の1840年代には、多数の裸婦の絵（現存するのは25点ほど）を描いていますが、今回展示されていた「葦の中のニンフ」を見る限りにおいては、女性の体の美しい曲線が主眼でその美しさを中心に描かれているようです。

ミレーは家計を支えるために当時流行っていた裸婦を描いたとされています。私の好きな印象派のルノワールが描く裸婦には、描かれた人間の可愛らしさやふくよかさにその主眼が置かれているので、両者の差異がはっきりと分かります。また、ルノワールは女性の美しさを描くことに生涯をかけた画家だと思えます。

また、ミレーはバルビゾンに来てからは、農村で働く人間や風景を描き、その絵の中に自然の厳しさや、人間の悲しみ、辛さ、希望等を描き込んだのです。ただ個人的には、ミレーの絵は苦手です。ルノワールのように色調が美しく絵全体にふくよかさや微笑まじさが漂っている絵が好きです。

ゴッホが画家として活動したのは、晩年の僅か10年に過ぎませんが、この期間の中でミレーをはじめとするバルビゾン派が果たした役割は決定的であったと言われていすし、ミレーに対する傾倒は異常なほどだったと言われていす。

さらに画家として歩むことを決意したゴッホが最初に行ったのは、ミレーの素描や複製画を模写することでした。何事もまず良いものとか気に入ったものを模倣することから次の新しいものを生み出すのだと思います。これは人間が得た知恵を次の世代に引き継ぎ、さらに良くして行くことと同じです。

良いものは模倣したり参考にすることにより次のステップに進み、それをまた次の者が引き継ぎというシステムで完成度を高める仕組みは重要だと思います。絵画でも音楽でもビジネスでも同じことです。ミレーからゴッホへそして次の世代へと絵画を描く魂や感情やそれを表す手法が引き継がれて行くのです。

今回展示されていたゴッホの絵の中で印象が強かったのは、1887年の夏に描いた「自画像」の絵でした。ゴッホは死ぬまでに41枚の自画像を描いたと言われていますが、この絵を見ると何故かエネルギーが吸い込まれる部分と絵からのエネルギーが出ている事を感じる部分があることです。

また絵を観ながら不思議に感じたのは、絵の右側の部分がブルーで均一に塗られていることです。後でガイドブックを読んで分かったことは、この絵をX線撮影で調査したところボンネットを被った農婦がこの部分から浮かび上がったようです。

と言うことは、過去に使ったキャンバスを再利用するためにこの部分を青い絵具で均一に塗ったことになります。このことから従来のゴッホの描写手法と絵の右側の部分をほぼ均一に塗った部分の対比が強調され、エネルギーの吸収と発散が感じられるのかも知れません。

とっても気に入って、全ての絵を観た後に、再度戻ってもう一度観ましたが同じ感覚を感じました。とても不思議な絵で忘れられないゴッホの絵となりました。観終わった後、会場内にある美術ショップでこの絵を購入しようと思いましたが、これらの絵からはエネルギーが感じられなかったので結局買いませんでした。

本物の絵からのみ発せられるエネルギーなのだと勝手に納得してしまいました。久しぶりに、心が感じる絵を観られて幸せでした。名作には何らかの力が埋め込まれている感じがしました。それは魂とでも言うものなのではないでしょうか？？・・・

## モネ、ルノワールと印象派展（渋谷Bunkamuraザ・ミュージアム）

---

平成16年2月に渋谷Bunkamuraのザ・ミュージアムで開催されている「モネ、ルノワールと印象派展」を観てきました。今回は秘蔵のプライベート・コレクションを中心に作品が集められており、海外の美術館に足を運んでも普段は公開されていない知られざる印象派作品が一堂に会していました。その点では足を運んだ甲斐がありました。

この展示会は、印象派全体を整理して「風景画」と「人物画」という二つの流れを明確にして印象派を別の切り口から我々に対して提示してくれたものでした。美術を専門とする人には百も承知の事実なのかも知れませんが、私のような全く美術を知らないものにとってこのような方法は大変に役に立つ企画であったと思います。

この2つに分類された中で、ルノワールが好きな私としてはやはり「人物画」に惹かれます。モネはどちらかと言えば「風景画」でありルノワールは「人物画」に分類できます。また、絵具の使用方法では、モネは不透明絵具を好んで使用し、これらから色彩の輝かしさを生かし自然の中の光を表現したとされています。

これに対してルノワールは、透明絵具の使い方に優れていたもので、不透明絵具の上にこの透明絵具を重ねて塗ることで新たな色の表現を獲得したのです。モネは不透明絵具の組み合わせで「風景画」を、ルノワールは不透明絵具と透明絵具の相反する融合によって人間の心を描くように微妙なバランスで「人物画」を描く事に成功しています。

いつものことですが、ルノワールが描く人物の肌の表現は格別なものがあります。それはいかにも生きている肌のように透明で生き生きとしています。また微妙に赤い色とか白い色が澄み切った透明の肌から浮き上がって見え、ますます心が通った暖かさを感じるようになります。

今回の展示会でルノワールの作品は33点展示されていましたが、私が好きな作品は5点でした。1879年に描いた「裸婦」は小さな絵でしたがルノワールには珍しく、おじさんが好きなシャガールに近いブルーを裸婦の周りに塗りこみ引き立たせていました。肌の白、髪の色、体の一部に使っている黄色、そして周りのブルーがバランスよく配置され、安心と暖かさを感じる作品になっていました。ルノワール的でない面がありました。

1902年の「羊飼」の作品は、心が暖かくなる色調で描かれており、ふっくらとした感じがありルノワールらしさが出ていて好きになりました。また1905年の「肌着を直す若い娘（ルイズ・ベンゼル）」は可愛らしくそして愛くるしく心が和む美しい絵でした。また、1909年の「読書をするレオンティーヌ」と「レオンティーヌとココ」は微笑ましくなるような暖かい感じのする絵で、無条件に好きになってしまいました。

それに比べ今回の展示会のポスターやパンフレットで紹介されている「青い服の子供」はどうも好きになれません。何故ならば子供の顔の中で目、鼻、口の周りに青い服の反射の色を表現したのかも知れませんが、パープルに近い色を縁取りとして使用しています。これにより折角の子供の顔が少し不気味に見えたとともに不健康感が出ているように思えて仕方がありません。

この絵が持つエピソードとしては、「青い服の子供（エドモン・ルノワール）」と「レオンティーヌとココ（クロード・ルノワール）」の2点はハリウッドの大女優グreta・ガルボが愛蔵していたものだそうです。

特に「青い服の子供」は、当時36才だったガルボがニューヨークのギャラリーでひと目見て気に入り、先に購入を決めていた紳士よりゆずり受けたという話が残っています。

しかし、このように良い絵を秘蔵のプライベート・コレクションとして独り占めすることは本当に絵にとって良いのか疑問です。芸術は多くの者と共有したり共感するところに価値があると思っているからです。

我々のような庶民はこのような企画があったら時間を作って足を運び、思いっきり絵の印象を心に焼き付けるしか方法は無いのかも知れませんね。でも良い絵を観た後は心が何となく軽くなるのが不思議です。

帰りに東急本店の地下にあるドウ・マゴで、焼きたてのパンを買って帰りました。電車の中が香ばしいフランスのパンの香りがして、ちょっと幸せな感じになりました。

## ドラクロワからムンクまで（19世紀ヨーロッパ絵画の視点）を観て

---

平成16年6月、名古屋ボストン美術館で開催されていた開館5周年記念ドラクロワからムンクまで（19世紀ヨーロッパ絵画の視点）を観てきました。この美術館を訪れるのはこれが2回目です。

最近の美術展はただ単に良い作品を展示するだけでなく、それらの背景となる事実を紹介したり、その時代の一連の作品を網羅することにより全体としての統一感を出すような企画展が多くなりました。これにより素人が観る場合には、非常に参考になり頭の中が整理され、観終わって美術館を出るときは何か心が豊かになった気がします。

今回のテーマは19世紀ヨーロッパ絵画の視点と言うことで、この時代の絵画がどのように変遷してきたのかを大きく4つの切り口で見せていました。その4つとは、「古へのあこがれ」、「東方へのあこがれ」、「現実を見つめる」、「近代生活を見つめる」です。

19世紀のヨーロッパは、政治、経済が大きく変化した変革の時代であり、人々を取り巻く世界は広がり多様化していきました。芸術のスタイルも、これに伴い古典古代に規範を求めた新古典主義、豊かな色彩で劇的な作品を生み出したロマン主義、ありのままを描こうとした写実主義、そして印象派、後期印象派と展開し新たな世紀の20世紀へと向かっていったのです。

画家たちは、激動する社会とともに自らを取り巻く世界を表現してきました。この展示会ではドラクロワ、ミレー、コロー、マネ、ゴッホ、ムンクら画家37人44点の作品を通して、19世紀を表現しています。これらの中には私の大好きなルノワールの作品が2点あり、とても満足しました。

まず最初のコーナーである「古へのあこがれ」では、はるか昔の日常生活に対する新たな思索への糸口や中世やルネサンスの歴史や文学などからも主題を求め、作品の着想の根源として描かれた作品が10点並んでいました。

これらのなかで「ダンテとベアトリーチェ」（アリー・シェフェール）、「兄弟愛」（ウィリアム＝アドルフ・ブーグロー）、「希望」（エドワード・コーリィ・バーン＝ジョーンズ）の3点に描かれている女性の顔立ちに透明感があり、素晴らしいと思いました。目は心の窓と言いますが、心の中の全ての動きが顔全体に描き出されているようでした。特に「兄弟愛」の作品に描かれている母親はとても素敵でした。

次のコーナーは「東方へのあこがれ」であり、当時の東方と呼ばれていたトルコやペルシアさらには北アフリカのイスラム文化圏に画家自らが訪れ、ここで異国情緒豊かなこれらの国々の風俗をテーマとして新しい取り組みをしたのです。

ここには7作品が展示されていましたが、私は何と云ってもルノワールの「アルジェリアの娘」に描かれている色彩の中に、有り余るほどのあこがれが満ち溢れているような印象を受けました。背景の青も民族衣装のオレンジ色も、また黒髪もみな生き生きとしていまし、異国情緒とはこのようなことを言うのだとルノワールが言っているようにも思われました。あたかもモーツァルトの天使の音符のような感じでした。

3つ目のコーナーは「現実を見つめる」であり、13の作品が展示されていましたが、どの絵も悲しみや辛さや暗さなど、どちらかという社会の中でも貧しい人々に光を当てて描かれています。以前にバルビゾン派の絵画展を観た時と同じ感じを受けました。

しかし不思議なことに観ていて悲しくはならず希望が湧いてくるような感じがするのです。辛く苦しい生活が描かれていますが、心の中にはあきらめではなく向上心が表れているので、観る側に悲しさでなく希望のような光を感じるのではないかと思いました。13の作品の中で「別離の前日」（ヨーゼフ・イスラエルス）の作品では、そこで暫く足が止まってしまいました。同情する心が湧き出たような気がしました。

そして最後のコーナーは「近代生活を見つめる」というものであり、「現実を見つめる」コーナーよりも明るく社会全体が躍動しているような感じが描かれていました。14の作品が展示されており、ここでもルノワールの絵がありました。「ガンジー島の海辺の子どもたち」がそれで、海辺で夏らしい服に身を包んだ母親と3人の子供が生き生きと描かれて、喜びが溢れている感じを受けました。

この時期は戸外での生活様式を描いている作品が多い中、ムンクのように世紀末に向かうころには、画家の視点は目に見えない内面の世界に向けられ、あらたな感情や神秘性に近づく動きが出てくる時代となったようです。

絵画も音楽と同じようにその時代の様子が反映されるとともに、次への新しい試みが行われ次のステップに移行していくようになるのです。個人的には音楽は18世紀から19世紀の前半まで、絵画は19世紀の作品が心に響くものがあります。

最近の音楽や絵画は抽象的な表現が多く、素直に感動することが出来ない感じがします。作品を観たり聴いたりした時に考え込んでしまう作品は問題があると思うのです。創作側からすると既成概念を打ち破り新たな表現を見出すことが芸術だと言われそうですが、打ち破った新たなものが理解されなければ意味がないと思うのです。

確かに過去の音楽でも絵画でもその時代の人に理解されず、評価されなかったものがあつたの

は事実です。しかし、今の時代のもとの質が異なると思っているのは私だけでしょうか。ひょっとして、時代に完全に乗り遅れているのかも知れませんが。

## モディリアーニの「おさげ髪の少女」を見て♪（名古屋市美術館）

---

平成16年9月、名古屋市美術館の常設展を見てきました。名古屋市美術館を訪れたのはこれで2度目ですが、前は今年5月に開催された「ゴッホ、ミレーとバルビゾンの画家たち」の特別展を見ましたが、その際に併せて常設展を見ることが出来たのですが一度に良い作品を見ると、見る側の心も疲れるしさらに、それに伴って生じる感動が弱くなってしまいうまう傾向があることから、常設展は次の機会にとっておいたのです。

なんと言っても常設展のメインはエコール・ド・パリのコーナーにある「おさげ髪の少女」の油絵です。その画家の名はアメデオ・モディリアーニ（1884年～1920年）でイタリア、トスカナ地方の港町リヴォルノの富裕なユダヤ人家庭に生まれた画家で、当初は彫刻家を目指していたようですが制作段階で生活貧困により材料を買う資金がないのと、病弱で体力に自信がなかったため彫刻を断念し、その後絵画に専念するようになったようです。

現在残されている写真を見る限りモディリアーニは、とてもハンサムな男だと思います。しかし彼自身の生活は荒れ、アルコール・麻薬・肺病・貧困に苦しめられる中でついに36歳の若さでそれも泥酔して街頭に倒れモンパルナスの慈善病院で没し、悲劇的な一生を終えたとのことです。

このモディリアーニは、1917年にパリの小さな画廊で個展を開こうとしていた時がありましたが、警察から待たがかかり、画家が生前に開いた唯一の個展は中止となりました。この時の中止の理由は、それが女性のヌードでありさらに今までの裸体画スタイルにはなかった「ヘア」を描きそれが刺激的であったようです。

何事も従来のスタイルを打ち破り新たな形を作り出すときには大きなエネルギーが必要となるものです。モーツァルトは35歳、今回のモディリアーニは36歳でこの世を去っていますが、それぞれの境遇は異なるものの才能ある人物に何か共通するものがあるよう気がしてなりません。

今回名古屋市美術館で見た「おさげ髪の少女」は、従来の特徴ある彫刻に関連した造形性を優先したものでなく、素直で素朴な人間の情感が自然な形で現されており、モディリアーニの心に何らかのトリガーで無心という状態が作り上げられているような気がしました。

この絵が描かれたのは1918年頃ですから、この画家が世を去る2年弱前の作品となります。この時パリは第一次世界大戦で混乱していたことから療養のために恋人ジャンヌと南仏に行っていた時期であり、かつジャンヌとの間に女の子が誕生するなど一時的な幸福感に満ちていた時期であったことが、「おさげ髪の少女」に描かれた澄んだ青い目から何気なしに、そして素朴に語りかけているような気さえしました。

この絵の背景の色は、顔を中心として左が青色、右が茶色でそれぞれ壁や扉が描かれており、着ている洋服の色がこれまたなんともいえない配色で全体に不思議な暖かさを感じさせ見る者の心を優しくしてくれます。

モディリアーニの作品には、ゆったりとした優しさを伴った優雅さがあります。他の画家が真似の出来ない独自のスタイルを確立し、さらにそれを洗練し、優雅さを加え、見るものに不思議な不安感を与えながらそれ以上に安定感を与えるようにし、かつ形を単純化して描いていると思います。

ただただこの絵に見惚れて何度も「おさげ髪の少女」の前に立ちこの絵を眺めながら心の安らぎに浸りました。このようにとても充実した時間をたった入館料300円で味わうことが出来るのです。ありがとうございました。感謝！！

参考に、モディリアーニ作「おさげ髪の少女」は名古屋市美術館の目玉として、オープン当時、公立美術館のなかでは、最も高額の3億6000万円という値段で購入されたとのこと。

## ブリヂストン美術館を訪ねて

---

平成16年10月、東京へ行ったときに、東京駅の近くにあるブリヂストン美術館を訪ねました。たまたま『マネ、モネ、ルノワールから21世紀へ「巨匠たちのまなざし」』の企画展が開催されていました。

通常はどのような展示をしているのか分かりませんが、当日見た限りではとても見易く、内容を理解する上で参考となる展示室ごとの解説も適切で素晴らしいと思いました。展示は第1室から第10室まで区切られており第1室は『西洋伝統絵画と「物語」近代絵画のめざめ』、第2室は「さまざまな日本洋画」、第4室は「印象派の登場」、第5室「ポスト印象派モネ」、第6室「19世紀末から20世紀初頭のさまざまな動き」、第7室「マチス」、第8室「ルオー、ピカソ」、第9室「具象画家の冒険、シュルレアリスム、抽象絵画」、第10室「20世紀の日本美術のはじまり」でした。また、第3室は他の展示でした。

この順番にそれぞれの絵画を見て行くと、絵画の世界の流れがどのような考え方に則って進んで来たかが素人にも分かるような仕組みになっていました。個人的には素晴らしい展示方法ではないかと思いました。今まで他の美術館を見て来ましたが、分かり易さの点ではこのブリヂストン美術館は最高ではないかと思います。

印象に残った絵画はレンブラントの「聖書あるいは物語に取材した夜の情景」、グレゴリオ・ラッザリーニの「黄金の子牛の礼拝」、ルノワールの「すわるジョルジェット・シャルパンティエ嬢」と「少女」、モディリアアーニの「若い農夫」、マイヨールの「欲望」（ブロンズ）、岡田三郎助の「臥裸婦」、山下新太郎の「供物」、藤田嗣治の「ドルドーニュの家」などでした。

どの絵にも心に届く感情があり、見ているとどれもゆったりとそしてじわじわと伝わってくるようです。またそれぞれの絵画からはそれぞれの画家の世界観のようなものが広がっており、本当に心が落ち着く感じがしました。

良い絵や彫刻というのはどのような時代のものであれ、またどのような作者であれ、それぞれの小宇宙から色や光や暖かさや清清しさや可愛らしさや楽しさのエネルギーが放出されている感じを受けます。そしてそれらに少しでも触れそれを感じる事が出来た時に、この絵は良い絵だなあと感じるのだと思います。また、さらにこれらのエネルギーを受けて、個人の心の宇宙に飛び込んだ時に心の中で万華鏡のように輝くのだと思います。

ルノワールの作品はどれも自分の心に響くものがありますし、以前にパリのマイヨール美術館で出会ったマイヨールの彫刻と絵画に感動し、その後も気になっていた芸術家のブロンズの作品を今回見つけたときに喜びをどのように表現して良いか分かりません。

約1m四方の正方形の型の中に若い男女の裸体が描かれている「欲望」という作品は、思春期の求愛のように初々しさがありまたロダンを思わせるような情熱的な作品でした。この作品は2階から1階に通じる階段に掛けられており、エレベータで1階に行ってしまうと目に触れることなく美術館を後にしてしまいます。

また、岡田三郎助の「臥裸婦」は不思議な雰囲気をかもし出しており、暫くその絵の前に立ちすくんでしまう衝撃がありました。失礼な言い方かも知れませんが、日本の画家もルノワールと同じ様に裸婦を十分に描く事ができるのだと変に感心してしまいました。

最後はやはり大好きなルノワールの作品について述べたいと思います。今回の企画展のパンフレットの表紙を飾っているのがルノワールの「少女」という作品です。シュザンヌ・アダンをモデルとしたパステル画であり、特に少女の目が明るいブルーで描かれておりそれも着ている洋服と同じブルーなので驚かされます。

この作品は現在フィラデルフィア美術館が所蔵しているあの有名な「大水浴」と同じ時期に描かれており、共に描かれている女性の品の良さが心に残ります。誰でも一度見たら忘れられないものとなります。

またこの「少女」の絵は、同一人物を描いたもう一枚のパステル画が見つかり現在山形美術館にあるようです。写真で見ると限りにおいては、優しさと品格からみるとブリヂストン美術館にある絵の方が上であるような気がしました。

東京駅から徒歩5分程のところに静かに良い作品を見る事ができる美術館があることに喜びを感じました。東京駅周辺でちょっとした時間があったら訪れてみる価値のある美術館だとも思いました。

## マチィス展を見て（国立西洋美術館）

---

平成16年11月、上野にある国立西洋美術館で開催されている「アンリ・マティス展」に行ってきました。東京の美術館に足を運ぶのは先月に行ったブリヂストン美術館以来です。東京には規模を考えなければ多くの美術館があり、こまめに足を運ぶとかなりの作品に出会う事ができます。これは地方都市にはない、東京だけの魅力かもしれません。

さて、マチィスですが作風から見てほのぼのとした作品があり、ルノワールのように大好きの分類には入りませんが、好きな画家の分類に入ると思います。個人的に見た感覚としては、油絵を使った作品ですが何故か水彩画のような感じを受けます。色を重ねるのではなく薄く延ばす感じがしました。使用している色も暖かさを感じる色彩が多く使われていて、心が落ち着く感じを受けました。

また、会場内での説明を読んで初めて分かった事ですが、作品を生み出す過程に重きを置いた画家のようです。ですから、会場にはその作品ができるまでの作品の様子を月日を表示しながらその変遷を示しているコーナーがありました。

この展示会のポスターや入場チケットに描かれている「ルーマニアのブラウス」がそれに該当していました。それはちょうど作曲家が作品を作るときの習作を時系列に並べたような感じです。確かにそれらを見ていると最後の結果と書き始めの構図等が大きく異なっており、画家がいろいろ描いている瞬間にその対象物との会話や、あるいは描いている作品と画家との対話や、画家自身との葛藤のような動きがありそれらがいろいろな変遷を経て最終の作品になっているのだと感じる事が出来ました。

他の多くの画家も多分同じような描き方なのではないかと思いますが、特にマティスは制作の過程をオープンにし、それも写真に収めています。作品ができるまでの「過程」に意義を見出しているこのマティスの画家としての拘りに感じるものがありました。他の画家はこれらの過程を公開せず最終的な作品だけを発表しているものと思います。

展示されていた作品は120点ほどであり、世界の主要な美術館や個人所有の作品が展示されており一挙にマティスの作品を見ることが出来るのは、このような企画展であるから可能になるのだと思いますし、機会があれば是非とも足を運ぶべきだと思います。

展示会の中で個人的に関心を持った作品等が3つありました。一つはブロンズの作品で裸婦の背中を表現した作品群であり、1909年から1930年までに同じテーマで4つの「背中」と題された作品が時系列的に並べられていました。

時間を経るごとに具体的に表現された裸婦の背中が、より抽象的に変化していく過程が現され

ておりとても興味をもちました。どの作品の背中も何かを語っているのです。ただロダンのように情熱的ではありません。静かな訴えが響いてくるような印象を受けました。

一般的に男性の背中が人生を語ると言われていますが、今回の裸婦の背中は悲しい幸せを語っているような印象を受けました。皆さんも現物を是非ともご覧になってその背中が語っているものが何かを感じ取って下さい。

二つ目は、デッサン集「テーマとヴァリエーション」からシリーズLという女性のモデルを描いたもので20枚程度の作品です。描かれているモデルの表情が一枚一枚異なっておりさらに全体的に見ると大きな動きの流れを感じることが出来るように工夫されています。

これも新しい試みなのではないかと素人的に感じました。どちらかと言うと実験的な取り組みで新たな絵画の世界を作り上げた画家なのかもしれません。

最後は「立っている裸婦、黒いシダ」という作品で黒の墨で描かれた作品です。この作品はどちらかと言うと東洋的な臭いを感じます。黒それも墨を使ってシンプルな線で描いた作品は正に東洋的な禅に通じ、枯山水的な境地に入ってしまう。他の画家と同じ様に、当時のマティスは日本や東洋の文化に興味を示した結果だと思われま。

マティス展のポスターを見る限りでは色鮮やか作品ばかりが展示されているものと思って行きましたが、最終的に興味を持ったのは全て黒一色の世界の作品やブロンズでした。自分でも意外な感じを持っています。

今回マティス展を見て感じたことは、作品の「過程」を重要視していることから時間の流れがあり極端な言い方をすれば音楽に近い領域で芸術を語る挑戦をした画家なのではないかと感じました。いままでにない画家であることは確かです。とても勉強になった美術展でした。12月12（日）まで開催されていますので、興味のあるかたはお出かけ下さい。秋は芸術の季節ですから。

## 「ちひろ美術館」を訪れて

---

平成16年11月の日曜日の午後、いわさきちひろが好きな私はいままで訪れたいといつも思っていた「ちひろ美術館」に出かけてきました。透明でやさしい色彩につつまれたちひろの絵には、他の人には真似できない独特のがあります。

私が初めてちひろの絵を見たのは今から30数年以上も前の高校生の頃だと記憶しています。そのころは音楽以外にあまり興味を持てなかったこともあり、絵を見ても心に響くものを感じられない貧しい感受性しか持ち合わせていませんでした。そのような時に何かのきっかけで、ちひろが描いた可愛らしい少女の絵を見て心から可愛らしいと思ったのでした。

ベートーヴェンのような硬いがっちりとした音楽に埋もれて生きていた自分にとって、新たな世界が開けた、それも自然に感じる事ができた初めての経験でした。このような絵があるんだなあと本当に素直に感動したことを覚えています。モーツァルトと出合った感覚に似ています。

それ以来気になっていた画家でしたが、縁が無かったというかこの年齢になるまで積極的に見ることはありませんでした。素人から見て感じるちひろの絵は、まずどの絵も素直で訴える心に曇りがなく、直接見る側の心に飛び込んでくることです。それは描かれている対象が子供であるからかも知れません。

しかしいつも思うことは、描かれている子供の目にそれぞれ特徴があるのです。優しいかったり、怒っていたり、悲しんでいたりと、全ての心の動きは目をみると分かります。この目の描き方と描かれた子供のしぐさの上に、絵全体の雰囲気を決める色の組み合わせがなされることによって、それぞれの作品に命が吹き込まれるような感じがするのです。

実際にちひろが描いた原画を見て思ったことは、本やポスター等で紹介されている絵と、その実物である原画を見た時の感覚の間には大きな差異があるのです。そこには悲しみはより悲しい心が、また喜びはさらに嬉しい喜びが原画から伝わってきます。

現に私が見た絵の中で、「海の夕焼けと手紙を書く少女」や「夕焼けと少女」や「ものかげからのぞく少女」を見たとき何故かしら自然と目頭が熱くなりました。これはその絵の中に訴えるものがきちんと描かれているからだと思えますし、それが原画であるから更に迫力があるのだと思えます。

当たり前のことですが、印刷物は原画を越えられない宿命を持っています。ですから、自分の好きな作品は必ず自分の目で本物である原画を見るべきだと思います。これはどのような画家にもいえますし、音楽でもCDで聴くのと生演奏を聴くのでは大きな差があります。常に本物を見

る事が重要であると思います。

原画を見て感じたその他の感想ですが、ちひろが描いた当時の紙質は酸性紙であったことと、水彩絵具の質が今のようなレベルでなかったことから、どんどん原画が悪い状態に陥るとのことです。確かに古い作品の原画は、劣化していることが分かります。従って現在、高度なデジタル技術を駆使して良い状態の内に原画をスキャナーで読み取り、将来に備える取り組みがなされていました。

しかし、どんな高度な技術を駆使しても人間が絵を描くときの魂まではコピーできないものです。記録するという意味では非常に価値のあるものだと思いますが、将来のちひろ美術館に展示される作品が全てこのデジタル技術を使用して印刷された作品が並ぶとしたらちょっと複雑な気持ちになります。

現に展示されていた作品のなかには、この技術を使用してプリントとされた作品がかなりありました。本物を見たい方は早めに訪れて本物の原画を見ておいた方が良いと思います。ちひろの絵で特に好きなものは、紫系の色を使用した作品です。どの絵も好きですが何故かちひろが使用して描いている紫系の色を中心としたパープルやピンクや青や藤色というのでしょうか、これらの色の作品が心に残っています。

具体的な作品としては、「バラ飾りのついた帽子の少女」「紫色の馬のある少女像」「おもちゃのピアノ」や絵本「おにたのぼうし」の中で描かれている少女が洗面器を持っている絵などが好きです。

ちひろは全体で9300枚もの絵を描いたそうです。それらの絵は西洋で発達した水彩画に、中国や日本の伝統的な水墨画の技法やさらに書道の心（藤原行成流の和仮名）を生かして、独特の水彩画の技法を確立し新たな世界を生み出しています。この西洋と東洋の融合からあらたな繊細で流動感のあるちひろ独自の水彩画が世界が広がっているように感じました。

小春日和の日曜日の午後、久し振りに心温まる絵を見た充実感をもって「ちひろ美術館」を後にしました。なお、この年はいわさきちひろ没後30年の年でした。

## 「ゴッホ展（孤高の画家の原風景）」を観て（東京国立近代美術館）

---

平成17年5月の連休の合間の平日に「ゴッホ展（孤高の画家の原風景）」を観るために東京竹橋にある東京国立近代美術館へ足を運びました。11時前に行ったのですが、すでに美術館の入り口は入場規制がされていて、30分待ちとの案内がされており200人ほどが並んでいました。連休の期間であったのも大きな要因なにかも知りませんが、美術館に行きこれほど並んで絵画を鑑賞したのは初めての経験でした。日本人でこれほどゴッホに興味を持って絵画を観に来る人がいるのだと改めてびっくりした次第です。

個人的にゴッホという画家は好きな分野の人ではないのですが、ひょっとすると感動するものがあるかもしれないという不純な気持ちで行きました。ゴッホファンには怒られてしまうかもしれませんね。人間には好き嫌いがあるので仕方が無いと思いますが、ゴッホのタッチと色の配色にどうしても心が動かないのです。それを見直したいとの思いがあったので、今回ゴッホ展に行ったのも事実です。

フィンセント・ファン・ゴッホは、オランダ生まれの画家で、同世代のセザンヌやゴーギャンのようなポスト印象派（後期印象派）に位置付けられていますが、実際の絵画のタッチは激しく個性的で、色彩や作品の主題からみると、そう簡単に理解できる画家ではないと思うのですが、世の中ではゴッホというネームバリューが先行しているような気がしてなりません。また、わずか十数年の活動で約2000点の作品を遺し、フランスで37歳の命を自ら絶った画家でもあり、他の画家と異なる軌跡がそこにあると思います。

ゴッホの人生の軌跡は、そのまま彼の絵に現れているのではないかと思います。これほどまでに変わる画家もそう多くはないと思います。このような画家に近いものとしてピカソがいますが、ピカソの画風はゴッホと異なり感動が素直に伝わってくるのですが、私にとってのゴッホは素直に伝わってこないのです。

この背景には彼の行動様式にもその兆候が現れているように思われます。例えば、熱狂的過ぎて伝道をとめられてしまったり、娼婦と同棲したり、自らの耳を切ったり、その情熱的な人生に比例しているように、彼の絵にその心の動きが反映されていると思います。

さて、ゴッホ展の構成ですが大きく5つのブロックに分けられていました。それは、第1章 宗教から芸術へ、第2章 農民の労働 芸術のメタファー〈オランダ〉、第3章 闇から光へ〈パリ〉、第4章 ユートピア〈アルル〉、第5章 模写／最後の風景〈サン＝レミ、オーヴェール＝シュル＝オワーズ〉です。

このようにそれぞれの作品を大きな歴史の流れのなかでとらえ、ファン・ゴッホの作品を中心とし、関連するミレー、セザンヌ、モネ、ゴーギャンなどの作品を同時に紹介しながらゴッホと

いう、一人の画家の出現の理由をあきらかにする目的で企画されたものでした。最近の絵画展はこのように単に作品を展示するだけでなく、もう一つの意味を込めた企画展が中心となって開催されるのが流れのようです。

今回の展示会での中心は何と言ってもポスターにも描かれているように〈夜のカフェテラス〉の絵ではないかと思います。この絵は南仏の夏の夜の心地よさが伝わってくるようだとされていますが、ゴッホが星空の夜をはじめ描いた作品だそうです。ゴッホは、「これはただ美しい青と紫と緑だけによる、黒なしの夜の絵だ」と言っていますし、さらに「これは色あせた、青白い、みすぼらしい光のある因習的な黒の夜から脱する唯一の方法」だったようです。この絵を観た時の印象ですが、美しい青い夜空の中に光る星を黄色を中心にしてその周りを白で囲い込むようにして星のまたたきを表現しており、初めて見たときに不安になるようなまた、何か異様な感じを受けたのは私だけでしょうか。

さらに、個人的に気になった絵画は2点でした。一つは「黄色い家」ともう一つは「糸杉と星の見える道」です。ともにこれらの絵の中で使われている青色に興味を持ちました。前者の「黄色い家」では、青と黄色が強いコントラストをもって描かれており、一瞬別世界にいったような衝撃を受けました。そしてよくよく見るとその空の色は濃い青で描かれており、昼間なのかあるいは夜なのか分からない状態です。しかし子どもを連れた人物が描かれているので多分昼間なのではないかと思います。

このように青と黄色という色彩を使って対比させ陰陽を表現するような手法も珍しいのではないかと思います。このころのゴッホの精神状態がどのようなものであったか分かりませんが、明らかに何らかのメッセージがこの中に埋め込まれているのではないかと思うのです。

もう一つの「糸杉と星の見える道」は彼の書簡の中でも書かれています、「糸杉のことが頭から離れない。ひまわりの絵のようなものを糸杉で描いてみたいと思う。」と言っています。この絵を見た時に、この糸杉を中心としたエネルギーの流れが絵画全体の他の構成のものまでを巻き込んで大きなうねりのようなものを描いていて、多分この流れはゴッホ自身の心の思いのエネルギーの流れだと思います。

全てが流れを持った線の塊で描かれているようであり、さらに空の青さが何ともいえない落ち着く青になっているのも不思議です。「黄色い家」で描かれた不安の青ではないのです。さらに糸杉の幹は2本あり、道を歩いている農夫は2人、そして馬車に乗っている人も2人、さらに空には糸杉を挟んで両側に太陽かあるいは星なのかわかりませんが2つの輝きがあるのです。なにかペアーに拘ったものがあるように思います。

この絵を描いた後ゴッホは、南仏を離れ再び北へと戻り、パリ近郊で自然と宗教とが葛藤する

かのような風景を描きながら、彼は自らの命を絶つのです。享年37歳という短い人生でした。私にとってゴッホはちょっと遠い存在の画家のようです。美術館には長蛇の列が出来て30分以上も待って入場し、さらに美術館の中でもゆっくりと絵の前に佇んで見る余裕も無いほど人で溢れた絵画展でした。これらに人にとってゴッホの絵がどのように伝わっているのだろうかと思案な事を考えてしまったゴッホ展でした。

## ジョルジュ・ド・ラ・トゥール展を観て（国立西洋美術館）

---

17世紀のフランスの画家ジョルジュ・ド・ラ・トゥール展に行ってきました。それまでラ・トゥールの名前すら知らなかったのが、あまり期待せずに気楽な気持ちで行ってきました。見終わって美術館を出る時の気持ちは、久しぶりに良い絵を観たなあと満足感がありました。

この画家ジョルジュ・ド・ラ・トゥールは1593年にフランス・ロレーヌ地方の小都市ヴィック・シュル・セイユでパン屋の息子として生まれたようです。ロレーヌ地方は、フランスの東部でドイツとの国境に近い地域であり、大きな都市としてはモーツァルトも立ち寄ったことがあるナンシーがあります。もともとロレーヌは公爵家が統治する、政治的にも経済的にもフランスから独立したひとつの国家であったようです。

ラ・トゥールは生涯に数百点にのぼる作品を描いたとされていますが、それらは30年戦争などの戦火の中で焼失し、現存している作品はわずかに40点程です。また1639年にはパリに赴き、当時の国王フランス王ルイ13世から多額の金を受け取り「国王付画家」という称号を得てルーブル宮殿の中に居室を得て活動したとされています。それだけ、当時は注目されていた画家であったと思われます。

また、絵の描き方からしてイタリアの影響を多大に受けているとの指摘がありますが、実際にラ・トゥールがイタリアに行ったかどうか明らかな記録はまだ見つからないようです。しかしモーツァルトもイタリアへの2回の旅行で音楽的に多大な影響を受けたように、ラ・トゥールの時代も、イタリア絵画の様式に影響を受けたようです。当時のイタリアは芸術面で優れていたことが窺われます。

さて、今回の展覧会ですが、ラ・トゥールによる真作から模作や関連作まで34点が展示されていました。会場は入り口から宗教（1）、音楽（1）、宗教（3）、風俗（2）の順番にコーナーが作られており全部で7つに区切られていました。ゆっくり観ても作品数が少ない関係から1時間あれば十分に鑑賞できるものでした。

闇の中に一本の蝋燭の光を中心に描きだしている光景は、観たものでないと分からない驚きがありました。当時の世界は、夜になると真っ黒な闇の世界の中で誰もが生活していることを考えると、ラ・トゥールが描く蝋燭の光は何らかのメッセージを含んでいるような気がします。正に闇と光の世界です。この2つは相反する世界であり、闇があるから光が強くなるその本質を浮き上がらせる事が出来るのであり、また光があるから反対に闇の深さが強調され、我々の心の中に訴えかけるのだと思います。

いまの時代は、24時間必ずといっていいほどどこかに光があるので現代人は本当の闇の世界を知らないこととなります。明るい光の中では精神的なものは似合わないですが、反対に闇の中

ではこの精神的なものがぴったりと合うと思います。

人間、何かがあって深く考えたり反省や後悔や悩む時は必ずと言っていいほど夜だと思います。このように光のない世界で人間は心の整理を行い新しい光の朝を迎え、少しずつ成長するものだと思います。そのような意味から、今回のラ・トゥールの作品は、自分の中に何かしら闇の世界からのメッセージを貰ったような気がしました。

今回の34点の作品の中で、自分として気に入った作品は「書物のあるマグダラのマリア」と「聖ヨセフの夢（聖ヨセフの前に現れる天使）」の2点でした。前者の作品は、マグダラのマリアを題材とした作品で、ほぼ全裸に近いマリアが両手で机に置かれた骸骨を抱え優しい目で何かを語りかけているような一風変わった構図になっています。

実際には髪が横顔を被っていて目は隠れていますが、全体の雰囲気からそのように感じました。特に横顔の中で口元がとても美しく描かれています。同様の他のマグダラのマリアに関わる絵はどれも着衣していますが、この絵だけがほぼ全裸なのです。しかしそこにはいやらしさではなく、清しい官能とでも言うのでしょうか、正直言ってそんな感じを受けました。また光として蝋燭は直接描かれていませんが、その光が顔と上半身を闇を通して照らしているのです。

もう1点は「聖ヨセフの夢（聖ヨセフの前に現れる天使）」です。これは蝋燭の光の表現方法が独特で本当に細かいところまでしっかりと描かれており驚愕に値します。絵の構図は、左側に立った少女（ここでは天使といっても羽のない普通の少女が描かれています）が、右側の椅子に座って居眠りでもしている老人に対して起しているようにも見えますし、左手の平を上に向けていることから、何か宗教的に意味があるようにも思われます。ちょうど薬師如来像が左手に薬壺をもっているように、この少女の左手には何か重要なメッセージがあるような気がしてなりません。

また、今回の作品の中でヴィエルという楽器を携えた老人の絵が3枚ありました。興味深いことにこのヴィエルという楽器は、ギターのような形をした楽器で、胴の端にあるハンドルを回すとそれに連動して木製の輪が回転し、この輪が弦を擦って音が出る仕組みの楽器です。このヴィエルという楽器は、中世において理想的なハーモニーを奏でる楽器として教会や上流階級の音楽会で演奏されたとのことでした。

17世紀の後半には宮廷音楽家の注目を浴びるような楽器となり、さらに18世紀にはいるとヴィヴァルディ、モーツァルト、ハイドン等がこの楽器のために作曲までしたとされています。自分なりに調べてみましたが、モーツァルトがこの楽器のために作曲したものはみあたりませんでした。果たしてどのような音が奏でられたのか興味のあるところです。

いままで名前すら知らなかった画家でしたが、今回の展覧会を通じて新たな世界が広がったような気がしました。

## フィリップス・コレクションを観て（森アーツセンターギャラリー）

---

平成17年6月、仕事で六本木ヒルズに行った帰りに、六本木ヒルズ森タワーの52階にある森アーツセンターギャラリーで開催されていた「フィリップス・コレクション展」を観てきました。

フィリップス・コレクションが日本で開催されることは知っていたのですが、六本木ヒルズのビルを出たところになんと、森アーツセンターギャラリーへの入り口があり、案内板に「フィリップス・コレクション展」のポスターがあり、もうびっくりです。そしてよくよく見ると夜10時まで開館していると書いてあるではありませんか。またまたびっくりです。迷うことなく1500円を支払って52階へあがりました。

今回の「フィリップス・コレクション展」のサブタイトルは「アートの教科書：ルノワール、ゴッホ、セザンヌ・・・」であり、中でもルノワールの「舟遊びの昼食」は圧巻です。この絵を初めて観たのは、今から10数年前に仕事でワシントンDCに行った際に、時間を見つけて「フィリップス・コレクション」を訪ねた時に出会い、深く感動した作品でした。現物をもう観ることはないなあと、その時に思いましたが、まさかその作品を今回日本で再会出来るとは思ってもみないことでした。

今回の展示会は、絵画が56点と彫刻が4点、展示されていました。ワシントンDCで観た時はルノワールの「舟遊びの昼食」の作品しか心に残りませんでした。今回はジャン＝オーギュスト＝ドミニク・アングルの「水浴の女」、ギュスターヴ・クールベの「ルーティエの岩山」、イレーヌ＝ジェルマン＝エドガー・ドガの「憂愁」、ポール・セザンヌの「ローヴの庭」、エドワール・ヴァイヤールの「セーラー服の子供と子守」、オスカー・ココシュカの「ロッセ・フランシオスの肖像」、ヴァシリー・カンデンスキーの「秋II」そしてライオネル・ファイニンガーの「村」の作品に心が惹かれました。

まず最初は、アングルの「水浴の女」ですが、背後から描いた女性の裸婦像がキャンバスの中心的な存在となっておりさらに、キャンバスの左部には森の小川で、まとった衣が半分はだけている女性（多分母親だと思いますが）が少女を水浴びをさせている様子や、さらにその奥には水浴びをし終わって、全裸で寛いでいる女性が描かれています。これらの部分はダビンチのモナリザのようにちょっと薄暗く描かれています。

対照的に背後から描いた女性の裸婦は、左上から光が射しておりさらに全体にふくよかな体の体型が観る者に安堵感を与えるような気がします。さらに上手い表現が出来ないのですが、この作品の中から懐かしさとも言うべき感じを受けました。

ドガの「憂愁」という作品ですが、一般にドガというと踊り子を描いた絵画が余りにも有名で

すが、今回観た「憂愁」という絵画はドガ的なタッチでなく、別の画家が描いた様な感じを受けました。

この絵は女性がソファかあるいは長椅子にでももたれ掛かっているもので、その女性の顔の表情からは心の痛みというか内面的な苦痛のようなものが感じられます。特にキャンバスの左下から光が射しており、その女性の顔の苦痛のようなものをさらに増長させているように窺えました。多分暖炉からの火がそうさせているのではないかと思います。光源を直接見せないのは、何かしらの暗示をこの絵に含んでいるのかも知れません。

また光が射している方向の対角線上にあるキャンバスの右上の部分は、未完成とも思われるような仕上がりになっていて、光源とこのエリアに何らかの意味を込めているのではないかと思います。全体的に暗い雰囲気のある絵で、特に火の光に照らされた女性の苦しそうな表情は忘れられません。

セザンヌの「ローヴの庭」ですが、セザンヌを多く観ている方であれば、直に分かるのだと思いますが、私のような者が観ると、この絵からはセザンヌを感じる事が出来ません。何故ならば全く異なる表現手法で描かれているからです。「ローヴの庭」とありますが、抽象的な絵であってこれが庭とは思えない表現です。

ただし、描かれてる色彩やそのタッチは柔らかく、個人的には大好きです。特にブルー系の色合いが何ともいえないものがあります。大好きなシャガールが使う青ではありません。感じとしてはパステル調の色合いです。この絵を通じてセザンヌが言いたかったものが何だったのかは分かりませんが、不思議と心が安らぐ感じがする絵でした。色のもつ意味と物の形を抽象化して描いた珍しいセザンヌの絵画だと思いました。

ヴァイヤールの「セーラー服の子供と子守」ですが、この作品は約25cmの正方形に描かれた小さなものです。私が気に入ったのは、全体に使用されている色合いです。ページュを基調にその同色調により描かれていて、ほのぼのとした感じを受けます。そして題にもあるように青いセーラー服の子供が、子守をしている母親かあるいはメイドさんにちょっかいをだしているような様子を描いたものです。

不思議なもので、誰にでも好きな色や色調があると思いますが、私はこの絵に描かれている色調が好きなのです。勿論ルノワールやシャガールも大好きですが、ふと落ち着くこの絵のような懐かしさが好きなのです。

今回の「フィリップス・コレクション展」を観て非常に不思議な感覚を覚えたのは、ココシュカの「ロッセ・フランシオスの肖像」という作品です。なにか霊を感じるような不気味な感じを

受けた作品でしたが、何か人が心を引きつけるのです。

オスカー・ココシュカは、ウィーンから西へ90キロのドナウ川のほとりのペヒラルンと呼ばれる小さな村で、1886年に生まれました。彼の父は有名な金細工師の一族出身でしたが、暮らしは貧しかったようです。しかし金細工師としての腕は確かな職人気質の父親で、好きに生きていたような父親だったので実際にココシュカの面倒を見ていたのは母親だったようです。ですから彼は母親を非常に愛し、尊敬していました。

またこの母親は、特別な霊能力のようなものを持ち合わせていたと言われていました。ですからココシュカにもその血が流れているからかも知れませんが、今回の絵画でロッセ・フランシオスの肖像画は、普通のものとは異なり人物の輪郭が黄色であり、さらにその影とも思われる背景は青により描かれています。ちょうど人物の後ろに守護霊が重なっているように感じられました。とても気になる画家なので、今後時間をかけて調べてみようと思いました。

1時間ほどで美術館を出ましたが、開催されたのが6月17日からとのことで、ちょうど開催されて1週間程でしたが、館内は人も少なくゆっくりと作品を鑑賞する事ができました。六本木ヒルズの中にあるので、恋人と名絵画を観てそして展望台で夜の東京の夜景を楽しみ、さらに美味しいワインや食事をしながら今観てきた絵画の話をするなんて素敵ですね。

最後は六本木ヒルズの横にあるグランドハイアットに宿泊すれば最高のデートコースだと思います。どなたか実行してみてください。しかし、夜10時まで美術館で名画が見られるようになったことは非常に嬉しいことです。他の美術館でも実施してもらえるといいなあと思いました。たまに夜8時まで開館しているところもありますが・・・

## 出光コレクションによるルオー展を観て（大丸ミュージアムK Y O T O）

---

平成17年9月、ぶらり京都ひとり旅での収穫として寺院を訪問できただけでなく、偶然にも京都で開催されていた2つの美術展を観られたもの大きな成果でした。2つの美術展とは、「出光コレクションによるルオー展」（大丸ミュージアムK Y O T O）と開館8周年記念「愛のシャガール展」（美術館「えき」K Y O T O）です。

今回は、四条烏丸にある大丸百貨店で開催されていた出光コレクションによるルオー展についての感想を書きたいと思います。個人的にルオーという画家は、今まで自分からかなりかけ離れた所にいる人との印象がありました。

中学校の美術の授業の時に、ルオーという画家がいて暗いイメージの王様（今で思うとキリスト像だったのではないかと思います）のような肖像画を、ゴッテツとしたタッチで描いた人との印象が心の中に焼き付いていました。ですから、正直言って好きな分野の画家ではないのです。

しかし、折角旅に出た際に偶然にもこのような美術展が開催されているのであれば、観ても良かなあとの気楽な気持ちで足を運んだのでした。4月中旬から6月末まで、東京都現代美術館でこのルオー展が開催されていたのは知っていましたが、見に行く機会が無かったのも事実です。

平日の百貨店に行くのも久し振りですが、それも旅先の百貨店で美術展を見るもの初めてでした。まずルオーという画家ですが、1871年5月27日、パリ・コミューンの崩壊前日にパリの北東部にあるベルヴィル地区のヴィレットで家具職人の子供として生まれました。小さい頃から芸術的な才能を見せたため、母方の祖父から絵画の手ほどきを受けたようです。

そしてルオーは、14歳の時にステンドグラス職人イルシュに弟子入りし、ステンドグラスの職人として修業をしながら、装飾美術学校の夜間クラスで美術を学んでいましたが、1890年に本格的に画家を志し、エコール・デ・ボザール（国立美術学校）に入学、ここでギュスターヴ・モローの教室に学んだ際に、マティスらと知り合ったのです。

ルオーの作品には暗い作品が多く、私の印象と同じように当時もなかなか理解されなかったようです。これらの背景には、ルオーの貧困と悲惨の労働者街での幼少体験によるものがあると思われるし、父親の職人氣質のような骨太の考え方も根底にあったのではないかと思います。

ルオーの作品で特徴的なのは、太い黒の輪郭線と厚く塗り込めた絵の具で描く事であり、これは明かにステンドグラスの影響が見られると思われます。また、初期の作品は全体としては、この太い黒の輪郭線の関係できちっと締まった感じになります。内容として社会の底辺に生きるサーカスの道化師や娼婦あるいは金貸し、裁判官などを厳しいタッチで描いていますが、どの作品

もワンパターンに見えてしまいます。私にルオーが発する感性のエネルギーが感じられないのかも知れません。

このように今までのルオーの作品は、キャンバスいっぱいに太い輪郭線を中心として、社会に底辺に生きる人々を優しく描く一方で、上流階級の人々を風刺をもって描いたりさらに、当時流行したサーカスの中で働く人々を細かい角度から描き、特に道化師に関してはライフワークの様に描いています。

また、道化師に関してルオー自身は、「道化師、それは私だ、それは我々だ・・・ほとんど我々すべてだ、ということをはっきり悟ったのです」とか「私は、言うべきことすべてを、しかも完全な形で、道化師と彼の夢の中に要約してみたいと思っています」と彼は語っていることから道化師に対する思いが深い事があげられるとともに、作品の根底に流れる基本的な哲学になっていると思います。

以上のようにルオーには悲観的な私でしたが、会場内でアンドレ・シュアレスの詩にルオーが82点の木版画を付した詩画集『受難』の下絵に手を加え、1935年に連作油彩画「受難（パッション）」が完成した作品を観て、今までのルオーに対して持っていたイメージが払拭され、その作品の素晴らしさに感嘆しました。

今回の美術展では、約100点の作品が展示されていましたが、それらの中でこの作品群が最高だと思いました。ただし、この挿絵は、シュアレスの詩句と内容が完全に一致しているわけではなく、あくまでもルオーがこの詩句の作品内容に忠実に描くのではなく、きわめて大らかに制作したとされています。

連作油彩画「受難（パッション）」の作品が気に入った大きな理由の一つに、挿絵を引き抜いて単にキャンバスに貼り付けると、そこには大きな余白が発生して全体のバランスを崩す格好になってしまうので、この余白の部分を青と緑の混合色の緑青とでも呼ぶ色で埋め観る側にゆとりを持たせてくれたことです。

仮にこのような配慮が無くどの絵も今までのようなキャンバス一杯の表現であったら、見るだけで疲れてしまい、そこに込められたルオーのメッセージを見出そうとする力さえ無くなってしまうと思います。

また、これらの個々の作品に描かれている挿絵はそれぞれに異なった大きさですが、共通して言えることは、それぞれの挿絵が現在我々が生きている世界とルオーが描く世界とを繋げる窓の役目を果たしている感じがあり、我々が心の窓を通してキリストの受難を見ているような気がしてくるから不思議です。

また挿絵以外の領域は緑青とでも呼ぶ色で統一的に塗られているのも連作でありまた物語であることを意識付けるものとなっており、素晴らしいと思いました。特に受難10番目の作品である「この眼、この悲しそうな眼」が印象的でした。

今回のルオー展を観て反省したことは、第一印象だけでなくそのものを十分にじっくりと見る必要があるということでした。以前にある知人がルオーが好きだと言っていたのを思い出し、彼は既にこのようなルオーの良さを理解していたのだと関心してしまいました。何事も謙虚にならないといけませんね。

## 宮城県美術館で出会った彫刻家・佐藤忠良の作品

---

出会いとは不思議なものだと思います。その人の人生の中で一度も出会うことがない人もいれば、今日という日に新たに出会う人もいますからです。一般的にこのような出会いを偶然という言葉で片付けているようですが、私はこれらは常に必然であると思っています。

必ずその機会に出会えるようになっていたという考え方が私に中に常にあります。ですから偶然というような曖昧な言葉でその出会いを整理したくないのです。毎日この必然の中で生きていますが、最近の出会いの中で特に感動的だったのが、今回お話しする彫刻家・佐藤忠良の作品との出会いです。

たまたま学会で仙台に出かけた帰りに宮城県美術館を訪れた際に、美術館に併設されている佐藤忠良記念館でこの彫刻家の作品に出会ったのです。正直いってその日まで、このような偉大な彫刻家が日本いるとは思ってもみませんでした。知らないということは、悲しいことでもあります。このような出会いにより必ず会えることは、大きな喜びでもあります。

記念館の入口にある作品を見た瞬間に、「あっ！何かがそこにある」という第六感のようなものを感じました。開館25周年記念で開催されていた「パウル・クレー」展を観てがっかりしていた直後だったので、その時の心はもうるんるん気分でした。

さて、作品を観て行くうちに感じたことが2つありました。一つはそれぞれの作品から感じられる感覚が、以前パリのロダン美術館やマイヨール美術館で観た作品と共通のものが感じられたのです。大変に失礼な言い方かも知れませんが、日本でそれも東北の田舎の出身の人が世界に通用するような彫刻作品をどうして創作できるのだろうか、といった偏見的な考え方がふと浮かんでしまったのも事実です。

これらの作品の中には、共通してロダンやマイヨールから発信されるシグナルが感じられたのです。それはとても不思議な感覚でした。もっと端的に言うならば、作品からは自然で無理の無い暖かく、そしてほっとするような安堵感、さらに弱いのですが連続して流れ出るエネルギーのようなものの感じを受けました。

もう一つ感じたのは、彫刻の作品もそうですが、さらにデッサンの作品を観た時に何故かいわさきちひろを思い出しました。なにが共通しているのかと思って考えましたが、多分二人に共通するのは、自分の身近な人々を素直にまた優しさと愛情をもって描いている点だと思います。

この彫刻家は、当初は画家を目指して勉強していたとのことで、特にモディリアーニに傾倒していたとのことです。一日に百枚ものデッサンをしていたモディリアーニの事実を知って驚嘆し、自分の浅はかさに見事に打ちのめされたと語っています。そして自然という大きな存在に人間

はなにも出来ないことを痛感し、自然の偉大さにひれ伏さざるを得ないとも言っています。このようなことが影響しているのかも知れませんが、作品からは素朴さとなにか土の香りを感じるのは私一人ではないと思います。

佐藤忠良記念館では、特に彫刻の「冬の子供」「果実」「ボタン（大）」「帽子・夏」「幼児」「男の児」やデッサンの「リカ」の作品に感動しました。

現在90歳を超えてなお第一線で活躍する彫刻家・佐藤忠良には頭が下がる思いがします。彼の作品は、美術館で鑑賞されるほかに全国各地の駅前広場や公園などで気軽に出会うことができるとのことで、おそらく私たちがもっとも日常的に接している彫刻にちがいないという事実に関して、知らなかったということは自分として恥ずかしいことだと思いました。

私が住む最寄駅の広場に彫刻がありますが、ひょっとしてと思い先日調べましたが残念ながら佐藤忠良の作品ではありませんでした。皆さんのお住まいの周りに佐藤忠良の彫刻作品がないか探してみるのも面白いかも知れませんね。

佐藤忠良が画家の安野光雅との対談の様子を著した「ねがいは「普通」」という本を購入しました。これから読みながら佐藤忠良の世界に浸り、彫刻からだけでなく本人の生の言葉からさらなる感動を受けたいと思っています。